

東京大学のサッカー

闘魂90年の軌跡

第2部 年代誌



年代誌 注記

- 各年度の記事、記録は、原則としてその年度の最高学年ごとに担当者を決めて作成した。
ただし、昭和29年度以前は、新聞記事、その他の記録をもとに編集委員が分担して執筆した。
- 試合記録は原則として、大学リーグ、京大定期戦およびトップチームの公式戦を取録したが、年度によって基準に不統一がある。
太平洋戦争中と戦争直後の記録は発見できないものもある。
リーグ戦の記録が不完全な年度がある。
不明な部分は空欄としてある。
- リーグ戦各年度の順位決定規則が不明の年度もある。
勝ち点制あるいは得失点差による順位決定が採用されていなかったと考えられる年度にも参考として得失点差および勝ち点を掲載した。
その場合の勝ち点は勝 = 2点、負 = 0点、引分 = 1点とした。
- リーグ戦の正式名称として初期には「コレッジリーグ」などが使われたが、本誌記録では「関東大学リーグ」「東京都大学リーグ」で表記を統一した。
- チーム名は新聞等を参考に、通常使用されている略称で表記した。
東大、京大は、戦前を含めて原則としてこれを用いた。
- グラウンドの略記は次の通り。
御殿下 (東大御殿下グラウンド)
農学部 (東大農学部グラウンド)
検見川 (東大検見川運動場)
神宮 (明治神宮外苑競技場)
絵画館前 (明治神宮外苑絵画館前グラウンド)
後楽園 (後楽園競輪場)
- 運営体制、合宿などの項は年度によって掲載基準に不統一がある。
- 学年年度は4月から翌年3月までを基準にしてあるが、9月入学・卒業の時代もある。
また、秋のリーグ戦終了後、新チームに切り替えて試合等を行っている場合もある。
そういう場合は、試合等の行われた年月日を明確にするように努めた。
- ポジションの表記は、時代によって、また試合システムの変遷にもなって違いがある。
主として、その時代の公式プログラム、新聞等の慣用にしている。
WMフォーメーションの時代のCHは実際には守備ラインにいるがHBに表記している。
WMフォーメーションが廃れたあと、FB、HBはDF、MFと表記されるようになったが、
表記は必ずしもシステムの変化を反映してはいない。

「帝大蹴球団」の名で発足

八高出身者で対外試合

東大にサッカーが、いつごろ持ち込まれたのかは、はっきりとは分らない。

記録に残っている最初の試合は、1918年（大正7年）2月10日に関東蹴球大会で番外（模範試合）として行われた「帝大蹴球団」対高等師範学校Bである。関東蹴球大会は当時、東京蹴球団（東京高師、師範系のクラブ）が朝日新聞社の後援を得て開催していた中等学校（現在の中学～高校2年に相当）の大会だった。

このときの「帝大蹴球団」は、名古屋の第八高等学校から東京帝国大学に進んだ学生たちの集まりだったという。

八高は当時の高等学校（旧制）のなかで、もっとも早くサッカーを始めた高校だった

うだ。野津は「一高の他に八高の連中が別々にサッカーをやっていたが、私がこれの一つにまとめ、帝大蹴球団という同好会を作り、東京高師や豊島師範や一高等などに試合に行った」と書いている。

また、大正12年卒業の田中豊は「大正9年から12年の頃は、帝大蹴球団と称して、同好の士が20人ほど集まり殆ど練習などせず、（中略）試合の前日手紙がきてグラウンドにこのこ出かけていき、人数が足りなくて8人や9人でやった事もあった」と書いている。試合相手は、高師、慶応、青山師範、豊島師範、暁星中学（アストラ）、早高だったという。

（牛木素吉郎）

全学チーム編成を呼びかけ

翌年9月に、新田純興と野津謙が一高から進学し、他の高校から進学した学生も加えた全学チームを編成しようと呼び掛けた。

この間の事情は、東大サッカー部誌『闘魂』創刊号（1964年）に詳しい。

第3回関東蹴球大会の番外試合に出場してアストラ・クラブに3-0で勝ったチームは、全学編成だったという。新田は「東大の名で公式に試合をした最初の記録」としている。1920（大正9）年2月11日である。

この全学チームも名称は「帝大蹴球団」だったよ

公式試合記録

1918（大正7）年

・関東蹴球大会模範試合

2月10日 高師球場

△帝大蹴球団 0-0 東京高等師範学校B

〔GK〕山崎 〔FB〕成瀬、長谷川

〔HB〕大谷、神田、岡崎

〔FW〕勝田、吉田、水野、深野、川本

（八高OBによるチーム）

1920（大正9）年

・関東蹴球大会模範試合

2月11日 高師球場

○帝大蹴球団 3-0 アストラ・クラブ（暁星中学校）

1921（大正10）年

・関東蹴球大会模範試合

2月11日（高師球場）

●帝大蹴球団 0-2 東京高師

1921年度（大正10年度）

全日本選手権と4校リーグ

東大最初の日本代表選手

東大のサッカーがまだ高校OBの同好会の域を出なかったところに、東大サッカー初の「日本代表選手」が出た。野津謙である。

1921年（大正10年）5～6月に上海で第5回極東選手権競技大会が開かれた。そのときの日本代表蹴球チームは師範系の東京蹴球団中心に臨時に作られた「全関東」だったが、そのなかに東京帝大3年生の野津が加えられた。野津を推薦したのは、ともに東大サッカーの基礎を作った新田純興である。

日本にサッカー協会はまだできていなかった。極東大会への選手団派遣を管轄していたのは大日本体育協会で、その球技部担当委員は岡部平太（高師出身、陸上競技）だった。新田は岡部のもとで補助役員をしていた。

協会設立と全日本選手権参加

上海極東大会のあと1921年（大正10年）9月10日に大日本蹴球協会（日本サッカー協会）が設立された。東大から理事に高橋礼本、実務を担当する委員に小田切武昌、井上益雄、竹内恵太郎、水野茂己、新田純興、野津謙が入っている。協会設立には、まだ東大工学部学生だった新田が事務を担当して貢献している。

協会設立に続いて、すぐ全国優勝蹴球競技会（全日本選手権）がはじまった。東大は東部（関東、東北）予選会に「東京帝国大学」（代表者 野津謙）として参加、選手として14人が登録されている。新田は「これが一高、三高、八高などの卒業生の大同

団結で作った最初のチームであった」と書いている（『闘魂』創刊号）。

「帝大蹴球団」としての試合は、それ以前にも行われていたが、正式の学校名を名乗ったチームとしては、これが初めてかもしれない。

11月の東部予選会で東京帝大は2回戦で埼玉師範に敗れた。これが初の公式戦である。

専門学校蹴球リーグ戦

初の全日本選手権が終わったあと、大学、専門学校の代表者が集まって新たにリーグ戦を始めることを決めた。会議に参加したのは東京高師、東大、早高、慶応、商大の5校で、東大からは新田と野津が出席している。

それまでの学校同士の試合は「練習試合」のようなもので、メンバーがそろわずに他校の選手を借りるようなことも多かったらしい。これからは正式の学校対抗として大会規則もきちんとしようという趣旨だった。

リーグ戦は翌1922（大正11）年の1月～2月の日曜日に行われた。準備会に出席した慶大は参加していない。本来、6試合行われるところだが、メンバーがそろわないための棄権が多く、実際に行われたのは3試合だけ。東大も初日の対高師を棄権、同じくメンバーの揃わなかった早高と組んで高師を相手に番外試合をしている。

雑誌『運動界』の記事には「帝大は新田、野津君等の俊英を有すれども、他に餘り目立った人も見当たらなかった」「熱心に研究もし、加ふるにより體格を有する此のチームは末恐るべしである」とある。（牛木素吉郎）

公式試合記録

1921（大正10）年

・第1回全国優勝競技大会（全日本選手権）東部予選会（高師校庭、豊島師範）

11月20日 2回戦 ● 0-1 埼玉師範（高師校庭）

1922（大正11）年

・専門学校蹴球リーグ戦（高師校庭）

1月29日 高師（棄権）帝大、早高（棄権）商大

（番外試合）帝大・早高連合 3-2 高師

2月5日 帝大 3-0 早高、高師（棄権）商大

2月12日 高師 6-1 早高、帝大 7-2 商大

[順位]①高師3勝、②帝大2勝1敗、③早高1勝2敗、④商大3敗

・第2回全国優勝競技大会（全日本選手権）関東蹴球予選大会（高師校庭）

10月31日 2回戦 ○ 3-0 早高

11月4日 準決勝 ● 0-2 成城中

全国高校大会を創設

大学サッカーの基礎を作る

1923 (大正12) 年1月4日、5日に「全国高等学校ア式蹴球大会」が高師校庭で開かれた。この大会を主催したのは東京帝国大学ア式蹴球部だった。

野津謙は「東大をいかに強くするか私の頭を悩ましたが、その結果、全国高等学校蹴球大会をやれば、優秀選手も集まるし、いいのではないかと考えるようになった」と書いている（『闘魂』創刊号）

医学部在学中の野津は、前年の12月ごろに当時の有力新聞だった萬朝報（よろず・ちようほう）から300円の補助を得て準備に奔走、ほとんど独力で大会を創設したという。それまでの協力者だった新田は4月にすでに卒業し、地方に赴任していた。

当時の学校制度は12～16歳が中等学校（現在の中学～高校2年）、その上が高等学校あるいは専門学校だった。高等学校は中学4年修了から進学することもできた。高等学校（3年）を卒業すると、ほとんどが東京、京都などの帝国大学に進んだ。

したがって、東大のサッカーを強くするには、高等学校にサッカーを普及させればよいと考えて、全国大会をはじめたわけである。審判を含め運営は東大生が担当した。

ちなみに野球の高等学校大会が始まったのは1924年（大正13年）7月である。サッカーが1年半、先んじている。

この高校大会は、第5回からは京都帝大が主催に加わり、会場も京都と1年おきになった。太平洋戦争がはじまるまではこの形で開かれ、戦後は学制改革により1948（昭和23）年の大会が最後になった。

「インターハイ」と呼ばれていたのは、この旧制高校の大会である。

チャー・ディンの指導を受ける

前年1月に行われた4校による専門学校リーグ戦は、1度きりで立ち消えになっている。その原因を新田は「大正11年度の全国優勝競技大会の決勝が12年に入ってから行われたためにリーグ戦を組む余裕がなかった」ことだろうと書いている（『闘魂』創刊号）。

1923（大正12）年9月1日に関東大震災がおき、そのために、この年度には活発な動きはない。しかし、各大学サッカー部の活動は、ますます本格的になっていったようだ。

大正13年1月17日付の帝大新聞に「ア式蹴球部は1月下旬あるいは2月上旬に早、慶、高師と試合を行うこととなり、帝大運動場にゴールポストを立て、チャー・ディン氏を聘して毎日練習に励んでいる」とある。慶大および高師との試合は2月に行われている。

チャー・ディンは、東京工業高等専門学校（現在の東京工業大学）に留学していたビルマ人のスポーツマンで早高が最初に指導を受け、ショートパスなどの新しい技術、戦術を伝えた。関東大震災で蔵前にあった工専の校舎が倒れ授業ができなくなったため、各校の招きに応じて指導をしていた。

そのころ山口高校在学中の竹腰重丸が熱心にチャー・ディンに学び、東大のリーグ6連覇の基礎になったとされているが、東大は竹腰の入学前にも、チャー・ディンの指導を受けていたわけである。

（牛木素吉郎）

公式試合記録

1923(大正12)年

(9月1日に関東大震災)

1924 (大正13) 年

・対抗試合

- 2月9日 ○ 2-0 慶大（一高運動場）
 (帝大)〔GK〕中本〔FB〕折下、岸本武
 (HB) 田中、辰間、堀田
 (FW) 須賀、別所、米谷、岸本英、山崎
- 2月11日 △ 0-0 高師（高師校庭）
 (帝大)〔GK〕竹内〔FB〕折下、岸本武
 (HB) 田中、辰間、堀田
 (FW) 茂森、須賀、米谷、岸本英、山崎

コレッジリーグ始まり 2位

春に英船、高師、早大を連破

東大ア式蹴球部が主催して大正12年1月にはじめられた全国高校蹴球大会に出場した選手たちが、選手供給源を拡大しようという思惑通りに東大に入学し、部員数も増え、この年も春期休暇中から猛練習を重ねた。水戸で合宿も行ったようである。

春季練習の力を試す機会がやってきた。当時横浜に入港していた英国汽船リーザス号のチームから挑戦を受けたのである。試合は4月23日に本牧のY C A C（現在も横浜にある外国人のスポーツクラブ）で行われた。相手は巨躯を利用してヘディングは強かったが、連係プレーは東大が勝り、2-1で勝利した。

また練習試合と思われるが、5月18日には高師を2-0で破り、5月25日には早大と対戦、技量に勝る早大が東大を圧倒して前半に1点を先取したが、東大は当りの強い早大に対して連係よくパスで攻め、後半に岸本、正木が得点を挙げて2-1で逆転勝ちした。

12校でコレッジリーグ創設

この年の秋に、大学・専門学校によるリーグ戦を創設するための準備委員会が設けられ、東大からは岸本英夫が出席した。参加校は12校で、それをこれまでの戦績から1部と2部に分け、1部の最下位と2部の優勝校を入れ替えるという、閉鎖された野球の六大学や、対抗戦が建前のラグビーとは異なる実力主義の方法を採用した。1部が東大、慶応、早大、高師、農大、法政で、2部が明治、商大、外語、青学、東歯、一高（欠席したため）となった。

順位決定は勝ち点により、勝2、分1、負0で、同点の場合は得点/失点により順位を決定する規程であった。試合時間は90分で、同点の場合は延長や再試合は行わないとされた。

第1回リーグは早大が優勝

第1回のリーグは大正14年1月中旬から2月中旬に行われた。厳冬期のこととて、前日からの雪で幹事たちはその対応に苦労したことなどの記録がある。

グラウンドは主会場が当時東京での主な試合が行われていた高師グラウンドで、それ以外には法政中

野グラウンド、一高グラウンド（一高は当時現在の東大農学部にあったが、グラウンドがキャンパスのどこにあったかはわからない）が使用された。

記念すべき第1回の王座には早大がついて、東大は惜しくも2位となった。以下にいくつかの試合内容を新聞記事等から紹介する。

▽対高師戦

昨秋の神宮大会予選と春の試合で東大に連敗していた高師は、歴史を汚された仇を報ずる試合と捉えていた。

前半は東大が押し気味に試合を進め、22分に中島がドリブルでバック陣を突破して1点を先取した。30分高師はこぼれ球を吉田が見事に決めて同点に追いつく。

後半互いに巧みにパスをつないで攻めあう好試合を展開する。7分に塩原のキックが風に乗ってそのままゴールインして東大がリードする。10分に高師は左CKを竹内がヘディングで決め同点。37分飯山が強いシュートを決めて逆転。以後東大バックの動きが減り、太田のシュートが見事決まって4-2となり、高師のリベンジがなかった。

▽対慶大戦

最初東大は攻勢に出たが慶応の厚い防御網を突破できず、20分ごろから慶大が東大を圧倒して（この頃圧倒するという言葉が戦評にしばしば使われている）再三コーナーキックを得たが東大もよく守り、0-0で前半を終わる。

両軍の技量にすぐれた選手を中心に繰り広げられる熱戦に観客も沸いて、見ていて気持ちの良い試合だった。

後半慶大が先取すれば、東大も20分に中島のシュートがバーから跳ね返る所を塩原がヘディングで決めて同点に追いつく。白熱した試合は同点のままタイムアップ。

▽対早大戦

前日の1尺（約30cm）余の積雪で、グラウンドの大部分は白く覆われ、一部は泥濘の状態という最悪のコンディションで、両軍とも悪戦苦闘した。

開始1分に中島のパスを岸本シュート、相手バックに当たった跳ね返りを正木シュートして先取点を挙げる。その後東大がパスを回して優勢に進めるが得点無く、逆に13分に尹がドリブルシュートを放って同点とする。16分、36分と早大のキーパーにミスが出て、東大が2点を追加し、その後早大FWが奮

戦するも得点には至らなかった。

後半両軍ともかなり疲れ、気ばかりあせる混戦が繰り返された。20分東大ゴール10メートルほど前の水溜りに止まったボールにGK飛び出し、無人となったゴールに玉井がけりこんで1点差となる。29分早大ゴール前に密集して揉み合う中、岸本飛び込んでシュートを決め、4-2で東大が全勝の早大を撃破した。

▽総評

帝大新聞に寄稿した廣瀬謙三の総評は「有望な帝大チーム」という見出しになっている。東大は各高等学校の猛者を集めて元気のいい意気に富んだ好チームで、FWの連係のいい日は相手を畏怖せしむるものがあると評している。今後高等学校から名手が集まるであろうから、リーグの首位となることは難事ではないだろうと予測している。（浅見俊雄）

公式試合記録

4月23日 ○ 2-1 英船リーザス号（YCAC）

5月29日 ○ 2-1 早大（高師）

・明治神宮競技大会関東予選

10月12日 1回戦 ○ 3-2 埼玉蹴（高師）

10月17日 2回戦 ○ 1-0 高師（豊師）

11月19日 3回戦 ○ 7-0 栃師（高師）

月 日 準決勝 ● 0-1 全豊島（ ）

・関東大学リーグ1部

1月18日 ● 2-4（1-1）高師（高師）

月 日 ○ 4-1 法大（高師）

月 日 ○ 棄権 農大（ ）

1月25日 △ 1-1（0-0）慶大（高師）

1月31日 ○ 4-2（3-1）早大（高師）

3勝1分1敗 2位

出場選手

相手	関東予選		関東大学リーグ1部				
	早大	全豊島	高師	法大	農大	慶大	早大
GK	村上	村上	村上			村上	村上
FB	林	野津	朝生			朝生	杉野
	山本	潮	山本			山本	林
HB	鈴木	鈴木	小村			小村	小村
	杉野	杉野	杉野			杉野	山本
	堀田	山本	鈴木			林	鈴木
FW	中村	井染	中村			中村	中村
	正木	正木	正木			岸本	正木
	岸本	岸本	岸本			鈴木	岸本
	中島	中島	中島			中島	中島
	塩原	塩原	塩原			塩原	塩原

関東大学リーグ1部成績

	早大	東大	法大	高師	慶大	農大	勝	負	分	得	失	差	点
早大		●2-4	○2-1	○3-1	○3-0	○棄権	4	1	0	10	6	4	8
東大	○4-2		○4-1	●2-4	△1-1	○棄権	3	1	1	11	8	3	7
法大	●1-2	●1-4		○1-0	△1-1	○5-0	2	2	1	9	7	2	5
高師	●1-3	○4-2	●0-1		△0-0	○棄権	2	2	1	5	6	-1	5
慶大	●0-3	△1-1	△1-1	△0-0		●1-2	0	2	3	3	7	-4	3
農大	●棄権	●棄権	●0-5	●棄権	○2-1		1	4	0	2	6	-4	2

リーグは18校の3部構成に

深刻なグラウンド問題

「部長・末広恭二 主将・山本」この年の代表者である。（名簿に山本の名前はないが、帝大新聞に野津謙が書いた早東戦の戦評にこう書かれている）

この年、竹腰、塩原、野島など高校大会で活躍した俊英が入学した。今の御殿下グラウンドはまだ整備されておらず、テニスコートが大きな場所をとっていて、サッカーの広さはとても取れなかった。そのため火曜、金曜は駒込染井の本郷中学のグラウンドで、水曜、土曜は本学の狭いグラウンド（今の御殿下）で3時から行われた。ボールはグラウンド横のホールの棚に入れてあるので、誰でも自由に使ってよい、と帝大新聞に載っている。

今の農学部は当時は一高のキャンパスだったから、野球部もキャンパス内にはグラウンドがなく、尾久の球場をほとんど無料で借りていたが、この年の9月から毎月700円を払わなければならなくなって、大変苦労していたようである。帝大新聞によれば、グラウンド問題だけではなく、大学にふさわしいより広大なキャンパスを求めるべきだという議論が、当時学内で活発に行われていた。

帝大アヅサの誕生と京大戦

この年最上級生の岸本が中心となって別のチームを編成して「帝大アヅサ」と名づける。うまい若いのが入ってきたから、彼らに譲ろうということからであった。分派というより、二軍、あるいは別軍という位置づけである。

帝大アヅサはヘーグ杯に参加して優勝するほどのチーム力を持っていた。

また4月にまだ正式の部になっていない京大チームと試合を行う。さらに、大学同士の行事として運動週間と呼ぶ東大と京大のスポーツ交流が昨年からは始まり、この年サッカーも種目に加わる。しかしこの試合は負傷者続出の壮絶な試合となり、せっかく始まった両大学蹴球部の交流が、この翌年から長期にわたって中断する伏線にもなった。

この2つについては、第4部の「活躍した“身のチーム”の横顔」と「東大-京大定期戦の足取り」でより詳しく記述している。

高校時代に鳴らした選手で

2年目を迎えたコレッジリーグは、昨年までの12校に加え、この年から立教大、国学院大、明葉大、東京高工（現・東工大）、高等工芸、商船が参加して18校による3部編成となった。

リーグは11月20日から翌年1月30日まで行われ、高師が勝ち点8で優勝し、東大、早大が勝ち点7で並んだが、ゴールアバレッジ（得点／失点）が東大9／3、早大14／7で東大が勝り、規程により東大が2位、早大が3位となった。

以下、そのとき早大の現役選手だった玉井操がアサヒ・スポーツに書いた総評から、東大に関する部分を要約して再録する。

今シーズンの東大は全部高校戦で鳴らした連中である。粒揃いのチームで、竹腰、小島は共にチームの重鎮である。東大は敵陣に攻め入ったときに強い。竹腰と中島が目立つ。前者の鮮やかな球さばきのシュートと後者の特殊なドリブルとには感心する。村上のキーパーも好い。

小島の長蹴と、杉野の長身には相手のフォワードがいつもなやむ。東大はハーフが比較的弱い。早大を美事破っておきながら、一高と引き分をしたとは少し情けない。練習不足に加うるに敵を見くびった故と思う。対高師戦の時の東大は高師より一歩乃至二歩と出足がおそかった。早大を破ったときはよくよく早大の欠点を見抜いていた。

しかしこの2年の成績から見て、東大、早大、高師は鼎立をなしている。蛙と蛇と蛞蝓とである。」

（アサヒ・スポーツ 大正15.3.1）

なおこの総評の中に、慶大チームはまだ体育会に入会していないため、依然クラブ組織の扱いであり、対外的にも内部的にも非常に苦しい立場にある、との記述が見られる。

オフサイドなどの規則変更

1925年6月に国際サッカー評議会は競技内容に大きな影響を与える競技規則の改正を行った。オフサイドの規則を、それまでは守備側の後方から3人目より前方がオフサイドとされていたものを、2人目より前方に変更したのである。これが2バックから3バックへのシステム変更をもたらすことにもなった。

日本では1926年1月30日に早大グラウンドで行わ

1925年度（大正14年度）

れた早慶戦が、このルールを始めて適用するテスト試合となった。慶応のあげた1点目は、それまでのルールならオフサイドとなるものであったようだ。結果は2-2の引き分けに終わったが、得点になりそうなシーンも多く、早大OBの鈴木重義は、ゲー

ムがより面白くなることが期待されるものだから、日本でも早く採用すべきだと、と強く要望している。（運動界 大正15.3.1）

（浅見俊雄）

公式試合記録

・明治神宮競技大会関東予選

月 日 ○ 3-1 アツサ（ ）
 月 日 ○ 2-0 アストラ（ ）
 10月12日 ○ 2-0 豊島師範（ ）
 10月11日 準決勝 ○ 1-0 早 大（ ）
 決勝 ○ 2-1 高 師（ ）

・明治神宮競技大会

10月30日 準決勝 ○ 1-0 水戸高（ ）
 11月2日 決勝 ● 0-3 鯉城ク（ ）
 準優勝

・京大戦

4月12日 ● 1-2 (1-0) 京大(京大)
 10月18日 △ 1-1 (1-1) 京大(高師)

・関東大学リーグ1部

10月23日 ● 0-2 (0-1) 高師(高師)
 11月7日 ○ 2-0 慶大(板橋)
 11月15日 ○ 3-0 (1-0) 法大(法政)
 11月21日 ○ 3-0 (3-0) 早大(一高)
 1月16日 △ 1-1 (0-1) 一高(一高)
 3勝1分1敗 2位

出場選手

相手	関東予選		神宮大会		京大戦		関東大学リーグ1部			
	高 師	鯉城ク	4 月	10 月	高 師	慶 大	法 大	早 大	一 高	
GK	村上	村上	村上	村上	村上		村上	村上	中島	
FB	小島	小島	朝生	小島	小島		小島	小島	山本	
	内田	内田	山本	山本	内田		内田	内田	内田	
HB	坂本	坂本	鈴木	坂本	坂本		坂本	坂本	坂本	
	杉野	杉野	杉野	杉野	杉野		杉野	杉野	杉野	
	山本	山本	木村	鈴木	山本		山本	山本	鈴木	
FW	中村	小村	中島	中村	中村		岡本	中村	中村	
	野島	野島	中村	野島	野島		野島	野島	野島	
	中島	中島	岸本	中島	中島		中島	中島	中島	
	竹腰	竹腰	潮	竹腰	竹腰		竹腰	竹腰	竹腰	
	川中	川中	塩原	川中	川中		川中	川中	岸本	

関東大学リーグ1部成績

	高 師	東 大	早 大	法 大	一 高	慶 大	勝	負	分	得	失	差	点
高 師	—	○ 2-0	● 2-4	○ 3-0	○ 3-1	○ 棄権	4	1	0	10	5	5	8
東 大	● 0-2	—	○ 3-0	○ 3-0	△ 1-1	○ 2-0	3	1	1	9	3	6	7
早 大	○ 4-2	● 0-3	—	○ 4-0	○ 4-0	△ 2-2	3	1	1	14	7	7	7
法 大	● 0-3	● 0-3	● 0-4	—	○ 1-0	○ 1-0	2	3	0	2	10	-8	4
一 高	● 1-3	△ 1-1	● 0-4	● 0-1	—	○ 2-1	1	3	1	4	10	-6	3
慶 大	● 棄権	● 0-2	△ 2-2	● 0-1	● 1-2	—	0	4	1	3	7	-4	1

4勝1分でリーグ戦初優勝

グラウンド問題解決の方向に

野球部のグラウンドはこの年の6月に駒場の農学部キャンパスに完成したが、現在の御殿下グラウンドにはテニスコートが3分の2近くを占拠していたことから、新興のア式蹴球部、ラ式蹴球部（ラグビー部）、ホッケー部などが連合して、コートに移転を求めている。大学当局は巢鴨庚申塚の大学所有地への移転を提案したが、庭球部が先権などを主張して受け入れず、解決が難航していた。

大学当局が強硬策をちらつかせながら庭球部の先輩を歴訪して説得するなどの努力を重ねた結果、庭球部も秋の京大戦を限りとして巢鴨に移転することを了承した。また少しでも運動場を広くするために、御殿山側の道路をつぶして2メートルほど拡張することとなった。

部への配分は611円80銭

帝大新聞に掲載された大正14年の学友会決算書によれば、ア式蹴球部への配分は611円80銭とある。漕艇部3,102円、陸上運動部1,710円、ラ式蹴球部1,036円、野球部682円とあり、剣道、柔道、スケート部もア式より若干多い予算枠を持っていた。ちなみに当時のサッカーボールの価格は7円50銭、8円、8円50銭であった（広告から）。

主張が対立し京大戦は中止

この年も運動週間の一環として京都で行われることになっていた京大戦は、チームの京都到着後に、競技時間やオフサイドについての両チームの主張の対立から、急遽中止されてしまった。昨年の荒れた試合も中止の理由の一つだった。

強力な攻撃力へ期待高まる

これまでバックの守備の強さが特徴だった東大は、新たに鈴木、安東を迎え、野島、竹腰、中島と組むフォワードは、個人技にコンビネーションのよさが加わって、関東一の強力な攻撃力を持つに至った。さらにバック陣、ゴールキーパーにも新鋭が加わり、リーグ初制覇が大会の前から予想されていた。惜しくも一高と引き分けて全勝は逸したが、鬼門高師にも快勝して堂々の初優勝を飾って周囲の期待にこたえた。

主将には中島がなり、まず4月1日から静岡で10日間の合宿を行い、静岡高校のグラウンドの練習で年度のスタートを切った。1日1円の費用で、多数の参加を帝大新聞で呼びかけている。

この年のリーグまでの試合については、手元には10月の朝鮮蹴球団との試合記録があるだけで、後は不明である。ここには、リーグで法政大、農大に連勝した後、苦手の高師を3-1で破り、事実上の優勝決定戦となった早大戦についての野津謙の戦評（帝大新聞 大正15.12.13号）を要約して紹介する。

「この日は快晴、微風で、霜解けで多少の凹凸はあったが、絶好のサッカー日和だった。早大は超弩級のHB本田をGKに下げるといふ策をとったが当を得たものだった。開始から早大は得意のショートパスで攻めたが、再三のチャンスをもにすることが出来なかった。東大は右側から攻めて多くのチャンスを作った後に、伊藤のシュートで貴重な得点を挙げる。その後も俊足の東大FWが攻め立てたが、GK本田の好守で得点に至らない。後半早大が圧迫したが、シュートが外れる。東大も伊藤が足を痛めて中央からの攻撃のみになり、攻めきれない。両翼からの攻撃が重要なことがこれによってもわかる。

90分間始終観客を緊張させたのは、両軍のヘディングに、パスに、またタックルに妙技が続き、しかもミスが少なかったからである。ただ早大が本田をGKとしたために、守備力は増したが、攻撃が多少鈍って、ショートパスを得意とするFWに十分ボールを供給することが出来なかった。また得意のパスも東大バックスにかなり防がれていた。

攻撃の戦法はやはりショートパスとロングパスを使い分けるようになるのが理想で、強い防御線を突破するには、戦法の変化によるのが得策である。ゴールキックの数は東大が早大の半分で、つまり東大の圧迫裡に試合は終わった。しかしもし最初のチャンスに早大が得点していたら、勝敗の帰趨は分からなかったであろう。

全体を通じて東大の勝利は順当であろう。年々高等学校より入ってくる選手を加えてメンバーは充実している。しかも今年よりグラウンドを得て、毎日練習できるようになったことはこの上ない強みである。残る一高戦も油断の無い限り勝利するだろう。そうすればリーグ戦の3年目で、初めて全勝による優勝を東大が成し遂げることになる。

1926年度（大正15年度）

東大は戦法等にもなお研究の余地がある。科学的研究によって到達すべき目的地がなお遠遠であり、東大の前途はすこぶるプロミッシングなことを思わせる。

勝利の期待された最終戦の一高戦は、苦手意識が働いたのか1-1で引き分け、初優勝は手に入れたがリーグ初の全勝は惜しくも逸した。（浅見俊雄）

公式試合記録

・明治神宮競技大会関東予選

10月9日 3回戦 帝大RA ● 0-3 WMW

10月21日 △ 1-1 朝鮮蹴球団

・関東大学リーグ1部

10月24日 ○ 3-0 (1-0) 法大 (法政)

11月14日 ○ 5-0 (1-0) 農大 (高師)

11月21日 ○ 3-1 (1-0) 高師 (一高)

12月5日 ○ 1-0 (1-0) 早大 (一高)

1月16日 △ 1-1 (0-1) 一高 (一高)

4勝1分 優勝

・京大戦中止

出場選手

関東大学リーグ1部					
相手	法大	農大	高師	早大	一高
GK	近藤	近藤	近藤	近藤	近藤
FB	武安	朝生	朝生	岸山	渡辺
	岸山	岸山	岸山	朝生	岸山
HB	萩原	鈴木喜	萩原	萩原	萩原
	杉野	杉野	杉野	杉野	鈴木喜
	鈴木喜	乗富	乗富	武安	乗富
FW	野島	伊藤	伊藤	伊藤	伊藤
	鈴木駿	鈴木駿	鈴木駿	鈴木駿	鈴木駿
	竹腰	竹腰	竹腰	竹腰	竹腰
	中島	中島	中島	中島	中島
	安東	安東	安東	安東	安東

関東大学リーグ1部成績 早大対一高戦は、大正天皇崩御の直後で、服喪中止

	東大	法大	早大	高師	一高	農大	勝	負	分	得	失	差	点
東大	-	○3-0	○1-0	○3-1	△1-1	○5-0	4	0	1	13	2	11	9
法大	●0-3	-	●1-2	○3-2	○2-1	○5-1	3	2	0	11	9	2	6
早大	●0-1	○2-1	-	○3-2	未対決	△2-2	2	1	1	7	6	1	5
高師	●1-3	●2-3	●2-3	-	○3-0	○3-0	2	3	0	11	9	2	4
一高	△1-1	●1-2	未対決	●0-3	-	○1-0	1	2	1	3	6	-3	3
農大	●0-5	●1-5	△2-2	●0-3	●0-1	-	0	4	1	3	16	-13	1

初の全勝、2年無敗で優勝

京大戦は復活を見送り中止

前年に関東リーグの覇権を握った東大は、竹腰が主将となり、さらに高校卒の優秀選手を迎えて、部員数も50名を越す大所帯となった。

京大との定期戦の復活も議論されたが、リーグ戦を重視するため、部員会議で中止を決定した。以後、両リーグの優勝チームとしての対戦（1930年12月28日）、朝日招待（1938年1月9日）で試合した以外は、戦後復活するまで東大-京大戦は行われなかった。

また一般学生へのサッカーの普及のために、前年に行った工学部と経済学部との対抗試合を発展させて、各学部の対抗試合を奨励することとした。一方、部では春の合宿のあと学内での練習を重ねて、1年生の中島、細井、青山、大町がレギュラーに定着した。

極東大会の国内予選は、代表となったWMW（早大現役が中心）に関東予選の準決勝で敗れたが、竹腰と次の年に入学する水戸高の春山が補強選手として上海の大会に出場した。2人とも対中華、対フィリピンの2試合に出場し、中華には5-1で敗れたが、フィリピンには2-1で逆転勝利して、極東大会での初めての勝利に貢献した。決勝点となった2点目は春山のパスを竹腰が決めたものだった。

リーグ戦に全勝して2連覇

ここでは前年と同様に、帝大新聞に寄せた「攻防共に全し」と題する野津謙の総評を要約して紹介する。

第1回、第2回の早大、高師の優勝は、東大との三つ巴での食い合いの後の、いずれも敗戦を含んでのものであったが、昨年よりの東大の優勝は、2年連続無敗での覇権獲得であった。今年の5試合は全て同じメンバーで戦っており、卒業するのは1人だけであるから、前途は洋々たるものである。

本年の東大は最も欠陥の少ないチームだった。特に攻撃の左翼に竹腰、鈴木のスーパープレーヤーを有することは最大の強みであった。加えてバック陣も昨年より強力であった。特にディフェンスとフォワードとの係りがよく、攻撃の速度を増し、得点力の向上にもなっていた。本学グラウンドもかなり自

由に使えるようになり、竹腰主将の下に行われた猛練習の効果が現れて、チームの特長を存分に発揮していた。

法政、慶応戦は全然危険がなかった。早大の精鋭を向こうに回して闘ったゲームは最も力のこもったもので、東大の前半の攻撃はいかなる防御をも抜かずんば止まらずの感があった。

早大を破って当たってきた高師はこれまでの鬼門でもあり、スコアの示すとおり最も危険な試合であった。苦手の一高には、今年は油断を見せず、3年ぶりに勝つことができた。

こうして全勝することができたのは、夏の極東大会予選に早大に惜敗したこと、秋の神宮大会予選に東京高校にまさかの敗戦を喫したことも一因となっている。このことで生まれた「勝たざるべからず」の意志が、最後まで敵に乗ずる機会を与えないことにつながった。

暑熱の中、極東大会で全精力を注いで戦ってきた早大は、リーグ戦ではいつもの元気がなく、東大、高師に敗れて新進の慶応にも引き分け、かろうじて3位にとどまった。（帝大新聞 昭和2.12.12）

上海・交通大戦で教訓得る

この年度のサッカー行事がほぼ終了した後になって、上海の強豪交通大学が突如日本に遠征して来た。関西、関東の有力大学と2勝2敗1分けのあと、東大は最終戦の1月22日に対戦し1-2で敗れた。

ここでは竹腰が帝大新聞に寄稿した文章の要約を紹介する。

交通大の攻撃法はショートパスである。いまさらロングパスとショートパスの特質を比較する必要はないと思われるが、ロングパスが単なるキックではなく、本当にパスであれば、ロングパスはきわめて有効である。しかし守備が進歩すれば、ロングパスを用いる場面は少なくなるであろう。

彼らの対戦する相手はそれ相当のレベルであろうから、必然的にショートパスを多用しているであろう。ショートパスで陥りがちな変化の乏しくなる欠点は、主としてボールを保持しているものの動きが単調にならないようにすることで補おうとしているように見えた。

守備陣はかなり固定したポジションを取ってい

た。後方にひいているHBはやたらに大きく前へ蹴るのではなく、FWに確実にボールを供給して、それによってゴール前の詰まった場所ではなく、広いスペースを有効に使うショートパス戦法を取っていたように思う。

日本のHBは、ボールを奪うことに専念して猪突することを避け、もっと相手の動きを局限するような努力をすべきである。またパスにならないキック

をするのではなく、FWにボールを供給する役割が重要である。

東大はこの試合の教訓を生かして、HBのプレーの完成とあいまって、一つのパスの体系を完成させたいものである。さらに個々の技術を洗練するとともに、覇気をいつまでも失わないチームを作り上げなければならない。（帝大新聞 昭和3.1.30）

（浅見俊雄）

公式試合記録

・極東大会関東予選

6月25日 準決勝 ● 1-2 早大WMW

11月27日 ○ 2-1 (1-1) 高師 (一高)

12月6日 ○ 3-1 (2-1) 一高 (一高)

5勝0敗 優勝 2連覇

・全日本選手権東京地区予選

月 日 3回戦 ● 1-3 東京高 (神宮)

・親善試合

12月3日 ○ 4-0

YCAC (本牧)

・関東大学リーグ1部

11月6日 ○ 4-1 (2-0) 法大 (東大)

11月12日 ○ 7-0 (5-0) 慶大 (東大)

11月19日 ○ 2-0 (2-0) 早大 (東高)

・上海・交通大学チーム歓迎試合

1月22日 ● 1-2 (1-1) 交通大 (神宮)

出場選手

関東大学リーグ1部						
相手	法大	慶大	早大	高師	一高	交通大
GK	奥野	奥野	奥野	奥野	近藤	奥野
FB	林 岸山	林 岸山	林 岸山	林 岸山	林 岸山	林 岸山
HB	萩原 青山 大町	萩原 青山 大町	萩原 青山 大町	萩原 青山 大町	萩原 青山 大町	萩原 青山 大町
FW	細井 野島 中島 竹腰 鈴木	細井 野島 中島 竹腰 鈴木	細井 野島 中島 竹腰 鈴木	細井 野島 中島 竹腰 鈴木	細井 野島 中島 竹腰 鈴木	細井 野島 中島 竹腰 鈴木

関東大学リーグ1部成績

	東大	慶大	早大	一高	高師	法大	勝	負	分	得	失	差	点
東大	—	○7-0	○2-0	○3-1	○2-1	○4-1	5	0	0	18	3	15	10
慶大	●0-7	—	△2-2	△3-3	○4-1	○3-0	2	1	2	12	13	-1	6
早大	●0-2	△2-2	—	○5-2	●2-4	○4-1	2	2	1	13	11	2	5
一高	●1-3	△3-3	●2-5	—	○2-1	○棄権	2	2	1	8	12	-4	5
高師	●1-2	●1-4	○4-2	●1-2	—	○3-1	2	3	0	10	11	-1	4
法大	●1-4	●0-3	●1-4	●棄権	●1-3	—	0	5	0	3	14	-11	0

新たな道を求めて上海遠征

在学4年目（農学部では3年目）となった竹腰が前年に引き続き主将を務めた。この年、篠島、高山、春山、若林といった優秀なFW陣に、斉藤、船岡のバック陣などが入部して、メンバーも一新した。帝大新聞にも「ア式蹴球部の黄金時代来る」とある。竹腰は攻撃陣が充実したことと、課題であったHBとFWの関係を強化するためにCH（ロビングセンターハーフとしての）に下がって、攻守の要を務めることになった。

負けはしたがいろいろ収穫

この年、昭和天皇の即位の礼が11月10日に行われることから、その前後が祝日となったのを利用して、東大チームは上海に遠征することとなった。チームの完成度を上げるために、より強いチームとの対戦をこの遠征に求めたのであった。

再戦を強く要望した交通大からは、済南事件の未解決という外交問題を理由に対戦を拒絶された。また最終戦の英国海軍チームとの試合は、連日の豪雨で中止となり、2戦2敗の不本意な成績で終わった。

竹腰が帝大新聞（3.11.19号、26号）に書いた遠征の印象記と、中島實がアサヒ・スポーツ（3.12.1号）に書いた報告とから、この2試合から東大が学んだものの要約を紹介する。

対戦した2チームは、第一戦が3部まである上海リーグの一部に属している軍以外の英人選抜チーム、第二戦は同じく一部所属の駐留英国陸海軍の選抜チームで、海軍4人、陸軍7人で編成されたチームだった。今週末日した交通大学チームは2部中位のチームだという。

結果は芳しいものではなかったが、得られたものは多かった。それは彼らのすぐれた技量に接しえたことと、それ以上に、彼らの示したフェアプレーの故である。2試合とも今まで経験したことがないほど気持ちよく試合することができた。

彼らのプレーには全て「含み」がある。すなわち余裕を残している。スピードを出しうるときにもそれを保留し、ドリブルのまだ可能なうちにパスを出し、左にもパスを出せるときに右に出すといったようなやりかたである。それは一見効率が悪いように

も見えるが、実はその逆の結果を生む。バックパスもその一例である。それは個々の技術の巧妙さといまわって、余裕を持ってシュートまで持ち込むことができるという結果を生む。またこれがHB、FBが相手の攻撃に対して準備するに十分な時間を与えることになる。

彼らのFWはW型をなしている。それは鋭さを出すためではなく、変化を出して相手をかく乱するためである。その変化を出すには、両インナーが広くかつ巧妙な動きをすることが重要であり、この動きによってFWは個が他から孤立することなく余裕を持てるようになっている。

われわれは道を求めて上海に遠征し、あくまで東大の学生として堂々と試合をしてきた。しかし技術的には多くを考えさせられた。体格の著しく違うわれわれは、彼らの方法をどれだけ取り入れるべきかはよく考えなければならないが、敵失を待たない合理的な蹴球に発展させるためには、彼らに多くを学ばなければならない。それは東大の蹴球にとっての問題だけでなく、わが国の蹴球にとっての問題である。

強さの秘密は強力なHB陣

全勝で3連覇を成し遂げたリーグ戦については、2つの総評の概要を紹介する。

上海遠征の堂々たる試合振りも観戦したが、リーグでは個人の完成からさらに数歩進めてチームとしての完成融合を見ることができた。

東大の強さは、CH竹腰の率いるHB線の攻撃力の優秀さがFW線を後援して、二重にFW線を布いたところにある。HB線の得たゴールは竹腰2、斉藤、新莊各1の4点に過ぎないが、内に秘めたHBの攻撃力はまったく他に見られぬものであった。東大は強靱よりも巧緻が今のチームの特色で、さらに個人の速いモーション、そのモーションを速やかに変換しうる軽妙さが巧みな連絡とともに完成される次のシーズンが待ちどうしくもある。

（山田午郎 アサヒ・スポーツ 昭和4.2.1号）

東大チームが上海において新たな道、新しい蹴球を求めた跡をリーグ戦に見ることができた。これまでは攻撃は攻撃、守備は守備として考える傾向があったが、チームが有機的に一体となって、11人が1

球1蹴の動きにつれて連絡の網目によって攻防に携わることが理想と考えられであろう。

この観点からいえば、FWは経験不足からまだ連絡と了解にかけて、スピードに対する盲目的執着が見られ、敵失がなければ攻撃に行き詰まる所があった。バックについてはFWよりも完成度が高かった。HB相互やFBとの関係、さらにFWの後援としての動きなど、少なくとも国内的にはかなり見る

べきレベルであった。また全てのバックからFWへのフィードがかなり有機的にできていたことも注目すべき点だった。

日本蹴球の国際的発展のためにも、国内的レベルに甘んずることなく、一層精進して了解と信頼に基づく、秩序あり、かつ自由なチームワークの完成に努力することを望んでやまない。（中島道雄 帝大新聞 昭和3.12.1）
（浅見俊雄）

公式試合記録

・関東大学リーグ1部

- 10月26日 ○ 11-0 (4-0) 明大 (東高)
- 11月17日 ○ 5-2 (1-0) 慶大 (東高)
- 11月24日 ○ 5-0 (2-0) 高師 (一高)
- 12月4日 ○ 9-1 (7-0) 一高 (一高)
- 12月9日 ○ 3-1 (3-0) 早大 (神宮)
- 5勝0敗 優勝 3連覇

・上海遠征

- 11月3日 ● 3-5 (1-1) 上海選抜 (上海)
- 11月4日 ● 0-5 (0-4) 英国駐屯軍選抜 (上海)

出場選手

相手	関東大学リーグ1部					上海遠征	
	明大	慶大	高師	一高	早大	上海選抜	英軍選抜
GK	近藤	近藤	近藤	近藤	近藤	近藤	近藤
FB	船岡	船岡	船岡	船岡	船岡	船岡	船岡
	岸山	小川	小川	岸山	岸山	岸山	岸山
HB	斉藤	斉藤	斉藤	斉藤	斉藤	斉藤	斉藤
	竹腰	竹腰	竹腰	竹腰	竹腰	竹腰	竹腰
	大町	大町	大町	新荘	新荘	大町	大町
FW	春山	春山	春山	春山	春山	春山	春山
	高山	高山	高山	高山	高山	高山	高山
	篠島	篠島	篠島	篠島	篠島	篠島	篠島
	若林	若林	若林	若林	若林	若林	若林
	鈴木	鈴木	鈴木	鈴木	鈴木	鈴木	鈴木

関東大学リーグ1部成績

	東大	慶大	早大	明大	高師	一高	勝	負	分	得	失	差	点
東大	-	○5-2	○3-1	○11-0	○5-0	○9-1	5	0	0	33	4	29	10
慶大	●2-5	-	○3-2	△1-1	○3-2	○9-0	3	1	2	18	10	8	7
早大	●1-3	●2-3	-	○3-2	○6-1	○4-3	3	2	1	16	12	4	5
明大	●0-11	△1-1	●2-3	-	○3-1	○4-1	2	2	1	10	17	-7	5
高師	●0-5	●2-3	●1-6	●1-3	-	△2-2	0	4	1	6	19	-13	1
一高	●1-9	●0-9	●3-4	●1-4	△2-2	-	0	4	1	7	28	-21	1

主力抜けたがチーム力向上

4年間文字通りスーパースターとして東大の中心にいた竹腰が3月に卒業し、鈴木も大学には残っていたが、部活動からは離れていた。だが、点取り屋の手島、守備の要の竹内が加わり、むしろチーム力はより強固のものになった。GKの奥野が主将を務め、竹腰は就職後も毎日のようにグラウンドに現れて現役を指導していた。

来日の英国艦隊と親善試合

5月に英国からの特使として来日されたグロスター侯の歓迎試合として、乗艦のサフォーク号との対抗戦が行われた。サフォークのチームは上海、香港でかなり試合をしており、上海の1部チームとも互角の力を持っているという。東大もまだチームとしてのまとまりは出来ていないが、両軍フェアに戦って、双方の選手の優秀な技術とあいまって気持ちのよい試合を展開した。竹腰は、「新人が東大チームを形成するに足る個人技術を習得して、組織立てられた強さを持つに至れば、昨年度よりはるかに強いチームとなる可能性は十分ある」と、この試合の評を帝大新聞に寄稿して、秋のリーグ戦に大きな期待を寄せている。

部の夏季合宿は9月1日から10日間、名古屋（たぶん八高グラウンドか）で行われた。

野津が欧州から貴重な情報

アムステルダム・オリンピックの日本代表団の役員として渡欧した野津は、その後ヨーロッパ諸国のサッカー事情を見てきたが、その報告を帝大新聞(4.41)に寄せている。その中でサッカーが母国英国だけでなく、ヨーロッパに広く普及しているのに驚き、東大チームの進もうとしている方向がヨーロッパのそれと同じであること、戦術的にはバックパスを多用し、コンビネーションに重要なものとなっていることを報告している。この報告が東大の更なる進化に大きな役割を果たしたといつてよい。

リーグ戦は無敗での4連覇

東大は竹腰が予感したように、より充実したチームに成長して、慶大には3-2と1点差であったが、5戦を通じて一度も相手にリードを与えることなく、4年連続で優勝、しかも初回の優勝時に引き

分け1を記録しただけの無敗での連覇を記録した。

ここには竹腰重丸が帝大新聞(5.11)に寄稿した同シーズンの総評から、その概要を紹介する。

多大の期待をもたれていた慶大も、リーグ戦に入ってから進歩の跡が見られず、2部で全勝すると思われていた法大も、停滞を思わせただけに反して、早大、一高が時日の経過とともに躍進的に進歩したことを考え合わせると、試合過多の弊害が痛感されると思う。もちろん試合数の問題は、大きく伸びるかどうかを規定する諸条件の一つに過ぎないが、日本蹴球の問題の一つとしてここに提起する次第である。

本シーズンにおいても東京カレッジリーグの諸チームは、大体の傾向として昨年の各チームの行き方を受け継いでいたといえる。東大は依然として攻守の複雑化に向かって進み、早大は粘り強さ第一に、慶大は鋭さに依存するチームを作っていた。しかし早大は時日の経過とともに強みを増しながらも、選手交代が多すぎる弊としてか、精緻さを欠いて過去のレベルを超えることはできなかった。

東大が今シーズンにいかなる歩みが続けたかを見るに、昨年のチームは攻守ともに一体となった陣形を敷く道程としてかなり労力の徒費があったのであるが、今年はまだ未完成な点はあるものの、一応昨年の清算をしえたのは一歩前進したものと見える。

複雑化の過程では常にHBが問題となるが、今シーズンは他のHBが不振であったのに対して、東大は頼るに足る堅実なHB線を形成していた。すなわち攻撃に関しては、FWへのフィードは適時、正確であり、かつFWの動きにつれての巧みな援護によって、チームの攻撃を連続的なものとしてより有利な状態から出発させることによりかなり成功していた。

東大の守備は時に破綻していたが、HBとしては相手を追い詰める責務は果たしていた。ただFBとともに、あまりにも楽に奪う習慣ができて、強力なタックルをする経験が少なかったために、それが必要なゴール近くにおいて時に破綻を生じ、あっけなく得点を許すことがあった。

FW内部の連絡は、昨年にも優るとも劣らぬものがあり、各人の動きが調和してきた11月末ごろからは、フリーでシュートの打てる機会が実に多くあった。ただここにも守備に関する未完成と同様に、止めを刺すシュートをよくミスしていた。シュートの練習不足に起因するのであろう。

東大は攻守ともにスピードを持っている。各人の走力がすぐれていることもあるが、戦法による所のほうが多い。走力の優越は有利なものであることは確かだが、蹴球がキックと走力の競走ではないことを示しえる段階に東大は進んだといえるだろう。

関学破り事実上の日本一に

この年から、東西大学リーグの覇者による東西優勝校争覇戦が行われることになり、東大は関西学院大を3-2で破って初代王者となり、事実上の日本一となった。（浅見俊雄）

公式試合記録

・関東大学リーグ1部

- 10月19日 ○ 7-0 (4-0) 文理大 (東大)
- 11月5日 ○ 7-0 (1-0) 農大 (成城)
- 11月24日 ○ 3-2 (1-1) 慶大 (神宮)
- 11月25日 ○ 7-1 (5-0) 明大 (神宮)
- 12月15日 ○ 6-3 (5-2) 早大 (神宮)
- 5勝0敗 優勝 4連覇

・東西王座決定戦

- 12月25日 ○ 3-2 (2-2) 関学 (神宮)
- 5月9日 △ 3-3 (3-1) 英艦サフォーク号 (神宮)
- 11月4日 ○ 6-4 (4-0) 英旗艦ケント号 (神宮)

出場選手

相手	関東大学リーグ1部					王座戦			
	文理大	農大	慶大	明大	早大	関学	サフォーク号	ケント号	
GK	奥野	阿倍	奥野	阿倍	奥野	阿倍	奥野	近藤	
FB	船岡 岸山	船岡 岸山	船岡 岸山	船岡 岸山	船岡 岸山	船岡 岸山	船岡 岸山	船岡 岸山	
HB	野沢 竹内 大町	野沢 竹内 大町	野沢 竹内 大町	野沢 竹内 大町	野沢 竹内 大町	野沢 竹内 大町	野沢 竹内 山川	野沢 竹内 大町	
FW	高山 篠島 手島 若林 春山	篠島 高山 手島 若林 春山	高山 篠島 手島 若林 春山	高山 篠島 手島 若林 春山	高山 篠島 手島 若林 春山	高山 篠島 手島 若林 春山	高山 篠島 手島 若林 鈴木	高山 篠島 手島 若林 春山	

関東大学リーグ1部成績

	東大	明大	早大	慶大	文理大	農大	勝	負	分	得	失	差	点
東大	-	○7-1	○6-3	○3-2	○7-0	○7-0	5	0	0	30	6	24	10
明大	●1-7	-	○4-3	○2-1	○2-1	●0-2	3	2	0	9	14	-5	6
早大	●3-6	●3-4	-	○2-1	△0-0	○4-2	2	2	1	12	13	-1	5
慶大	●2-3	●1-2	●1-2	-	○4-1	○3-2	2	3	0	11	10	1	4
文理大	●0-7	●1-2	△0-0	●1-4	-	○1-0	1	3	1	3	13	-10	3
農大	●0-7	○2-0	●2-4	●2-3	●0-1	-	1	4	0	6	15	-9	2

部の評価と人気は上り調子

東大勢を主力に極東大会へ

この年第9回極東大会が東京で開催され、日本は初めて予選を行わずに選抜チームを編成して臨んだ。そしてその主力は東大の現役とOBで、竹腰が主将となった。中華と激戦の末に引き分け、初めてアジアの覇権を握った大会だったが、これについては「国際大会で初優勝」に詳述している。

サッカー部の国内および学内でのステータスも人気も上がり、帝大新聞の運動会紹介でも「最も強い蹴球部」と書かれ、一般新聞を含めて蹴球の記事が多く、しかも大きく取り上げられるようになった。極東大会、リーグ戦などにもかなりの観客が集まったようである。

東大は春山が主将になったが、夏に春山の退部を受けて篠島が主将になっている。篠島は秀才で、小学5年で中学に入る飛び級をし、しかも東京高校は中高一貫の7年制（普通は中学5年に高校3年）だったので、普通のコースで入学した同級生に比べて2歳若い最年少であった。

春はチームの主力が極東大会代表に選ばれて、長期の合宿で大会に備えたので、チームとしてのまとまった練習は、大会後までできなかったと思われる。8月下旬から9月上旬に、山中で合宿を行っている。

2年続けて日本一の王座に

明大は前年、試合のたびにラフなプレーを繰り返したので他チームの颯々（ひんしゆく）を買ひ、学連で協議した結果、自主的にか処分としてかは不明だが、1年間出場しない（できない）ことになり、5チームでリーグが行われた。翌年には1部に復帰しているから、自ら謹慎したのであろう。

極東大会の準備のための、2ヵ月以上の猛烈を極めた合宿練習と激烈な試合のもたらした心身の疲労と故障者の影響は大きく、このリーグ戦で、東大は早大に3-2で敗れる。5年ぶりの敗戦であった。そしてその後の一高戦と、一高に苦杯をなめて同率首位となった早大との優勝決定戦には、前年も現役戦にはまったく出ていなかった名手鈴木駿一郎がLWとして登場した。竹腰はじめ先輩たちの薦めに、篠島たち現役も鈴木を必要とすることを納得しての登場だったのだろう。結果は京大との東西対決を含

めて3勝し、関東リーグの5連覇と、2年続けての日本一の王座につくことができた。

篠島は卒業に当たって、最も印象に残っていることとして、「大学1年のときの上海遠征、高文（高等文官試験）を受けるのを諦めて出場した第9回極東大会に備えての練習の辛さ、最後の昭和5年11月30日に早稲田に敗れたこと」と帝大新聞（6.2.16.）に記している。

ここでは早大との2試合と、京大との王座決定戦についての評を新聞などの記事から紹介する。

滑らかな動き消えた早大戦

両軍ともパスが3つ以上続くことはまれで、早大は無駄な長蹴がラインを割ったり相手に渡ることが多かった。東大は例年見られる精巧で機械のように滑らかな11人の動きがなく、特に相手を奔命に疲らせる正確なパスワークがほとんど見られなかった。

ここ数年強力なFWを擁して苦戦の試練を受けることなく楽勝してきた東大バックスは、早大インサイドトリオの、ときに両翼や後方からの支援を受けての各自の特色あるプレーによって相手をかく乱する攻撃を支えきれずに破綻を示した。

（濱田論吉 アサヒ・スポーツ 5.12.15）

早大の攻撃はHBとFBの好調に支えられ、CF本田のものすごい活躍とあいまって好結果につながったといえる。

東大は攻守の主力若林、近藤を欠き、手島も手負いで、攻撃は組織的構成的なパスワークを失って個人的ながんばりに頼らざるを得ず、守備もHBとFBの連係が断たれて消極的なものとなった。

（小山忠恵 帝大新聞 5.12.4）

力量全く伯仲の優勝決定戦

両軍の力量がまったく伯仲していたため、シーズン掉尾をかざるにふさわしい白熱した激戦となった。早大はシーズン中に上達したが、それは長期にわたって緊張した練習を続けたからであろう。東大は故障によるメンバーの変動が多く、多くの未完成部分があった。HBからFWへのパスが悪く、「滑り出る」感じを与えずに中盤で多くの努力を要していた。

中盤の激戦が多く、両キーパーの好守およびバック陣にミスが少なかったことが得点が最小にとどまった理由である。東大が5連覇できたのは、幸運に

よるといってよい。

この試合は攻撃に味の乏しい憾みはあったが、激戦の程度は極東大会の日華戦に匹敵するもので、見るものに息つく暇を与えなかった。

（竹腰重丸 帝大新聞 5.2.22）

単調だった学生王座決定戦

この試合は日本のナンバーワンを決定する試合であったが、試合の内容は単調で変化に乏しく、息詰まるような場面が少なかったことで期待を裏切られた。

会場の甲子園が両チームの技術、体力、構成力には広すぎる（長すぎる）こともその原因だった。東大のときは東京でのリーグ戦時より精彩がなかった。攻撃で全員の動きが十分には整わず、寄せにかかる際にも出足が不ぞろいであった。チーム全体としての攻守の隊形が京大よりも整っていたことが勝因の一つに上げられよう。

東大の特徴がチームの構成力であるのに対して、京大の強みは個人のダッシュ力や果敢なタックルの強さにあった。

（竹腰重丸 帝大新聞 6.1.12）
（浅見俊雄）

公式試合記録

・関東大学リーグ1部

11月5日 ○ 3-1 (1-1) 文理大 (神宮)

11月14日 ○ 3-1 (1-1) 慶大 (神宮)

11月30日 ● 2-3 (0-1) 早大 (神宮)

12月7日 ○ 7-0 (4-0) 一高 (神宮)

3勝1敗 同率1位

優勝決定戦

12月14日 ○ 1-0 (1-0) 早大 (神宮)

リーグ優勝 5連覇

・東西王座決定戦

12月25日 ○ 2-1 (2-1) 京大 (甲子園南)

・関東遠征試合

6月14日 ○ 4-3 (2-2) 関大 (東大)

出場選手

相手	関東大学リーグ1部				決定戦	王座戦
	文理大	慶大	早大	一高	早大	京大
GK	阿部	阿部	阿部	阿部	阿部	阿部
FB	船岡	船岡	船岡	船岡	船岡	船岡
	山田	近藤	林	竹内	竹内	竹内
HB	野沢	野沢	野沢	林	林	林
	竹内	竹内	竹内	野沢	野沢	野沢
	斉藤	斉藤	斉藤	斉藤	斉藤	斉藤
FW	三宅	三宅	三宅	三宅	三宅	三宅
	篠島	篠島	篠島	高島	篠島	篠島
	内藤	手島	手島	篠島	手島	手島
	若林	若林	青山	内藤	内藤	内藤
	手島	出浦	出浦	鈴木	鈴木	鈴木

関東大学リーグ1部成績

	東大	早大	一高	慶大	文理大	勝	負	分	得	失	差	点
東大	-	●2-3	○7-0	○3-1	○3-1	3	1	0	15	5	10	6
早大	○3-2	-	●1-2	○4-3	○3-0	3	1	0	11	7	4	6
一高	●0-7	○2-1	-	●0-2	○4-2	2	2	0	6	12	-6	4
慶大	●1-3	●3-4	○2-0	-	○3-1	2	2	0	9	8	1	4
文理大	●1-3	●0-3	●2-4	●1-3	-	0	4	0	4	13	-9	0

リーグ戦6連覇の大金字塔

篠島以下の攻守の中心メンバー5人が卒業し、短艇の点取り屋のCF手島が主将になった。手島は協会機関誌「蹴球」第1号（昭和6.10.23号）の有力大学新主将の抱負に「(略) 他の学校がやっている様に、石神井の寺に合宿して竹腰コーチの下練習してゐます。秋の学期になれば練習時期も少いし、経験にも乏しい我々には甚だ不利ですけれども、若い元氣な新人の意氣と頑張りで押通すつもりでゐます。(略) 眼中に敵なく、敵は寧ろ近く己の中にあるだろうと思ひます。己を相手の戦ひには豫想もありません。只努力あるのみです。(略)」(原文のまま)と書いている。

この年、帝大OBと現役別軍の帝大LBの2チームが全日本選手権大会（兼明治神宮大会）に出場したが、OBは関東予選1回戦で敗退したのに対し、LBは予選4試合を勝ち抜いて本大会に出場し、準々決勝で関西の雄関学を2-1で下し、決勝で興文中（中国代表）を5-1で破って堂々優勝を飾った。これについては第4部に別記する。

リーグ戦までの試合などについては資料が得られなかった。ただ、夏休み終わりの合宿に近年まれな激しい練習を行いながら、9月以来練習に激しさを失ってきた、という文が竹腰重丸の寄せた帝大新聞のリーグ戦途中の記事に見られる。

リーグは黄信号のあと優勝

緒戦の明大戦では、開始40秒で明治に先制点を与えて観客をどよめかせたが、9-1で大勝したものの、農大には2-1と苦戦して連覇に黄信号がともった。しかし、かつての苦手の一高を一蹴し、打倒東大に執念を燃やす慶早を破って、結局は5戦連勝で優勝を飾り、リーグ6連覇の偉業を成し遂げた。

ここには東早慶の三つ巴戦を前にした予想とその戦評、関学との王座決定戦の戦評の記事の概要を紹介する。

ビッグスリーというリーグ

いつの頃からか「ビッグスリー」というリーグがリーグの中のできてしまった。しかしこれまでの慶応の出来から見れば、昨年同様東早戦で優勝が決まるであろう。技量で東に一日の長が、まとまりにおいて早に歩がある。牙城を守るものと攻めるものと

の間で、見る者の手に汗握る試合となることを期待している。

(高山忠雄 帝大新聞 6.11.16)

攻撃に決め手欠いた慶大戦

今シーズンの基調を活動力の向上、技の激しさを出すことに置いたが、10月以後グラウンドが踏み固められたため激しい練習は不可能となり、諸所の運動場に出張練習したため、9月はじめの合宿練習後よりも動作の激しさは減少して不振に陥っていた。しかしこの4日前から好調となって愁眉を開いたが、攻撃で「決め手」というほどの確実な得点の形が出来上がらなかった。

慶応の攻撃はそれほど威力はないが、セットプレーはキックの正確さと長身とから警戒もし練習もしていた。しかし試合ではCKから先取点を奪われた。

東大はリードされた後も終始優勢に試合を進め、動きの強さを利して強引に守備を突ききった後に粘り勝ちするという形で4点をあげて勝利した。

(竹腰重丸 帝大新聞 6.12.7)

パスに変化が増した早大戦

東大の攻撃はさらに力を増しパスに変化が多くなった。激しく動きながらパスからパスへの移り行きに時間をかけずに行われる攻撃は、相手として止めるに困難だ。東大の攻撃は一戦ごとに力を増している。

早大の攻撃はこれまでの試合ほどには後陣からFWへの送球がなく、東大HB、FBの出来がよかったので、期待ほどの華々しさを示さなかった。

早大の守備は慶応戦に見られた東大のRW高山、CF手島の好連絡を断つことに力を注いだ。RI和田が好調でしばしば守備が破られていた。

(竹腰重丸 帝大新聞 6.12.7)

攻撃に鋭さ欠いた王座決定戦

東大は前半風上にあつたとはいえ全線を整備して試合をリードしていた。後半に入って関学は風を利して試合をオープンに進め、東大の守備陣に破綻を生じさせた。

東大HB線は後半に入って制球力を失ったため、前線へのフィードも思うに任せず、手島が完全にマークされて、FW線のコンビネーションが取れなくな

1931年度（昭和6年度）

っていった。

関学は前半HBのフォローアップが乏しいために攻撃に力がなかったが、後半は風にも助けられ、守備陣も堅実なものとなり、すぐれたキック力を遺憾なく使うことで今日の結果を得られた。

関学は実力を遺憾なく発揮できたのに対して、東大はなんとなく物足らない試合をしたといえるのではなかろうか。（山田午郎 朝日新聞 6.12.14）
（浅見俊雄）

公式試合記録

・関東大学リーグ1部

- 10月16日 ○ 9-1 (4-1) 明大 (神宮)
- 10月22日 ○ 2-1 (1-0) 農大 (神宮)
- 11月8日 ○ 8-0 (4-0) 一高 (石神井)
- 11月29日 ○ 4-1 (1-1) 慶大 (神宮)
- 12月5日 ○ 3-1 (1-0) 早大 (神宮)
- 5勝0敗 優勝、6連覇

・東西王座決定戦

- 12月13日 △ 2-2 (1-0) 関学 (神宮)
- 引分 両校優勝

出場選手

相手	関東大学リーグ1部					王座戦
	明大	農大	一高	慶大	早大	関学
GK	阿部	阿部	阿部	阿部	阿部	阿部
FB	竹内	田村	田村	田村	田村	田村
	大石	竹内	竹内	竹内	竹内	竹内
HB	林	林	林	林	林	林
	野沢	野沢	野沢	野沢	野沢	野沢
	生島	生島	木村	木村	木村	木村
FW	赤松	高山	高山	高山	高山	高山
	和田	和田	内藤	和田	和田	和田
	手島	手島	手島	手島	手島	手島
	藤岡	藤岡	藤岡	内藤	内藤	内藤
	中村	中村	中村	中村	中村	中村

関東大学リーグ1部成績

	東大	慶大	早大	一高	農大	明大	勝	負	分	得	失	差	点
東大	—	○4-1	○3-1	○8-0	○2-1	○9-1	5	0	0	26	4	22	10
慶大	●1-4	—	○4-3	○5-1	○6-2	○6-0	4	1	0	22	10	12	8
早大	●1-3	●3-4	—	△2-2	○11-1	○9-0	2	2	1	26	10	16	5
一高	●0-8	●1-5	△2-2	—	○1-0	○3-1	2	2	1	7	16	-9	5
農大	●1-2	●2-6	●1-11	●0-1	—	○7-0	1	4	0	11	20	-9	2
明大	●1-9	●0-6	●0-9	●1-3	●0-7	—	0	5	0	2	34	-32	0

早慶に大敗、7連覇ならず

リーグ戦、3位に甘んじる

東大6連覇の後を受けて7連覇の期待が高まる中、接戦が予想される昭和7年度の関東リーグが開幕した。

東大は初戦の一高戦に辛勝した後、文理大、農大にも同じく僅差で勝って接戦を制したが、続く早大戦、慶大戦に大敗して7連覇の夢は潰え、結局3位に甘んじた。

常勝東大に対して5-0で大勝した早慶両校は首位をかけての決勝を引き分け、続く1位決定戦で慶応が5-2で早大に勝ち、念願のリーグ初優勝を飾った。

▽東大4-3一高（10月1日、神宮）

戦評：前半先取点を許してしまった東大は後半17分にも1点を失う。後が無くなった東大は30分過ぎに立て続けに2点を奪いなおも攻めるが、逆に38分には相手CHのロングキックで1点を失い、再びリードを許してしまう。

しかし東大は40分に1点を返し、タイムアップ直前にもシュートを決めて辛うじて初戦の敗北を免れた。

▽東大5-3文理大（10月8日、神宮）

戦評：第1戦に続いて東大は早々と開始50秒に文大GKのロングキックを起点とした攻撃で1点を失ってしまう。

開始2分には1点を返して同点とするが、10分には再び1点を失い、再びリードを許してしまう。

しかし東大はこれにひるまず奮起して25分、42分と加点してリードし、優位に立って前半を終えた。

後半立ち上がりの文理大の猛攻をしのいだ東大は29分、33分と加点して5-2として勝負を決めた。

しかし東大は終了間際にまたも1点を失う危うさを見せてしまう。この安定を欠く守備のもろさが、後に続く早大戦、慶大戦の大敗につながっていくこととなる。

▽東大2-1農大（10月22日、神宮）

戦評：前半開始5分で1点を奪い、3試合ぶりに先手を取った東大だが、その後の連続攻撃にも追加点があげられず、逆に25分には1点を失い同点とされてしまう。

後半は相互に攻撃を繰り返す中、東大は27分に挙

げた1点を守りきって辛勝した。

評によれば、「東大の堅陣を脅かし続けた農大の善戦は賞するに余りある」とあるが、東大の力の衰えを肌で感じた相手チームが「常勝東大組し易し」と気力を奮い立たせてしまった結果といえなくもない。残念ながら東大の力の衰えを窺わせる試合結果であったと言える。

▽東大0-5早大（11月19日、神宮）

戦評：東大は7連覇の偉業達成の前に立ちほだかる早大戦を前にして、負傷者が続出、内藤主将の病気をはじめ、ゴールゲッター和田のひざの故障、守備の要、原田の左足肉離れと憂色が漂う中での早大戦で、未曾有の惨敗を記録することになった。

早大は前半から東大ゴールを襲い、早くも9分に先取点を奪い、その後も18分、25分、38分と加点して前半で勝負を決めてしまった。

後半は東大が果敢に攻撃を繰り返し、押し気味に試合を進めるが早大守備陣はゴールを死守、東大は40分の最後のチャンスを失った直後にドリブルシュートで加点され、この時すでに攻撃の余力なく、早大に惨敗した。

▽東大0-5慶応（11月27日、神宮）

戦評：慶大は前半5分に早くも1点を先取、その後も22分、34分と立て続けに2点を奪って勝負を決めた。

東大はCH高山を欠き、病気がりの内藤を使うなどしてキックオフ直後こそ動きに鋭さを見せて互角の試合を予想させたが、伝統を誇る精密な連携は見ようとして見るができなかった。

東大陣はオーバーワークの色濃く、出足は鈍く制球力も極めて乏しく、HBとFBは人が交錯して徒勞の守備を強いられた。

早慶両校は、東大戦に際して先取点を奪ってからはその動きはさらに鋭さを増し、疲労と負傷に悩む東大を置き去りにして追加点を重ねて勝利を確実にした。

東大にはもはや早慶の勢いを止める力はなかった。

関東OBリーグ戦で雪辱

昭和8年3月に港区の綱町球場で行われたリーグ戦で、東大OBは前年秋のリーグで惨敗した慶大に3-1、早大に7-2で勝って優勝し雪辱を果たした。

（戦評は朝日新聞から要旨抜粋）

（安達二郎）

公式試合記録

・関東大学リーグ1部

- 10月1日 ○ 4-3 (0-1) 一高 (神宮)
 10月8日 ○ 5-3 (3-2) 文理大 (神宮)
 10月22日 ○ 2-1 (1-1) 農大 (神宮)
 11月19日 ● 0-5 (0-4) 早大 (神宮)
 11月27日 ● 0-5 (0-3) 慶大 (神宮)
 3勝2敗 3位

出場選手

関東大学リーグ1部					
相手	一高	文理大	農大	早大	慶大
GK	大村	阿部	阿部	大村	大村
FB	田村 市川	田村 市川	田村 八巻	田村 市川	田村 市川
HB	林 高山 木村	江崎 高山 木村	山田 高山 木村	江崎 高山 木村	江崎 横田 木村
FW	小川 和田 日高 内藤 菊池	小川 和田 日高 太田 菊池	小川 和田 日高 太田 菊池	横田 和田 日高 太田 菊池	小川 和田 宮内 内藤 菊池

関東大学リーグ1部成績

	慶大	早大	東大	文理大	農大	一高	勝	負	分	得	失	差	点
慶大	△2-2	○5-0	○6-4	○2-1	○4-1	4	0	1	19	8	11	9	
早大	△2-2	○5-0	○4-1	○4-0	○2-0	4	0	1	17	3	14	9	
東大	●0-5	●0-5	○5-3	○2-1	○4-3	3	2	0	11	17	-6	6	
文理大	●4-6	●1-4	●3-5	○2-0	△1-1	1	3	1	11	16	-5	3	
農大	●1-2	●0-4	●1-2	●0-2	○4-0	1	4	0	6	10	-4	2	
一高	●1-4	●0-2	●3-4	△1-1	●0-4	0	4	1	5	15	-10	1	

再び早慶の下風に甘んじる

リーグでの栄光の姿は遠く

前年、7連覇の夢を砕かれた東大は、今年こそはと首位奪回の気持ちを強く持ち、片や早大、慶大は東大に代わるリーグの盟主としての地位を確固たるものにしようと、一層の戦力アップを図ってリーグ戦に臨んだ。リーグ戦の前半は、予想通り東早慶の3校が順調に下位校に勝って後半を迎えたが、慶大戦で東大は先制して優位に試合を進めたが、後半反撃されて勝利を逃がしてしまった。

早大戦では勢いの差が運まで左右し、悲運の東大にはもはや6連覇当時の栄光の姿は見られず、みじめな姿をさらす結果となってしまった。早大と慶大は前年に続いて最終戦で覇権を争ったが、早大が4-1と慶大を下し、昨年の雪辱を果たしてシーズンを終えた。

▽東大3-2農大（10月8日、神宮）

戦評：前半2分、農大は前に大きく出たボールをRIが強襲して早々と1点を先取した。しかし東大は14分に同点とすると、続いて23分にはPKを決めてリードを奪い、後半も早々と4分に1点を追加して試合を決めた。農大は東大の出鼻を挫く好調なスタートを切ったが、同点とされてからは動きに鋭さがなくなり、HBからの好パスへの反応悪く、チャンスを生かせずに惜敗した。

▽東大9-2文理大（10月16日、石神井）

戦評：前節に慶大に12-0と言う未曾有の大敗を喫した文理大は前半こそ起死回生の思いで強い戦意を示したが、後半8分に東大に追加点を許すと大きく崩れ、結局は前週に次ぐ点差の大敗を喫した。東大のGKは技術的にはまだ若く、FBラインも高山の率いるHBの援護がなければ危ないほど不振であった。得点も和田一人がCKで3点あげるなど、東大にとっては造作ない得点であった。文理大は反則が多くチームが未成熟で、それが大敗を招く結果になったといえる。

▽東大7-0成城高（10月29日、石神井）

戦評：東大は前半10分に先制すると、その後は間断なく得点を重ね、危なげなく勝った。

▽東大3-4慶大（11月10日、神宮）

戦評：前半3試合を無傷で勝ち抜いてきた両校はリーグ優勝には勝利が絶対条件であり、1点を争う

接戦となった。前半16分に1点を先取した東大はその後慶大の反撃をかわしながら36分にも加点、2-0で前半を終えた。

後半開始直後、慶大は1点を返して反撃するも東大も攻撃の手を緩めず、12分にはCH高山のシュートがバー下面に当たったが不運にも得点ならず。これを境にして奮起した慶大はその後26分から32分のわずか6分の間に3点を追加して勝敗を決してしまった。

東大は終了間際に得点したが時すでに遅く惜敗した。

後半立て続けに3点失うころには疲労が蓄積していて守備陣が破たんしていた。

「惜敗とは言え、すべて実力の相違と言うよりほかにない」「前半2点のリードで体力を使い、日頃の練習不足が重なってこの結果を招いた」——これが新聞の試合評である。

▽東大0-2早大（11月18日、神宮）

戦評：前年、前々年と続けて慶大と東大に覇権一歩手前でこれを阻止された早大と、ビッグ3の一角として最後の波乱を起こしたい東大の戦いは大きな期待を集めて始まった。しかし前半8分、東大は早大RWの右からのセンタリングをLI名取に押しされて簡単に先取点を奪われ、さらに前半27分にはFWの主力選手である菊池が早大堀江と衝突して退場する不運が重なり、その後乏しい戦力で敵陣に迫ってCKを立て続けに奪うなど善戦するが、力及ばず零敗を喫してシーズンを終えた。

（戦評は朝日新聞から要旨抜粋）

OBリーグ戦は連覇ならず

前年優勝した東大OBはB組の法政大を5-0で軽く一蹴、互いに優勝候補と自認する早大との決戦に臨んだが、前半の先制得点もむなしく後半3点を奪われ、連続優勝を逃した。A組は慶大が青学、文大、明文を破って全勝し、早大と決勝対決することになった。

（昭9年2~3月）

（安達二郎）

公式試合記録

・関東大学リーグ1部

- 10月8日 ○ 3-2 (2-1) 農大(神宮)
 10月16日 ○ 9-2 (1-1) 文理大(石神井)
 10月29日 ○ 7-0 (4-0) 成城高校(石神井)
 11月10日 ● 3-4 (2-0) 慶大(神宮)
 11月18日 ● 0-2 (0-1) 早大(神宮)
 3勝2敗 3位

出場選手

関東大学リーグ1部					
相手	成城高	文理大	農大	慶大	早大
GK	宮沢	宮沢	宮沢	大村	宮沢
FB	荻原	荻原	荻原	江崎	荻原
	原田	原田	原田	原田	原田
HB	江崎	江崎	江崎	江崎	江崎
	高山	高山	高山	高山	高山
	木村	木村	木村	木村	木村
FW	和田	和田	和田	和田	和田
	川原	川原	宮内	川原	川原
	佐藤	佐藤	川原	佐藤	佐藤
	菊池	菊池	菊池	菊池	菊池
	徳田	徳田	徳田	徳田	徳田

関東大学リーグ1部成績

	早大	慶大	東大	文理大	農大	成城高	勝	負	分	得	失	差	点
早大	—	○4-1	○2-0	○3-1	○5-1	○6-1	5	0	0	20	4	16	10
慶大	●1-4	—	○4-3	○12-0	○5-2	○8-0	4	1	0	30	9	21	8
東大	●0-2	●3-4	—	○9-2	○3-2	○7-0	3	2	0	22	10	12	6
文理大	●1-3	●0-12	●2-9	—	○4-3	○6-0	2	3	0	13	27	-14	4
農大	●1-5	●2-5	●2-3	●3-4	—	○3-1	1	4	0	11	18	-7	2
成城高	●1-6	●0-8	●0-7	●0-6	●1-3	—	0	5	0	2	30	-28	0

最下位決定戦で勝って残留

昔日の面影がないリーグ戦

この年度は立教大が新たに1部リーグに昇格し、条件が等しい大学チーム同士で覇を競うこととなった。

リーグ戦に先立って大学、高専分離案が提案され、否決されたが、現実にはその影響を受けることはなかった。この年、東大は第1戦の文理大には辛うじて勝ったものの、それまで勝ち続けていた農大に敗れ、新参の立教大にも敗れて昔日の面影はなく、早慶両校に大敗して最下位決定戦で辛うじて農大を破って1部残留を決めた。中盤の要の高山を送り出し、攻撃の要の菊池を引退で失い、川原の活躍に期待するしかない東大は、チームの更改期に差し掛かり、困難な状況にあったといえる。

▽東大4-3文理大（10月7日、神宮）

戦評：雨の神宮球場、泥んこの中での対戦となったが、試合巧者の東大は経験の差を生かして巧みに試合運び、勝利した。前半6分過ぎにはゴール前の混乱とキーパーミスに乗じて2得点し、36分にもキーパーファumbleで1点を加えて、前半を3-1で折り返した。後半は文理大が風を利用して東大ゴール前にボールを集めたが、ゴール前の守備を固めた東大は必死にこれを防ぎ、2点を失うも1点を返して、文字通りの泥試合を制した。

▽東大1-2農大（10月22日、神宮）

戦評：東大は前半風上の利が生きてコーナーキックがそのまま決まり1点を先取した。後半は農大の攻撃は良い形となって東大を襲い、流れの中から2点を奪ってリーグ加盟以来初めての東大打破の宿願を達成した。東大はボールを6割方キープするも攻撃は力を欠き、良くて引き分けの負け試合であった。

▽東大1-2立大（10月29日、東高）

戦評：東大の得点CKは13、立教に21のGKを蹴らせ、7割方試合をリードしながら不運も手伝って試合に負けた。攻めながら得点を奪えない決定力不足は如何ともし難く、立教に辛勝をもたらす結果となった。

▽東大1-6早大（11月17日、神宮）

戦評：東大はFWの陣形を浅いW型とし、守備陣を厚くしてロングキック戦法を採ったが、かえって

試合を単調にして失敗に終わった。早大の得意のロングキック戦法の復活と比較すれば、おのずと優勢は明らかで、前半10分にして3点を失って勝負は早々に決まってしまった。それでも東大は後半果敢に攻撃を仕掛け、東大優位に試合を運んだが、早大バックスはよく踏ん張ってゴールを守り、東大の得点を1点に止めた。そして30分、44分には追加点を挙げて大勝した。

▽東大0-6慶大（11月26日、神宮）

戦評：前半、風上の慶応は6分、15分、34分と順調に得点を重ね、後半も東大の攻撃をキーパー一宮の好捕で凌ぎ、逆に3点を重ねて大勝した。慶大はFW各自のボールへの寄せは鋭く、怒涛のごとく攻め入る攻撃に東大はあえなく6点を奪われる結果となってしまった。

勝ちたいと気持ちが焦る東大はプレーが委縮し、浮足立って球が足につかず、得意のパスワークは乱れた。

これで東大は1勝4敗となり、同じく1勝4敗の農大との最下位決定戦に臨むことになった。

▽リーグ戦1部最下位決定戦

戦評：東大6-0農大（12月8日、和泉）

球場は泥んこ状態で最悪のコンディションの中、東大は大胆にもメンバーを大幅に入れ替えて戦いに臨んだ。慶大戦のときと同じメンバーは川原、江崎、萩原、松浦の4名のみ。7名を入れ替えた東大は心機一転、前半から農大を圧倒して、前後半とも3点を入れて快勝、1部残留を果たした。このあと農大は文理大に5-2で敗れ、最下位となって2部に降格した。

（戦評、は朝日新聞から要旨抜粋）

大学と高専、分離が決まる

昭和10年2月、東京学生蹴球連盟が会合を開き、加盟30校中26校が賛成、成城高、府立高が棄権、東高、一高が反対の多数決で大学と高専の分離を決定、大正13年以來の組織が改められた。

OBリーグは予選で敗れる

東大はB組で文理大に勝ち、慶大と引き分けて再試合を行い、延長戦の末1-3で敗れて予選で敗退した。

（安達二郎）

公式試合記録

・関東大学リーグ1部

- 10月7日 ○ 4-3 (3-1) 文理大 (神宮)
 10月22日 ● 1-2 (1-0) 農大 (神宮)
 10月29日 ● 1-2 (0-1) 立大 (東高)
 11月17日 ● 1-6 (0-4) 早大 (神宮)
 11月26日 ● 0-6 (0-3) 慶大 (神宮)
 1勝4敗 同率4位

順位決定戦

東大、文理大、農大の3校が勝ち点2で同率4位となつたため順位決定戦が行われた。

- 12月8日 ○ 6-0 (3-0) 農大 (和泉)
 農大は文理大にも敗れ最下位となり2部に降格

出場選手

相手	関東大学リーグ1部					順位決定戦
	文理大	農大	立大	早大	慶大	農大
GK	飯田	飯田	大村	飯田	宮沢	川島
FB	八巻	八巻	八巻	八巻	荻原	原田
	近石	近石	近石	近石	八巻	荻原
HB	大内	大内	大内	江崎	近石	松浦
	荻原	荻原	荻原	荻原	江崎	江崎
	長	江崎	江崎	松浦	松浦	大内
FW	潮田	潮田	太田	潮田	潮田	徳田
	若林	若林	若林	若林	若林	寺沢
	太田	太田	佐藤	太田	太田	佐藤
	川原	川原	川原	川原	川原	川原
	徳田	徳田	徳田	徳田	寺沢	沖

関東大学リーグ1部成績

	早大	慶大	立大	東大	文理大	農大	勝	負	分	得	失	差	点
早大		△3-3	○5-1	○6-1	○10-2	○7-0	4	0	1	31	7	24	9
慶大	△3-3		○6-3	○6-0	○6-1	○6-2	4	0	1	27	9	18	9
立大	●1-5	●3-6		○2-1	○5-2	○4-0	3	2	0	15	14	1	6
東大	●1-6	●0-6	●1-2		○4-3	●1-2	1	4	0	7	19	-12	2
文理大	●2-10	●1-6	●2-5	●3-4		○5-1	1	4	0	13	26	-13	2
農大	●0-7	●2-6	●0-4	○2-1	●1-5		1	4	0	5	23	-18	2

強豪東大復活するかの期待

五輪へ代表チーム派遣決定

大日本蹴球協会は3月6日に緊急理事会を開き、第12回オリンピックの東京招致問題に備え、第11回ベルリン大会に万難を排して参加することを決定した。

チームの編成は1チーム中心の制度を取り入れ、必要の場合は他チームの選手を加えることとし、5月に開催される第1回全国総合選手権大会、11月の明治神宮大会および12月の東西学生リーグ戦などの成績を選考資料とする、全国総合選手権大会には朝鮮、台湾を含むなどを決定した。

全日本選手権は予選で敗退

5月に開かれた全日本総合選手権大会で、東大LBは関東予選準々決勝までは順調に勝ち進んだが、準決勝で早大に1-3で敗れた。決勝は、文理大が早大を1-0で下して関東代表となった。

地方対抗選手権は初戦敗退

大会第1日目に文理大と当たった東大LBは延長戦にもつれ込む接戦を展開したが、結局延長の前半に失った1点が返せず2-3で惜敗した。（昭和10年9月）

リーグ戦2位で息吹き返す

昨年2度の決戦を行っても雌雄を決せられなかった早慶両校は、今年こそは覇権を奪おうとの意気に燃え、一方6連覇のあと3シーズン悲嘆にくれた東大も、一高の黄金時代を築いた沖、稲川、小川、川島を加え、菊池の復帰もかかって、強豪東大復活の期待が持てるシーズンとなった。昨シーズン3位の立教も侮りがたく、文大に新興商大が加わって接戦が予想されるシーズンを迎えたが、結局東大は2位になり、多少息を吹き返した。

▽東大6-0立大（10月5日、神宮）

戦評：前シーズンで3位を占めた立教も、4年ぶりに整備した陣容の東大の前には歯が立たず大敗を喫した。

▽東大5-2慶大（10月19日、神宮）

戦評：慶大は前節で文大に引き分けたとはいえ、東大戦では昭和7年以来5-0、4-3、6-0で

勝っているのに、東大がいくら陣容を整備したとは言え、これほどみじめな結果になろうとは誰も予想できなかった。

前半3-1と開いて勝負は決したが、特に東大バックスの戦力強化は見るべきものがあり、慶大FWの連携不足が尚一層その差の大きさを目立たせる結果となった。

▽東大2-2文理大（10月28日、石神井）

戦評：東大は前半12分に1点を失い、18分に得たPKも外して逆に44分にも1点を加えられ、前途多難を予想させた。しかし、後半によく反撃し13分、32分に入れて同点とし、なおも攻めたが追加点ならず引き分けた。

▽東大2-4早大（11月9日、神宮）

戦評：早大は24分CH立原のロングシュートが決まり、さらに27分には加茂、西邑のパス交換で東大バックスを崩したところで再びCH立原のロングシュートが決まり前半を終えた。

後半は眠れる獅子が目覚めるごとく、東大の爆発的な動きが早大バックスを混迷させた。13分、16分に横山が決めて同点にし、さらなる攻撃が期待されたが、疲れの出てきた東大の反撃はここで止まり、早大はこの疲れに乗じて反撃に転じ、36分、41分に2点を追加し、激戦の幕を閉じた。

▽東大5-2商大（11月15日、神宮）

戦評：商大は打倒東大の意気に燃え、2点リードされても食いつくねばりこさが東大の自殺点を誘って同点まで追い込んだ。

しかし、持てるすべてを傾注した商大の戦いぶりも、後半25分に東大に3点目を奪われてからは東大の巧みな攻撃になすすべもなく、38分、40分に加点された。（戦評は朝日新聞から要旨抜粋）

東西OB選抜戦は引き分け

昭和11年2月11日、甲子園南球場で全関東対全関西のOB選抜対抗試合が行われたが0-0で引き分けた。

通算対戦成績は2勝2敗2分で全くの5分となった。なお東大からはFW藤岡、手島、高山、HB竹腰、FB竹内、田村の6名が出場した。

（安達二郎）

公式試合記録

・関東大学リーグ1部

- 10月5日 ○ 6-0 (2-0) 立大 (神宮)
 10月19日 ○ 5-2 (3-1) 慶大 (神宮)
 10月28日 △ 2-2 (0-2) 文理大 (石神井)
 11月9日 ● 2-4 (0-2) 早大 (神宮)
 11月15日 ○ 5-2 (2-1) 商大 (神宮)
 3勝1敗1分 2位

出場選手

関東大学リーグ1部					
相手	立大	慶大	文理大	早大	商大
GK	川島	川島	川島	川島	川島
FB	荻原	荻原	荻原	荻原	荻原
	藤岡	藤岡	藤岡	藤岡	藤岡
HB	森	大内	大内	大内	大内
	種田	種田	種田	種田	種田
	宮沢	森	森	森	森
FW	潮田	潮田	潮田	潮田	潮田
	川原	川原	川原	川原	川原
	高橋	高橋	高橋	高橋	高橋
	沖	沖	沖	沖	沖
	小川	横山	横山	横山	横山

関東大学リーグ1部成績

	早大	東大	文理大	慶大	商大	立大	勝	負	分	得	失	差	点
早大	—	○4-2	○5-3	○8-2	○7-1	○13-1	5	0	0	37	9	28	10
東大	●2-4	—	△2-2	○5-2	○5-2	○6-0	3	1	1	20	10	10	7
文理大	●3-5	△2-2	—	△2-2	○2-1	○3-1	2	1	2	12	11	1	6
慶大	●2-8	●2-5	△2-2	—	○5-1	○10-1	2	2	1	21	17	4	5
商大	●1-7	●2-5	●1-2	●1-5	—	○4-3	1	4	0	9	22	-13	2
立大	●1-13	●0-6	●1-3	●1-10	●3-4	—	0	5	0	6	36	-30	0

早慶に再び大敗の憂き目

ベルリン・オリンピック代表に東大から竹腰コーチ、選手3名（FW高橋、HB種田、FB竹内=主将）が選ばれた。ほかの大学からは早大10名（うちOB3）、慶大、東京高師の各1名と、朝鮮の1名であった。

全日本の関東代表権は逃す

全日本選手権大会の関東予選は東大と慶大が決勝戦まで進み、延長戦で1点を奪った慶大が2-1で東大を破り関東代表となった。

（昭和11年6月）

リーグ戦は早慶東の激突か

早大はオリンピックチームに主力選手を送り出し、東大は3年の雌伏を経て前年2位に復活し、慶大は進境著しい二宮を擁して、早慶東の激突が期待を集めた。

▽東大1-2農大（10月10日、神宮）

リーグ戦の初戦、東大は風上に位置して前半18分に早くも1点を奪ったが、守備陣の出来は悪く、ボールを農大に支配されることが多くなり、危ない場面が続く中ついに44分1点を返され、同点で前半を終えた。

後半10分、農大はドリブル突破からチャンスをつかんで1点を追加、その後東大の強襲が続いたが農大はよくこれを防いで零封し、番狂わせで初戦を飾った。

▽東大3-1文理大（10月16日、神宮）

農大に予想外の敗戦を喫した東大はオリンピックに出場した種田、高橋（豊）をメンバーに加え、背水の陣で文大戦に臨んだ。文大も打倒東大の意気に燃え、試合は最初から白熱したものとなった。

前半攻防を繰り返す中で文大は34分に東大種田のクリアミス誘って得点、東大も前半終了間際に1点を返した。後半4分、捕球するキーパーに東大の徳田、河西が果敢にチャージして体ごと押し込み得点に成功すると文大の意気は衰え始め、その後東大が2点を加えて貫禄勝ちした。

▽東大3-0商大（11月8日、明大和泉）

気力充分な商大は前半2分、13分と果敢に東大ゴールを脅かしたが、東大これに動じず、次第に落ち

着きを取り戻して前半2点、後半に1点を加えて勝った。

しかし、強豪早慶との対戦には心許なさを感じさせた。

▽東大0-5慶大（11月14日、神宮）

慶大は二宮、右近を左に出して攻撃を仕掛けたが、東大の守備は堅固で良くこれを防ぎ、ロングキックで慶大をかき回した。しかし前半27分、慶大播磨のドリブルするボールをキーパーがファンブルして1点を失った。32分にもキーパーが相手CFに競り負け、後半7分にはチャージを受けてボールをこぼし、3点を失った。キーパーミスともいえるプレーで3点を失った東大は、それでも果敢に攻撃したが、バックの気力続かず、攻撃の隙を突かれて30分、35分とさらに2点を失った。

▽東大0-4早大（11月29日、神宮）

東大はGKを喜谷に交代、属（さっか）をHBに下げて守備を強化して臨み、早い突進と分厚いマークで早大の巧みな攻撃を阻んだが、攻撃しては惜しいところかわされ、逆にそのあと攻められるパターンで、結局、早大のCF川本一人に4点を決められてリーグ戦を終えた。

（戦評は朝日新聞から要旨抜粋）

東西対抗戦にHB種田出場

2月27日神宮で行われた東西対抗戦は関西が4-0で関東を破った。東大からは菊池、種田が選ばれたが、種田がHBとして出場した。

大学OBリーグ戦で2連覇

東大OBは青学大、農大、明大に勝ってA組で優勝、B組優勝の慶大と決勝戦を行い、1-0で勝って2年連続優勝を飾った。

東西OB戦で東大からは4名

関東OBは3月21日、鶴丸公園で行われた関西OBとの試合に2-1で勝った。なお東大OB出場者はFB竹内、HB高山、FW竹腰、菊池の4名だった。

（安達二郎）

公式試合記録

・関東大学リーグ1部

- 10月10日 ● 1-2 (1-1) 農大(神宮)
 10月16日 ○ 3-1 (1-1) 文理大(神宮)
 11月8日 ○ 3-0 (2-0) 商大(明大和泉)
 11月14日 ● 0-5 (0-2) 慶大(神宮)
 11月29日 ● 0-4 (0-1) 早大(神宮)
 2勝3敗 4位

出場選手

関東大学リーグ1部					
相手	農大	文理大	商大	慶大	早大
GK	高橋	高橋	高橋	高橋	喜谷
FB	築島	種田	築島	種田	菊池
	藤岡	藤岡	藤岡	藤岡	藤岡
HB	大内	大内	種田	大内	属
	菊池	菊池	菊池	菊池	種田
	森	森	森	森	森
FW	属	潮田	潮田	潮田	潮田
	徳田	阿部	阿部	阿部	阿部
	阿部	高橋豊	沖	属	沖
	河西	河西	河西	河西	河西
	松村	徳田	徳田	徳田	松村

関東大学リーグ1部成績

	早大	慶大	文理大	東大	商大	農大	勝	負	分	得	失	差	点
早大	—	○2-0	○3-0	○4-0	●4-6	○6-0	4	1	0	19	6	13	8
慶大	●0-2	—	△0-0	○5-0	○4-0	○8-0	3	1	1	17	2	15	7
文理大	●0-3	△0-0	—	●1-3	○7-2	○3-1	2	2	1	11	9	2	5
東大	●0-4	●0-5	○3-1	—	○3-0	●1-2	2	3	0	7	12	-5	4
商大	○6-4	●0-4	●2-7	●0-3	—	○3-2	2	3	0	11	20	-9	4
農大	●0-6	●0-8	●1-3	○2-1	●2-3	—	1	4	0	5	21	-16	2

リーグ戦2位、面目を施す

関東6人制大会が始まる

関東協会は個人能力と技術の進歩向上を図る目的で、5、6月に6人制サッカー大会を始めた。

これは3年後に予定されている東京オリンピックに向けての準備の一環でもあり、前年のベルリン・オリンピックで初戦に優勝候補スウェーデンに3-2で逆転勝利の金字塔を打ち立てながら、次戦のイタリアに0-8で大敗するなど、体力、走力が劣っていることを痛感したことから始めた大会である。

メンバーはGK、BK2人、FW3人の計6人で、ピッチは11人用のフルサイズ、試合時間は10分+10分（休憩5分）、延長戦は3分+3分で、現在から見るとフットサルの前身とも言える体裁を整えていた。

第1回大会には大学、社会人などの27チームが参加した。朝日新聞社が後援をしたが、主催する協会の意図に呼応して大々的に紙面を展開した。

大会は5月30日、6月6、7日、13日に神宮競技場で行われ、東大はA、B2チームが参加し、3次予選まで進んだ。13日には準決勝、決勝が行われ、早大Aが初優勝を飾った。

全体として「6人制はごまかしが効かない。各自の欠点を意識させ、審判にもプレーヤーにも非常に役立つ」との継続を期待する評価が得られた。

全日本選手権は予選で敗退

東大は関東予選の準決勝まで進んだが、早大WMWに延長戦で1-3で敗れ、昨年に続いて予選敗退した。

神宮大会も関東予選で敗退

9月に行われた明治神宮大会の関東予選で東大は準決勝まで進んだが、早大WMWに0-1で敗れて敗退した。

リーグで6年ぶりに早大破る

早大は春に行われた全日本選手権予選で慶大に敗れ、明治神宮選手権予選では東大に辛うじて勝つなど波乱が予測されるシーズンであった。

東大は最終戦で早大を破って2位を確保してビッグスリーの面目を施し、逆に優勝候補筆頭の早大が慶大にも1-5と大敗して荒れ模様のシーズンの幕

を閉じた。

▽東大0-2文理大（10月3日、神宮）

戦評：文理大は自らの技量の不足を十分に自覚し、それを補うために満々たる闘志をもって、キック力、体力で正面から東大に挑み、個々の技量を過信した東大を粉砕して、見事勝利をものにした。

▽東大4-1商大（10月9日、神宮）

戦評：商大は前半にたびたび訪れたチャンスに決定力なく、後半、東大の新人松村に3点を奪われて敗れた。松村は不振の東大にあって今後の活躍に期待できる選手である。

▽東大5-0明大（10月24日、東高）

戦評：東大は前半8分に早くも1点を先取したが、その後得点はなく前半を終えた。後半はキープ力に勝れる東大のペースは変わらず、明大の疲労に乗じてオープンにボールを回しては得点を重ねて楽勝した。

▽東大1-1慶大（11月7日、神宮）

戦評：東大は菊池、種田、藤岡の巨漢バック陣が、精密を誇る慶大FWの攻撃をはね返し、1点を献上するも5分後にはすぐさま追い付いて引き分けた。松村はこの試合でも左の難しい角度からのシュートを決めて期待にこたえてその役割を果たした。

▽東大1-0早大（11月20日、神宮）

戦評：東大は昭和7年以来の5連敗の屈辱を晴らすべく良く戦い、快勝して雪辱を果たした。新聞評には「最後の戦いに臨む東大の旺盛なる精神力と実力をいかに発揮した点に満腔の敬意を表す」と記されていた。（戦評は朝日新聞から要旨抜粋）

朝日招待で地元京大に屈す

朝日招待に呼ばれた東大は、リーグ終了後も猛練習を続けて関西に乗り込んだが、チーム初めての関西遠征で2名が風邪で体調を崩すなど地の利を得られず、京大に2-5で敗れた。前半風下の京大は終了間際に1点を奪った。後半12分、東大はGKとBKのすれ違いで不測の1点を失うと粘り強いバックス陣にほころびが見え、勝敗は決まった。

学生OBリーグで3年連覇

予選を危なげなく勝ち上がった東大OBは決勝でも慶大OBを3-1で退け、3年連続で優勝を遂げた。

公式試合記録

・第1回関東6人制蹴球大会

5月30日

第1次 東大A 3-0 (2-0) 早大WMW・B (神宮)

東大B 0-1 (0-0) 東蹴 (神宮)

6月6日

第2次 東大A 6-0 (3-0) 豊島 (神宮)

6月7日

第3次 東大A 0-1 (0-0) 早大A (神宮)

・関東大学リーグ1部

10月3日 ● 0-2 (0-0) 文理大 (神宮)

10月9日 ○ 4-1 (1-0) 商大 (神宮)

10月24日 ○ 5-0 (1-0) 明大 (東高球場)

11月7日 △ 1-1 (1-1) 慶大 (神宮)

11月20日 ○ 1-0 (1-0) 早大 (神宮)

3勝1敗1分 2位

出場選手

関東大学リーグ1部					
相手	文理大	商大	明大	慶大	早大
GK	岩動	岩動	岩動	岩動	岩動
FB	菊池 藤岡	菊池 藤岡	菊池 藤岡	菊池 藤岡	菊池 藤岡
HB	属 種田 森	属 種田 田村	属 種田 田村	属 種田 森	属 種田 森
FW	大屋 大槻 高橋豊 阿部 奥田	松村 大槻 高橋豊 森 奥田	松村 森 大槻 渡辺 阿部	松村 大槻 高橋豊 渡辺 阿部	松村 大槻 高橋豊 渡辺 阿部

関東大学リーグ1部成績

	慶大	東大	早大	明大	文理大	商大	勝	負	分	得	失	差	点
慶大	-	△1-1	○5-1	○10-0	○5-0	○7-0	4	0	1	28	2	26	9
東大	△1-1	-	○1-0	○5-0	●0-2	○4-1	3	1	1	11	4	7	7
早大	●1-5	●0-1	-	○9-3	○6-1	○4-0	3	2	0	20	10	10	6
明大	●0-10	●0-5	●3-9	-	○2-1	○2-0	2	3	0	7	25	-18	4
文理大	●0-5	○2-0	●1-6	●1-2	-	○4-2	2	3	0	8	15	-7	4
商大	●0-7	●1-4	●0-4	●0-2	●2-4	-	0	5	0	3	21	-18	0

6 大学随一の充実ぶり示す

最大最強のチームを作ろう

6人制大会に現役、OB混成の3チームを参加させるなど、春先から実力向上に力を入れた。最大最強のチームを作り上げようという意気込みで練習を続けたが、一方では意気込みだけで上滑りしないように、「自分自身を相手にする」というように内省的な面にも心を配っている。

秋のシーズンを前に8月下旬から2週間、山中湖で合宿をしたが、基礎的技術の習得中心だった。

秋のリーグ戦は慶大に優勝を譲ったが、その優勝は実力からして順当といえるもので、東大はよく奮闘したと新聞評では称えられている。

主将菊池がけがをして、シーズン前半の3試合は出場できず、チームとして大いに不安があった。しかしこれは新人横山が健闘して埋めるとともに、チーム全体として次第に調子を上げ、6大学随一の充実ぶりを見せた。春先の絶不調を、個々の特性をよく生かすことで克服、第2位獲得の成果を得た。

技量の点では必ずしも優れていたわけではないが、個々の特性を巧みにつなぎ合わせることで立派な成果を上げたわけで、このひたむきな精進を続けていけば、東大の黄金時代を再現することは、そう遠い日のことではあるまいと期待された。

盛んになる関東6人制大会

12年度から始まった関東6人制選手権大会は、参加チームが40に増えた。このため編成替えをして3部制をとり、1部は大学・高専など、2部は実業団、3部は中学校（師範を含む）とした。東大からは東大LBとしてA、B、C3チームが出場、Bチームは決勝戦まで勝ち残ったが、早大Aに0-1（延長戦）で敗れた。

欧州チームの初の来訪試合

▽全関東学生4-0 コリンシャーズ

昭和初期の日本サッカー界にとってはヨーロッパや南米の強豪国と交流する機会ほとんどなく、ましてや来訪してくれるようなチームはなかった。しかし、たまたま幸運にもイングランドからイズリントン・コリンシャーズが世界一周の遠征の途次に日本に立ち寄ってくれた。

迎え撃った全関東学生選抜は日本代表といっても

いいチームで、4-0で勝ち、当時の日本が国際的に次第に力をつけていることを示した。種田孝一がHB、菊池宏がFBとして出場した。

東京五輪の開催権を返上

昭和15年（1940年）は紀元2600年に当たるというので、日本政府は国家的な各種の記念事業を展開しようと計画し、その一環として東京にオリンピックを招致する準備を進めていた。しかし、国際的な政治情勢は日本の意向とは全く違う方向に展開したため、オリンピック開催は無理と判断して、この年の7月開催権を返上した。

リーグ戦は慶大と覇権争う

▽東大3-2早大（11月12日、神宮）

戦評：試合内容はスコアが示すようなものではなく、東大の圧勝だった。立ち上がりから鋭い勢いで完全に試合を支配、七分三分の割りで優勢に攻めた。しかし、早大がよく防戦に努めたので、覇権を争うのに相応しい内容のある試合を展開した。

東大は菊池、属（さっか）、田村のハーフ陣が健闘、FWも分厚い攻撃体形を整えて勝ち味のある展開を見せた。前半38分、シュートがバーに当たったあと、FWが突っ込んで先制。後半12分には奥田が追加して2-0。そのあと早大はよく反撃して14分、33分に得点して同点に追いついたが、東大の猛攻を受け、44分、ゴール前でのハンドを判定ゴールとされ、不覚の1点を失った。

▽東大1-3慶大（11月27日、神宮）

戦評：無敗同士の対決。今シーズン最高の技量と闘志に裏付けられたまれに見る熱戦となったが、意気盛んな慶大が快勝、ついに連覇の夢を果たした。

前半10分、慶大は東大の猛進撃を巧みにあしらったあと、東大バックスの隙を捉えて先制した。東大は先制されたあと反発がなかったことが惜まれる。

いたずらに慶大FWの優れた足技と予想外の強い体当たりで翻弄されてしまい、もし果敢に潰していれば3-0まで開くことはなかっただろう。ともあれ争覇戦らしい申し分のない激しい競り合いが随所に見られた堂々たる大試合だった。

（戦評は朝日新聞から要旨抜粋）

（折原一雄）

公式試合記録

・全日本選手権関東予選

5月21日 1回戦 ● 2-2 (0-1) 早大 (青師)
延長 0-1 (0-1)

・関東大学リーグ1部

10月8日 ○ 3-1 (2-1) 農大 (東京高)
10月15日 ○ 5-2 (1-2) 文理大 (神宮)
11月5日 ○ 4-0 (0-0) 明大 (東京高)
11月12日 ○ 3-2 (1-0) 早大 (神宮)
11月27日 ● 1-3 (0-3) 慶大 (神宮)
4勝1敗 2位

・朝日招待大会

1月8日 ○ 8-2 関学大 (甲子園南)

出場選手

相手	全日本予選	関東大学リーグ1部					朝日招待
	早大	農大	文理大	明大	早大	慶大	関学大
GK	岩動	岩動	岩動	岩動	岩動	岩動	岩動
FB	築島	築島	築島	築島	築島	築島	築島
	大山	大山	大山	大山	大山	大山	大山
HB	田村	田村	田村	田村	田村	田村	田村
	菊池	横山	横山	横山	菊池	菊池	菊池
	属	属	属	属	属	属	属
FW	大谷	奥田	河西	奥田	奥田	大屋	奥田
	直木	直木	直木	直木	直木	直木	直木
	阿部	阿部	阿部	阿部	阿部	阿部	阿部
	大槻	大槻	大槻	大槻	大槻	大槻	大槻
	松村	松村	松村	松村	松村	松村	松村

関東大学リーグ1部成績

	慶大	東大	早大	農大	明大	文理大	勝	負	分	得	失	差	点
慶大	-	○3-1	○2-0	○8-2	○6-2	○6-2	5	0	0	25	7	18	10
東大	●1-3	-	○3-2	○3-1	○4-0	○5-2	4	1	0	16	8	8	8
早大	●0-2	●2-3	-	△1-1	○4-0	○2-0	2	2	1	9	6	3	5
農大	●2-8	●1-3	△1-1	-	○1-0	△1-1	1	2	2	6	13	-7	4
明大	●2-6	●0-4	●0-4	●0-1	-	○2-1	1	4	0	4	16	-12	2
文理大	●2-6	●2-5	●0-2	△1-1	●1-2	-	0	4	1	6	16	-10	1

鳴かず飛ばず、3位

スケール小さく技術は低調

春の6人制大会は、東大からはOBを含めて前年より1チーム多い4チームが参加、東大OBが優勝している。続く全日本選手権では準決勝で慶大に敗れ、3、4位決定戦に回っているが、結局4位に終わっている。

リーグ戦の予想では、東大はスケールは小さいが侮れないと他校から警戒されていたが、結局、鳴かず飛ばずで3位に終わっている。農大、明大には勝ったものの商大とは引き分け、早慶には食い下がったがいずれにも黒星で、花を咲かすまでには至らなかった。

FWの陣容は直木を中心に置いて、いろいろメンバーを変えてみてはいるが、あまり代わり映えせず、迫力のないものに終わっている。これを援護すべきバック陣は、そのロングキックが狙いを誤ってパスとしての効果が薄く、威力を発揮せずに終わっている。

要するに従来の東大に比べると、スケールが一回り小さくなったといえるようで、各個人の技術低下は否めず、その向上が当面の課題ではないかと指摘されている。また、技術あつての作戦であつて、技術以上の作戦は望めないことを知らねばならないと、新聞評でも指摘されている。

さらに充実する6人制大会

関東6人制大会は今年度で第3回を迎えるが、年を追って充実し、今回は前年より10チームほど増えて参加49チームとなった。東大からは東大OBを初めとして東大A、B、Cの4チームが参加した。東大勢は快進撃を続けて1試合だけで敗退した東大C以外はすべて勝ち進み、決勝戦は東大勢同士の争いとなって、結局東大OBが優勝した。

関東蹴球協会主催、朝日新聞社後援だが、今から見ると紙面は破格とも思える大きな扱いをしていて、連日全試合の結果はもちろん、全チームのメンバー、試合内容、さらに大会前には予想記事、閉幕後には総評を載せ、大会関係者の座談会まで開いて盛り上げていた。

全日本選手権は慶大に苦戦

▽東大8-0大阪倶楽部（6月9日、神宮）

戦評：ボールは終始大阪陣内にあり、東大の大勝に帰した。若さとFWの優れたコンビネーションを持つ東大は思うがままに動き回り、気力を欠いた大阪俱はついに反発の機会をつかめず、一方的な試合に終わった。

▽東大1-4慶大BRB（6月10日、神宮）

戦評：前半、風上に陣した慶大は矢継ぎ早に攻め、7分早くも先取点を挙げ、引き続いて優勢を続けた。後半、慶大は気を緩めたためか鋭さがなくなり、東大はこの虚に乗じて18分に1点を返した。実力が一段上の慶大の勝利は当然だったが、前半で試合の大勢が決まったためか、後半の内容はすこぶる貧弱だった。

リーグ戦は早慶とも倒せず

▽東大1-4早大（11月11日、神宮）

戦評：闘志満々の早大は開始早々の2分に早々と先制したあと続けて得点、完全に試合をリードした。東大は個人技術の不足はいかんともしがたく、バックは早大の攻撃陣にかき回され、FWの攻撃はまとまらず、迫力のないプレーを続けていた。

後半になると早大は気がゆるんで動きが鈍ったが、18分、19分と立て続けに得点すると、東大は奮起、奥田が持ち込んでセンターリングしたのを笹間が決めると、試合はにわかには活気を帯び、両チームとも激しい攻撃、鋭いつぶしを見せて、ビッグ3の名に相応しい戦いを繰り広げた。

▽東大1-5慶大（11月18日、神宮）

戦評：東大の健闘で見ごたえのある試合となった。

東大は前半12分、15分と続けざまに失点して元気を失ったかのように見えたが、30分に3点目を献上した直後に有馬のヘディングで貴重な1点を返した前後から再び闘志あるプレーを見せた。バックスは粘りのあるタックルで慶大FWをよくつぶし、FW陣も好パスと鋭い突っ込みを見せて五分五分の試合を展開した。

後半6分、慶大は左からのゆさぶりで1点追加したが、東大の意気は衰えず、慶大ゴールはしばしば危機に見舞われたが、東大攻撃陣の決定力不足に辛くも救われた。（戦評は朝日新聞から要旨抜粋）
(折原一雄)

公式試合記録

・全日本選手権大会（神宮）

- 6月9日 準々決勝 ○ 8-0（3-0）大阪倶楽部
 6月10日 準決勝 ● 1-4（0-3）慶大BRB
 6月11日 3位戦 ● 3-5（2-2）全普成専門

・関東大学リーグ1部

- 10月8日 △ 1-1（1-0）商大（東大）
 10月14日 ○ 3-1（1-1）明大（神宮）
 10月29日 ○ 8-0（4-0）農大（東大）
 11月11日 ● 1-4（0-2）早大（神宮）
 11月18日 ● 1-5（1-3）慶大（神宮）
 2勝1分2敗 3位

出場選手

相手	全日本予選			関東大学リーグ1部				
	大阪	BRB	普成	商大	明大	農大	早大	慶大
GK	吉田	吉田	吉田	岩動	岩動	岩動	岩動	岩動
FB	原田	原田	原田	原田	原田	原田	原田	原田
	大山	大山	大山	大山	大山	大山	大山	大山
HB	力石	力石	力石	力石	力石	力石	力石	力石
	横山	横山	横山	横山	横山	横山	横山	横山
FW	長谷部	長谷部	長谷部	長谷部	長谷部	長谷部	長谷部	長谷部
	大屋	大屋	奥田	大屋	有馬	奥田	奥田	有馬
	直木	直木	直木	直木	菊池	菊池	菊池	菊池
	菊池	菊池	菊池	菊池	直木	直木	直木	直木
	大槻	大槻	大槻	大槻	大槻	笹間	笹間	大槻
	有馬	大谷	大屋	有馬	大谷	大谷	大谷	大谷

関東大学リーグ1部成績

	慶大	早大	東大	明大	商大	農大	勝	負	分	得	失	差	点
慶大	-	○3-2	○5-1	○8-2	○7-1	○6-0	5	0	0	29	6	23	10
早大	●2-3	-	○4-1	●1-2	○5-0	○7-0	3	2	0	19	6	13	6
東大	●1-5	●1-4	-	○3-1	△1-1	○8-0	2	2	1	14	11	3	5
明大	●2-8	○2-1	●1-3	-	●2-4	○2-0	2	3	0	9	16	-7	4
商大	●1-7	●0-5	△1-1	○4-2	-	△1-1	1	2	2	7	16	-9	4
農大	●0-6	●0-7	●0-8	●0-2	△1-1	-	0	4	1	1	24	-23	1

名手そろえたが評判倒れに

早慶には2年続けての黒星

竹腰監督、横山主将の体制でスタート。監督の厳格な指導の下で練習に取り組み、また直木、大山、大谷ら名手がそろっていたので、かなり期待されたのだが、シーズンが終わってみると成績は惨めなもので、評判倒れに終わってしまった。秋のリーグ戦は、第1戦で商大に出鼻をくじかれ、文理大に苦しみ、明大には大勝したものの早大戦で三流試合を展開、とうとう慶大には大敗、結局4位に甘んじた。そしてライバル早慶には2年続けての黒星になった。

「高校で練り上げた粒よりの選手を集めながら強化できないのは、なんらかの欠陥があるからだろう。寄せ集めの漫々とした練習をしていたのでは、気力に満ちたチームは生み出せない。覇権が再び訪れることは遠いことだろう」と当時の新聞紙面は酷評しながらも、東大の再建を期待している。

6人制はベスト4止まり

4回目を迎えた関東6人制大会は全般的に個人技が進歩、耐久力も増すなど所期の目的に向けて軌道に乗り出した。東大はA B 2チームが参加したが、ともに準決勝で敗退した。

総評：東大Aは大谷の浮き球処理や直木のダッシュに見るべきものがあったが、動きが単調なので準決勝では東京俱に乗ぜられた。東大Bは単調ながらよく動いていたが決め手がなく、シュートの威力を欠く恨みがあった。

全日本選手権はあと1歩で

▽東大2-1関大（5月24日、神宮）

戦評：攻守ともに1日の長がある東大の順当勝ち。関大がこれといった決め手を欠くのに対し、東大は右サイドからゴールの左ポストへ向けて送るパスを大谷や笹間に狙わせたり、直木のキープ力を生かすなどいささか見るべきものを持っていたことが勝因といえよう。

▽東大1-2WMW（5月25日、神宮=準決勝）

戦評：両チームぬかるみに苦しみ、東大はショートパスで攻めて一進一退を繰り返していたが、ともに滑ってシュートが狂い点にはならなかった。東大は失点直後の前半28分ゴール正面のFKのはね返りを笹間がヘディングしたがバーを越えてしまった。

後半、東大は0-2とされたあとの27分に逆襲してゴール前で混戦、GKが飛び出してクリアした球を笹間が拾ってシュートすると中央を割って1点を返した。29分、直木がゴール直前で好機を得たが逃がしてしまった。

その後東大は右サイドからクロスパスをゴール前に送って突っ込ませたが、WMWバックスの出足が早く潰された。さらにFWがショートパスで盛んに攻勢を続けたが、ゴール前でキープ力がなく機を失っていた。

結局、ガッチリ守って東大FWを抑え、攻めてはC F川本の個人技をよく生かしたところにWMWの勝因があり、東大バックスは川本1人を持って余した感があった。

リーグ戦は早慶にまた苦杯

▽東大0-1早大（11月9日、神宮）

戦評：寒さと滑るグラウンドとで前半は30分過ぎまで凡蹴を繰り返していた。しかし早大はロビングで優勢に攻撃を続け、44分、ゴール前で一度混戦になったあと、みごとな中距離シュートで先制した。

この1点を守り切ろうと後半早大が消極的になったのに対し、東大は活発に動き回って攻勢を続け、30分に菊池が絶好のパスを送ってゴール直前に得点チャンスをつくったが、笹間のシュートはゴールを越え、惜しくも好機を逃してしまった。

東大はFWの主力大谷の欠場が大きく響いており、唯一の得点コースである左サイドから突っ込むという決め手を欠いていたところに零敗の因があったといえよう。

▽東大0-6慶大（11月16日、神宮）

戦評：東大は守備陣の乱れから立ち上がり早々に続けて失点してしまった。優勢と評判の高い慶大に対して、東大は大谷を復活起用、FW線を整えて万全を期していたので、あるいは慶大に一泡吹かすかと思われていたのに、10分の最初の失点後、反撃に出ようと気負いたった矢先の12分にまたも失点して気落ちしてしまった。あとは16分、20分、30分と立て続けに点を献上した。

前半に1回、後半に2回、計3回の好機があったが、これ以外に好機らしいものはなく、全く無気力な試合振りに終始してしまった。

（戦評は朝日新聞から要旨抜粋）
（折原一雄）

公式試合記録

・関東6人制選手権

4月16日
2回戦 東大A ○ 2-0 豊島倶A（青師）
東大B ○ 3-1 早大A（青師）

4月20日
準々決勝 東大A ○ 3-0 湘南中OB（青師）
東大B ○ 5-0 明大B（青師）

4月21日
準決勝 東大A ● 1-2 東京倶（青師）
東大B ● 1-3 早大（青師）

・全日本選手権関東予選

4月28日 1回戦 ○ 10-0（6-0） 豊島倶（青師）
4月29日 準決勝 ○ 3-0（2-0） 早大（青師）
5月5日 決勝 ○ 4-1（2-1） 明大（青師）

・全日本選手権大会

5月24日 1回戦 ○ 2-1（1-0） 関大（神宮）
5月25日 準決勝 ● 1-2（0-1） 早大WMW（神宮）
5月26日 3位戦 △ 1-1（0-1） 全普成（神宮）

・関東大学リーグ1部

10月6日 ● 0-1（0-1） 商大（神宮）
10月12日 ○ 3-2（1-0） 文理大（神宮）
10月27日 ○ 6-1（3-0） 明大（神宮）
11月9日 ● 0-1（0-1） 早大（神宮）
11月16日 ● 0-6（0-5） 慶大（神宮）
2勝3敗 4位

出場選手

相手	全日本予選		全日本選手権		関東大学リーグ1部				
	豊島	明大	関大	WMW	商大	文理大	明大	早大	慶大
GK	浜野	浜野	浜野	浜野	浜野	浜野	浜野	浜野	浜野
FB	原田	原田	原田	原田	原田	原田	原田	原田	原田
	長谷部	長谷部	長谷部	長谷部	長谷部	長谷部	長谷部	長谷部	長谷部
HB	力石	力石	力石	力石	力石	力石	力石	力石	笹間
	島田	横山	横山	横山	横山	横山	横山	横山	横山
	有馬	有馬	有馬	有馬	有馬	有馬	有馬	有馬	有馬
FW	菊池	菊池	菊池	菊池	菊池	菊池	菊池	菊池	菊池
	直木	直木	直木	直木	直木	種田	種田	種田	種田
	天野	天野	天野	種田	種田	直木	直木	直木	直木
	笹間	笹間	笹間	笹間	笹間	笹間	天野	天野	天野
	大谷	大谷	大谷	大谷	大谷	大谷	笹間	笹間	大谷

関東大学リーグ1部成績

	慶大	商大	早大	東大	文理大	明大	勝	負	分	得	失	差	点
慶大	-	○3-1	○4-1	○6-0	○6-0	○8-1	5	0	0	27	3	24	10
商大	●1-3	-	○2-1	○1-0	●2-4	○4-0	3	2	0	10	8	2	6
早大	●1-4	●1-2	-	○1-0	○4-3	○2-1	3	2	0	9	10	-1	6
東大	●0-6	●0-1	●0-1	-	○3-2	○6-1	2	3	0	9	11	-2	4
文理大	●0-6	○4-2	●3-4	●2-3	-	○3-1	2	3	0	12	16	-4	4
明大	●1-8	●0-4	●1-2	●1-6	●1-3	-	0	5	0	4	23	-19	0

東早、再決戦でも引き分け

戦時色が次第に濃くなる

中国大陸での戦火は拡大の一途を続けており、一方、世界情勢は風雲急を告げていたが、昭和16年12月8日、太平洋戦争が始まった。このような状況は大学制度にも影響を及ぼして繰り上げ卒業が始まり、この年度は3ヵ月繰り上げの12月卒業となった。

大学リーグは、4年間にわたって関東の王座を占めていた慶大が、早大と東大に敗れて、ついに座を明け渡した。東大と早大は全くの実力伯仲で、早大は5年ぶり、東大は10年ぶりの覇権を目指して戦ったが引き分け、覇権決定の再試合も引き分けて、結局双方1位となった。

6人制は東大から3チーム

関東6人制大会は第5回を迎えるが、参加チームは昨年より10チーム増えて58チームとなった。内訳は第1部29（大学14、高専5、クラブ10）、第2部15（実業団）、第3部14（中学校）となっている。大幅に増えたのは大学が9チーム増えたからだが、これは毎年春に行われていた全日本選手権がシーズンに秋に移したので6人制大会が春の唯一の大会となり、技術向上の意義が増したからと思われる。

東大からはA、B、C3チームが参加したが、Aは主力+OB、Bは2・3年生、Cは新人という編成。予想では東早慶3グループの争いと見られていたが、東大Aは1回戦で足元をすくわれ、残った東大Bも準決勝で敗れた。

リーグ戦は東早で優勝争う

▽東大3-0慶大（10月19日、神宮）

戦評：東大は立ち上がりから活発に動き回り、前半10分、菊池から左に出したパスを大谷がダッシュ鋭く受け、すこしドリブルしたあと中央を割って早々と先制した。このパスコースは東大唯一の得点源で、期せずして慶大の弱点を突いて結実したわけだが、これを許した慶大バック陣の責任は大きい。

▽東大2-2早大（10月25日、神宮）

戦評：早大は出足が悪く、固くなって球が足につかず、最初は東大の一方的な攻勢を受けていたが、次第に落ち着いて、27分、右CKから得点したあと

は圧倒的に攻め続けて32分に追加点を挙げた。

後半4分、東大は相手GKが前に出てキックしたのを有馬が拾って直ちにシュートするとGKの留守へ決まって2-1と迫った。戦況はとみに活況を呈し、東大の粘り強い攻撃を早大が押し切るかと思われたが、42分、東大は原田から出たライナーを大谷が鋭く決めて2-2の同点とした。

東大は頼む大谷に最後の瞬間に活路を見出したが、0-2から追撃に成功したことは確かに東大の躍進と気力の横溢を物語るもので、凡戦の多かった秋に、さすが優勝を争う唯一の好試合だったといつてよからう。

東早、気合のかかった熱戦

▽リーグ戦優勝決定戦

東大1-1早大（11月16日、神宮）

※引き分けで決勝つかず両校優勝

戦評：早大は前半28分、ゴール前の混戦から決めてリード。東大は大谷に球を集めたが、早大バック陣のマークが固くてものにならなかった。後半、早大はHBに負傷者が出たことから多角的なパスワークができなくなり、得意の揺さぶり戦法に駒不足を感じていた。しかし東大とて左右両ウイングからCF大谷へ球を送る単調な攻めに終始、22分に奥瀬が決めてようやく追いついた。

双方ともFW陣の胸のすくような技はみられなかったが、技術的にはともかく、両者ともに気合がかかって力のこもった一戦だった。

このシーズン、東早はともに1試合を引き分けたあと、リーグ戦後半には調子を整え、東早第1戦は今秋唯一の好試合を展開してみせた。

東大はあくまで両翼から大谷へ通す得点経路を生かそうとしていて、ある程度までは成功していたが、これにこだわっていたことが覇権を握れなかった原因になったともいえよう。少なくとも早東第1戦から決定戦までの2旬の間に、もうすこし変化のある攻め方を修得すべきだった。

東大の単調な攻撃方法では、がっちりとゾーンディフェンシ的な構えを備えた3Bを破り得べくもない。商大戦で無得点、覇権決定戦で1点しか取れなかったことが、これを実証している。

（戦評は朝日新聞から要旨抜粋）

（折原一雄）

公式試合記録

・関東6人制選手権（一高，青師，神宮）

5月10日 1回戦 東大B ○ 2-0 一高B

5月11日 1回戦 東大A ● 0-1 一高A

5月18日 2回戦 東大B △ 1-1 WMW

延長引分抽選勝

東大C ○ 2-0 外語

5月24日 準々決勝 東大B ○ 3-0 専大

東大C 0-0 早大B

延長●0-2

5月25日 準決勝 東大B ● 0-3 明大A

・関東大学リーグ1部

9月28日 △ 0-0 (0-0) 商大 (神宮)

10月11日 ○ 2-0 (0-0) 立大 (神宮)

10月15日 ○ 3-0 (0-0) 文理大 (東大)

10月19日 ○ 3-0 (2-0) 慶大 (神宮)

10月25日 △ 2-2 (0-2) 早大 (神宮)

3勝2分 同率1位

・優勝決定戦

11月16日 △ 1-1 (0-1) 早大 (神宮)

引分 両校優勝

出場選手

相手	関東大学リーグ1部					決定戦
	商大	立大	文理大	慶大	早大	早大
GK	浜野	浜野	浜野	浜野	浜野	浜野
FB	原田	原田	原田	原田	原田	原田
	木村	木村	木村	木村	木村	木村
HB	奥瀬	奥瀬	奥瀬	奥瀬	奥瀬	奥瀬
	横山	横山	横山	横山	横山	横山
	有馬	有馬	有馬	有馬	有馬	有馬
FW	菊池	菊池	菊池	菊池	菊池	菊池
	種田	種田	種田	種田	種田	種田
	大谷	大谷	大谷	大谷	大谷	大谷
	奥島	奥島	奥島	奥島	奥島	奥島
	天野	天野	天野	天野	天野	天野

関東大学リーグ1部成績

	東大	早大	慶大	商大	立大	文理大	勝	負	分	得	失	差	点
東大	-	△2-2	○3-0	△0-0	○2-0	○3-0	3	0	2	10	2	8	8
早大	△2-2	-	○1-0	○4-0	○4-2	△2-2	3	0	2	13	6	7	8
慶大	●0-3	●0-1	-	○2-1	○2-1	○2-1	3	2	0	6	7	-1	6
商大	△0-0	●0-4	●1-2	-	△1-1	○2-0	1	2	2	4	7	-3	4
立大	●0-2	●2-4	●1-2	△1-1	-	○3-1	1	3	1	7	10	-3	3
文理大	●0-3	△2-2	●1-2	●0-2	●1-3	-	0	4	1	4	12	-8	1

1942年度（昭和17年度）

秋のリーグ戦が春に移る

半年繰り上げて9月に卒業

昭和16年12月8日に太平洋戦争が始まると戦時色は一段と濃くなり、前年度に始まった繰り上げ卒業はさらに早められて、この年から半年繰り上げの9月卒業となった。（この繰り上げ制度は戦争終了後の昭和22年まで続いた。旧制大学の就学年限は本来は3年間）

このような改変を受け、従来秋に開いていたリーグ戦はチーム編成の制約から、この年は春に移して開いている。

東西対抗戦では関学を圧倒

▽東大8-1 関学大（7月4日、神宮）

選評：東大は終始圧倒し一方的に攻めて大勝したが、試合内容は近来にない貧困なものだった。

6人制に東大出た記録なし

関東6人制大会は第6回を迎えたが、戦時下の影響を濃く受けたためか参加チームは激減した。開催はしているが、東大が出場した記録は残っていない。時期は、これまでは公式戦のなかった春を選んで開いていたが、リーグ戦が秋から春に移行したので6人制大会は8月に開いている。

このあと、大会は社会情勢から開催自体が困難となって、自然消滅の道をたどった模様で、開催した記録類は残っていない。

組織変え新たに学生選手権

戦時下の厳しい状況のもと、サッカー協会は体制の改変を求められて発展的に解消し「大日本学徒体育振興会」にその1部門として組み込まれた。そして16チームの参加を得て、11月に同振興会関東支部主催のもとに「第1回関東学生蹴球選手権大会」を開いた。

大会は、実力差を考慮して編成していた、これまでの1部、2部制および総当たりのリーグ戦形式を廃して、新たに勝ち抜き戦形式を採用した。また、大学と高等専門学校は互いに別のリーグで戦っていたが、これを統合した。

大会は東早慶ビッグ3とそれ以外のチームとの実力差が目立ち、結局東早で決勝を争って早大が優勝した。

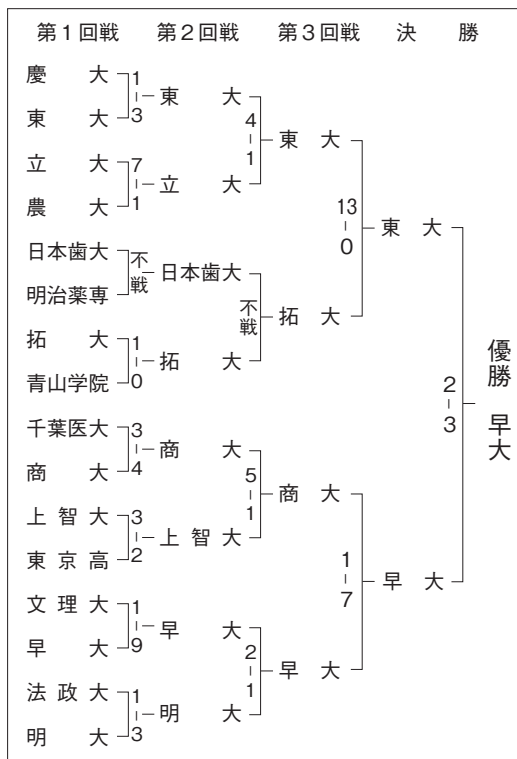
▽決勝戦 東大2-3 早大（11月28日、神宮G）

戦評：開始直後から東大が早大を圧倒して、試合は早大サイドで進められた感があったが、早大の粘り強い防戦が功を奏して決まらなかった。前半中ごろ逆襲でチャンスをつかんだ早大が先制。その直後、東大が中央から攻めてシュートを打つと、これが早大ボックスを割って、あっけなくゴールして同点。あと早大は左からの速攻を生かして2ゴールを加えた。

東大は前半終わりごろ、早大GKの失策から1点を得て肉薄し、後半もしばしば好機を得て早大ゴールを襲い、ポストに当たるようなシュートを放ったが決まらず、早大の逃げ込みが成功した。

（戦評は朝日新聞から要旨抜粋）

（折原一雄）



関東学生選手権トーナメント

公式試合記録

・関東大学リーグ1部

- 4月29日 ○ 4-0 (3-0) 立大 (神宮)
 5月17日 ○ 5-0 (3-0) 商大 (東伏見)
 5月31日 ● 2-4 (1-1) 明大 (日吉)
 6月6日 △ 1-1 (1-1) 慶大 (神宮)
 6月21日 ○ 1-0 (0-0) 早大 (神宮)
 3勝1分1敗 優勝

・関東学生選手権

- (日医大、第一生命、東大、青師、神宮の各グラウンド)
 11月14日 1回戦 ○ 3-1 慶大
 11月22日 2回戦 ○ 4-1 立大
 11月23日 準決勝 ○ 13-0 拓大
 11月28日 決勝 ● 2-3 (2-3) 早大 (神宮)

・東西代表校対抗戦

- 7月4日 ○ 8-1 (7-0) 関学大 (神宮)

出場選手

相手	関東大学リーグ1部					決定戦	関東学生選手権	
	立大	商大	明大	慶大	早大	関学大		早大
GK	近藤		近藤	近藤	近藤	近藤		近藤
FB	大貫		大貫	大貫	大貫	大貫		大貫
	木村		木村	木村	木村	木村		木村
HB	奥瀬		奥瀬	奥瀬	奥瀬	奥瀬		奥瀬
	加藤		加藤	加藤	加藤	加藤		須賀
	須賀		須賀	須賀	須賀	須賀		渡辺
FW	吉田		菊池	菊池	種田	種田		中村
	矢島		矢島	天野	天野	天野		加藤
	天野		天野	大谷	大谷	大谷		伊藤
	奥島		奥島	奥島	奥島	奥島		奥島
	三上		三上	三上	三上	三上		三上

関東大学リーグ1部成績

	東大	早大	明大	慶大	立大	商大	勝	負	分	得	失	差	点
東大	-	○1-0	●2-4	△1-1	○4-0	○5-0	3	1	1	13	5	8	7
早大	●0-1	-	○5-1	○5-1	○8-1	●2-4	3	2	0	20	8	12	6
明大	○4-2	●1-5	-	○1-0	●2-4	○4-1	3	2	0	12	12	0	6
慶大	△1-1	●1-5	●0-1	-	○3-2	○5-0	2	2	1	10	9	1	5
立大	●0-4	●1-8	○4-2	●2-3	-	△1-1	1	3	1	8	18	-10	3
商大	●0-5	○4-2	●1-4	●0-5	△1-1	-	1	3	1	6	17	-11	3

戦争中断中の幻の優勝記録

この時期、戦争の影響は広く一般の人の生活にも次第に大きく影を落とすようになり、これまでのようにスポーツに時間を割くようなことはできなくなっていた。また野球、サッカーを始め多くのスポーツが敵性スポーツ（戦争の相手国のアメリカ、イギリスなどで生まれたスポーツ）ということで禁止されたとされているが、どういう形で禁止命令が出されたのかは定かでない。学生サッカー界の活動も例外ではありえなかった。

現在の関東大学リーグの主権者である関東大学サッカー連盟の公式記録には、昭和18年から20年までの3年間はリーグ戦中止とあり、リーグの回数も、17年の第19回から、21年の第20回と、年をとばした回数が公式の記録となっている。また新聞などの関係資料にもこの年の記録は残っていない。

しかし、昭和19年9月卒業の大貫雅敏の記録によれば、リーグ戦が開催されたという。以下は大貫の記録によるものだが、日時、会場は不明であり、東大を除く他校同士の対戦結果も残されていない。

◇リーグ戦

東大 7-1 文理大
東大 7-0 立大
東大 5-3 慶大
東大 11-2 早大
東大 5-0 明大
〔GK〕近藤 〔FB〕大貫、木村
〔HB〕奥瀬、須賀、渡辺
〔FW〕中村、加藤、伊藤、奥島、三上

メンバー表として上の記録が残っているが、どの試合でのメンバーなのか、あるいは全試合を通じての不動のメンバーだったのかは不明。なお、リーグ戦は行われたとしたら諸般の状況から前年度と同じく春に行われたものと思われる。

対戦相手のうち早、明、慶、立は、17年の1部のチームで、リーグの成績は東大の1位のあとこの順序で2～5位であり、最下位の商大の代わりに文理大が入っているから、確認はされていないが、文理大が2部の優勝チームだったとすれば、商大と入れ替わったものと思われる。

なお、21年の再開時には、1部にはこの中から明

治がなく、商大が入っている。この年の成績からこの二つが入れ替わったと考えれば接続性があるが、17年の成績からでは、最下位の商大が1部にいることと、3位の明大がないことの説明がつかない。このことから公式には戦時下ということで記録に残すことは出来なかったが、実質的にはリーグが行われて、その成績が戦後の入れ替えにも用いられたと推測することが出来る。

成績は東大が全勝での堂々の優勝であり、これが公式記録ならば、東大のリーグ優勝は10回となって、単独で3位ということになる。戦争で消えた、誠に惜まれる幻の記録である。

闘魂1号には、下記の関東大会の記録があるが、出典は不明である。

◇関東蹴球大会（11月12、13日 神宮G）

1回戦 全東大 1-0（延長）全文理大
準決勝 全東大 2-0 全慶大
決勝 全東大 2-1（延長）全明大
〔GK〕近藤 〔FB〕大貫、木村
〔HB〕奥瀬、須賀、渡辺
〔FW〕中村、加藤、伊藤、奥島、三上

メンバーは決勝戦のものだが、1回戦から同じだったとも思える。

戦火は拡大する一方で、文科系学生に対する徴兵猶予が停止されて「学徒出陣」となり、10月21日には学生スポーツの聖地だった神宮競技場で、雨の降る中「出陣学徒壮行会」が行われて、多くの大学サッカー選手も戦地へと出征していった。こうしてスポーツ活動の火は消えた。

（浅見俊雄、折原一雄）

1944年度（昭和19年度） 1945年度（昭和20年度）

戦争のため活動中止（記録なし）

1946年度（昭和21年度）

戦後最初の日本一に輝く

戦後のスポーツの復興は早かった。サッカーも昭和20年の秋には各地で試合が行われ、21年2月には東西対抗戦が関西で行われている。

4月には全日本選手権大会の関東予選が行われ、OB、現役で編成した東大LBは全早大を2-0で破って代表となり、5月5日に東大グラウンドで関西代表の神経大クを6-2で破って戦後最初の日本一に輝いた。この大会は決勝戦のみで、神経大クには夜行列車に立ち通して東上したという終戦直後ならではのハンデがあった。

東大現役の活動がいつから始まったかは定かでないが、20年秋には有志でボールを蹴っていて、チームを作ろうということになった。大学の学生部に勤めていた横山陽三（昭16卒）と、大学からも、横山とも家の近かった同期の有馬洪両先輩が、部の復活に手を貸してくれた。暮れごろには部としての活動が始まっていたようである。

21年には学内で高校のOBの対抗による大会が行なわれ、そこで部にスカウトされた選手もいたようである。部員はぎりぎりの人数だった。夏には日立で1週間の合宿を行っている。早稲田の先輩の世話で、配給制だった食料も、現地で用意してくれたという。復活第1回の大学リーグ戦は早大に敗れて2位だった。

（浅見俊雄）

公式試合記録

・京大定期戦

中止

11月10日 ○ 2-0 (2-0) 慶大 (東大)

11月17日 ● 0-3 (0-2) 早大 (東大)

4勝1敗 2位

・関東大学リーグ1部

10月10日 ○ 7-0 (3-0) 商大

10月16日 ○ 11-0 (4-0) 立大 (東大)

10月26日 ○ 6-0 (5-0) 文理大 (東大)

・部長 内田祥三

・監督

・主将 永井卓也

・主務

出場選手

関東大学リーグ1部					
相手	商大	立大	文理大	慶大	早大
GK	馬渡	馬渡	馬渡	馬渡	馬渡
FB	高崎	村瀬	三井	佐藤	佐藤
	三井	三井	高崎	本城	本城
HB	黒津	黒津	黒津	黒津	黒津
	永井	永井	永井	永井	永井
	松元	松元	松元	松元	渡辺
FW	三上	三上	二宮	天野	天野
	岡本	高橋	三上	三上	三上
	遠山	早川	遠山	遠山	遠山
	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎
	二宮	岡本	岡本	二宮	二宮

関東大学リーグ1部成績

	早大	東大	文理大	慶大	商大	立大	勝	負	分	得	失	差	点
早大		○3-0	○3-1	△1-1	○3-1	○7-0	4	0	1	17	3	14	9
東大	●0-3		○6-0	○2-0	○7-0	○11-0	4	1	0	26	3	23	8
文理大	●1-3	●0-6		○2-1	○2-1	-							
慶大	△1-1	●0-2	●1-2		○5-0	○8-0	2	2	1	7	8	-1	5
商大	●1-3	●0-7	●1-2	●0-5		○2-0	1	4	0	4	17	-13	2
立大	●0-7	●0-11	-	●0-8	●0-2								

不覚続きでリーグ戦3位

前年度の主力も残り、出征していた文科系の学生も復員してきたので、戦力は充実していて、この年の目標は当然のごとくリーグ優勝だった。しかし第2戦の慶大に前半に1-4とされ、後半猛追したが及ばず、3-5で不覚の1敗を喫してしまった。

さらに優勝争いのライバルと見られていた早大との最終戦にも、1-2で敗れ、早、慶に次ぐ3位と、前年よりも順位を落としてしまった。当時のメンバーからは「早稲田には岩谷にやられた、慶応には負けるはずではなかった」と同じ言葉が聞かれる。

この結果がよほど悔しかったのであろう、誰言うもなく卒業を伸ばしてもう1年やって優勝しようと、馬渡、後藤、松元、二宮、高橋の5人が残り、残らなかった高崎、遠山は、なぜ残らないのかと皆になじられたという。

前年もこの年も、早、慶、東、文理が1位から4

位までを占めているが、いずれも理科系の学生がいる大学であった。理科系は学徒出陣から免除されて国内に残っていたが、学徒動員で軍需工場や農家で働いていたので勉強もロクにできなかったし、もちろんサッカーをすることは不可能だった。しかし戦後、すぐにサッカーに参加できた。これに対して文科系は学徒出陣で戦場に駆り出され、生き延びていてもすぐには帰国できないケースが多かった。従って文科系だけの大学は戦力の低下が大きかったのである。商大などにはシロートと思われる選手も試合に出ていたという。千葉医大がこの年1部に上がり、5位となって残留したのも、こうした背景があったことだと思われる。

なお、戦中および戦後すぐのサッカーの状況については、当時のメンバーによる座談会「東大サッカー 戦中・戦後の思い出」を本書に掲載してある(61～67ページ)。

(浅見俊雄)

公式試合記録

・京大定期戦

中止

11月9日 ○ 5-0 (3-0) 文理大 (東大)

11月16日 ● 1-2 (0-2) 早大 (東大)

3勝2敗 3位

・関東大学リーグ1部

10月11日 ○ 5-0 (4-0) 商大 (東大)

10月17日 ● 3-5 (1-4) 慶大 (東伏見)

10月22日 ○ 3-0 (3-0) 千葉医大 (東大)

・部長 内田祥三

・監督 横山陽三

・主将 二宮 泰

・主務 馬越和英

出場選手

関東大学リーグ1部					
相手	商大	慶大	千葉医	文大	早大
GK	馬渡	馬渡	馬渡	馬渡	馬渡
FB	高崎 後藤	高崎 後藤	高崎 後藤	高崎 馬越	高崎 馬越
HB	松元 海老原 大島	松元 海老原 大島	松元 海老原 大島	後藤 海老原 松元	後藤 海老原 松元
FW	二宮 高橋 早川 小倉 小林	二宮 高橋 早川 福田 小林	二宮 高橋 早川 山崎 遠山	二宮 高橋 早川 山崎 遠山	二宮 高橋 早川 山崎 遠山

関東大学リーグ1部成績

	早大	慶大	東大	文理大	千葉医大	商大	勝	負	分	得	失	差	点
早大	—	○2-1	○2-1	○5-1	○3-0	○12-0	5	0	0	24	3	21	10
慶大	●1-2	—	○5-3	△1-1		○4-2							
東大	●1-2	●3-5	—	○5-0	○3-0	○5-0	3	2	0	17	7	10	6
文理大	●1-5	△1-1	●0-5	—	○5-1	○5-0	2	2	1	12	12	0	5
千葉医大	●0-3		●0-3	●1-5	—	○2-1							
商大	●0-12	●2-4	●0-5	●0-5	●1-2	—	0	5	0	3	28	-25	0

大量留年して宿願の優勝

この年、ほかの大学を驚かしたのは、前年の最上級生のレギュラーがほとんど全員大学に残って、サッカーを続けたことであった。前年優勝できなかったことが悔しくてならず、みんなで残って優勝を目指そうということになったという。前年主将の二宮も残ったが、この年の主将にはG Kの馬渡になった。

春には関東大学トーナメントが行われたが、決勝で文理大を5-0で破って優勝したことで決勝戦のメンバー以外には、記録が見当たらない。

高校大会消え京大戦復活へ

10月に、学制改革に伴ってこの年が最終回となった全国高校選手権大会が京都で行われた。長年にわたって東大、京大の蹴球部が共催して行ってきた大会であったので、両校の代表が集まった機会に、戦前に定期戦としてスタートしながら、さまざまな事情で長く中断されていた東大-京大の定期戦を復活しようという機運が盛り上がり、翌24年から定期戦を復活させることが決定された。

リーグ戦1部で最後の優勝

1年のときも試合に出場し、前年のリーグもC Fで活躍した早川は、春の試合にも出場していたが、秋のリーグ戦のメンバーには名前がない。それは同時期に行われていた極東裁判の文書翻訳作業に早川が従事していて、仕事の制約上缶詰状態になっていて、練習や試合に参加する自由がなかったためである。

このため攻撃力はかなり削減されたと思われるが、2戦目の文理大戦には惜敗したが、ライバル早慶を撃破して、留年した最大の目的である優勝を勝ち取ることができた。この優勝が東大の関東大学リーグ1部での最後の優勝である。

▽東大5-2慶大（11月7日、神宮）

文理大に黒星をつけられた東大に対し、全勝の慶大に6分の利があったが、慶大には明大戦の好調さは見られず、東大の鋭い足とキープ力に圧倒されて、中盤のボールをことごとく東大に取られて終始防戦に立ってしまった。後半4-0とリードされたあと、東大が気を許して攻め手を緩めた一瞬をねらって、いずれも胸のすくようなゴールで4-2と迫

ったが、慶大のスパートはわずかの間だけに終り、東大に追加点を許して止めをさされた。

Bクラスを相手に快勝を続けてきた慶大が、大物東大に対してバックの弱点をさらけてしまったのに対して、この日の東大は文理大に負けて発奮してか、シーズン1の好フォームを見せていた。たくましいファイトとキープ力、それにマークと潰しの確実なバック陣の活躍は見事であった。

（アサヒ・スポーツ、23.11.13 大橋）

▽東大2-0早大（11月14日、神宮）

東大対早大の試合はシーズンを飾った好試合で、両軍固くなったため快心のパスワークは見られなかったが、スピーディなオープニングで接戦を演じた。東大は後半2分左からウイングの送球をバックスがミスし二宮がシュートしてリード、早大はこれをタイにするチャンス再三迎えたが、ゴール前の突込みに欠け、さらに東大はタイムアップ直前中央線そばにフリーキックを得、キックはゴール前左の好センターリングとなり、東大FWが全員でもみこんで入れた。なおこれで東大は4勝1敗の成績で今期リーグに優勝した。（朝日新聞、23.11.25、大橋）

東西1位対抗で関学に苦杯

関東、関西のリーグ戦の1位同士の対抗戦が、東大と関学の間で12月12日に西宮で行われた。

アサヒ・スポーツ（23.12.11）の天藤の予想では、「終戦後の学生チームはその日の調子と一寸したしきも判り切った作戦が成功するかしないかで勝敗が逆転する場合が多く、六分の強みを伝えられる東大も勝つとはいえない。」としながらも、「東大のよさはチームにバランスが取れていて、全員忠実な動きをする所にあり、守っては相手FWに突き破るべき穴を作らせず、攻めてはバックスの一寸したミスキックを拾って得点機を作る」「東大の欠点は、忠実な動きによってゴール前までは確実にボールを持っていくが、最後の瞬間の鋭さに欠ける」と分析している。また関学については、「錫田一人のFWだが、錫田の個人技を生かす戦法を取れば東大バックスを破りうる機会はある」「錫田一人ではつぶされるから、他の4人のFWである程度東大バックスを揺さぶってから、錫田に球を出すべきであろう」として、「関学の作戦に勝利の女神が微笑むか、堂々理詰め東大に栄冠が握られるか」「順当に行けば東大に利がある」と結んでいる。

そして同じ天藤の戦評を以下に要約する。

「微風ながら風上の東大に開始早々に好機が訪れたが、シャープな動きに欠けて突破力なく、凡キックを繰り返すに過ぎなかった。圧迫されていた関学は8分に鶴田を何度も使ったパスで逆襲し好シュートはGK正面だったが、これで一気に立ち直って、むしろ優勢に試合を進めた。東大は前半終盤の2度の決定機も決めきれなかった。

後半風上となった関学が一方的に攻め込み、疲労の見え出した東大バックスのスキをつけて、38分に

鶴田の決定力が実を結んで1-0とリードした。さらに関学は猛攻を続け、41分にセンターリングを東大バックがミスキックしたボールを拾って三田が決め、勝利を確定した。東大は大埜の児童の活躍をFWの両サイドが生かすことができなかった。

いずれにせよ両軍ともバックよりFWに難があり、1位対抗としては攻撃力の低調さから試合内容はさびしいものであった。」

（アサヒ・スポーツ23.12.18天藤）

（浅見俊雄）

公式試合記録

・関東大学選手権

5月18日 決勝 ○5-0（2-0）文理大（東伏見）
優勝

11月7日 ○ 5-2（2-0）慶大（神宮）

11月14日 ○ 2-0（0-0）早大（神宮）

4勝1敗 優勝

・京大定期戦

なし

・東西学生第1位対抗

12月12日 ● 0-2（0-0）関学（西宮）

・関東大学リーグ1部

10月10日 ○ 9-0（3-0）千葉医大（神宮）

10月24日 ● 0-1（0-1）文理大（神宮）

10月30日 ○ 6-1（5-0）明大（神宮）

・部長 田中二郎

・監督 横山陽三

・主将 馬渡一真

・主務 馬越和英

出場選手

相手	関東大学リーグ1部							1位対抗
	文理大	千葉医	文理大	明大	慶大	早大	関学	
GK	馬渡	馬渡	馬渡	馬渡	馬渡	馬渡	馬渡	馬渡
FB	馬越	海老原	丸山	松元	松元	松元	松元	松元
	後藤	後藤	後藤	後藤	中村	中村	中村	中村
HB	松元	松元	松元	海老原	海老原	海老原	海老原	海老原
	中村	中村	中村	丸山	丸山	丸山	丸山	丸山
	海老原	大島	海老原	大島	大島	大島	大島	大島
FW	小林	二宮	二宮	二宮	二宮	二宮	二宮	二宮
	高橋	高橋	高橋	高橋	高橋	高橋	高橋	高橋
	早川	小林	小林	松平	松平	松平	松平	松平
	大埜	大埜	大埜	大埜	大埜	大埜	大埜	大埜
	松平	松平	松平	小林	小林	小林	小林	小林

関東大学リーグ1部成績

	東大	文理大	早大	慶大	明大	千葉医大	勝	負	分	得	失	差	点
東大	-	●0-1	○2-0	○5-2	○6-1	○9-0	4	1	0	22	4	18	8
文理大	○1-0	-	●1-6	○2-1	△1-1	○5-0	3	1	1	10	8	2	7
早大	●0-2	○6-1	-	△1-1	●0-1	○13-0	2	2	1	20	5	15	5
慶大	●2-5	●1-2	△1-1	-	○6-2	○13-1	2	2	1	23	11	12	5
明大	●1-6	△1-1	○1-0	●2-6	-	○6-0	2	2	1	11	13	-2	5
千葉医大	●0-9	●0-5	●0-13	●1-13	●0-6	-	0	5	0	1	46	-45	0

経験者少なく、連覇ならず

前年、大量に留年までして優勝を勝ち取ったメンバーが一気に卒業して、リーグ戦経験者は大埜、松平、海老原純、丸山の4人だけであった。主将には海老原がなった。

この年に新制大学の最初の入学者が、一高と同居で駒場キャンパスにはいった。そして新制1年のみのチームが結成され、駒場で練習したというが、ア式蹴球部とはまったく別活動であったようだ。このチームのキャプテンは小倉貫太郎で、当時の学生運動の中心的活動家であり、日本航空に入社して、山崎豊子の「沈まぬ太陽」の主人公恩地元のモデルとなった人物である。

前年の優勝当時の強力FWに、須賀、有馬、横山らのベテランのOBバック陣、それに現役の大埜、海老原が加わって編成した東大LBは、全日本選手権大会に出場して、関東予選でセントポール（立教のOB、現役連合）、早大、WMW（早大OB）を連破して代表となり、東伏見で行われた本大会では、準決勝で東洋工業を7-1で粉砕、決勝では日鉄二瀬を準決勝で破った関大クと対戦して、5-2で破って優勝した。

朝日新聞（24.6.6）の戦評では、「東大は関大バックスの鈍い動きに乗じて40本におよぶシュートのうち、関大GKのミスも手伝って5点を得た。一方関大FWはまったくコンビネーションなく、後半の半ばごろから2点を入れてやや緊張させたに過ぎなかった。」とある。

またアサヒ・スポーツ（24.6.11）には「勝った東大もまめに動いたのと有馬の強い動きが目立ったぐらいで40本にも及ぶシュートを放ったにもかかわらず関大GKのミスあるいは感の悪さが手伝った3点を除けば堂々の得点はわずかに2点にとどまった。」と書かれている。これが東大のチームが全日本選手権に優勝した最後である。

当時は各有力大学とも、現役とOBで編成したチームで全日本選手権に参加することが多く、こうしたチームが常に全日本の上位を占めていた。またこの年の東洋工業、日鉄二瀬のように、実業団チームが大学チームに挑戦するという図式がしばらく続くことになる最初の大会でもあった。

夏季合宿は松本の「千代の湯」で1週間行った。

当時小石川高にいた岡野は、同時期に松本の養心堂という合宿所に泊まって、早大の岡田のコーチの下で練習しており、東大に試合を申し込んだが断られたという。合宿には竹腰が泊まりこんでコーチに当たった。このときのメンバーがインステップキックを教わったと当時のことを語っているから、技術的には満足のいくレベルではなかったのであろう。

復活した京大戦は1-1

戦前は、両チームの主張が食い違っていた大正15年の試合が中止されて以来、定期戦としては行われなかった京大戦が、この年から復活した。1979年の復活30回の記念プログラムに、京大OB岡本彰郎氏が「京大蹴球部五十年史」に書かれた文章が転載されているが、京大の選手は食料も宿舍もなかったので、東京の先輩の家に分宿したという。試合はタイムアップ寸前まで京大がリードしていたが、結果は1-1の引き分けとなってしまったのが心残りである、と書いておられる。

リーグ戦はすべて1点差

この年の東京国体のために新設された武蔵野球技場が、リーグ戦の主会場として使われ、東大は全試合をここで行った。

当時のメンバーによれば、日本代表でもあった大埜以外は技術が低かったので、このチームはキックアンドラッシュで戦うしかなかった、コーナーフラッグめがけて蹴れ、というのがバックへ与えられた指示だったという。

勝った試合も敗れた試合もすべて1点差であったが、2勝3敗で4位となってしまった。慶大には3-2で勝ったが、日本代表にも選ばれた慶大LWの重松は、八戒のあだ名がある巨躯のFB三輪と対して、「あいつは鈍感だから抜けない」とぼやいたという。

最終戦の早大に2-3で惜敗した結果、早大が立大より勝ち点1上回って辛くも優勝したが、この早大戦についてのアサヒ・スポーツの戦評からその試合の内容を紹介する。

早大は東大に敗れば立大に優勝をさらわれる大事な試合で気合が入っていた。8分に松永、岡田、高橋とわたって、高橋がブッシュして1点、以後もボールをキープして東大陣に攻め込んだが決定機を

つくれず、28分岡田のロングシュートをキーパー倒れて防いだが及ばず、わずかにゴールラインを越えて2-0となり大勢を決した。

後半4分丸山からのパスを受けた秋山が単身左より持ち込み、クリーンシュートを決めて1点差に迫った。これに勢いを得た東大が猛烈な反撃に出て早大ゴールを再三脅かしたが、FWの攻撃に厚みがな

く、惜敗した。

個人技、コンビとも早大に一日の長があり、勝利は順当なものだった。東大は大埜が光ったが、彼に次ぐものに欠けチャンスを逸していた。早大を2点に押さえたバックの健闘は賞される。

(12月3日、天藤)

(浅見俊雄)

公式試合記録

・京大定期戦 復活第1回

7月 △ 1-1 (0-0) 京大 (御殿下)

・関東大学リーグ1部

10月9日 ● 1-2 立大 (武蔵野)
 10月23日 ○ 2-1 明大 (武蔵野)
 10月30日 ● 1-2 教大 (武蔵野)
 11月13日 ○ 3-2 (2-2) 慶大 (武蔵野)
 11月27日 ● 1-2 (0-2) 早大 (武蔵野)
 2勝3敗 4位

・部長 田中二郎
 ・監督 横山陽三
 ・主将 海老原純
 ・主務 池原秋男

出場選手

相手	関東大学リーグ1部					
	京大	立大	明大	教大	慶大	早大
GK					本永	本永
FB					三輪	三輪
					中村	中村
HB					海老原	海老原
					丸山	丸山
					市川	大島
FW					八星	八星
					菊井	菊井
					松平	松平
					大埜	大埜
					三上	秋山

関東大学リーグ1部成績

	早大	立大	慶大	東大	教大	明大	勝	負	分	得	失	差	点
早大	-	○5-0	△1-1	○2-1	△1-1	○2-1	3	0	2	11	4	7	8
立大	●0-5	-	△1-1	○2-1	○3-2	○6-1	3	1	1	12	10	2	7
慶大	△1-1	△1-1	-	●2-3	△2-2	○3-1	1	1	3	9	8	1	5
東大	●1-2	●1-2	○3-2	-	●1-2	○2-1	2	3	0	8	9	-1	4
教大	△1-1	●2-3	△2-2	○2-1	-	●1-4	1	2	2	8	11	-3	4
明大	●1-2	●1-6	●1-3	●1-2	○4-1	-	1	4	0	8	14	-6	2

2位争い期待されたが4位

主将に最適の名選手大埜

主将には文句なく大埜が選ばれた。東北大生のとき学徒動員で飛行機乗りとなり、死とも直面した経験を持ち、復員して23年に東大に入り直したのでかなりの年長であり、23年から日本代表に選ばれていた名選手だから、主将としては最適の人だった。

中条によれば、大埜は練習や試合の前に「愉快に、元気に、仲良くやろう」といつも言っていたという。スポーツの本質を言いえて妙な言い方である。

春休みに、遠方の人だけが本郷の追分寮に泊まりこみ、近くの方は通いで練習をした。休日で帰省した寮生の荷物を押し入れに押し込んで、貸し布団で寝て、食事は学食でした。泊まり込んだのは10人程度だった。

この年、岡野が入学する。駒場での発表を見た後、家が入谷だったので、帰宅途中に御殿下に顔を出して、すぐ入部した。大埜はじめ旧制の人たちには子ども扱いされ、大埜には「関東大震災を知っているか」と聞かれたという。大埜は大正12年生まれとあとで知って、「赤ん坊じゃ覚えているはずないじゃないか」ということになった。合宿や練習も、出なければいけないというような強制はなかった。

夏合宿は山中湖寮で行われた。進駐軍が女性とちゃらちゃらしていたり、東大のグラウンドで野球をしたりしていた。合宿にはOBがかなりたくさん集まってくれた。「食堂のおばちゃんのご飯をどんぶりにテンコ盛りしてくれたのがうれしかった。練習内容は覚えていないが、食事のことは覚えている」とのことだった。涼しいことを期待していたが、日差しが強く暑くてしんどかったという。

最終日の山中湖1周マラソンは、柴沼が1位で、秋山、大埜の順だった。大埜は全員がスタートしたのを確認してビリから走り出し、励ましの声をかけながら次々抜いていったという。

新制大のメンバーで京大戦

京大戦は、理由は分からないがこの年は行っていない。しかし、闘魂5号には、この年2年目となった新制大学のチーム（すなわち教養学部と教養部のチーム）が京都で試合を行ったこと、嵐のあと大木で湿度100%の環境下だったことが記されているが、

勝敗、スコア、メンバーについては記録がない。

予想は「慶を追う早東立」

リーグ戦開幕の10月15日を目前にした13日の朝日新聞に、大橋の名で今年のリーグ戦の予想記事が出ている。これによれば、見出しは「慶を追う早、東、立」となっている。慶大は竹島、重松の両ウイングのダッシュ力と、菅原、両角、早川らの豪快なプレーによるFWはリーグ随一で、バックにやや難はあるが優勝候補のトップに上げ、早大は堀口を中心とするバックはまとまっているが、FWはホープ松永1人で、彼を生かせるかが問題、東大は海老原、丸山、大島の抜けたHBが弱体化し、エース大埜を中心としたFWは、岡野、菊井、中条らの新人がどれほどの得点力を示すかが問題で、伝統の粘り強さが発揮されれば案外好試合を見せよう、立大の強みはCH鈴木吉が健在で、相変わらずエネルギーギッシュなプレーをするし、FWには竹下、竹村の両ウイングに春日部高から入った名コンビ高林、鈴木潔の活躍が期待される、と予想している。

総得点の大半を岡野が稼ぐ

グラウンドは武蔵野がこの年も主に使われたが、初めて後楽園競輪場も一部使われた。

東大は2位争いを期待されたが、初戦の立大戦で0-4と大敗を喫し、早慶には善戦してともに引き分けた。しかしこの年創部以来はじめて1部に上がった中大に唯一敗れたチームとなる恥辱を味わったが、最終戦で教育大に1-0で辛くも勝って、立大と同位の4位となった。これに負けていれば、中大と同位の最下位になるところであった。

当時のメンバーに話しを聞いた中から、いくつかの話題を上げてみたい。

3-3で引き分けた慶大戦で、大埜はヘディングの競り合いで片目が見えなくなり、攻める方向も定かでなかった。海老原が、攻める方向が逆だ、と怒鳴ったという。

この3点はすべて新人岡野があげたものだった。中央から強引に突破して左足で1点目、柴沼のCKをヘディングして2点目、柴沼のパスを右足で決めて3点目と、岡野は実に鮮明に記憶している。この試合は前半押し気味に進めてリードしたが、後半攻めこまれて1点差となり、最後に早川への大埜のタックルがPKにとられて追いつかれてしまった。

1950年度（昭和25年度）

教大に1-0で勝った点も岡野があげた。泥んこのグラウンドで、GK村岡がミスキックしたボールを岡野がそのまま蹴ったら、村岡の頭を越えてゴールインしたもんだ。結局このリーグ戦で東大があげた5点のうちの4点が、岡野の得点だった。

これも岡野の話だが、中大戦に敗れた後、秋山、三輪と新宿で酒を飲んだことを知った原が、リーグ戦中に酒を飲むような奴と一緒にサッカーはできないと怒って、しばらく練習に来なかったという。

大橋による朝日新聞の1月30日付の総評によれば、東大は大壘のワンマンチームながら、よく早、

慶に引き分けて2部転落を免れたのは、やはり伝統を守ったチームの闘志によったところで、むしろ善戦したといえる。大壘に続いてCH海老原、GK吉富が光り、将来を期待されると、リーグ戦前に東大は2位争いに加わると予想した割には好意的に書いてくれている。

この中で2部転落を免れたと書いているが、次年度から1部は7チームとなるので、最下位の中大も転落せずにすんでいる。

（浅見俊雄）

公式試合記録

・京大定期戦

中止

・関東大学リーグ1部

10月22日 ● 0-4 立大（後楽園）
 11月5日 △ 3-3（2-0）慶大（後樂園）
 11月12日 ● 1-2（1-1）中大（武蔵野）
 11月19日 △ 0-0（0-0）早大（武蔵野）
 11月26日 ○ 1-0（0-0）教大（武蔵野）
 1勝2分2敗 4位

・部長 田中二郎

・監督 横山陽三

・主将 大壘正雄

・主務 池原秋男

出場選手

相手	関東大学リーグ1部				
	立大	慶大	中大	早大	教大
GK	吉富	吉富	吉富		吉富
FB	三輪	三輪	三輪		三輪
	中村	中村	中村		中村
HB	長山	坪田	坪田		石川
	海老原	海老原	海老原		海老原
	原	原	原		原
FW	中条	柴沼	柴沼		柴沼
	菊井	菊井	菊井		香川
	岡野	岡野	岡野		岡野
	大壘	大壘	大壘		大壘
	秋山	秋山	中条		秋山

関東大学リーグ1部成績

	早大	慶大	教大	東大	立大	中大	勝	負	分	得	失	差	点
早大	—	○3-2	△3-3	△0-0	○3-2	○3-0	3	0	2	12	7	5	8
慶大	●2-3	—	○1-0	△3-3	○3-1	○4-0	3	1	1	13	7	6	7
教大	△3-3	●0-1	—	●0-1	○6-2	○2-0	2	2	1	11	7	4	5
東大	△0-0	△3-3	○1-0	—	●0-4	●1-2	1	2	2	5	9	-4	4
立大	●2-3	●1-3	●2-6	○4-0	—	○4-2	2	3	0	13	14	-1	4
中大	●0-3	●0-4	●0-2	○2-1	●2-4	—	1	4	0	4	14	-10	2

6位確保で最下位免れる

3年生の総意で主将には菊井が選ばれたが、東大法学部教授の父菊井維大から、息子は司法試験を控えているので主将は辞退しろといわれ、石川、八星が自宅までお願いに訪れたが、逆に説得され、そこで振る舞われた酒を痛飲して、菊井宅に泊まってしまう羽目になった。その結果、石川が主将になった。

このことがあって、同期の仲間が卒業後任地に赴くに当たっては、壮行の宴を菊井宅で開いてくれたという。菊井は司法試験を受けて見事合格したが、父の言うままに修習生の道に進むのを潔しとせず、日本銀行に就職した。試験合格の資格はずっと保持されているので、菊井は日銀で理事まで昇進して退任したあと、自分の子どもと同年齢か、もっと若い修習生たちに交じって研修所での修習と実務修習に参加し、試験にも合格して弁護士となり、2008年現在も現役の弁護士として活躍している。

復活した京大戦は4-1

大壘のワンマンチームとまで言われた前年のチームから大壘が卒業して、一層の戦力低下が心配された。春の合宿は宇都宮の競馬場近くで行われた。栃木師範の寮で宿泊し、県営グラウンドで練習に励んだ。大内先輩が乾パンを差し入れしてくれたというから、たぶん当時日立の栃木工場に勤務していた大内がここを紹介してくれたのであろう。毎日競馬場の周りを走ったという。

前年行われなかった京大戦は京都で行われ、4-1で東大が勝った。また前日に行われた教養同士の試合は1-1で引き分けた。

夏の合宿は山中寮で行われ、恒例の山中湖1周マラソンは石川が1位、前年トップの柴沼が2位だった。石川は何事にも率先垂範する主将だった。

1部は7チームに編成替え

この年から1部は7チームとなって明大が昇格し、また自動入れ替えではなく、入れ替え戦が行われることになった

東大は無名の選手ばかりのチームだから、旧制高校のサッカーをやるうというのがこのチームのモットーだった。蹴って、走って、強く当たって、スライディングして、そして激しい闘志を燃やしてということである。

10月3日の朝日新聞の予想には、早、慶、立で優勝を争うだろうとし、東大については、「FWからエース大壘を失い、チーム力は昨年よりずっと落ちる。ここもバック陣はおとらないが、FWには人がいない。ただ伝統の粘りがどこまで上位チームを圧するか。」(大橋)と書かれている。

最下位免れた貴重な1点

初戦の立大戦の前半、道場側に攻めて、菊井からのボールを柴沼シュートしたが、水溜りにボールが止まり、相手バックと菊井が競り合って、一瞬早く菊井がシュートして先取点を取った。菊井にとっては大学での唯一の得点だった。この得点のおかげで立大に勝ち、結果的には、最下位と入れ替え戦を免れる貴重な得点だった。

部の先輩でもある朝日の大谷の戦評を要約すると、「確かに番狂わせで、雨が東大に恵みをたれた。神宮ではなく狭い東大のホームグラウンドだったことも幸いした。しかし幸運だけでなく東大はよくがんばった。特にバックスのスライディングに次ぐスライディングのタックルは目覚しく、GK吉富の確実な守備とあいまってゴールを守り通した。雨の中では気をつけなければいけない、ボールのコースに身体を必ず置くという原則も守られていた。」(26.10.20)となる。

RWの加藤は開幕戦の立大戦で負傷して次の3試合には1年の藤本が出場した。藤本を推薦したのは竹腰だったという。藤本は1、2年のときはあまり練習には出ていなかったようだから、竹腰がいつどこで藤本を見ていたのかは分からない。

ビッグ3の面影は全くなし

この年は、実力一と誰もが認めていた慶大が、明大に0-4で惨敗した早大と最終戦で対戦して1-0で敗れ、同率となった優勝決定戦でも2-1で連敗して、早大の3連覇を許してしまった。また、東教大が最下位となり、初め入れ替え戦で東工大に7-1で大勝して、1部残留を決めた。

朝日新聞の総評には、「東大について、往年の早、慶と並んだビッグスリーの面影はミジンもなく、わずかに立大に一勝、明大と引き分けて二部転落を免れた。見られるのはCF岡野、CH海老原ぐらいであった。」(12.18大橋)とある。

(浅見俊雄)

公式試合記録

・京大定期戦

7月10日 ○ 4-1 京大（京大農学部）

・部長 田中二郎

・監督 横山陽三

・関東大学リーグ1部

10月14日 ○ 2-1（1-0）立大（東大）

10月20日 ● 1-4（1-2）教大（神宮）

10月29日 ● 2-5（1-4）中大（神宮）

11月5日 ● 0-2（0-1）慶大（神宮）

11月19日 ● 0-4（0-0）早大（神宮）

11月24日 △ 2-2 明大（武蔵野）

1勝1分4敗 6位

・主将 石川晴樹

・主務 山本一次

出場選手

相手	定期戦	関東大学リーグ1部					
	京大	立大	教大	中大	慶大	早大	明大
GK		吉富	吉富	立石	吉富	吉富	
FB		三輪	三輪	三輪	三輪	三輪	
		坪田	坪田	坪田	坪田	坪田	
HB		石川	石川	安氏	石川	石川	
		海老原	海老原	海老原	海老原	海老原	
		安氏	安氏	石川	安氏	安氏	
FW		柴沼	柴沼	柴沼	柴沼	柴沼	
		菊井	菊井	菊井	菊井	菊井	
		岡野	岡野	岡野	岡野	岡野	
		中条	中条	中条	中条	中条	
		加藤	藤本	藤本	藤本	加藤	

関東大学リーグ1部成績

	早大	慶大	明大	立大	中大	東大	教大	勝	負	分	得	失	差	点
早大	-	○1-0	●0-3	○4-0	○3-1	○4-0	○2-1	5	1	0	14	5	9	10
慶大	●0-1	-	○6-2	○3-1	○3-1	○2-0	○6-0	5	1	0	20	5	15	10
明大	○3-0	●2-6	-	○4-2	○2-0	△2-2	○4-1	4	1	1	17	11	6	9
立大	●0-4	●1-3	●2-4	-	○7-1	●1-2	○6-0	2	4	0	17	14	3	4
中大	●1-3	●1-3	●0-2	●1-7	-	○5-2	○2-0	2	4	0	10	17	-7	4
東大	●0-4	●0-2	△2-2	○2-1	●2-5	-	●1-4	1	4	1	7	18	-11	3
教大	●1-2	●0-6	●1-4	●0-6	●0-2	○4-1	-	1	5	0	6	21	-15	2

第1回全国大会で優勝

この年には新制大学が4年までそろい、旧制大学は3年だけが残っていた。レギュラーメンバーのうち旧制は4人で残り7人は新制、前年は新制は岡野1人だったから、旧制から新制への切り替わりのバトタッチをする過渡期の年だった。

この年、浅見、根津、服部、山本、中島、西本らが入部して公式戦にも出場した。中島は山中の合宿から、西本はリーグ戦が終わってからの入部だったが、すぐに公式戦に出場した。2人ともそれだけの技術を持った選手だが、それを上回る人材に不足していたともいえる。

主将には海老原がなった。人柄も体も大きく、強いリーダーシップを持った主将だった。

台風の中で京大戦は敗れる

京大戦は、台風のさなか、風雨の激しい京大グラウンドで行われた。ゴールからはハーフライン辺がまったく見えないような状態になり、3点目などはGKが飛び出してボールを取りそこない、落ちたボールが水に浮かんで、クリアしようと追う海老原と浅見をあざ笑うかのように、走るより早くゴールに流れ込んでいった。得点者には当時台風につけられた女性名を記録すべきだろう。

京大戦の疲れもあって、そのあとの関学大戦には1-8で、神戸商大戦には1-4でともに大敗する。

夏の合宿は8月末に山中寮で行った。一人ひとりが強くなる、自分で自分を律する、技術的にはボールを止めることに重点を置く、という目標が掲げられた。最終日の山中湖1週マラソンは柴沼兄が優勝した。またリーグ戦の直前に、農学部横の更新館で3日間の合宿を行なった。リーグ戦の戦力についての危機感からだった。

リーグ戦で初の最下位に

アサヒ・スポーツのリーグ戦の予想には、見出しに「早、慶の優勝争い、ダークホースは中、立」とある。東大については、「リーグ中おそらく一番見劣りするチームで、昨年から8人を失って大痛手、ややバックスは見られる、FWは岡野が進歩しているが両サイドの支援は望めない、よほどがんばらなければ2部転落の歴史を作るかもしれない」と手厳

しい。(10月11日、大橋の記事の要約)

こうした予想通り、早大には善戦して3-3で引き分けた以外は、1勝もあげることができず、リーグが始まってから初めての最下位に転落してしまった。早大戦以外の得点は5試合で2点のみ、他大学には全敗した6位の東教大にも3-0と完敗した。

スポーツ毎日の総評には「東大はCF岡野が体力も増加して軽快に動き縦横によく活動しボール扱いにも進歩が見られたほかCH海老原の守備力が買えるだけだった。」(12月6日)とある。

リーグ戦でもまれた成果が

前年から始まった入れ替え戦の相手は青学大、春の練習試合では3-1で勝っていたが、東大にとっては初めて経験する2部への転落の危機でもあり、大勢集まった先輩のプレッシャーもあって、かなり緊張して試合に臨んだ。しかし中島、浅見の1年生コンビで先取点を上げてからは、まったく東大のペースで試合を進め、4-0で危なげなく1部の座を守ることができた。

この年に始まった全国大学選手権大会は、当時は申し込めば出場できる大会であった。リーグ最下位の屈辱を晴らそうということもあり、リーグ戦と同じメンバーに、小柄ながら技術力の高い1年の西本が新たに入部して、この大会に臨んだ。

新聞の予想では、初戦で当たる京都学芸大学が勝ち進むのではとあったが、これに5-0、さらに東医大に9-0と大勝して勢いに乗り、中大に準々決勝で4-3で逆転勝ち、立教も準決勝で1-0で撃破し、決勝でも早大を2-1で破って、誰も予想していなかった優勝を果たしてしまった。入れ替え戦とこの大会については、当時のメンバーによる座談会「第1回大学選手権を語る」(68~76ページ)に詳しく述べられている。

横山陽三は「昨年のリーグ戦で比較的不成績であった早大と東大が、リーグ戦でもまれたチーム力をそのまま持ってきた強みがあった」と分析している。確かに練習も試合も経験の少ない東大は、リーグと入れ替え戦で鍛えられ、そのあとの4週間足らずの激しい練習で、心技体ともたくましく向上させることができた結果としての優勝だった。

(浅見俊雄)

公式試合記録

・京大定期戦

7月10日 ● 1-3 (1-2) 京大 (京大農学部)

・関東大学リーグ1部

10月11日 ● 1-4 (0-1) 明大 (武蔵野)
 10月19日 △ 3-3 (3-2) 早大 (神宮)
 11月2日 ● 0-3 (0-2) 教大 (神宮)
 11月15日 ● 0-2 (0-1) 慶大 (神宮)
 11月22日 ● 0-1 (0-1) 立大 (神宮)
 11月29日 ● 1-4 (0-2) 中大 (神宮)

0勝1分5敗 7位

・入替戦

12月7日 御殿下 ○4-0 青学大 (御殿下)

・第1回全国大学選手権大会

1月2日 1回戦 ○ 5-0 京都学芸大 (絵画館前)
 1月3日 2回戦 ○ 9-0 東医大 (絵画館前)
 1月4日 3回戦 ○ 3-3 中大 (神宮)
 延長 1-0
 1月5日 準決勝 ○ 1-0 立大 (神宮)
 1月6日 決勝 ○ 2-1 (1-0) 早大 (神宮)
 優勝

・部長 田中二郎

・監督 横山陽三

・主将 海老原朗

・主務 中川 勉

・夏合宿 山中湖 8月19日~28日

出場選手

相手	定期戦	関東大学リーグ1部						入替戦	全国大学選手権			
	京大	明大	早大	教大	慶大	立大	中大	青学大	中大	立大	早大	
GK	立石	立石	立石	立石	立石	立石	立石	立石	立石	立石	立石	
FB	柴沼晋	柴沼晋	帆足	柴沼晋	原	原	原	柴沼晋	柴沼晋	柴沼晋	柴沼晋	
	坪田	坪田	坪田	坪田	坪田	坪田	坪田	坪田	坪田	坪田	坪田	
HB	原	中川	柴沼晋	原	柴沼晋	柴沼晋	柴沼晋	原	原	原	原	
	海老原	海老原	海老原	海老原	海老原	海老原	海老原	海老原	海老原	海老原	海老原	
	浅見	浅見	浅見	浅見	浅見	浅見	浅見	浅見	浅見	浅見	浅見	
FW	柴沼明	柴沼明	柴沼明	柴沼明	柴沼明	柴沼明	柴沼明	柴沼明	柴沼明	柴沼明	柴沼明	
	服部	中島	石井	石井	石井	石井	石井	石井	石井	石井	石井	
	鳥居	岡野	中島	岡野	岡野	中島	中島	岡野	岡野	岡野	岡野	
	岡野	石井	岡野	中島	中島	岡野	岡野	中島	中島	中島	中島	
	山本	鳥居	根津	鳥居	根津	藤井	藤井	藤井	西本	西本	西本	

関東大学リーグ1部成績

	慶大	中大	早大	立大	明大	教大	東大	勝	負	分	得	失	差	点
慶大	-	○3-0	△1-1	○5-2	○7-0	○2-0	○2-0	5	0	1	20	3	17	11
中大	●0-3	-	△1-1	○5-4	○2-0	○1-0	○4-1	4	1	1	13	9	4	9
早大	△1-1	△1-1	-	○3-0	●1-2	○3-1	△3-3	2	1	3	12	8	4	7
立大	●2-5	●4-5	●0-3	-	○3-0	○2-1	○1-0	3	3	0	12	14	-2	6
明大	●0-7	●0-2	○2-1	●0-3	-	○2-1	○4-1	3	3	0	8	15	-7	6
教大	●0-2	●0-1	●1-3	●1-2	●1-2	-	○3-0	1	5	0	6	10	-4	2
東大	●0-2	●1-4	△3-3	●0-1	●1-4	●0-3	-	0	5	1	5	17	-12	1

リーグでの最下位は回避

この年から全員が新制大学の部員で構成されることになった。主将には岡野が就任したが、正月の大学選手権で東大を優勝に導く大活躍をしたことで、西独ドルトムントで開催されることになった国際大学スポーツ週間（後のユニバーシアード大会）に派遣する学生代表チームの一員に選ばれ、合宿と遠征（7月24日出発～9月18日帰国）で、夏季に長期にわたってチームを離れなければならなくなったことから、不在中は原が主将を務めることになった。帰国後のリーグ戦時にはまた岡野が主将に復帰した。

夏の合宿の間は原が主将

合宿は8月16日から25日まで山中湖で行われた。4年5人、3年4人、2年8人、1年8人の計25人だった。朝食前に体操、ランニングをし、午前2時間、午後3時間の練習日程だった。原が合宿初日に書いた合宿日誌には「合宿の目的である鋭さ、寄せの速さについて少しでもそれを心がけ努力する傾向が見えたのは喜ばしい。常に自分の技術、力以上のことを目指して努力し、練習するようにしていきたい。岡野の留守に充分練習して、彼が帰ってきたら満足した気分でバトンを渡せるように。」という内容が書かれている。横山監督、高月、小泉、後藤、大埜、菊井、海老原の諸先輩が、それぞれ1、2泊して練習に参加してくれた。

リーグ戦での予想は悲観的

リーグ戦の予想については東大の先輩の書いたものから、戦いぶりは各紙の戦評（切り抜きだけで紙名、日付けがない）から概略を紹介する。

▽予想 「東大は正月の全国大会に優勝して、侮れぬ力を示したので、へき頭の慶大戦から好試合が演ぜられるであろう。東大はCH海老原が抜けたが、中島、原の進境で、昨年とほぼ同様のチーム力を持っているので、岡野のワンマンチームを脱するであろうが、体力的には依然非力であるので、おおきな期待はできないであろう。」（横山）。

▽慶大戦 前半は両軍の激しい攻防戦に始まるが、次第に慶大がキープ力を発揮して攻め、重松のシュートで先行。後半東大ががんばり接戦を見せたが、体力ががた落ちした終盤の7分間に慶大が3点をあげて快勝した。

▽早大戦 東大は前半よく攻めて25分藤本の好パスを岡野決めて先制したが、岡野への縦パスのみの攻めに終始して追加点を上げられなかった。後半、東大はほとんど防戦を余儀なくされた。

▽立大戦 立大は前半風上を利して攻め、東大GKのミスに助けられて2点を拾ったが、CKからの浅見のヘディングで2-1と食い下がった。後半風上となった東大は、バックからのロングキックで盛んに立大ゴールをおびやかす、24分柴沼強引に突進してロングシュートしたボールをGKファンブル、これを西本拾って中に返すのを岡野ブッシュして同点に追いつく。このあと東大に再三のチャンスがあったがもののできず、引き分けかと思われた41分にこぼれ球を浜田クリーンシュートを決めて立大が辛勝した。東大は岡野を中心に精一杯の善戦をした。

▽明大戦 東大は大黒柱の岡野が捻挫で欠場したが、これがかえってチームに奮起の心を生ぜしめ、最初からよく動いて明大を倒した。東大は前半8分、山本からのクロスパスを藤本が、37分には浜口からのセンターリングをまた藤本が決めて2点をリードした。明大はボールを回そうとはしていたが、FWの動きが鈍く、東大バックスの早いアタックにつぶされ、後半12分に宅が1点を決めたにとどまった。

東大は各自がどうしても自己の力でやらなければという強い精神力の発揮によって勝利を収めた。

▽教大戦 東大は岡野、藤本、原の3人までが負傷を押しての出場だったが、それにしても不甲斐ないプレー振りだった。FWに競り合う気迫が見られず、押しの弱い教大FWに対して、出足の悪いバックが軽かわされ、経験不足のGKの守りを一層不安定にした。

▽総評 最下位必至と見られた東大は、前半の不調にもかかわらず後半力戦して最下位を免れた。明大戦では岡野を負傷で欠きながら、全員涙ぐましい努力がものをいった。

大学選手権も2回戦まで

前年優勝した大学選手権大会では、1回戦で岩手大に3-2と苦戦したあと、2回戦で東京学芸大を圧倒的に攻めながら、0-1で不覚にも敗れてしまった。このあと東学大は余勢を駆って1部校に健闘して、4位に食い込む善戦をした。

（浅見俊雄）

公式試合記録

・京大定期戦

7月10日 ○ 8-2 (6-1) 京大 (御殿下)

・関東大学リーグ1部

10月4日 ● 0-4 (0-1) 慶大 (神宮)
 10月11日 ● 0-7 (0-1) 中大 (武蔵野)
 10月18日 ● 1-3 (1-0) 早大 (神宮)
 11月1日 ● 2-3 (1-2) 立大 (神宮)
 11月14日 ○ 2-1 (2-0) 明大 (神宮)
 11月29日 ● 2-7 (1-3) 教大 (神宮)
 1勝5敗 6位

・全国大学選手権

1月2日 1回戦 ○ 3-2 岩手大 (絵画館)
 1月3日 2回戦 ● 0-1 東学大 (絵画館)

・部長 田中二郎
 ・監督 横山陽三
 ・主将 岡野俊一郎 原 忠彦
 ・主務 折原一雄
 ・夏合宿 山中湖

出場選手

相手	定期戦	関東大学リーグ1部						全国大学選手権	
	京大	慶大	中大	早大	立大	明大	教大	岩手大	東学大
GK	立石	立石	立石	立石	立石	立石	新倉		
FB	福田 柴沼	柴沼 中川	柴沼 中川	福田 柴沼	柴沼 福田	福田 柴沼	柴沼 倉田		
HB	中川 帆足 原	浅見 原 山本	原 浅見 山本	山本 原 浅見	山本 原 浅見	山本 原 浅見	山本 原 浅見		
FW	藤本 浅見 岡野 島田 藤井	藤本 中島 岡野 島田 藤井	藤本 中島 岡野 島田 福田	藤本 島田 岡野 中島 浜口	藤本 島田 岡野 中島 西本	浜口 島田 西本 中島 藤本	岡野 島田 西本 中島 藤本		

関東大学リーグ1部成績

	教大	中大	立大	慶大	早大	東大	明大	勝	負	分	得	失	差	点
教大	—	○2-0	△0-0	○2-0	○2-0	○7-2	○6-2	5	0	1	19	4	15	11
中大	●0-2	—	○2-1	○3-2	○4-0	○7-0	○3-1	5	1	0	19	6	13	10
立大	△0-0	●1-2	—	○3-1	○7-2	○3-2	○4-0	4	1	1	18	7	11	9
慶大	●0-2	●2-3	●1-3	—	○3-0	○4-0	○2-1	3	3	0	12	9	3	6
早大	●0-2	●0-4	●2-7	●0-3	—	○3-1	○3-0	2	4	0	8	17	-9	4
東大	●2-7	●0-7	●2-3	●0-4	●1-3	—	○2-1	1	5	0	7	25	-18	2
明大	●2-6	●1-3	●0-4	●1-2	●0-3	●1-2	—	0	6	0	5	20	-15	0

入れ替え戦、問題なく楽勝

この年岡野は大学にも部にも残っていたが、主将は引き受けず、柴沼が主将となった。頑健な体で強い当りが売り物の柴沼が、リーグ戦初戦の中大戦で、相手に激しくぶつかった際に負傷してしまった。診断は膝の靭帯断裂で、そのシーズンの出場は不可能となった。しかし練習も、試合も外から大きな声で指導と激励を続けた。

京大戦含め関西遠征で連戦

春合宿をはじめ駒場の同窓会館で行った。

6月に、2日間で3試合の日立遠征をした。日立に勤務していた大内先輩が世話をしてくれたものであり、翌年の夏合宿をここで行うきっかけともなったものだった。

京大戦は京都で行われ、13-0と大勝した。そのあと京都学芸大、関大ク、田辺製菓、全大阪と連戦し、京学大に引き分けた以外は善戦はしたものの3敗した。この間に3日間は靱グラウンドで練習し、竹腰、大谷先輩が参加して指導していただいた。

夏合宿は恒例の山中で8月末に行われた。浅見は疾走中にグラウンドのへこみで転倒し膝を捻挫して、帰京後ギブスを巻くはめになった。これも翌年合宿場所を変更する伏線となった。

氷雨の中、早大に大敗

この年も新聞記事などから予想、早大戦の戦評と、総評の概要を紹介する。

▽予想

東大は昨年より全体的に技術は向上しているが、強くなっていない。技術的に頼れるのは岡野一人。どうせ優勝はできないという気分的沈滞が強引なプレー、思い切った突進を阻んでいるようだ。

(中条、朝日新聞)

▽早大戦

東大はハーフ・ラインを割って早大陣に突入したのは前・後半を通じてわずかに2度。実力差のはっきりした試合だった。東大の拙守はあったにしろ、この悪コンディションで8点をあげた早大攻撃力はたたえられてよい。(松山)

この試合についてももう少し説明を加えよう。この日11月28日は、寒風、氷雨の最悪のコンディションだった。富士山で表層雪崩のために、東大はじめ多

くの大学山岳部員が遭難死した日である。早大にまったく一方的に押し込まれ、いくらけてもボールが飛ばずにハーフ・ラインをほとんど越えず、早大の安田、胡の小太りした短躯の両サイドハーフがまさに水を得た魚のように生き生きと走り回って、東大のクリアの短いボールを中盤で拾いまくり、ゴール前にボールを供給していた。安田はゴールを3点もあげている。

試合のあと、あまりの寒さにシャワーも温まらず、瘦身の藤本は水のようなシャワーの下で、全身をがたがたと震わせていた。

第2試合の慶立戦で慶応のこれも痩せ身の岩淵は、試合中に体が硬直して倒れてしまった。この試合は1-1で引き分け、立教が初の優勝を飾った。

そして第3試合の中-教戦は、あまりの悪コンディションにこの日は中止され、30日に延期された。ラグビーも延期されたと記憶している。雨でも、槍が降っても決行するという当時のことからすれば、まったく異例のことだった。

▽総評

明東は実力的に数段落ち、チーム力にカラーがなくなってしまった。ガムシャラに走るとか、身を投げ出してタックルして粘るとかいう特色がない。来年はどんな色でもよいからカラーを着けてきて欲しいものだ。(朝日新聞、中条)

大学選手権は無敗で3位に

法政との入れ替え戦は、まったく問題なく楽勝して1部にとどまることができた。

そして正月の大学選手権には、まだ負傷いえぬ柴沼から浅見に主将がバトンタッチされ、岡野は日本代表に選ばれてビルマ遠征に加わることになり、4年のレギュラーは藤本だけという編成で出場した。

1回戦は岐阜大、2回戦は鹿児島大をいずれも3点差で下して、準々決勝はリーグで初優勝した立大と対戦したが、闘志で圧倒して1-0で下した。準決勝はリーグでは9-0で大敗した中大と2-2で引き分けたが抽選負け、そして3位決定戦も早大と引き分けて、1度も負けずに3位となった。

(浅見俊雄)

1954年度（昭和29年度）

公式試合記録

・京大定期戦

7月11日 ○ 13-0 (5-0) 京大 (京大)

・関東大学リーグ1部

10月10日 ● 0-9 (0-4) 中大 (武蔵野)
 10月17日 ● 1-2 (0-0) 立大 (神宮)
 10月24日 ● 0-6 (0-4) 教大 (神宮)
 10月31日 ● 1-4 (0-1) 慶大 (神宮)
 11月13日 ● 1-4 (0-0) 明大 (武蔵野)
 11月28日 ● 0-8 (0-4) 早大 (神宮)

0勝6敗 7位

・入替戦

12月5日 ○ 6-1 (2-1) 法大 (武蔵野)

・全国大学選手権

1月2日 1回戦 ○ 3-0 (0-0) 岐阜大 (神宮)
 1月3日 2回戦 ○ 4-1 (2-0) 鹿児島大 (神宮)
 1月4日 3回戦 ○ 1-0 (0-0) 立大 (神宮)
 1月5日 準決勝 △ 2-2 延長0-0 中大 (神宮)
 延長引分 抽選敗
 1月6日 3位戦 △ 1-1 延長0-0 早大 (神宮)
 延長引分 両校3位

・部長 田中二郎

・監督 横山陽三

・主将 柴沼 晋

・主務 折原一雄

・春合宿 駒場 同窓会館 3月31日～4月7日

・夏合宿 山中湖 8月24日～9月2日

出場選手

相手	関東大学リーグ1部							入替戦	全国大学選手権					
	京大	中大	立大	教大	慶大	明大	早大		法大	岐阜大	鹿児島	立大	中大	早大
GK	楠田	楠田	楠田	楠田	楠田	楠田	楠田	楠田	楠田	楠田	楠田	楠田	楠田	
FB	柴沼 福田	柴沼 福田	浜口 福田	浜口 福田	浜口 福田	浜口 福田	浜口 福田	浜口 福田	浜口 福田	浜口 柴沼	浜口 福田	浜口 福田	浜口 福田	
HB	五十嵐 倉田 浅見	山本 倉田 五十嵐	山本 倉田 五十嵐	山本 倉田 五十嵐	山本 倉田 浅見	山本 倉田 浅見	山本 倉田 浅見	山本 倉田 浅見	山本 倉田 浅見	山本 倉田 浅見	山本 倉田 浅見	山本 倉田 浅見	中島 倉田 浅見	
FW	藤本 島田 岡野 中島 浜口	藤本 島田 岡野 中島 藤本	山野 島田 岡野 中島 藤本	浅見 島田 岡野 中島 藤本	山野 五十嵐 藤本 岡野	山野 島田 岡野 中島 藤本	藤本 島田 岡野 中島 山野	藤本 島田 岡野 中島 小松	藤本 島田 山野 中島 小松	藤本 島田 山野 中島 原	藤本 島田 山野 中島 小松	藤本 島田 山野 中島 小松	藤本 島田 山野 五十嵐 小松	

関東大学リーグ1部成績

	立大	早大	教大	慶大	中大	明大	東大	勝	負	分	得	失	差	点
立大	-	○1-0	○1-0	△1-1	○2-1	△0-0	○2-1	4	0	2	7	3	4	10
早大	●0-1	-	△0-0	○2-0	○5-2	○2-0	○8-0	4	1	1	17	3	14	9
教大	●0-1	△0-0	-	●1-2	○5-1	○7-0	○6-0	3	2	1	19	4	15	7
慶大	△1-1	●0-2	○2-1	-	●1-3	○2-1	○4-1	3	2	1	10	9	1	7
中大	●1-2	●2-5	●1-5	○3-1	-	○4-3	○9-0	3	3	0	20	16	4	6
明大	△0-0	●0-2	●0-7	●1-2	●3-4	-	○4-1	1	4	1	8	16	-8	3
東大	●1-2	●0-8	●0-6	●1-4	●0-9	●1-4	-	0	6	0	3	33	-30	0

大学選手権、2年続きの3位

いささかの名誉回復

シーズン最後の正月大会、第4回全国大学選手権大会で2年連続3位になった。リーグ戦が本意な成績に終わっただけに、3位入賞はいささかの名誉回復だった。

このときの4年生は、1年生のときに第1回全国大学選手権に優勝したときのメンバーだった。4年間で優勝を1度、3位を2度獲得したことになる。大会も4回目を迎えて定着し、各校とも力をいれて参加したなかでの3位だった。

リーグ戦では明大から1勝

リーグ戦は、同勝ち点の場合は、前年の順位によって順位を決めるという当時の規則で7校中最下位に終わった。東大は明大との対戦に勝って白星1、明大は勝ちはなく引き分け2だったが、当時の勝ち点は勝利2、引き分け1だったので明大と同勝ち点となった。勝利の勝ち点3の現在の規則なら、東大が6位だったところである。

朝日新聞の大学リーグ展望には「東大は戦力が変わらず、善戦が期待できる」と書いてある。先輩の中条一雄さんの記事だから、身びいきもあるかもしれないが、1年生のときからレギュラーで経験を積んできた4年生が主力。それに岡野が哲学科から心理学科へ転科して残ったので、中位以上を望める戦力だったと思う。

しかし、GK畔柳、RH山本の骨折、病気などがあり、明大からの1勝だけにとどまった。

「オージー教室」で練習指導

この当時は、戦後の学制改革による6・3・3制がスタートした初期で、サッカー経験者の入学が難しくなったころだった。

戦前は、サッカー（蹴球）を校技としていた旧制中学（現在の中学～高校2年の年齢相当）の経験者が、旧制高校を経て、東大に進学していた。

1955年度の4年生は、新制高校の卒業生だが、入学したときは旧制中学で、都立五中、浦和中、湘南中など戦前からのサッカー名門校の出身者が主力だった。

しかし、新制高校の数は増えたが、サッカーの普及は遅れていた。東大の入学も難しさを増し、サッ

カー経験者の獲得が難しくなっていた。

その対策として、未経験者の部員を集めて、小石川高（旧制五中）出身の折原一雄（あだ名はオージー）が、初心者を指導する体制を作った。大学選手権でレギュラーの座を獲得した小松新樹は、「オージー教室」の一つの成果である。

浅見主将の科学的な新方針

主将の浅見俊雄は、スポーツ科学を専攻していただけに、当時としては新しい考えによる方針を打ち出した。

合宿で運動能力の測定を試みるなど、専攻に直接関係のあることだけでなく、部の運営にも新機軸を出した。

夏の合宿は、前年までは山中湖で行っていたが、茨城県日立の会瀬グラウンドに変えた。パスを生かしたサッカーをめざすためには、山中湖のでこぼこのグラウンドは、よくないと、平坦なフィールドを求めたものだった。最終日の山中湖1周マラソンに代えて、酷暑のトラックで5千メートル走を行った。

また、夏合宿のあとに、名古屋、関西、広島への遠征を試みた。強い相手との実戦経験が必要だという考えに基づくものだった。

関学、東洋工業など、当時の一流チームが相手になってくれるだけの名声が、まだ「東大のサッカー」には残っていた。

（牛木素吉郎）



日立の夏合宿、OBとの試合後

公式試合記録

・天皇杯全日本選手権関東予選

4月17日 決勝 1-3 早大（農学部）

・定期戦

7月10日 ○ 6-0 京都大（農学部）

・関東大学リーグ1部

10月23日 ● 1-4 教育大（神宮）

10月30日 ● 0-6 早大（神宮）

11月6日 ○ 4-1 明大（神宮）

11月12日 ● 1-3 中大（神宮）

11月20日 ● 0-5 立大（神宮）

11月27日 ● 0-5 慶大（神宮）

（次年度から1部を8校に拡大するため入れ替え戦はなし）

・第4回全国大学選手権

1月2日 1回戦 3-0 商船大（神宮）

1月3日 2回戦 6-1 東北大（絵画館前）

1月4日 3回戦 4-3 中大（神宮）

1月5日 準決勝 0-4 早大（神宮）

1月6日 3位決定 1-0 教育大（神宮）

・部長 田中二郎（法学部教授）

・監督 横山陽三

・主将 浅見俊雄

・主務 牛木素吉郎

・学連 津田義久

・合宿 春季：駒場（同窓会館）

夏季：茨城県日立市（会瀬）

・練習 農学部グラウンド

・部室 第二食堂2階

出場選手

相手	全日本		定期戦		関東大学リーグ1部						大学選手権		
	早大	京大	教大	早大	明大	中大	立大	慶大	中大	早大	教大		
GK	畔柳	畔柳	畔柳	楠田	楠田	楠田	楠田	楠田	楠田	楠田	楠田	楠田	
FB	倉田	折原	浜口	浜口	五十嵐	五十嵐	浜口	五十嵐	浜口	浜口	浜口		
	福田	福田	福田	福田	福田	福田	福田	福田	福田	福田	福田		
HB	山本	山本	五十嵐	五十嵐	原	原	原	原	五十嵐	五十嵐	五十嵐		
	帆足	倉田	倉田	倉田	倉田	倉田	倉田	倉田	倉田	倉田	倉田		
	浅見	浅見	浅見	浅見	浅見	浅見	浅見	浅見	浅見	浅見	浅見		
FW	山野	山野	山野	山野	服部	服部	嶋田	小松	山野	山野	山野		
	嶋田	嶋田	嶋田	嶋田	岡野	岡野	五十嵐	中島	嶋田	嶋田	嶋田		
	岡野	岡野	岡野	岡野	山野	山野	山野	山野	岡野	岡野	岡野		
	中島	中島	中島	中島	中島	中島	中島	岡野	中島	中島	中島		
	片原	原	小松	小松	嶋田	嶋田	岡野	嶋田	小松	小松	風間		

ポジションは、当時の表記による。実際の布陣はWM

関東大学リーグ1部成績

	早大	教大	立大	慶大	中大	明大	東大	勝	負	分	得	失	差	点
早大		○1-0	○5-1	△2-2	○5-3	○2-1	○6-0	5	0	1	21	7	14	11
教大	●1-1		○1-0	○2-0	△1-1	○4-2	○4-1	4	1	1	12	5	7	9
立大	●1-5	●0-1		○3-2	○1-0	△2-2	○5-0	3	2	1	12	10	2	7
慶大	△2-2	●0-2	●2-3		○1-0	△1-1	○5-0	2	2	2	11	8	3	6
中大	●3-5	△1-1	●0-1	●0-1		○4-1	○3-1	2	3	1	11	10	1	5
明大	●1-2	●2-4	△2-2	△1-1	●1-4		●1-4	0	4	2	8	17	-9	2
東大	●0-6	●1-4	●0-5	●0-5	●1-3	○4-1		1	5	0	6	24	-18	2

1956年度（昭和31年度）

入れ替え戦敗退、2部降格

リーグ戦で大敗の連続

昭和31年、関東大学リーグ1部で7戦全敗、入れ替え戦で法政大に敗れ、2部への降格が決定した。

リーグ戦開始後、6連敗、得点4、失点32と大敗の連続であった。最終の農大戦には、得点力向上を意図して、RW福田、CF津田、LW山本と大幅メンバー変更をテストし、先取点を挙げるなどして善戦したことから、法政大との入れ替え戦もこのメンバーで対戦、先取得点して前半リードしながら後半逆転されて1-2で敗れた。

田村先生の献身的なご指導

この年、OBの方々 が2部降格を非常に心配され、特別に農学部助教授の田村三郎先生（昭14卒）が監督に就任された。それまで東大では監督が自ら練習を指導することはまれで、主将が練習と試合の指揮をとるのが普通だったが、田村監督は自らの研究生生活を犠牲にして、毎日の練習ではユニホームに着替えてグラウンドに来られ、山中湖の夏合宿、農学部のレギュラー合宿にも参加されて、前例のない献身的な直接指導をされた。

また、大先輩の篠島秀雄さん（昭6卒、当時三菱化成取締役、のち社長）が、入れ替え戦前日、わざわざ御殿下グラウンドに来られて激励してくださった。しかし、残念ながら先輩方の期待に応えることができなかった。



練習を直接指導される田村監督

学制改革の影響

この年は、戦後の学制改革による新学制にすべて切り替えられた年であった。前年の4年生は旧制中

学の最後の入学生であったのに対し、この年の4年生は新制中学の第1期入学生だった。戦前からの旧学制では、旧制中学（5年）のサッカー経験者が旧制高校（3年）を経て東大にきた。つまり、旧制中学1年生から8年間のサッカー経験を持つ者が主力だった。新学制ではこのような選手供給源が失われた。

新学制の義務教育として急増した新制中学では、サッカーの普及が遅れている一方、旧制中学の名門校は新制高校になり、在学3年間で選手の育成期間が短くなった。

さらに、受験競争が年々激しくなり、サッカー経験者の入学が難しくなった。この年の新入部員10人のうち、高校サッカー部の経験者は僅か2人という状況で、未経験者を練習で鍛えて、3年、4年になれば試合に出場させるという状態だった。この年のリーグ戦には、入学後にサッカーを始めた小松、稲井、津田、名取の4人が出場した。

実業団でも活躍した小松

4人の中でも、小松は3年生で準レギュラー、4年生でレギュラーの座を確保し、LWとしてリーグ戦に出場した。卒業後は実業団の名門古河電工に入社してサッカーを続け、シニア年齢になってからは、40代、50代、60代を通じて、東京四十雀クラブ、SOI（旧制高校OB）クラブで大活躍したが、平成18年、71歳で惜しまれて亡くなった。東大入学後サッカーを始めて、社会人としてもトップレベルのチームでプレーした珍しい例だった。

（山本 修）



卒業生の送別試合

後列 山本、津田、対木、嶋田、稲井
前列 原、小松、倉田、福田、片原

公式試合記録

・京大定期戦

7月8日 △ 3-3 (1-2) 京大 (京大農学部)

・関東大学リーグ1部

10月21日 ● 0-8 (0-3) 早大 (後楽園)
 10月28日 ● 1-4 (0-3) 教大 (御殿下)
 11月4日 ● 1-6 (1-4) 慶大 (御殿下)
 11月11日 ● 0-8 (0-4) 立大 (後楽園)
 11月18日 ● 1-2 (0-1) 明大 (後楽園)
 11月24日 ● 1-4 (0-2) 中大 (御殿下)
 12月1日 ● 1-4 (1-3) 農大 (御殿下)

0勝7敗 8位

・1部2部入替戦

12月9日 ● 1-2 (1-0) 法大 (御殿下)

・第5回全国大学選手権大会

1月3日 1回戦 2-2 (1-1) 松山商大 (御殿下)
 延長 ● 0-3 (0-1)

・部長 安東新午

・監督 田村三郎

・主将 原 靖二郎

・主務 津田義久

・学連委員長 津田義久

・春合宿 駒場

・夏合宿 山中湖 8月11日～17日

・レギュラー合宿 農学部 8月22日～27日

出場選手

相手	定期戦	関東大学リーグ1部							入替戦	選手権大会
	京大	早大	教大	慶大	立大	明大	中大	農大	法大	松山商大
GK	畔柳	畔柳	畔柳	畔柳	畔柳	畔柳	畔柳	長浜	長浜	畔柳
FB	高田	名取	高田	高田	高田	高田	名取	原	原	倉田
	福田	福田	倉田	福田	福田	倉田	倉田	倉田	倉田	浜口
HB	原	原	原	原	服部	服部	原	高田	高田	木村
	倉田	倉田	名取	倉田	倉田	原	福田	名取	名取	名取
FW	山本	山本	山本	山本	山本	山本	山本	服部	服部	山本
	服部	小林	嶋田	小林	小林	風間	稲井	福田	福田	福田
	五十嵐	五十嵐	五十嵐	五十嵐	五十嵐	五十嵐	五十嵐	五十嵐	稲井	服部
	小林	安達	安達	風間	稲井	稲井	安達	津田	津田	小林
	嶋田	服部	服部	嶋田	嶋田	嶋田	服部	嶋田	嶋田	梅本
	小松	小松	小松	小松	小松	小松	小松	山本	山本	小松

関東大学リーグ1部成績

	早大	立大	慶大	中大	明大	農大	東教大	東大	勝	負	分	得	失	差	点
早大	—	○2-1	●1-3	△2-2	○4-0	○2-1	○6-0	○8-0	5	1	1	25	7	18	11
立大	●1-2	—	○4-2	●2-4	△2-2	○4-3	○2-1	○8-0	4	2	1	23	14	9	9
慶大	○3-1	●2-4	—	○4-2	○2-1	●0-2	△0-0	○6-1	4	2	1	17	11	6	9
中大	△2-2	○4-2	●2-4	—	△0-0	△1-1	●0-1	○4-1	2	2	3	13	11	2	7
明大	●0-4	△2-2	●1-2	△0-0	—	○2-1	△2-2	○2-1	2	2	3	9	12	-3	7
農大	●1-2	●3-4	○2-0	△1-1	●1-2	—	○2-1	○4-1	3	3	1	14	11	3	7
東教大	●0-6	●1-2	△0-0	○1-0	△2-2	●1-2	—	○4-1	2	3	2	9	13	-4	6
東大	●0-8	●0-8	●1-6	●1-4	●1-2	●1-4	●1-4	—	0	7	0	5	36	-31	0

関東1部への復帰は成らず

1部への復帰を目指して

前年度に法政大との入れ替え戦に敗れ、部の歴史上初めての2部リーグ所属の年となった。当然のことながら、われわれの目標は1部への復帰であった。層の厚かった56年度先輩が卒業して、戦力低下は否めなかったが、秋のリーグ戦までに強化して、1部への復帰のチャンスをつかもうというのが、五十嵐主将以下全部員の気持ちであった。横山監督、五十嵐主将の方針で、1部リーグのゲーム感覚を失わないようにするため、春には1部の大学チーム（慶応大、中央大など）との練習試合を行った。

首位に並び決定戦で敗れる

秋のリーグ戦は強敵日大には3-1と快勝したものの、青学大、日体大との2つの引き分けが響いて5勝2分という結果になり、6勝1敗の日大と1部チームとの入れ替え戦出場をかけて、1位決定戦を行うことになった。決定戦は残念ながら、日大の激しいプレーの前に0-2と敗れ、1部リーグ復帰は成らなかった。振り返ってみると、リーグ戦中盤での2つの引き分けが痛かった。また攻守の要の五十嵐主将が膝の靭帯を痛め、リーグ戦後半の試合を欠場したのも響いた。

グラウンド脇に合宿所完成

横山監督のご努力と諸先輩のご協力で、この年の秋に農学部グラウンド脇に木造平屋建ての合宿所が完成した。日大との決定戦には、新合宿所で合宿をして臨んだが、残念な結果に終わった。

五十嵐主将の悲痛な事故死

昭和33年1月30日、練習を終えて帰宅途次の五十嵐洋文・前主将が赤門前で輪禍に会い、翌31日早朝に亡くなるという悲しい出来事が起こった。当時の新聞はその時の状況を次のように報じている。

「〔五十嵐〕洋文君がはねられたのは夕方6時すぎ、サッカーの練習が終わって友人4人とタクシーを拾おうと、本郷三丁目からやってくるクルマの方を向いて車道で見ていた。すると反対側の駒込の方から来たタクシーが前のバスを追い抜くため急スピードでカーブを切った。反対の車道に入り込んで、

洋文君を真後ろからハネ飛ばした……。

両手をオーバーのポケットにいれたまま5メートルばかり飛んで道路にたたきつけられ、頭蓋骨折、耳、鼻から血を流して動かない…。サッカーの主将だった彼はいままでに何十回かグラウンドに倒れたことがある。いつもボールを追ってハネ起きた。しかし「神風タクシー」の前には永久に起き上がらなかった。」

（昭和33.2.8. 朝日新聞「神風タクシーよ聞いてくれ」）

昭和33年2月2日、葬儀が執り行われた。

その後ご父君よりサッカー部に5万円のご寄附が寄せられた。

昭和33年3月27日、御殿下グラウンドで追悼紅白試合を実施した。（西野 宏）



昭和33年1月25日送別試合の後、御殿下グラウンドで

（昭和33年卒がそろって）

後列左から：木村、五十嵐、西野、
前列左から：小林、名取、浜口

公式試合記録

・国公立大会

7月 日 決勝戦 ○ 6-0 一橋大 ()

・第49回京都大学定期戦

7月 日 △ 0-0 京大 (御殿下)

・関東大学リーグ2部

10月19日 ○ 2-0 上智大 (慶大)
 10月27日 ○ 3-1 一橋大 (慶大)
 11月3日 ○ 3-0 武蔵大 (武蔵野市営)
 11月10日 △ 0-0 青学大 (武蔵野市営)
 11月17日 ○ 5-0 東学大 (武蔵野市営)
 11月22日 △ 2-2 日体大 (東大農学部)
 12月1日 ○ 3-1 日大 (武蔵野市営)
 5勝2分 2位

・優勝決定戦

12月4日 ● 0-2 日大 (御殿下)

・第6回大学選手権

1月3日 1回戦 ○ 2-0 神大 (農学部)
 1月4日 2回戦 ○ 4-0 千葉大 (御殿下)
 1月5日 準々決勝 ● 0-3 東農大 (農学部G)

- ・部長 安東新午
- ・監督 横山陽三
- ・主将 五十嵐洋文
- ・主務 西野 宏
- ・練習 御殿下
- ・部室 御殿下地下

出場選手

相手	定期戦	関東大学リーグ2部								大学選手権
	京大	上智大	一橋大	武蔵大	青学大	東学大	日体大	日大	日大	東農大
GK	長浜	長浜	長浜	長浜	長浜	長浜	長浜	長浜	長浜	長浜
FB	高田	高田	高田	高田	高田	高田	高田	佐藤	佐藤	高田
	佐藤	佐藤	佐藤	佐藤	福田	佐藤	佐藤	福田	福田	佐藤
HB	木村	五十嵐	五十嵐	五十嵐	五十嵐	服部	服部	服部	服部	高場
	安達	安達	安達	安達	安達	福田	安達	安達	安達	安達
	松村	木村	木村	木村	木村	木村	木村	高場	高場	服部
FW	小林	小林	小林	小林	小林	野澤	野澤	小林	小林	梅本
	五十嵐	梅本	梅本	梅本	梅本	松村	松村	野澤	野澤	野澤
	風間	長崎	長崎	風間	風間	長崎	長崎	長崎	長崎	木村
	梅本	野澤	野澤	服部	野澤	梅本	梅本	松村	松村	松村
	服部	服部	服部	長崎	服部	風間	風間	風間	風間	風間

関東大学リーグ2部成績

	日大	東大	上智大	青学大	一橋大	日体大	東学大	武蔵大	勝	負	分	得	失	差	点
日大		● 1-3													
東大	○ 3-1		○ 2-0	△ 0-0	○ 3-1	△ 2-2	○ 5-0	○ 3-0	5	0	2	18	4	14	12
上智大		● 0-2													
青学大		△ 0-0													
一橋大		● 1-3													
日体大		△ 2-2													
東学大		● 0-5													
武蔵大		● 0-3													

最終戦でリーグ優勝を逃す

大塾新監督ら豪華な指導陣

昭和33年度は、大塾新監督、風間新主将の下、農学部グラウンド脇のア式蹴球部合宿所の春合宿でスタートしたが、4月末、風間が急に退部する事態になり、高田が後を継いだ。

主務は選手も兼務した高山。副将は球扱いが一番うまかった服部（平成10～18年度監督）学連担当伊野部。同期にはFWの梅本、長崎、FBの佐藤、2年生まで1部の東大ゴールを死守した畔柳、高校同窓の西尾の諸兄らがいて、非力な小生を支えてくれた。

大塾監督は五月祭のOB・現役戦でアキレス腱断裂という災難にあったが、車椅子に乗り松葉杖をつけて、足を引きずりながらグラウンドに姿を見せて指導された。若手OBの岡野、浅見、中島の諸先輩にもご指導いただいた。豪華なスタッフだった。

当時のシステムはスリーバックのいわゆるWMフォーメーションが主体で、相手によりハーフの1人がやや下がった守備体型をとった。

6月の国公立大会に2連覇し、7月の京大戦は乱戦の末負けた。山中湖の夏合宿、農学部合宿所のレギュラー合宿を経て、9月の天皇杯全日本選手権大会では若手OBに現役数名が入った東大LBチームが3位の好成績をおさめた。

日大と優勝決定をかけたが

リーグ戦は初戦に不覚を取ったものの、その後は服部など4年生の踏ん張り、野沢（2年）の得点力、小山（3年）、高場、松村（2年）ら全員の頑張り勝ち、最終の日大戦が優勝決定戦になった。試合3日前から農学部合宿所に集合。篠島大先輩から本郷江知勝で「すきやき」の激励を受け、当日は竹腰大先輩初め多くの方の声援を得て戦ったが力及ばず、目標の1部復帰はならなかった。

ところで服部が、天皇杯関東予選決勝で勝利のミドルシュートを決め、「入った！入った！」と叫びながらバンザイをした笑顔、また見かけはこわそうなベランメー調の親分風だが、おだやかでしゃつな語りで教え諭し、雨の日に傘も差さずにグラウンドサイドから指示された偉大な故大塾監督の声と姿などは、50年経った今でも思い出す。（高田宗昌）

主務としての狙いは実現

最上級生になって、風間が主将に選ばれ、私がマネージャーを担当することになった。関東学連の担当は伊野部をお願いした。新体制が発足して1ヵ月後に、風間主将が突然退部するという予想外の事態が発生したが、ここは高田が主将を引き継いでくれて乗り切ることができた。

私はマネージャーを務めるにあたって、下級生とくに1年生のときの自分の体験を大切にしようと考えた。一方、基礎体力作りの夏の合宿、レギュラーのシュート練習のボール拾いなどを経て、辞めていった仲間がたくさんいた。

まず、リーグ戦が始まる前に多くの練習試合を組み、レギュラーでない部員の出場機会をできるだけ増やすようにした。サッカーでは経験がかなりものをいい、技術の差は簡単には埋まらない。公式戦に出る機会がなく、ボール拾いを続けなければならない人たちにもゲームの緊張感を味わってもらおうことが参画意識を持たせるために最善と考えたからである。

また、新しいユニホームを作った。シャツのエリだけが白いライトブルーのユニホームは好評で、伝統的な上下白の公式戦用ユニホームと併用した。気持ちを高める上でそれなりの効果があったと思う。

部活動の中で嫌な思いを抱いて退部する者を出さないようにするという、私の主務としての狙いはなんとか実現できたと考えている。（高山武彦）



天皇杯の試合のおこなわれた藤枝東高校グラウンドで

公式試合記録

・国公立

月 日 決勝 ○ 1-0 東学大 ()

・京都大学定期戦

7月6日 ● 3-4 京大 (京大農学部)

・関東大学リーグ2部

- 10月19日 ● 0-3 日体大 (御殿下)
 - 10月26日 ○ 2-1 防衛大 (農学部)
 - 11月3日 ○ 6-2 青学大 (御殿下)
 - 11月9日 ○ 2-0 武蔵大 (御殿下)
 - 11月16日 ○ 1-0 上智大 (御殿下)
 - 11月22日 ○ 1-0 一橋大 (御殿下)
 - 11月30日 ● 0-3 日大 (御殿下)
- 5勝2敗 2位

・大学選手権

- 12月25日 2回戦 ○ 3-2 (延長) 鹿児島大 (小石川)
- 12月26日 3回戦 ● 1-1 (延長) 国士大 (小石川)
(抽選)

- ・部長 安東新午
- ・監督 大埜正雄
- ・主将 風間幸介
高田宗昌
- ・主務 高山武彦
- ・学連 伊野部元彦
- ・合宿 山中湖
- ・練習 御殿下
- ・部室 御殿下地下

出場選手

相手	定期戦	関東大学リーグ2部							大学選手権	
	京大	日体大	防衛大	青学大	武蔵大	上智大	一橋大	日大	鹿児島大	国士大
GK	長浜	長浜		長浜	長浜	長浜	長浜	長浜		
FB	佐藤	佐藤		松村	松村	松村	松村	松村		
	高田	吉田		吉田	吉田	吉田	吉田	高場		
HB	高場	高場		高場	高場	高場	高場	三浦		
	高山	高田		高田	高田	高田	高田	高田		
	服部	服部		服部	服部	服部	服部	服部		
FW	梅本	梅本		梅本	梅本	梅本	梅本	梅本		
	野澤	松村		野澤	野澤	野澤	野澤	野澤		
	長崎	野澤		長崎	長崎	長崎	長崎	長崎		
	松村	小山		小山	小山	名越	名越	名越		
	安達	安達		安達	安達	安達	安達	小山		

関東大学リーグ2部成績

	日大	東大	防衛大	一橋大	日体大	上智大	武蔵大	青学大	勝	負	分	得	失	差	点
日大	-	○3-0	●1-2	△2-2											
東大	●0-3	-	○2-1	○1-0	●0-3	○1-0	○2-0	○6-2	5	2	0	12	9	3	10
防衛大	○2-1	●1-2	-	○3-0	△-	●0-4	○2-1	○1-0	4	2	1				9
一橋大	△2-2	●0-1	●0-3	-	○2-0	○2-0	○1-0	●0-2	3	3	1	7	8	-1	7
日体大		○3-0	△-	●0-2	-										
上智大		●0-1	○4-0	●0-2		-									
武蔵大		●0-2	●1-2	●0-1			-								
青学大		●2-6	●0-1	○2-0				-							

リーグ2部で初優勝したが

須賀監督のもとみな燃える

昭和31年の秋、東大ア式蹴球部始まって以来初めてという関東大学リーグ1部からの陥落を経験し、32年、33年と2年間、1部復帰を目指して頑張ったが、やっと3年目にして2部優勝を果たし、1部最下位との入れ替え戦に臨むこととなった。

前年まで2年間ご指導くださった大埜正雄監督が引かれて、新たに須賀敏孝先輩（昭19卒）が監督になられた。須賀監督の時代は以来かなり長期に及び、ご指導いただくこととなった。同監督は旧制高校のサッカーを経験され、東大の全盛時代にプレーされた方だから当然1部復帰を目指しており、選手一丸となって燃えた。

主将は安達良英、主務は山川博司と水谷幸弘。主力はゴールキーパーの長浜。彼はこの年最終学年の4年生であったが、1年生のときのリーグ後半からずっと東大のゴールを守ってきたから、関東大学リーグ1部で試合を経験した選手の1人であった。ほかには主将の安達が3試合だけ出たと記憶している。それに学士入学して夏合宿から再登場してくださった山本修さんは、1部リーグをたっぷり経験なさっていた。もう1人の主力選手は3年生でフォワードの名手野沢、細い身体でかならずしも頑健とはいえなかったが、精妙なボールタッチと優れた状況判断でチームを指揮した。

優勝決定戦で日大を下す

シーズン前半の締めくくり当たる京大戦は、京大を御殿下で迎えて戦い4-1で快勝した。

秋のリーグ戦は10月25日に開幕。8大学編成、最初の4試合を3勝1敗で過ごしたところで、主将の安達が持病の腎臓炎の悪化で出場不能となり、小山が主将を代行し、かつ1年上で留年して5年生に在学していた服部一郎さんに助けをいただいて残り3試合を戦ったが、幸いにして2勝1分で、結局5勝1分1敗で日大と同点首位となって、優勝決定戦を行うことになった。

優勝決定戦はリーグ最終戦のわずか3日後の12月2日、御殿下で戦った。後半先行して2-1で日大を下し、学連役員の横山陽三先輩から小さな優勝カップをいただいたことを記憶している。

夢に見た入れ替え戦も涙で

そして夢に見た1部・2部入れ替え戦。これまたわずか4日後の12月6日、1部最下位の法政大と戦って負けた。法政のCF大原君に鮮やかに決められたシーンが目に焼きついている。0-2であった。リーグ戦では松村がCHであったが、入れ替え戦では名越に変えた。CH名越が浮き球を胸で落として処理しようとしたところをうばわれて得点された。

チームメイトのプロフィール

野澤：テクニシャン。何事もはっきり言った。

室田：懐が深いプレーヤーだった。防衛大卒業してから卒業まではいなかった。

小堀：森鷗外の孫アンヌと孤高の画家達四郎の子。

吉田：上がったあと必至で戻る姿が印象的。

高場：味があった。CFで振り向くフェイントを練習していた。

山本：帝人に2年勤務後、この年学士入学して、通算6年目。

昭和35年卒業後、吉田、小山、山川が、翌々年野澤が富士通に入社して富士通が隆盛に向かった。昭和35年には関東4部であったが、毎年昇格して関東1部になった。現在の川崎フロンターレの基礎を築いたといえる。（小山富士夫）



優勝決定戦 表彰式（上）、優勝決定戦 集合写真（下）



公式試合記録

・全日本選手権東京予選

4月11日 1回戦 ● 0-7 中大 ()

・第10回京都大学定期戦

7月5日 ○ 4-1 京都大 (御殿下)

・国立大会 3年連続優勝

7月 日 決勝戦 ○ 3-1 一橋大 ()

・関東大学リーグ2部

- 10月25日 ○ 1-0 日体大 (御殿下)
 - 10月31日 ● 1-2 成城大 (農学部)
 - 11月3日 ○ 7-1 上智大 (御殿下)
 - 11月8日 ○ 1-0 武蔵大 (御殿下)
 - 11月15日 ○ 2-0 防衛大 (御殿下)
 - 11月23日 ○ 8-0 一橋大 (御殿下)
 - 11月29日 △ 2-2 日大 (御殿下)
- 5勝1敗1分 同率1位

・優勝決定戦

12月2日 ○ 2-1 日大 (御殿下)

・入替戦

12月6日 ● 0-2 法大 (御殿下)

・全国大学選手権大会

12月23日 1回戦 ○ 6-0 福岡大 (御殿下)

12月24日 2回戦 ● 0-1 北大 (農学部)

・監督 須賀敏孝

・主将 安達良英
小山富士夫

・主務 山川博司
水谷幸弘

・練習 御殿下

・部室 御殿下地下

出場選手

相手	天皇杯	定期戦	関東大学リーグ2部							決定戦	入替戦	大学選手権	
	中大	京大	日体大	成城大	上智大	武蔵大	防衛大	一橋大	日大	日大	法大	福岡大	北大
GK	長浜	長浜	長浜	長浜	長浜	長浜	長浜	長浜	長浜	長浜	長浜	高橋	高橋
FB	松村 三浦	安達 三浦	安達 三浦	安達 三浦	安達 三浦	安達 三浦	名越 三浦	名越 三浦	名越 三浦	名越 三浦	松村 三浦	名越 三浦	梅村 三浦
HB	高場 安達 足立	吉田 松村 本林	吉田 松村 名越	山本 松村 名越	梅村 松村 名越	梅村 松村 名越	服部 松村 吉田	服部 松村 吉田	服部 松村 吉田	服部 松村 吉田	梅村 名越 吉田	服部 松村 吉田	室田 服部 吉田
FW	山川 野澤 本林 小山 斉藤	小山 野澤 高場 室田 名越	小山 野澤 高場 室田 山本	小山 野澤 吉田 室田 斉藤	小山 野澤 高場 室田 山本	小山 野澤 高場 室田 山本	小山 野澤 高場 室田 山本	小山 野澤 高場 室田 山本	小山 野澤 高場 室田 山本	小山 野澤 高場 室田 山本	小山 野澤 高場 室田 山本	小山 野澤 高場 室田 山本	山川 野澤 高場 小山 山本

関東大学リーグ2部成績

	東大	日大	防衛大	一橋大	日体大	成城大	武蔵大	上智大	勝	負	分	得	失	差	点
東大	-	△2-2	○2-0	○8-0	○1-0	●1-2	○1-0	○7-1	5	1	1	22	5	17	11
日大	△2-2	-	○4-0	○4-1					5	1	1				11
防衛大	●0-2	●0-4	-	○2-0	○1-0	○4-2	○5-0	○6-0	5	2	0	18	8	10	10
一橋大	●0-8	●1-4	●0-2	-	○3-0	△1-1	△1-1	○1-0	2	3	3	7	16	-9	7
日体大	●0-1		●0-1	●0-3	-				3	4	0				6
成城大	○2-1		●2-4	△1-1		-			2	4	1				5
武蔵大	●0-1		●0-5	△1-1			-		1	4	2				4
上智大	●1-7		●0-6	●0-1				-	1	5	1				3

作戦ミス？ 2部4位の屈辱

野澤中心のチームにしたが

昭和35年度は優秀な新人が多く入部してきた。逆に4年生は野澤（主将）、松村（副主将）、高場、足立、本林の僅か5人プラス学士入学された山本さんだけであった。2年生、3年生にも優秀なプレーヤーがいたが、3角形の部員構成であった。主務には3年生の喜多になってもらい、裏方として部を支えてもらった。3年生での主務はやりにくかったと思うが無理なお願いをした。

須賀監督のご指導、岡野・浅見の大先輩、山本先輩の助言、松村副主将の助けなどにより、若手を育てながら1部復帰を目指して練習に励んだ。1、2年生はどんどん上達し、どんどんレギュラーに起用した。4年生が手薄で、そうせざるを得ない面もあった。

若手も伸び、京大戦は若い戦力で京大グラウンドで2-2の引き分け。前年の実績から東大強しの前評判もあったが、まだ若手の成長以前で、2-2の引き分けが実力であった。

夏の合宿を経て1部復帰を目指す関東リーグ戦では、スタートの3試合は順当に勝ち進んだが、つまずきは成城大戦であった。成城大は当時強かった青学高から選手を集め、青学高出身の野澤を青学高の後輩が徹底的に密着マークしてパスの出所を押さえに掛かり、それが成城大の作戦成功となって東大は0-1で敗れた。（結局、成城大がリーグ戦1位となった）

次の一橋大戦は4-1の快勝であったが、その次の防衛大戦では防衛大が成城大と同じ作戦を取ってきた。すなわち大きな男を野澤の徹底マークに付けてきた。そしてすべてレートタックルによるファウルでパスの出し手を止めてきた。ついには野澤の膝が思い切り蹴られ、野澤が動けなくなってしまった。当時は交代は許されず、イエローカードもレッドカードもなく、防衛大の作戦に0-2で負けてしまった。

次の日大戦は野澤が負傷で出られず0-3の負け。結局、リーグ戦は4位の恥辱をなめた。これらはすべて野澤をパスの起点とする野澤中心のチームにした主将野澤の責任である。パスの起点が1つしかなかったチームを止めるのは、相手チームにとって戦略的にやさしかったかもしれない。室田が体調

不良で途中で出られなくなったが、彼がいればパスの起点が増えていたのにと悔やまれる。

せめてもの救いは、若手が成長したことであったが、残念な1年であった。（野澤量一郎）

愚直な頑張り作戦を続ける

残念な1年であったが、それでも当時の仲間がともに懸命に働いたことは、その後その団結が長く強く続いていることをもって証としたい。天皇杯関東予選での立教大戦、国公立大会での教育大戦、いずれもさすが1部校だけのことはあってかなりの差で負けたが、体を張っての競り合いをして、秋へ向けての充実感を覚えている。しかしリーグ戦では野澤つぶしに対抗する組み立てがないことがなんとも口惜しかった。

ただ、そのなかでも東大サッカーの愚直な頑張りスタイルはなんとか続けられたと思っている。個々にみれば、山本さん（34年学士入学）の1部リーグ戦で鍛えた鋭い切れ味、野澤の抜群の技、“突貫小僧”の高場、粘りのFW本林、強い足腰のHB足立と、それぞれ頑張った。

また、リーグ戦後半では多くの若手がチームの力に育ち、次の頑張りを期待できるご指導をされた須賀大先輩には深く感謝申し上げる次第である。

主将の野澤は「これでは終われない」と、サッカーへの情熱と勉学指向を併せて翌年もチームの最主力選手として残ったが、山本さん、服部さんの再々にわたる主軸としてのご活躍と同じく、その気力のすばらしさと体調維持のご努力に敬意を表したい。（松村 保）



昭和36年3月卒業記念
左から松村、高場、野澤、山本、本林

公式試合記録

・天皇杯関東予選

月 日 1回戦 ○ 4-1 国学院 ()
 月 日 2回戦 △ 2-2 日体大 ()
 月 日 3回戦 ● 0-6 立大 ()

11月19日 ○ 4-1 一橋大 (御殿下)
 11月23日 ● 0-2 防衛大 (御殿下)
 11月27日 ● 0-3 日大 (御殿下)
 4勝3敗4位

・国公立

月 日 決勝 ● 0-5 東教大 ()

・大学選手権

12月22日 2回戦 ○ 2-1 東北学院 (御殿下)
 12月24日 3回戦 ● 3-4 法大 (御殿下)

・京都大学定期戦

7月3日 △ 2-2 京大 (京大農学部)

・部長 安東新午

・監督 須賀敏孝

・主将 野澤量一郎

・主務 喜多康夫

・副将 松村保

・練習 御殿下

・部室 御殿下地下

・関東大学リーグ2部

10月23日 ○ 4-2 上智大 (東伏見)
 10月30日 ○ 3-1 武蔵大 (東伏見)
 11月6日 ○ 3-1 日体大 (農学部)
 11月13日 ● 0-1 成城大 (御殿下)

出場選手

相手	定期戦	関東大学リーグ2部							大学選手権
	京大	上智大	武蔵大	日体大	成城大	一橋大	防衛大	日大	法大
GK					高橋	高橋	高橋	高橋	高橋
FB					三浦 松村	三浦 小川	三浦 松村	三浦 小川	三浦 小川
HB					高場 安達 名越	松村 安達 名越	小川 安達 名越	梅村 安達 名越	梅村 安達 名越
FW					後藤 野澤 南 室田 山本	後藤 野澤 南 高場 山本	後藤 野澤 南 高場 山本	松村 高場 南 後藤 山本	門馬 野澤 南 後藤 齋藤

関東大学リーグ2部成績

	成城大	防衛大	日大	東大	日体大	一橋大	武蔵大	上智大	勝	負	分	得	失	差	点
成城大	-	○2-1		○1-0		○2-0									
防衛大	●1-2	-	○4-3	○2-0	○4-1	○3-0	○1-0	○2-1	6	1	0	17	7	10	12
日大		●3-4	-	○3-0		△2-2									
東大	●0-1	●0-2	●0-3	-	○3-1	○4-1	○3-1	○4-2	4	3	0	14	11	3	8
日体大		●1-4		●1-3	-	○5-0									
一橋大	●0-2	●0-3	△2-2	●1-4	●0-5	-	△0-0	○2-1	1	4	2	5	17	-12	4
武蔵大		●0-1		●1-3		△0-0	-								
上智大		●1-2		●2-4		●1-2		-							

1 部昇格のチャンスを選す

多くの先輩の指導を受けて

昭和33年に入学し昭和37年3月に卒業したサッカー部メンバーで、我々の学年の最後の公式戦となった昭和36年の関東大学リーグ戦を最後まで戦ったのは、齋藤、三浦、高嶋、喜多、名越の5名であった。詳細は記録に譲るが、我々の年代は東大が1部リーグから陥落した後、それほど間を置かない時期にあたり、サッカー部の主目標は2部で優勝し、入れ替え戦に勝って1部に復帰することであった。

この目標のもとに、安東部長(工学部教授)、須賀監督、浅見コーチのもと、練習には大埜先輩など多くの諸先輩も熱心に御殿下グラウンドへ足を運ばれご指導をくださった。また竹腰先輩が時々練習試合などを観戦に来られ、タッチライン際でコーチングをされたこともあった。

我々の年度で活躍したメンバーは上記のほかに、学士入学して再度東大サッカー部に戻られた山本先輩、諸事情で途中退部の室田、金君らを挙げることができる。

昇格の確率が高いと知るが

この年は、新人戦、京大戦、国公立大戦などを経ながら、秋の(関東大学2部)リーグ戦に入った。一橋大、青学大、日体大など従来からの2部リーグチームとの対戦を経過していくうちに、1部リーグの最下位は多分農大となりそうで、しかも、かなり力が落ちているので、2部で優勝すれば入れ替え戦で勝てる確率が高いとの情報を得た。そしてリーグ戦を順調にこなし、結局2部の覇を日大と争うこととなった。

優勝決定の試合は御殿下グラウンドでの雨中の決戦となったが、日大の前に東大は一敗地にまみれ、課題は後へ引き継がれることとなった。因みに日大は入れ替え戦に勝ち1部に昇格した。

(名越英夫)

公式試合記録

・天皇杯

4月8日 1回戦 ○ 4-0 日興 ()
 4月9日 2回戦 ○ 2-1 茗友 ()
 4月15日 3回戦 ● 0-3 早大 (御殿下)

11月19日 ○ 2-1 防衛大 (御殿下)

11月25日 ● 1-3 日大 (御殿下)

4勝1敗2分 2位

・国公立

月 日 決勝 ● 0-6 東教大 ()

・大学選手権

12月22日 1回戦 ○ 9-0 関東学院 ()

12月23日 2回戦 ○ 1-0 松山商大 ()

12月24日 3回戦 ○ 4-3 東農大 ()

12月25日 準々決勝 ● 0-3 中大 ()

・京都大学定期戦

7月2日 ○ 2-1 京大 (御殿下)

・関東大学リーグ2部

10月15日 ○ 2-1 日体大 (農学部)
 10月21日 ○ 2-1 一橋大 (農学部)
 10月28日 △ 1-1 武蔵大 (農学部)
 11月5日 ○ 1-0 上智大 (御殿下)
 11月11日 △ 1-1 成城大 (御殿下)

・部長 安東新午

・監督 須賀敏孝

・コーチ 浅見俊雄

・主将 名越英夫

・主務 喜多康夫

・練習 御殿下

・部室 御殿下地下

出場選手

相手	全日本選手権		関東大学リーグ2部								大学選手権	
	早大	京大	日体大	一橋大	武蔵大	上智大	成城大	防衛大	日大	中大		
GK	高橋	高橋	高橋	高橋	中島	高橋	高橋	高橋	高橋	高橋	高橋	
FB	内藤	小川	小川	小川	小川	小川	小川	小川	小川	小川	小川	
	三浦	三浦	三浦	三浦	三浦	三浦	三浦	三浦	石光	石光	安達	
HB	山浦	梅村	梅村	梅村	梅村	梅村	梅村	梅村	梅村	梅村	梅村	
	安達	安達	安達	安達	安藤	安達	安達	安達	安達	安達	内藤	
	名越	名越	名越	名越	中村	名越	名越	名越	名越	名越	中村	
FW	門馬	畔柳	門馬	畔柳	門馬	門馬	門馬	門馬	門馬	門馬	門馬	
	野沢	野沢	野沢	野沢	野沢	野沢	野沢	野沢	野沢	野沢	間宮	
	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	
	後藤	後藤	後藤	後藤	後藤	後藤	後藤	後藤	後藤	後藤	後藤	
	梅村	門間	斎藤	門馬	畔柳	畔柳	畔柳	畔柳	畔柳	畔柳	畔柳	

関東大学リーグ2部成績

	日大	東大	上智大	成城大	武蔵大	防衛大	一橋大	日体大	勝	負	分	得	失	差	点
日大	○3-1					○2-1	○3-0		6	0	1				13
東大	●1-3	○1-0	△1-1	△1-1	○2-1	○2-1	○2-1		4	1	2	10	8	2	10
上智大		●0-1				○3-1	○4-0		4	1	2				10
成城大		△1-1				△2-2	○2-1		2	3	2				6
武蔵大		△1-1				△1-1	△0-0		1	2	4				6
防衛大	●1-2	●1-2	●1-3	△2-2	△1-1		△1-1	○1-0	1	3	3	8	11	-3	5
一橋大	●0-3	●1-2	●0-4	●1-2	△0-0	△1-1		△2-2	0	4	3	5	14	-9	3
日体大		●1-2				●0-1	△2-2		0	4	3				3

1部復帰、法大に阻まれる

ただただ走って体力づくり

昭和37年度のシーズンは、小石川サッカー場で行われた関東大学リーグ1部・2部入れ替え戦の法大戦に0-1で敗れて終わった。悔しかったが充実した1年であった。

シーズン当初、目標は1部復帰であるので、そのために何をすれば良いのか考えた末、

1. 走り負けない体力をつける
2. 得意の戦法を作る

の2点に絞り、秋のリーグ戦優勝と入れ替え戦の勝利を目指した。

体力作りについては、ただただ走った。インターバル走を重点に。また浅見先輩が紹介された「サーキット・トレーニング」をも採り入れた。そのため大学構内を探索して鉄材を求め、土木教室から拝借したセメントと合わせてダンベルなどの器具を作ったり、自転車のチューブをエキスパンダーの代わりにしたりした。また電電公社（当時）の伊野部先輩にお願いして木の電信柱を3本入手し、グラウンドのゴール裏にベンチを立ててヘディング練習に役立てたりしたのも楽しい思い出である。

得意の戦法については、クラマーコーチの説く基礎を重視することの大切さと反復によるゲーム組み立ての習熟を目指し、得点を挙げるために最も効果的な戦法として、ウイングができるだけ深く切り込んで送るマイナスのセントリングを中が合わせることに最重点を置いて練習した。

1軍・2軍制で効率上げる

部員が多い割に経験者が少ないことから、効率を上げるために1軍と2軍にチームを分け、1軍重視の練習をしたので2軍選手には不満もあったと思う。だが、須賀監督が練習には必ずお見えになって下さったので表立っての不満はなかったと思っている。

いま振り返れば、高校時代から東大のサッカー部を1部にするぞと思って過ごした5年間で青春だったのだろう。実はストレートで大学に入ると決めていた私は、入試のあと、農学部の中合宿で行われた有志の春合宿に夜具を持ち込んで参加したのだが、あえなく不合格となり、寂しく合宿所を後にした。浪人中は高校の後輩のコーチをしながらサッカーと

は離れずにいたので、翌年合格できたことは初志の1部復帰の一里塚のはずだったのだが・・・。

2部で全勝優勝した後、入れ替え戦に備えて農学部で合宿し、万全の準備を整えて臨んだが、運無く敗れて5年間は終わった。勉強をせずにサッカーのためにのみ本郷に通い、駒場のクラスの友の名も知らず。しかし充実した大学生活であった。須賀監督を初めとする多くの先輩、一緒に練習し共に戦った仲間たち、有難うございました。サッカーと巡り合えてよかった。（梅村 洋）

成城大破り6連勝

本年度の優勝をかけた1戦が東大御殿下グラウンドで行われた。両校とも先週まで5戦全勝で、この試合の勝ったものが八分通り優勝をにぎるとあって、試合前の練習から緊張した雰囲気であった。前半は、成城得意の速攻で東大をせめまくり何度か東大ゴールを脅かした。そして9分、成城はダイレクトパスを通しRWがセントリング、このボールが東大GK高橋の頭上をおそい、高橋懸命にパンチするも及ばずゴールイン。その後は30分過ぎまでは七分三分で成城が押していたが得点までは至らず、30分過ぎてからは東大もペースをとりもどし、すこし東大が押しぎみのところで前半を終わった。後半に入ると東大は持ち前のスタミナとファイトにものをいわせて、一方的に攻めはじめ、8分、LW畔柳がドリブルで成城バックスをかわし強シュート。18分RI梅村よりの好パスをRW門馬がクリーンシュートして逆転。また23分左よりのコーナーキック、LI後藤よりLW畔柳へショートパス、畔柳がおちついてセントリングすれば、待つてましたとばかりCF南の強ヘディングシュート、成城GK1歩も動けずゴールなり3点目をあげた。その後成城の必死の攻撃もRB小川らのバック陣の好守により得点に結びつかずタイムアップとなった。試合ははじめよりエキサイトし両軍とも反則が多く、一部で試合の興味を薄くしたきらいはあったが、全般的に動きのほげしい好試合であった。スタミナにおいて大部分まざっている東大の順当勝ちともいえるだろうが、今シーズン第一の苦戦であった。

（東大新聞第518号 昭和37年11月28日）

公式試合記録

・天皇杯

4月7日 1回戦 ○ 7-0 志村化工（ ）
 4月8日 2回戦 ● 3-4 埼玉教員（ ）

・京都大学定期戦

7月1日 ● 0-1 京大（京大農学部）

・関東大学リーグ2部

10月13日 ○ 2-0 一橋大（御殿下）
 10月20日 ○ 2-1 自由学園（御殿下）
 10月27日 ○ 3-0 武蔵大（御殿下）
 11月3日 ○ 5-1 防衛大（御殿下）
 11月10日 ○ 2-0 上智大（御殿下）
 11月18日 ○ 3-1 成城大（御殿下）
 11月25日 ○ 6-0 東農大（御殿下）
 7勝 優勝

・入替戦

12月1日 ● 0-1 法大（小石川）

・大学選手権

12月23日 1回戦 ○ 4-0 鹿児島大（ ）
 12月24日 2回戦 ○ 7-0 千葉大（ ）
 12月25日 準々決勝 ● 0-2 中大（ ）

・部長 安東新午

・監督 須賀敏孝

・主将 梅村洋

・主務 山根文吾

・練習 御殿下

・部室 御殿下地下

出場選手

相手	全日本	定期戦	関東大学リーグ2部							入替戦	大学選手権
	埼玉教員	京大	一橋大	自由学園	武蔵大	防衛大	上智大	成城大	東農大	法大	中大
GK	中島							高橋		高橋	中島
FB	梅村							小川		内藤	小川
	八田							内藤		小川	八田
HB	山浦							安達		安達	安達
	石光							石光		石光	石光
	中村							山浦		山浦	山浦
	門馬							門馬		門馬	畔柳
FW	間宮							梅村		梅村	野村
	山田							南		南	南
	後藤							後藤		後藤	後藤
	畔柳							畔柳		畔柳	石田

関東大学リーグ2部成績

	東大	成城大	上智大	防衛大	一橋大	東農大	自由学園	武蔵大	勝	負	分	得	失	差	点
東大	—	○3-1	○2-0	○5-1	○2-0	○6-0	○2-1	○3-0	7	0	0	23	3	20	14
成城大	●1-3	—	○—	○2-1	○4-1	○—	○7-1	○—	6	1	0				12
上智大	●0-2	●—	—	●3-7	○6-0	●—	○5-1	○—	3	4	0				6
防衛大	●1-5	●1-2	○7-3	—	●2-3	○5-3	△4-4	△4-4	2	3	2	24	24	0	6
一橋大	●0-2	●1-4	●0-6	○3-2	—	○3-1	●0-4	○2-0	3	4	0	9	19	-10	6
東農大	●0-6	●—	○—	●3-5	●1-3	—	○2-1	●—	2	5	0				4
自由学園	●1-2	●1-7	●1-5	△4-4	○4-0	●1-2	—	△1-1	1	4	2	13	21	-8	4
武蔵大	●0-3	●—	●—	△4-4	●0-2	○—	△1-1	—	1	4	2				4

入れ替え戦出場の夢消えて

もろもろの面で闘魂を発揮

我々39年卒の同期は12名で始まり、12名で終わった。チーム全体を見渡せば、公式戦で東大のユニホームに袖を通す可能性が極めて少ないことを十分に悟りながら、最後まで厳しい練習に耐え、それぞれにチーム盛り上げ役に徹した部員を多く数えた。「闘魂」は試合だけでなく、もろもろの部活動の中でも発揮されていたことを記しておきたい。

大学選手権はベスト8で涙

法政大との入れ替え戦に敗れ、先輩から「次こそ頼むぞ」とバトンを託された我々はその雪辱を誓いつつ、一息つく暇もなく12月の大学選手権に突入した。第1戦、第2戦を難なく突破してベストエイトに進み、準々決勝でその年の1部優勝校の中央大に対決した。片伯部、小城、岡光ら有力選手を揃える中央大に我が東大はよく健闘したが及ばず、0-2で敗れ去った（記録は昭和37年度の項参照）。

翌日の朝日新聞の記事によれば「この1点はあまりにも早すぎた。前半0-0で進んでいれば、あるいは東大に勝つチャンスが出来たかも知れないと思えるほど、その後東大は良く反撃した。前半は中盤でも良く持ち、むしろ押し気味であった。しかし、まあ実力通りの試合と言えよう」と結んであった。

5月には新人戦が行われたが、2回戦で宿敵法政大に0-2で敗れ、今更ながら1部リーグの壁の厚さを痛感させられた試合であった。

全日本の胸を借りた練習も

昭和39年の東京五輪に向けて特別強化を図る全日本チームが本郷の旅館に合宿し御殿下で練習していたので、4月、5月にかけて5回、全日本チームと御殿下で練習マッチを行った。右バック小川肇のスライディングタックルが俊足左ウイング杉山の脚に見事決まるなど痛快な思い出もあり、また先取点を奪った試合もあったが、回を重ねるごとに点差は開き、最後の試合は0-11で終わった。

天皇杯の予選で三菱重工と

天皇杯は関東予選の準決勝でHB森、FW二宮など全日本クラスを揃える強豪新三菱重工と対戦した。6月の蒸し暑い炎天下、実業団相手に天は我ら

に味方した！と思いつつ前半は押し気味に試合を進めたが、試合巧者振りを発揮するベテランの清水らにすきを突かれ1点を失うと、後半半ばにはスタミナが切れて集中力を失い、0-4で惨敗した。

京大戦は得点力不足で凡戦

終始押し気味に試合を進めたが、得点力不足はいかんともしがたく、両チームとも先輩から「伝統戦も地に落ちた」と厳しくしかられる凡戦に終始してしまった。

優勝できるチーム力はある

3年の川瀬君が体調を回復させて戦列に加わり、初戦で体力、走力に勝る日体大を2-1で破って、まずは順調なスタートを切った。しかし第2戦で最も組みしやすしと踏んだ自由大に個人技でかき回され、フォワード、バックスとも歯車が狂い始めて1-1の引き分けに終わってしまった。その後農大、一橋大戦は勝利したものの防衛大に引き分け、優勝をかけた上智大戦に敗れて入れ替え戦出場の夢は潰えた。

東大は全7試合を通じて各試合とも相手チームよりゴールキックは少なく、CKは多く奪っていた。徹底した勝ち狙いで戦えば優勝できるチーム力を備えていたとも言える。

キック・アンド・ラッシュでは勝てないとの前年の入れ替え戦の反省から、個人技向上のため綿密な練習計画を実行したりしたが、結局は前年の入れ替え戦の呪縛（じゅばく）に囚われた不完全燃焼の残念な結果で終わってしまった。その真逆にいたのが日体大で、東大に敗れた後も愚直に体力サッカーを貫き通し、2部昇格のその年に、すぐ1部昇格を果たした。

強い東大めざし「闘魂」創刊

関東1部の厚い壁を破れない東大、一方では飽和状態の部員数、東大サッカー部はいかにあるべきかを問い続けた時代でもあった。強い東大を目指す気持ちは同じでも、その方法論は一つではなかった。

「故きを温ねて新しきを知る」—先輩への深い敬意と謝意を、そして後輩への熱い期待を「闘魂」第1号の創刊に込めて、我々同期12人の1年間の戦いはここに終わった。（安達二郎）

公式試合記録

・天皇杯関東予選

6月 日 1回戦 ○ 3-0 八雲キッカーズ ()
 6月 日 2回戦 ○ 2-0 日産火災 ()
 6月23日 準決勝 ● 0-4 新三菱重工 ()

・大学選手権

12月22日 2回戦 ○ 3-0 広島大 ()
 12月24日 3回戦 ● 0-0 名商大 ()
 (延長、抽選)

・京大大学定期戦

7月7日 △ 0-0 京大 (御殿下)

・部長 安東新午

・監督 須賀敏孝

・コーチ 高田宗昌

・主将 安達二郎

・主務、学連 宇尾誠一

・関東大学リーグ2部

9月30日 ○ 2-1 日体大 (御殿下)
 10月6日 △ 1-1 自由学園 (御殿下)
 10月26日 ○ 2-0 東農大 (御殿下)
 11月2日 ○ 2-1 一橋大 (御殿下)
 11月9日 △ 2-2 防衛大 (御殿下)
 11月16日 ● 0-1 上智大 (御殿下)
 11月24日 ● 0-2 成城大 (御殿下)
 3勝2敗2分 3位

・練習 御殿下

・合宿 農学部、検見川

出場選手

相手	天皇杯		関東大学リーグ2部						
	新三菱	京大	日体大	自由学園	東農大	一橋大	防衛大	上智大	成城大
GK	中島	中島	坂井	中島	中島	中島	中島	中島	坂井
FB	小川	石光	小川	小川	小川	小川	小川	小川	小川
	八田	小川	八田	八田	八田	八田	八田	八田	武田
HB	安達	安達	小林	小林	安達	安達	安達	安達	安達
	石光	八田	石光	石光	石光	石光	石光	石光	八田
	山浦	山浦	山浦	山浦	山浦	小林	小林	山浦	石光
FW	畔柳	三浦	安達	川瀬	南	南	南	南	川瀬
	野村	河合	川瀬	三浦	川瀬	川瀬	川瀬	川瀬	野村
	南	南	南	南	畔柳	中岡	中岡	中岡	鳥原
	後藤	後藤	後藤	後藤	後藤	後藤	後藤	後藤	三浦
	石田	畔柳	畔柳	畔柳	石田	石田	石田	畔柳	石田

関東大学リーグ2部成績

	日体大	上智大	東大	成城大	防衛大	一橋大	自由学園	東農大	勝	負	分	得	失	差	点
日体大	-	○1-0	●1-2	○5-1	○2-1	○2-1	○5-1	○2-0	6	1	0	18	6	12	12
上智大	●0-1	-	○1-0	○3-0	△1-1	○4-2	○2-1	○1-0	5	1	1	12	5	7	11
東大	○2-1	●0-1	-	●0-2	△2-2	○2-1	△1-1	○2-0	3	2	2	9	8	1	8
成城大	●1-5	●0-3	○2-0	-	●0-1	△5-5	○4-0	○5-0	3	3	1	17	14	3	7
防衛大	●1-2	△1-1	△2-2	○1-0	-	●0-2	○2-1	●0-2	2	3	2	7	10	-3	6
一橋大	●1-2	●2-4	●1-2	△5-5	○2-0	-	●0-3	○2-1	2	4	1	13	17	-4	5
自由学園	●1-5	●1-2	△1-1	●0-4	●1-2	○3-0	-	○2-1	2	4	1	9	15	-6	5
東農大	●0-2	●0-1	●0-2	●0-5	○2-0	●1-2	●1-2	-	1	6	0	4	14	-10	2

諸先輩の熱い指導を受けて

「とにかく走れ」と言われ

43年前のこととて往事茫々。思い出すのは、ただひたすら練習を続けたこと、竹腰先輩がしばしば大きな石に座って練習をご覧になり、「とにかく走れ」と言われたこと、須賀監督には毎日、お仕事を終えられたあと、御殿下グラウンドに来ていただいたこと、高田コーチにはいつもニコニコと指導に来ていただいたこと、それぞれにお仕事を持たれながら貴重なご指導に、今更ながら感謝の念を深めている。試合のたびに学生課長であった横山さんら諸先輩の応援、大埜先輩の「トウダイ、ガンバレー」の大声の応援、激励にも励まされた。お一人ごとの顔と声が懐かしくよみがえってくる。

不合理なことをしなければ

リーグ戦は8チーム中5位に終わった。「闘魂」の創刊号は前年度主将の安達さんたちがリーグ戦終了後に精力的に編集・発行された。その座談会の記事の中で、新主将としての私の「勝つためには、何か不合理なことをやらなければならない。何か無理をしなければ勝てないように思えてなりません」との発言に対して、野津謙先輩から「そう、その通り。そういうこともスポーツをやって初めて分かることだ。私はスポーツから大きな人生観を得た」とのコメントを頂き、さらに大内弘先輩から「そういう話も、これくらいの人数だから通るので、合宿へ行ったらさらに60人を前にしては、何も言えなくなってしまうよ」という現実的な指摘を受けたところで、岡野俊一郎先輩の「そういうことを伝えるのは難しいが、具体的にやるには、大学というのはある意味でOB全部が（技術と精神の）指導者だが、現実には監督、コーチに任せねばならない」とのまとめがあった。

このあたりがきっかけとなり、「勝つために、技術的な面を強くするためにはどうすれば良いか。やはり『練習する』ことである。サッカーという対象に自己を完全投入することによってのみ、勝利への最善の道を得ることが出来るものと考えます。しかし私は、こうした考えを部員全体には要求しません。これは努力目標です」というのが『今年度の抱負』（闘魂・創刊号）となった。

やや一本調子の方針を反省

春の新人戦、国公立大会、京大戦、七帝戦あたりまでは、この方針でうまく回っていたように思う。リーグ戦に入り、第3戦、3部から昨年上がってきた順天堂大学に3-0で敗れたときから、対応策が打てないまま5位に終わってしまい、最終の成城大戦が終わったあと、地下の部室のシャワーの前で、「老兵は去りゆくのみ」などと言った覚えがある。今にして思えば、年間を通してやや一本調子で行き過ぎたのかな、もう少し緩急をつけた自由自在さがあった方が良かったかなと反省している。

（石光 豊）

東京オリンピックを手伝う

関東学連1部、2部のチームからサッカー競技の補助役員が出ることになり、東大からは主務の樋口が駒沢競技場の試合の記録係を務めた。1部校からは6人くらいずつ出たが、2部校からは各校1名であった。また読売新聞運動部からの要請で、駒沢競技場でサッカーの試合を取材する同社社会部記者のサポートを石田、太田、間宮の3人が受け持った。

（樋口周嘉）



国公立大会で優勝して



追い出し試合後に

公式試合記録

・国公立

6月14日 1回戦 ○ 2-0 電通大 ()
 6月21日 2回戦 ○ 4-0 東外大 ()
 6月27日 準決勝 ○ 2-0 東教大 ()
 6月28日 決勝 ○ 5-1 一橋大 ()

12月12日 ● 0-2 成城大 (御殿下)
 2勝3敗2分 5位

・大学選手権

12月23日 ● 1-1 (抽選) 一橋大 ()

・京都大学定期戦

7月4日 △ 0-0 京大 (京大農学部)

・七帝戦

7月6日 1回戦 ○ - 名大 (京大農学部)
 7月8日 2回戦 ○ - 東北大 (京大農学部)
 7月9日 決勝 ○ - 阪大 (京大農学部)

- ・部長 安藤新午
- ・監督 須賀敏孝
- ・コーチ 高田宗昌
- ・主将 石光豊
- ・副主将 畔柳信雄
- ・主務 樋口周嘉

・関東大学リーグ2部

10月31日 ○ 1-0 一橋大 (御殿下)
 11月8日 △ 1-1 防衛大 (御殿下)
 11月14日 ● 0-3 順天大 (御殿下)
 11月22日 ○ 3-1 自由学園 (御殿下)
 11月28日 △ 2-2 上智大 (御殿下)
 12月5日 ● 0-3 法大 (御殿下)

- ・合宿 春期 3月29日~4月5日 農学部
 新人戦 4月23日~4月29日 農学部
 国公立 6月15日~6月22日 農学部
 夏期 8月20日~8月31日 検見川
 リーグ 10月3日~10月10日 農学部

- ・練習 御殿下
- ・部室 御殿下地下

出場選手

相手	レギュラー	定期戦	関東大学リーグ2部							
		京大	一橋大	防衛大	順天大	自由学園	上智大	法大	成城大	
GK	坂井	坂井								
FB	水澤 間宮 小柳 武田	水澤 間宮								
HB	平田 石光 鳥原 嶋田 河井	平田 石光 鳥原								
FW	中岡 三浦 畔柳 太田 石田 野村 熊谷	中岡 三浦 畔柳 太田 石田								

関東大学リーグ2部成績

	法大	順天大	上智大	成城大	東大	防衛大	一橋大	自由学園	勝	負	分	得	失	差	点
法大	-	○3-1	○2-0	○1-0	○3-0	○4-0	○2-1	△1-1	6	0	1	16	3	13	13
順天大	●1-3	-	○3-0	○3-1	○3-0	○4-0	●1-2	○1-0	5	2	0	16	6	10	10
上智大	●0-2	●0-3	-	○2-1	△2-2	○2-0	○2-0	△0-0	3	2	2	8	8	0	8
成城大	●0-1	●1-3	●1-2	-	○2-0	○3-0	○3-1	○4-3	4	3	0	14	10	4	8
東大	●0-3	●0-3	△2-2	●0-2	-	△1-1	○1-0	○3-1	2	3	2	7	12	-5	6
防衛大	●0-4	●0-4	●0-2	●0-3	△1-1	-	○4-2	○3-2	2	4	1	8	18	-10	5
一橋大	●1-2	○2-1	●0-2	●1-3	●0-1	●2-4	-	○3-1	2	5	0	9	14	-5	4
自由学園	△1-1	●0-1	△0-0	●3-4	●1-3	●2-3	●1-3	-	0	5	2	8	15	-7	2

クラマーの練習方法を学ぶ

サッカーに専念できる態勢

昔のことで取りとめない話になりそうだが、当時を振り返ってみたい。私は昭和39年度に3年生で初めて公式戦へ出るようになり、優勝を目指して石光主将の下で戦ったが、残念ながら5位に終わった。

新主将を任せられ合宿所での納会で、4年生諸氏から「頼んだよ」といわれるたびに、ひしひしと重責を感じた。そして4年生になったらサッカーに打ち込める環境を作ろうと、山根、宇尾、長田の各先輩のノートや東大出版会の講義録をもとに、4年生でしか取れない必修科目（2科目8単位）を除いて、卒業に必要な最低限の単位を3年で取得して態勢を整えた。しかし、どうすれば強いチームになれるのか、皆目見当もつかない状況であった。

春合宿までは筋力の強化を

高田新監督の助言を入れて、春合宿までは全体練習はしないで、各人に筋力強化プログラムを課し、部室の壁に進展状況を記入するようにした。どういう練習をすれば勝てるチームを作れるか悩んだが結論は出ない。ただ3年生にタレントがそろっており、優勝した昭和37年度の梅村主将のときに似たチーム構成が出来るかも知れないとひそかに考えていた。そうしたなか多忙にもかかわらず、高田監督は当時全日本コーチのクラマー氏から直接学んだ練習方法を紹介され、日々の練習はこれをもとに組み立てた。



検見川合宿

4-2-4にスーパーを

高田監督は、技術的な面の個別指導は少なかったように思うが、ボールリフティングは最低50回以上と課題を出されたり、戦術的な面でWMから4-2

-4、更に変形してバックラインの後ろにもう1人スーパーを置くという守備体系を指示された。

当時全日本コーチの岡野先輩もひょっこり顔を出されては、ドリブルの仕方、シュートの練習法など実演し、指導して下さいました。須賀前監督も度々見られては黙って練習をみておられた。70人を超える新1年生の対応については、高田監督の助言や4年生の陣容から夏合宿までは、渡邊君を中心に面倒を見ることにした。



練習時のスナップ

日本リーグ勢と練習試合

練習試合は、日本リーグの三菱重工、古河電工とよくやった。三菱には服部先輩がいて「お前たち、下手だな！」と試合後よく皮肉を言われた。そういわれても仕方がない。当時ボールリフティングを連続100回以上出来る人は数名だった。技術では勝てない、何で勝つかが課題であった。

国立大戦は東京農工大グラウンドで教育大と戦い1-0で優勝。京大戦は検見川グラウンドで1-0の勝利。

夏合宿は1対1に強くなる練習を中心にし、急造CF坂井をはじめ全員が力をつけ自信をもってリーグ戦に臨んだが、結局3位に終わった。主将として何をしたか今でも疑問に思っている。

（平田 攻）



4年生フィールドプレイヤー9人

公式試合記録

・国公立

6月4日 決勝 ○ 1-0 東教大（農工大）

・京都大学定期戦

7月4日 ○ 1-0 京大（検見川）

・関東大学リーグ2部

10月10日 △ 0-0 成城大（駒沢第二）

10月16日 △ 1-1 上智大（駒沢第二）

10月24日 ○ 2-0 順天堂大（御殿下）

10月30日 △ 3-3 法政大（御殿下）

11月7日 ● 1-2 東農大（駒沢第二）

11月14日 ○ 1-0 一橋大（駒沢第二）

11月21日 ● 0-1 防衛大（駒沢補助）

2勝2敗3分 3位

・大学選手権

12月19日 2回戦 ○ 2-0 成蹊大（ ）

12月20日 3回戦 ● 1-3 東北学院大（ ）

・部長 安東新午

・監督 高田宗昌

・主将 平田 攻

・主務 河島洋征

・練習 御殿下

・部室 御殿下地下

出場選手

相手	レギュラー
GK	広瀬
FB	水澤
	小柳
	見米
	武田
HB	島田
	平田
FW	中岡
	野村 (三浦)
	坂井
	熊谷
	(河井)

定期戦	関東大学リーグ2部							
	京大	法大	上智大	東農大	成城大	一橋大	順天大	防衛大

関東大学リーグ2部成績

	法大	上智大	東大	東農大	成城大	一橋大	順天大	防衛大	勝	負	分	得	失	差	点
法大		△1-1	△3-3	○3-1	○2-1	○6-0	○3-1	○2-0	5	0	2	20	7	13	12
上智大	△1-1		△1-1	○4-0	○4-0	○3-0	○7-2	○4-0	5	0	2	24	4	20	12
東大	△3-3	△1-1		●1-2	△0-0	○1-0	○2-0	●0-1	2	2	3	8	7	1	7
東農大	●1-3	●0-4	○2-1		△1-1	●1-3	○2-1	○3-0	3	3	1	10	13	-3	7
成城大	●1-2	●0-4	△0-0	△1-1		●2-4	○4-0	○2-1	2	3	2	10	12	-2	6
一橋大	●0-6	●0-3	●0-1	○3-1	○4-2		●0-3	△0-0	2	4	1	7	16	-9	5
順天大	●1-3	●2-7	●0-2	●1-2	●0-4	○3-0		○7-3	2	5	0	14	21	-7	4
防衛大	●0-2	●0-4	○1-0	●0-3	●1-2	△0-0	●3-7		1	5	1	5	18	-13	3

今年こそと意気に燃えたが

多くのレギュラー級が残留

新チームの最上級生11名のほとんどが高校時代からのサッカー経験者であり、半数以上が前年度までにレギュラーないし準レギュラーとしてリーグ戦に出場していたのに加え、下級生にも優れたタレントがおり、40年次の先輩からチームを引き継いだ時点では一同「今年こそは・・・」の意気に燃えていた。渡辺部長（理学部教授）、高田監督の下で新チームがスタートしたが、4年生進級を目前に、選出されて間もないキャプテンに米国への留学話が持ち上がり、新チームの実質的スタートを前にキャプテン交代、エースストライカーの休部と言う予想外の事態を抱えてのスタートとなった。しかし嶋田新キャプテンの強力なリーダーシップと、残るメンバーにみなぎる自負は、こんな状況をものともしないかのようであった。

リーグ戦は思いもせぬ成績

春の検見川合宿、6月の国公立大会、7月の京大戦と戦って、戦績は不十分ながらも、内容は可もなく不可もなしといったところで、この時点では秋のリーグ戦に向けて危機感のようなものは特に感じていなかった。4年生メンバーの個性は様々であり、それぞれ日常生活では必ずしも優等生ではなかったかもしれないが、ことサッカーに関しては一様に真面目でありチームとしてもそれなりにまとまっていた。キャプテンの発案で、リーグ戦終了まで、4年生全員検見川の合宿所で共同生活を送ろうという案が真剣に議論されたが、実現には至らなかった。

8月の夏合宿とそれに続く七帝戦などを経てリーグ戦に突入した。開幕戦こそ一橋大に3-0と快勝したものの、第2戦の敗戦以降、何となく歯車がかみ合わないまま、その後の5試合で1勝しかあげることができず（1分）、終わってみれば2勝1分4敗という、思っても見ない結果であった。

チームカラーを確立できず

シーズン終了後、山上会議所で行われた納会での重苦しい雰囲気は今でも忘れられない。

このような結果に終わった原因はいろいろあったと思われるが、今にして思えば、結局のところ、我々がどのようなチームを目指していたのかが明確

でなく、日ごろの練習や合宿を通じてチームカラーを確立することが出来なかったことが大きかったように思う。当時の我々のレベルでは、90分間を走り抜く体力と正確なキックの能力があれば、そこそこ勝つことができた時代でもあった。そんな中で、我々はどんなチームを目指すべきだったのかが、必ずしも明確でなかったのかと今では思う。

4年の労苦は大きな財産に

スポーツにおいては勝つことが最大の目的である。それだけにリーグ戦終了直後は「何のために4年間苦しい練習を続けてきたのか」との思いを口に出す者もあった。しかし40年以上を経た今、4年間御殿下グラウンドに通い続けたことを後悔する者はいない。試合に勝つためには得るものの少なかつたグラウンド通いではあったが、そこでかけがえのない11人の仲間と出会い、苦労を共に出来たことはその後の人生において大きな財産となった。

それにつけても卒業後わずか7年で、最も皆に愛された沖邦雄君を急性くも膜下出血で失ったことは痛恨の極みであった。残された10人は以後毎年晩秋の墓前に集い酒を酌み交わす。還暦をとうに過ぎた出席者の中で、ひとり沖君だけはまだ30歳の青年のままである。

嶋田キャプテンの回想から

4年間の部生活を振り返って一番残念に思うことは夏の過ごし方が悪かったということである。

即ち春は慶応とか教育大といった1部校に勝つのに、秋になるとリーグ戦で思うような成果を挙げることが出来なかったことである。

これは夏のトレーニングに問題があると思われる。夏の炎天下にトレーニングを行うことは技術の向上、体力の向上、精神力の向上等には大きな力を貸さない。それどころかかえって体力を消耗させて、その消耗を回復出来ないまま秋のリーグ戦に入ってしまったことに原因があると思われる。

確かに体力をつけるには、ある程度疲れるところまでやらなければならない。だが体力をつける為にトレーニングすることと、体力を消耗させることとは別である。自分を条件の悪い所で鍛えることによってトレーニングに対する自己満足を得ていたのかもしれない。

= 回想は「闘魂」3号から抜粋 (三浦 重)

1966年度（昭和41年度）

公式試合記録

・国公立

6月19日 2回戦 ○ 4-1 商船大 ()
 6月25日 準決勝 ● 0-2 都立大 ()

10月16日 ● 2-4 上智大 (駒沢第二)
 10月22日 ● 1-2 日体大 (御殿下)
 10月29日 △ 0-0 東農大 (御殿下)
 2勝4敗1分 5位

・京都大学定期戦

7月3日 △ 1-1 京大 (京大農学部)

・部長 渡辺武男

・監督 高田宗昌

・主将 嶋田厚二

・主務 吉田茂男

・七帝戦

8月10日 1回戦 ○ 1-0 九大 (検見川)
 8月11日 準決勝 ○ 1-0 阪大 (検見川)
 8月13日 決勝 ● 0-1 京大 (検見川)

・合宿 春季 3月27日~4月2日 検見川
 京大戦 6月21日~6月26日 農学部
 夏季 8月1日~8月8日 検見川
 リーグ 9月1日~9月7日 検見川

・関東大学リーグ2部

9月18日 ○ 3-0 一橋大 (駒沢第二)
 9月24日 ● 1-3 成城大 (駒沢第二)
 10月2日 ○ 1-0 青学大 (駒沢第二)
 10月9日 ● 1-2 順天大 (駒沢第二)

・練習 御殿下

・部室 御殿下地下

出場選手

相手	国公立		定期戦	七帝戦			関東大学リーグ2部						
	商船大	都立大	京大	九大	阪大	京大	一橋大	成城大	青学大	順天大	上智大	日体大	東農大
GK	大熊	永峰			永峰	大熊	永峰	永峰	永峰	永峰	永峰	永峰	永峰
FB	小柳理 見米 小林	小柳理 見米 小林		小川司 小柳理 見米	小柳理 見米 武田	小柳理 見米 小林	小柳理 小林	小柳理 小林	小柳理 見米	小柳理 見米	小柳理 見米 武田	小柳理 見米	小柳理 見米
HB	小川恭 藪内 沖	小川恭 藪内 沖		藪内 熊谷	藪内 沖	小川恭 熊谷	小川恭 藪内 熊谷	小川恭 藪内 熊谷	小川恭 藪内 熊谷	小川恭 藪内 熊谷	小川恭 藪内 沖	小川恭 藪内 熊谷	小川恭 藪内 熊谷
FW	熊谷 嶋田 三浦 中井 山村 大町 八林	三浦 中井 八林 小柳望		嶋田 鳥原 三浦 八林 小柳望	熊谷 嶋田 鳥原 三浦 岡田	嶋田 鳥原 三浦 中井 八林	嶋田 鳥原 三浦 中井 小柳望	嶋田 鳥原 三浦 八林 小柳望	嶋田 鳥原 三浦 中井 小柳望	嶋田 鳥原 三浦 中井 八林	嶋田 鳥原 三浦 中井 八林	嶋田 鳥原 三浦 中井 小柳望	嶋田 鳥原 三浦 中井 小柳望

関東大学リーグ2部成績

	日体大	東農大	成城大	順天大	上智大	東大	青学大	一橋大	勝	負	分	得	失	差	点
日体大	-	△3-3	○3-1	○4-3	○2-0	○2-1	○3-0	○3-0	6	0	1	20	8	12	13
東農大	△3-3	-	○7-0	○3-1	○3-1	△0-0	○2-0	●2-3	4	1	2	20	8	12	10
成城大	●1-3	●0-7	-	○3-1	○2-0	○3-1	○3-0	○2-0	5	2	0	14	12	2	10
順天大	●3-4	●1-3	●1-3	-	●1-3	○2-1	○3-2	○4-1	3	4	0	15	17	-2	6
上智大	●0-2	●1-3	●0-2	○3-1	-	○4-2	●1-2	△3-3	2	4	1	12	15	-3	5
東大	●1-2	△0-0	●1-3	●1-2	●2-4	-	○1-0	○3-0	2	4	1	9	11	-2	5
青学大	●0-3	●0-2	●0-3	●2-3	○2-1	●0-1	-	○2-0	2	5	0	6	13	-7	4
一橋大	●0-3	○3-2	●0-2	●1-4	△3-3	●0-3	●0-2	-	1	5	1	7	19	-12	3

「自ら工夫」のいい面いかす

「闘う雰囲気」はよかった

京大戦で快勝はあったものの、リーグ戦までのゲームから客観的に判断して、前年に比べ戦力アップとは考えられず、期待されないチームだったと思う。

しかし、主将としてみると、何となく「闘う雰囲気」はいい。メンバーには「なんとかやってみよう」という意気はある。根拠はないけれど「全知全能を尽くせば、いけるんじゃないか」と。監督不在で始まった我がチームには、「自ら工夫」という良い面が養われていたのかもしれない。

リーグ戦は、スーパー4年生の坂井さん、スピード抜群の熊谷さんらの活躍、見かねて復帰いただいた監督の須賀さんの的確なメンバーチェンジもあって、開幕3連勝！しかし、全勝対決の日体大戦に0-1で惜敗した後は、小川の精神的弱さから結局1試合も勝てず、中位に終わった。

単発攻撃の限界だったのか

タクティクス、スキル、スタミナが劣っていたこともあったが、なによりファイティングスピリットが持続できなかったというしかない。カバーリング重視の粘り強い守備をベースに、細かいパスワークよりも、中盤を省略したロングパスからトップ頼みという単発攻撃の限界だったかも知れない。一方、カウンターサッカーは、どんなに強い相手にも恐れることなく戦え、しかも勝てるチャンスも多いという自信も持てた。個人、チームの技術を上げてボールキープ率を高め、豊かなアイデアでゴールゲットという正統サッカーからは対極にあるという感はあるものの、このスタイルでもいいから、かつてのイタリアチームのレベルに達すれば良いのかも。

今思えば、基本に忠実なまじめなメンバーが多かったのだから、戦術をもっと突き詰めて議論し合えば、もっと行けたかもと反省しきり。個人のタクティクス、スキル向上のワクワクするようなトレーニングや、先輩のツテを頼っての楽しい遠征も考えつくべきだった。そうしたことができず、下級生にも申しわけないことをしたと思っている。

部長の渡辺武男教授の理学部研究室や、新部長就任をお願いに高山英華教授のもとを厚かましくも訪問したこと、監督依頼にうかがった王子製紙の海老

原朗先輩に銀座のうなぎをご馳走になったことなど懐かしく思い出し感謝している。

同期のメンバーの印象

- 小西 運動量豊富。右のキック力はすごかった。
- 中井 ボールキープ、パスのテクニックは優秀。
- 小林 身体能力抜群。安定した守備に信頼感。
- 諏訪 最終戦ウイングで好プレー。
- 中尾 樋口さん以来の完ぺきマネージャー。

(小川恭二)

部の基金制度で運営に余裕

①予算はサッカー部基金から 当時のサッカー部は、サッカー部基金の利子を主たる原資とした予算で運営されていた。これはわれわれにとって大変ありがたいことだった。運動会の他の多くの部はそのような基金をもたず、ダンスパーティーなどでの資金集めに苦労していた。われわれ自身も先輩諸氏に寄付金をお願いにまわったが、そもそもこのような基金制度を築いていただいた先輩には大感謝であった。

②破傷風の予防で全員接種 御殿下グラウンドはかつて馬場として使われていたということで、けがした場合の破傷風菌感染の恐れを指摘された。さっそく運動会に依頼し、部員全員に予防接種をしてもらったことがあった。

③京大戦を検見川で 1967年（昭和42年）の京大戦は東大が当番校。それまで定期戦は御殿下で行われていたが、思い切って3年前の東京オリンピックの日本代表の練習用に整備された、素晴らしい芝生の検見川Aグラウンドに切り替えた。先輩連からは「遠すぎるから、やはり御殿下で」という声もあったが、当時芝生のグラウンドでのサッカーは夢のように恵まれたことであり、検見川で決行した。

④先輩が次々ふえたリーグ戦 御殿下と駒沢第2競技場で行われた。御殿下での試合のときは、山上会議所側の中央が私の定位置であった。おおかたの予想を覆す開幕3連勝！それ以前の練習にはほとんど先輩の姿は見られなかったが、勝ち続けるに従い、試合ごとに応援に来られる先輩の数が増えるのに驚いた。第4戦、駒沢第2競技場での日体大との全勝対決に惜敗した試合のことは、いまでもはっきりと記憶に残っている。

(中尾 捷)

公式試合記録

・国公立

月 日 ○ 4-1 (延長) 水産大 ()
 月 日 ● 1-2 東学大 ()

11月11日 ● 1-3 国士大 (御殿下)
 11月18日 △ 2-2 青学大 (駒沢第二)
 11月25日 ● 2-3 上智大 (駒沢第二)
 3勝3敗1分 5位

・京都大学定期戦

7月2日 ○ 3-0 京大 (検見川)

・部長 渡辺武男

・監督 須賀敏孝

・関東大学リーグ2部

10月15日 ○ 4-1 順天大 (御殿下)
 10月22日 ○ 3-0 成城大 (御殿下)
 10月28日 ○ 1-0 東農大 (御殿下)
 11月5日 ● 0-1 日体大 (駒沢第二)

・主将 小川恭二

・主務 中尾捷

・練習 御殿下

・部室 御殿下地下

出場選手

相手	国公立		関東大学リーグ2部							
	水産大	東学大	京大	順天大	成城大	東農大	日体大	国士大	青学大	上智大
GK	永峰	永峰	永峰	永峰	永峰	永峰	永峰	永峰	永峰	永峰
FB	藪内 小林	藪内 小林	藪内 小林	藪内 松岡	藪内 松岡	藪内 松岡	藪内 松岡	藪内 松岡	藪内 松岡	藪内 小林
	HB	小西 小川 松岡	小西 小川 松岡	小西 小川 吉崎	小西 小川 吉崎	小西 小川 吉崎	小西 小川 吉崎	小西 小川 吉崎	小西 小川 吉崎	小西 小川 吉崎
FW		大塚 (大町) 鍋島	田岡 小柳	熊谷 小柳	熊谷 鍋島 (坂井)	熊谷 中井	熊谷 中井	熊谷 中井 (大塚)	熊谷 中井	熊谷 中井
	中井	中井	中井	中井	坂井	坂井	坂井 (大塚)	坂井	坂井	熊谷
	北川 (田岡)	北川	鍋島 (大町)	小柳	小柳	小柳	小柳	小柳	小柳	小柳
	八林	八林	八林	大塚 (大町)	八林	八林 (鍋島)	八林 (大町)	八林 (大塚)	八林 (大塚)	八林

関東大学リーグ2部成績

	東大	順天大	成城大	東農大	日体大	国士大	青学大	上智大	勝	負	分	得	失	差	点
東大		○4-1	○3-0	○1-0	●0-1	●1-3	△2-2	●2-3	3	3	1	13	10	3	7
順天大	●1-4														
成城大	●0-3														
東農大	●0-1														
日体大	○1-0														
国士大	○3-1														
青学大	△2-2														
上智大	○3-2														

優勝は日体大、東大は5位、他大学の順位不明

浅見新監督の下に強力布陣

科学的トレーニングを継続

今回、この小稿を書くにあたり、小川恭二前主将から引き継いでから1年間書き留めていた「キャプテン・ノート」を読み直した。関東2部秋のリーグ戦の雌雄を決する天王山の戦いだった11月2日（土）の第6節、東京農大戦以降のページはまったく白紙のままだった。最終節・第7戦の上智大戦も5-3で勝っているが、ノートの記録は白紙である。この天王山の戦いに敗れた日、自力での関東1部昇格の入れ替え戦出場が破れ、私だけではなく、4年生全員、頭の中が真っ白になったまま御殿下グラウンドに立ち尽くしていたことを昨日のこのように思い出す。

このシーズンは浅見俊雄先生を新監督に、また駒場キャンパスで体育講師を務められていた戸苅晴彦先生をコーチに迎えた新体制のもと、1968年1月9日に練習を御殿下で開始した。1月21日の納会兼「4年生追い出しコンパ」のあと、いったん1ヵ月間中断、3月12日から再開、同20～31日に春合宿、6月25～30日に京大戦強化合宿、7月7日の京大戦（京大農学部）を戦って前期を終えた。シーズン入り後から前期を通して浅見監督、戸苅コーチの指導による体育理論に基づく科学的トレーニングを継続したことは結果としては大きかったと思う。

順調な戦力強化で自信をもつ

短い夏季オフのあと、7月28日からの恒例の山中湖合宿で秋季シーズンの準備に入った。この時期まで残ったのは1年生16名、2年生7名、3年生9名、4年生11名の合計43名だった。このシーズンは例年になく優秀な1年生が多数入ってきたので、それまでレギュラー組だった3、4年生との競争が激化し、これが良い相乗効果を生み、日本リーグのチーム（三菱重工、古河電工、日立本社など）やユース日本代表チーム、朝鮮大、早稲田大、関学大などの練習試合にもほとんど負けることなく、大いに自信になった。また、久しく優勝していなかった国公立大会にも決勝戦で教育大に競り勝って優勝し、京大戦も3-0で快勝するなど、順調に戦力強化ができたと思う。

僅差で2位逃し出場権失う

7月末の山中湖合宿のあと、8月末の検見川でのレギュラー合宿で仕上げをして、9月末から関東2部リーグ戦7連戦に入った。初戦の国士館大戦で逆転勝ちして勢いに乗り、その後は東京学芸大に引き分けた以外は、前年に惜敗した日体大にも雪辱、快勝するなど、第6節の東京農大戦まで無敗で快調に進んでいた。しかし、この天王山の東京農大戦で敗れ、最終節に勝って勝率では2位以上を確保はしたものの、全勝の東京農大は負けても優勝が決まるため、最終節は流してしまって日体大に敗れ、勝った日体大が浮上して得失点差で東大は2位の座を奪われ、惜しくも入れ替え戦出場権を失う結果となった。

1年間を通して、1年生の台頭で試合の出場機会が減った3、4年生には申しわけない気持ちであったが、結果としてこの選手層の厚みが翌年の関東2部優勝、入れ替え戦出場に結びついたものと思っている。当時の日本のトップクラスのチームと決して引けをとらない試合ができたことで得たチームとしての自信は、その後のア式蹴球部の再興のきっかけにはなったと思う。（藪内俊和）

山中湖一周で4年生活躍

当時、夏合宿は第一次合宿が山中湖で、第二次合宿が検見川で、というのが慣例で、昭和43年も7月27日～31日の日程で第一次山中湖夏合宿が行われた。この合宿は雨にたたられてグラウンドでのボールを使った練習は全く行えず、最終日のみが晴れであった。そして最終日は、午前9時30分出走で、恒例の山中湖一周レースであった。怪我人や実習等で不参加者もいたが、38名が完走した。上位イレブンは、(1) 八林57'22"、(2) 大塚57'58"、(3) 大町58'22"、(4) 加納58'42"、(5) 藪内58'59"、(6) 古村59'15"、(7) 上妻59'59"、(8) 小柳1° 00'03"、(9) 山本1° 01'32"、(10) 手島1° 02'32"、(11) 友定1° 02'33"、と上位5位まで4年生が独占で、またベストイレブンの過半数も4年生であった。これ以外では、(18) 永峰1° 04'32"、(32) 鍋島1° 23'01"、(38) 小林1° 31'37"で、練習にまじめに取り組む4年生が浮き彫りになった合宿であった。（八林秀一）

公式試合記録

・国公立

6月13日 △ 2-2 日医歯大 ()
 6月23日 ○ 4-1 水産大 ()
 6月29日 準決勝 △ 1-1 東学大 (抽選) ()
 6月30日 決勝 ○ 4-3 東教大 ()

11月10日 ○ 5-3 上智大 (御殿下)
 5勝1敗1分 3位

・京都大学定期戦

7月7日 ○ 3-0 京大 (京大農学部)

- ・部長 高山英華
- ・監督 浅見俊雄
- ・コーチ 戸辺晴彦
- ・主将 藪内俊和
- ・主務 小林喜一

・関東大学リーグ2部

9月29日 ○ 3-2 国士大 (駒沢第3)
 10月5日 ○ 2-1 青学大 (御殿下)
 10月13日 ○ 5-1 成城大 (御殿下)
 10月19日 △ 1-1 東学大 (御殿下)
 10月26日 ○ 3-1 日体大 (御殿下)
 11月2日 ● 2-7 東農大 (御殿下)

- ・合宿 春季 3月20日~3月31日
 京大戦 6月25日~6月30日
 夏季 7月27日~7月31日 山中湖
 8月下旬 検見川

- ・練習 御殿下
- ・部室 御殿下地下

出場選手

相手	定期戦	関東大学リーグ2部						
	京大	国士大	青学大	成城大	東学大	日体大	東農大	上智大
GK		永峰 (金丸)	金丸	永峰	永峰	永峰	永峰	永峰
FB		田代 武田 吉崎 松岡	石田 武田 吉崎 松岡	田代 武田 吉崎 松岡	田代 武田 吉崎 松岡 (友定)	田代 武田 吉崎 藪内	田代 武田 吉崎 藪内	田代 武田 吉崎 藪内
HB		藪内 小柳	藪内 小柳	藪内 小柳 (大町)	藪内 小柳	友定 小柳	友定 古村 (大町)	友定 (松岡) 小柳
FW		鍋島 俵 上妻 八林 (黒沢)	大町 (田代) 俵 上妻 黒沢	黒沢 (鍋島) 俵 上妻 八林	黒沢 (大塚) 俵 上妻 八林 (古村)	黒沢 俵 上妻 古村 (八林)	黒沢 俵 上妻 八林 (鹿島)	黒沢 俵 上妻 古村 (八林)

関東大学リーグ2部成績

	東農大	日体大	東大	国士大	成城大	東学大	青学大	上智大	勝	負	分	得	失	差	点
東農大			○7-2												
日体大			●1-3												
東大	●2-7	○3-1		○3-2	○5-1	△1-1	○2-1	○5-3	5	1	1	21	16	5	11
国士大			●2-3												
成城大			●1-5												
東学大			△1-1												
青学大			●1-2												
上智大			●3-5												

東大闘争の激動を乗りこえ

入試中止、多難なスタート

この年の1月18～19日、機動隊の手により安田講堂の封鎖解除が行われ、20日に東大は入学試験の中止を決定した（別冊「ライトブルーの青春賦」参照）。それまで学内はバリケード封鎖が相次ぎ、連日の集会やデモなどで物理的にはもちろん、精神的にも荒廃していた。

サッカー部の活動はこのような状況の中で行なわれようとしていた。2月某日、御殿下へ集合すべく招集をかけた。果たして何人集まるか。大きな不安をもって当日グラウンドへ行った。見るとグラウンドには1年生から3年生まで、前年のシーズンを戦ったメンバー全員が来た。そしていったん集まるや、「いろいろあるが、とにかくサッカーをやるや」ということで、シーズンのスタートを切ることができた。少しオーバーかも知れないが、東大サッカー部の活動がいったん途絶えるかどうかの瀬戸際だった。

悪条件の中で連帯感高まる

練習を始めたものの、新1年生がいない。グラウンド整備、ボール管理、部室の管理などから雑事に至るまで、全員で分担しないと回らない状況であった。しかし、1年生不在はこの年に限っていえば決して悪い面ばかりではなかった。気心の知れた、まとまりやすい人数でチームの一体感が高まった。そして更に全員のレベルもかなり高かった。技術、戦術、体力に加えて、今流に言えばモチベーション、まあ「気合い」である。

実はこの年の京大戦は1-1の引き分けであった。心のすみに「勝って当然」という思い上がり。多少の差こそあれ、メンバーのほとんどが抱いていて、「勝つために必要な努力」を怠ったせいだと今は思う。そして、記録を見るたびに悔やまれる。

快進撃のあと昇格戦は大敗

合宿を重ね、ミーティングを繰り返し、厳しい練習試合を経験して、満を持して臨んだリーグ戦だった。初戦の成城大から4連勝。そして後半は農大に負けたものの、日体大に引き分け。そして最終戦は国士舘大に快勝して、結局5勝1敗1分。日体大と勝ち点で並んだものの、得失点差で上回って優勝を

遂げた。東大が関東2部に落ちて以降3回目で7年ぶりの2部優勝であった。快挙といえる。

そして、万全の準備をして臨んだ入れ替え戦であったが、惨敗に終わった。0-7という点差は別にしても、やはり勝ち抜くためには何かがかけていたということであろうか。負け方があまりにもみごとだっただけに不思議に悔いはない。

個性的でアクの強い下級生を抱え、かつ最上級生であるわれわれも自立心の強い面々が集いながら、よく団結してよい結果を残すことができた。スタートが多難だった分、シーズンを乗り切った充実感は何にもまさるものがある。それもこれもサッカーの底知れぬ魅力のおかげなのか。（武田 厚）

中央大との入れ替え戦

入れ替え戦は一部リーグ最下位の中央大であった。代々木グラウンド、前夜来の雨、また試合中も降り続く小雨で、滑りやすい芝のピッチコンディションであった。チーム全体が緊張感のためか、試合開始早々から思いがけないミスや、要の上妻が相手選手に削られ退場を余儀なくされた不運もあったが、チームとしてそれまでやってきたことすら出来ぬまま、ズルズルと大量得点を許し、結果は0対7の惨敗であった。スコアほどの実力差は無いと信ずるものの、気力、出足、スピード、組織的プレイ等、一部リーグで揉まれて来ていただけに相手が一枚上手と実感した。無様な試合で、先輩始め多くの関係者の方々の期待を裏切ったことを恥じるとともに、翌年こそ夢実現をと後輩に託す気持ちで一杯であった。（吉崎英雄）



入れ替え戦 上妻に向かう中大選手

公式試合記録

・京都大学定期戦

月 日 △ 1-1 京大（検見川）

・関東大学リーグ2部

9月28日 ○ 5-2 成城大（代々木）
 10月4日 ○ 3-0 東学大（駒沢第三）
 10月12日 ○ 3-0 青学大（明大）
 10月19日 ○ 2-1 上智大（御殿下）
 10月25日 ● 1-2 東農大（駒沢第二）
 11月1日 △ 1-1 日体大（駒沢第三）
 11月9日 ○ 2-0 国士大（御殿下）
 5勝1敗1分 優勝

・入替戦

11月22日 ● 0-7 中大（代々木）
 2部残留

・部長 高山英華

・監督 浅見俊雄

・コーチ 戸苅晴彦

・主将 武田厚

・主務 小菅恭彦

・練習 御殿下

・部室 御殿下地下

出場選手

相手	定期戦	関東大学リーグ2部								入替戦
	京大	成城大	東学大	青学大	上智大	東農大	日体大	国士大	中大	
GK		小原	小原	小原	小原	小原	小原	小原	小原	
FB		田代	金丸	清水	田代	清水	鹿島	鹿島	鹿島	
		武田	武田	吉崎	武田	武田	武田	武田	武田	
		吉崎	吉崎	武田	吉崎	吉崎	吉崎	吉崎	吉崎	
HB		清水	清水	鹿島	鹿島	田代	清水	田代	田代	
		八林	八林	小柳	八林	八林	八林	八林	八林	
		小柳	小柳	八林	小柳	小柳	小柳	小柳	小柳	
		戸井	戸井	古村	戸井	戸井	戸井	戸井	戸井	
FW		上妻	上妻	上妻	上妻	上妻	上妻	上妻	上妻	
		俵	俵	俵	俵	俵	俵	俵	俵	
		黒沢	黒沢	戸井	黒沢	黒沢	黒沢	黒沢	黒沢	

関東大学リーグ2部成績

	東大	日体大	東農大	上智大	国士大	青学大	東学大	成城大	勝	負	分	得	失	差	点
東大		△1-1	●1-2	○2-1	○2-0	○3-0	○3-0	○5-2	5	1	1	17	6	11	11
日体大	△1-1														
東農大	○2-1														
上智大	●1-2														
国士大	●0-2														
青学大	●0-3														
東学大	●0-3														
成城大	●2-5														

1970年度（昭和45年度）

1 部昇格への期待を裏切る

7大学戦は前評判通り、優勝

昭和45年度、同期の皆から「お前、暇だから（教養学部留年中）主将をやれ！」といわれ気楽に引き受けてしまった。関東リーグ2部で昭和42年5位、43年3位、44年には優勝し、入れ替え戦で中央大学に負けはしたものの確実にチーム力が上がっている状況で、45年は1部昇格を期待されてのスタートであった。2部で勝って当然の思いと、先輩の期待に本当に応えられるかと不安を持って新チームがスタートした。

この年は九州大で行われた7大学戦に久しぶりに参加した。京大農学部グラウンドでの京大戦のあと、引き続いて参加したのだが、前評判通り優勝することができた。

8日間に8試合の強行遠征

京都から福岡へ向かう途中、京都教育大、三菱重工京都、新日鉄広畑、広島商科大、三菱化成黒崎と、京大戦、7大学戦を含め炎天下で8日間に8試合という強行日程であった。部員は疲労困ぱい、故障者続出の状態となったが、各地で先輩にたいへんご馳走になり、浅見監督にも全日程ご指導をいただき、良い思い出を作ることができた。遠征費用も先輩たちのカンパで賄え、ただ感謝のみであった。

つまずいてリーグ戦は4位

9月からいよいよリーグ戦が始まったが、初戦に前年最下位の成城大にまさかの敗戦、2戦目に前年7位の学芸大に引き分けと最悪のスタートとなった。この年は各チームが星をつぶしあって大混戦となっており、最終戦までかすかに上の入れ替え戦出場の可能性が残っていたが、起死回生をかけた最終戦で日体大にも負け、4位という成績で終了した。

浅見監督の指導にも応えることができず、先輩たちの期待を裏切ることになってしまったことに対する後悔の念もあり、いまだにまだほろ苦い思いが残っている。

三菱化成黒崎工場（現三菱化学）に入社してからもサッカーを続け、一時は日本リーグ（Jリーグの前身）2部を目指して、地域リーグの決勝大会まで進んだものの、最後の試合で大阪ガスに負けて昇格はならなかった。その後企業スポーツの衰退とともに

に、2000年には三菱化学を母体としたチームは北九州ニューウエーブという市民チームとして再出発し、いよいよ2008年度からJFLでプレーすることとなった。長年のわれわれの思いが現実となり、現在は1サポーターとしてJ2昇格のために応援している。今でも時どきプレーをしている。

（清木俊行）



検見川での夏合宿にて



リーグ戦 対青学戦終了後 御殿下にて

公式試合記録

・京都大学定期戦

7月12日 ○ 3-2 京都（京大農学部）

・部長 高山英華

・監督 浅見俊雄

・関東大学リーグ2部

9月19日 ● 0-1 成城大（御殿下）

・主将 清木俊行

・主務 宮路康利

9月26日 △ 0-0 東学大（御殿下）

10月3日 ○ 3-0 青学大（御殿下）

10月11日 △ 1-1 国士大（御殿下）

・練習 御殿下

10月18日 ● 1-2 上智大（御殿下）

10月24日 ○ 3-0 東農大（御殿下）

・部室 御殿下地下

11月1日 ● 1-3 日体大（御殿下）

2勝3敗2分 4位

出場選手

相手	関東大学リーグ2部							
	京大	成城大	東学大	青学大	国士大	上智大	東農大	日体大
GK	小原	小原	小原	小原	小原	小原	小原	小原
FB	渡辺	渡辺	渡辺	渡辺	渡辺	鹿島	渡辺	井上
	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島	清木	鹿島	鹿島
	金丸	榎井	榎井	清木	清木	大日向	清木	清木
	清木	清木	清木		赤松	赤松	大日向	大日向
HB	小柳	小柳	小柳	小柳	小柳	小柳	小柳	小柳
	上妻	上妻	上妻	上妻	上妻	上妻	上妻	上妻
FW	櫻井	笠原	櫻井	櫻井	櫻井	櫻井	黒澤	櫻井
	黒澤	(出場選手名不明)	(出場選手名不明)	黒澤	黒澤	黒澤	俵	黒澤
	俵	俵	俵	俵	俵	俵	戸井	俵
	戸井	戸井	戸井	戸井	戸井	戸井		
交替	古村		古村	笠原		金丸	櫻井	榎井
			笠原			笠原	乾	渡辺

関東大学リーグ2部成績

	日体大	上智大	成城大	東大	東学大	東農大	青学大	国士大	勝	負	分	得	失	差	点
日体大	-	○1-0	○9-0	○3-1	○2-1	○4-2	○4-1	○3-0	7	0	0	26	5	21	14
上智大	●0-1	-	△1-1	○2-1	●2-3	○1-0	○3-0	○1-0	4	2	1	10	6	4	9
成城大	●0-9	△1-1	-	○1-0	○1-0	●0-2	△0-0	○3-1	3	2	2	6	13	-7	8
東大	●1-3	●1-2	●0-1	-	△0-0	○3-0	○3-0	△1-1	2	3	2	9	7	2	6
東学大	●1-2	○3-2	●0-1	△0-0	-	●2-3	○1-0	△1-1	2	3	2	8	9	-1	6
東農大	●2-4	●0-1	○2-0	●0-3	○3-2	-	●0-1	○2-1	3	4	0	9	12	-3	6
青学大	●1-4	●0-3	△0-0	●0-3	●0-1	○1-0	-	○1-0	2	4	1	3	11	-8	5
国士大	●0-3	●0-1	●1-3	△1-1	△1-1	●1-2	●0-1	-	0	5	2	4	12	-8	2

入試中止の後遺症を抱えて

模様変えをした春季対抗戦

昭和46年も当然のことながら1部復帰を目標に掲げ、浅見監督、黒沢主将の下、週5日の御殿下での練習を軸に活動を始めた。

この年、春の関東学連主催の公式試合は、1、2年生のみによる新人戦から、全学年が出場できる春季対抗戦に変更された。1部2校、2部2校によるブロックを4組作り、各ブロック上位2校が決勝トーナメントに進んで優勝を争うもので、2部校にとっては1部校と公式戦を戦う機会が作られた。初戦1部の法政と引き分けたものの、2部で負けたことのなかった学芸大、前々年の入れ替え戦を戦った中大に連敗して決勝トーナメントで戦う機会を失した。

このあと国公立戦、京大戦、名古屋遠征、山中湖合宿と2度の検見川合宿などのステップを踏んでリーグ戦に臨んだ。

勝っても負けても1点差

秋のリーグ戦は第1、2戦を引き分けたあと、第3戦で過去負けたことのなかった国士舘大に敗れて暗雲が垂れこめた。第4戦で2部に上がってきた拓大を破り、明るさが出てきた勢いで第5戦は明大と対戦し、東大の実力を見せつける好試合ではあったが、ジャッジミスともいえるPKを取られて惜しくも敗れた。第6戦も引き分けに終わり、最終戦は負ければ下との入れ替え戦という位置に追い込まれたが、軽うじて勝ち、入れ替え戦は免れた。最終結果は4位だったが、勝ち試合も負け試合もすべて1点差。1点取ることの難しさ、勝つことの難しさを味わわされたリーグ戦であった。

1学年不在のきびしい環境

このころ2部校の半分以上は、高校で活躍した選手を入学させる大学で占められていた。一方、東大は昭和44年の入試中止の後遺症で3年生がいない、また例年のことであるが、理科系学部の4年生は実験や実習に追われる、新生でサッカー経験のある人がサッカー部になかなか入ってこないなど厳しい環境に置かれていた。特に部の経験、技量、パワーが身につけて4年生に対して圧力をかけられるはずの3年生がいなかったことは、選手層の厚み、部の

更なる活性化や一体感の醸成という点から大きなハンディであった。

一方でこの年の4年生には新入生のころからレギュラー選手となり、大学選抜強化合宿にも参加した上妻、俵、黒沢、低学年のときからレギュラーの一翼を担ってきた戸井、医学部5年金丸、留年した清木（前年の主将）、古村など経験豊富な面々がいたが、2年生は笠原、佐々木、内田、乾、1年生は柴田らを除くとすぐに使えそうな選手はいなかった。

創意工夫で諸対策を実行

こうした状況の下で、黒沢主将は1部復帰への執念＝勝利への執着心の持続、仲良しクラブ化の防止を基本に据え、戦力を高めるため4年生のマンネリズム化の防止＝恒常的進化の追求と2年生のレベルアップを主要な方針として臨んだ。

人一倍の努力家でサッカーへの熱意旺盛と伝えられていた昭和35年卒の小山富士夫先輩に目付け役をお願いして、浅見監督には御殿下で指導される時間がなかなか取れないなか、現役のみでは厳しさに欠ける部分についてご指導を願った。山中湖合宿では4年生全員が前日に集まってブレインストーミングを行い、目標へ向けての全員の意志統一と各自やるべきことを再確認した。検見川合宿では弱点補強のため個別練習の時間をとった。また、炎天下での練習は理解力、判断力を失って戦力向上には役立たないことを考え、またリーグ戦が秋に行われることもあって、練習は午前4時起床の朝食前練習と薄暮に行った。このように、さまざまな創意工夫と対策を施した。

結果は、前記の通りとなったが、医学部を除く4年生が全員卒業し就職することとなったため、翌年医学部5年生となる上妻は、4年生不在の中、主将として厳しい戦いを強いられることとなる。

（宮路康利）

公式試合記録

・春季対抗戦

5月1日 予選リーグ △ 1-1 法大 ()
 5月3日 予選リーグ ● 1-2 東学大 ()
 5月5日 予選リーグ ● 0-4 中大 ()

9月26日 △ 2-2 東農大 (御殿下)
 10月2日 ● 0-1 国士大 (御殿下)
 10月17日 ○ 1-0 拓大 (御殿下)
 10月24日 ● 1-2 明大 (御殿下)
 10月31日 △ 1-1 上智大 ()
 11月6日 ○ 1-0 成城大 ()
 2勝2敗3分 4位

・国公立

6月13日 1回戦 ○ 3-0 水産大 ()
 6月20日 2回戦 ○ 1-0 東学大 ()
 6月27日 3回戦 ● 1-2 東教大 ()

・部長 田村三郎
 ・監督 浅見俊雄
 ・主将 黒沢秀樹
 ・主務 宮路康利

・京都大学定期戦

7月4日 △ 1-1 京大 (御殿下)

・関東大学リーグ2部

9月18日 △ 1-1 東学大 (御殿下)

・練習 御殿下
 ・部室 御殿下地下

出場選手

相手	定期戦	関東大学リーグ2部						
	京大	東学大	東農大	国士大	拓大	明大	上智大	成城大
GK		乾	乾 (吉澤)	吉澤	吉澤	吉澤	吉澤	乾
FB		清木	清木	清木	金丸 (内田)	清木 (大日向)	金丸	金丸
		赤松 笠原 内田	赤松 笠原 内田	赤松 笠原 手島	笠原 清木 赤松	金丸 清木 赤松	清木 赤松 大日向 笠原 内田	清木 赤松 大日向 笠原 内田
HB		古村 上妻	古村 上妻	古村 上妻 (山中)	古村 上妻	古村 上妻	古村 上妻	古村 上妻
		黒沢	黒沢	黒沢	黒沢	黒沢	黒沢	黒沢
FW		俵 柴田 佐々木 (戸井)	俵 柴田 佐々木 (山中)	俵 柴田 佐々木 (戸井)	俵 柴田 戸井	戸井 俵 佐々木 柴田	戸井 俵 柴田	戸井 俵 柴田

関東大学リーグ2部成績

	明大	上智大	東農大	東大	国士大	成城大	拓大	東学大	勝	負	分	得	失	差	点
明大			○2-0	○2-1	○3-0		●0-1	○2-1							
上智大			●2-3	△1-1	○1-0	○2-1	○3-0	△0-0							
東農大	●0-2	○3-2		△2-2	○4-1	○2-0	△2-2	△1-1	3	1	3	14	10	4	9
東大	●1-2	△1-1	△2-2		●0-1	○1-0	○1-0	△1-1	2	2	3	7	7	0	7
国士大	●0-3	●0-1	●1-4	○1-0		○2-0									
成城大		●1-2	●0-2	●0-1	●0-2		△4-4	○2-1							
拓大	○1-0	●0-3	△2-2	●0-1		△4-4		△1-1							
東学大	●1-2	△0-0	△1-1	△1-1		●1-2	△1-1								

屈辱の下位との入れ替え戦

4年生不在のシーズン迎え

昭和44年の入試中止の影響で、47年は4年生不在のシーズンとなった。医学部5年生の上妻が主将を引き受けたが、実質的には3年生が最上級生であり、俵、黒沢、戸井らのFW、清木、赤松らのBKなど、ここ数年、チームを支えて来た主力がごっそりと卒業したことによる戦力のダウンはまぬがれず、変則的な部の運営にも苦勞することとなった。

春季対抗戦は、中央大には引き分けたものの、日体大、拓大に連敗した。続く6月の国公立大会では、都立大、学芸大を破り順調に決勝に進出、教育大に3-0で完勝して優勝し、大いに意気が上がった。

検見川での夏合宿、京大戦のための京都遠征などを経て臨んだ秋のリーグ戦には、上妻を中心に、内田、笠原、佐々木、三田ら「最上級生」の3年生、急成長の2年生に加え、宮武、植村といった新鮮な1年生を起用し、まさに総力戦態勢で戦いを挑んだ。

基本的には、上妻が中盤で攻守の要となり、前線の柴田、宮武の得点力を活かすという布陣だった。浅見監督の指示で、対戦校のパス交換状況などのデータを事前に収集する他、自主的な筋力トレーニングなど当時のサッカーとしては先進的な準備、練習も怠りなく行った。

リーグ戦、最初はまずまず

こうして迎えたリーグ戦は、初戦の学芸大戦を引き分け、続く拓大戦は落としたものの、成城大戦は3-0で取り、まずまずの滑り出しを見せた。第4戦の国士館戦は、2-4で敗れたが、第5戦の立大戦で5-1と大勝、この時点で、2勝2敗1分で五分と持ち直した。第6戦の強敵・農大（この年の首位）に1-3と力負けし、最終戦は、ここまでともに2勝で、下部との入れ替え戦の可能性を抱えた上智大との対戦となった。万全の準備で臨んだ試合だったが、前半に痛恨の失点をし、結局、これが命取りとなって、0-1で惜敗した。最終的には、2勝4敗1分けで、上智大とは勝ち点で1ポイント負けて7位となり、屈辱の入れ替え戦を迎える結果となった。

今から振り返ってみれば、この年のリーグ戦は、

3位の学芸大以下が大混戦で、もし、上智戦に勝っていれば3勝3敗1分けで、4位となっていた訳で、改めて、1勝、ワンゴールの重さを突き付けられた形となった。

逆転、ギリギリで2部残留

入れ替え戦は、リーグ戦終了から2週間後の11月25日。駒沢競技場に明学大を迎えての対戦となった。昇格を目指す明学大の闘志あふれるプレーに押されて、一時は1-3と2点のビハインドとなる苦しい展開となった。応援に詰めかけた多数のOBがかたずを飲んで見守る中、前半終了時点までに1点差に迫り、背水の陣で臨んだ後半で、気迫あふれるプレーを見せた東大は、同点、さらには逆転し、ギリギリのところで2部残留を決めた。

肝心の試合に勝ちきれない

このシーズンはチーム編成上もまことに苦しい時期ではあったが、チーム力そのものは、夏の検見川合宿の最終日に早大東伏見グラウンドで行われた練習試合で早稲田に勝ったり、検見川での日本代表チームとの練習試合で善戦したりしており、例年に比べ、決して見劣りはしなかった。リーグ戦も12得点13失点と数字の上ではそれなりの結果を残しているものの、肝心の試合に勝ちきれないという悪癖からなかなか抜け出せず、最終的には「屈辱の年」として記録に残ることとなってしまった。3部との入れ替え戦は、サッカー部史上初めてのことであり、来期の立て直しが緊急の課題として浮上した。

(岡田滋行)

入れ替え戦の記憶

前半は身体が金縛り状態では一っとしているうちに3点取られる。向こうも安心したのか、その後、動きが硬くなった。植村や宮武は平気な顔をしていた。前半終了直前に1点を返し、2-3で折り返し。この1点は大きかった。皆、なんとかなるといふ顔になった。後半の同点ゴールは、センターバックの笠原がスライスポールのような当たりそこないで決めたものだ。彼は周囲の気分に左右されない自分の空気を持っている選手だ。

試合終了後、とにかくほっとしたのを覚えている。関東2部という旗をとにかく次の年も下ろさずに済んだ。

(内田純司)

公式試合記録

・春季対抗戦

4月 日 予選リーグ △ 1-1 中大（御殿下）
 4月 日 予選リーグ ● 0-5 日体大（御殿下）
 4月 日 予選リーグ ● 0-3 拓大（御殿下）

10月15日 ○ 3-0 成城大（御殿下）
 10月22日 ● 2-4 国士大（御殿下）
 10月29日 ○ 5-1 立大（御殿下）
 11月4日 ● 1-3 東農大（御殿下）
 11月11日 ● 0-1 上智大（御殿下）
 2勝4敗1分 7位

・国公立

（検見川、御殿下）

6月 日 2回戦 ○ 4-0 都立大
 6月 日 準決勝 ○ 5-3 東学大
 6月 日 決勝 ○ 3-0 東教大

・入替戦

11月25日 ○ 4-3 明学大（駒沢）
 2部残留

・京都大学定期戦

7月2日 ○ 1-0 京大（京大農学部）

・部長 田村三郎

・監督 浅見俊雄

・主将 上妻達也

・主務 西澤良徳

・練習 御殿下

・部室 御殿下地下

・関東大学リーグ2部

9月30日 △ 1-1 東学大（御殿下）
 10月8日 ● 0-3 拓大（御殿下）

出場選手

相手	春季対抗	定期戦	関東大学リーグ2部							入替戦
	中大	京大	東学大	拓大	成城大	国士大	立大	東農大	上智大	明学大
GK	吉沢	吉沢	吉沢	吉沢	吉沢	吉沢	吉沢	吉沢	吉沢	吉沢
FB	上妻	山中	山中	山中	山中	山中	山中	上妻	山中	山中
	内田	三田	三田	天野	天野 (小野田)	天野	天野	内田	内田	小野田 (天野)
HB	笠原	笠原	笠原	南谷	笠原	笠原	笠原	笠原	笠原	笠原
	三田	内田	天野	三田	内田	内田	内田	山中	小野田	内田
FW	山辺	山辺	内田 (小野田)	内田	三田	三田	三田	小野田 (南谷)	三田	三田
	遠藤 山中 佐々木	上妻 植村 宮武	上妻 植村 佐々木	上妻 植村 佐々木	上妻 植村 佐々木	上妻 植村 佐々木	上妻 植村 佐々木	上妻 植村 佐々木 (遠藤)	上妻 植村 佐々木 (遠藤)	上妻 植村 佐々木
FW	田中	柴田	柴田	柴田	柴田	柴田	柴田	柴田	柴田	柴田
	柴田	佐々木 (荒川)	宮武 (山辺)	宮武	宮武	宮武	宮武 (荒川)	宮武	宮武 (南谷)	宮武

関東大学リーグ2部成績

	東農大	国士大	東学大	拓大	成城大	上智大	東大	立大	勝	負	分	得	失	差	点
東農大							○3-1								
国士大							○4-2								
東学大							△1-1								
拓大							○3-0								
成城大							●0-3								
上智大							○1-0								
東大	●1-3	●2-4	△1-1	●0-3	○3-0	●0-1									
立大							●1-5								
								○5-1	2	4	1	12	13	-1	5

入試中止の影響から脱して

久しぶりに4学年がそろろう

昭和44年入試中止の影響で続いていた変則体制がようやく終わり、久しぶりに4学年そろってのシーズンを迎えることになった。前年に部の史上初めての3部との入れ替え戦を経験したことを出発点とし、戦力的には、前年主将の上妻が去ったものの、主力が、ほぼそのまま残留という状況でのスタートとなった。また、浅見監督を補佐するコーチ、お目付け役として、46年度から参画している小山富士夫さんに加え、新たに北川薫さん（教養学部）、八林秀一さん（経済学部大学院）、古村一郎さん（通称「鬼の古村」、経済学部＝肩書きはいずれも当時）などの諸先輩が入り、かなりの危機感の中、密度の濃い練習に取り組んだ。

春季対抗戦は、法政に0-2で敗れたが、6月の国公立大会では、教育大に3-0、学芸大に5-2で勝って決勝に進出し、東工大を3-2の僅差で破って優勝を果たした。さらにはこの年から始まった天皇杯関東地区予選でも、8月下旬に宇商OBクラブ、9月に拓大、日立水戸勝田を連破するなど、好調を維持したまま秋のシーズンに臨んだ。

中盤4人にして厚みをつくる

この年は、上妻という強力な中盤の要の穴を埋めるだけの選手がいなかったため、中盤を4人にして攻撃の厚みを作り、守備の時には少なくとも2人はバックラインまで下がってくるという3・4（2・2）・3という変則的なシステムで戦った。メンバーは、主将の笠原をはじめ、内田、佐々木などの4年生を軸に、柴田、山中、山辺、荒川、天野、遠藤、吉沢らの3年生が競い合い、さらには、タレント豊かな植村、宮武の2年生がレギュラーの一角と占める、といった感じで、学年のバランスも良く取れていた。

出だしつまづいたが4位に

リーグ戦では初戦の日大戦を1-2で落とし、第2戦も、天皇杯予選で3-0の勝利をおさめている拓大に1-2で敗れるという波乱のスタートとなった。いずれも、まずまずの試合運びをしながら、決定的なチャンスをものにできず、一方、バックラインも、完全に崩されている訳ではないのに、失点を

喫するという戦いぶりだった。拓大戦終了後、諸先輩の肝入りで「山下」でのミーティングが行われ、精神面を含めた立て直し策が協議された。

拓大戦後、バックセンターの笠原主将が負傷したため、フォワードの柴田をバックに下げ、スーパーシステムに変更して臨んだ中盤戦以降は、前年首位の最強の農大に1-1で引き分けて以降、学芸大に1-0で辛勝、成城大は6-1で大勝と快進撃を続けた。第6戦の上智大も2-1で破り、最終戦の順天堂大戦は、勝てば2位というところまで順位を上げた。順天堂大戦は、結局、前半の0-1の劣勢をくつがえすことができず、1-2で惜敗、3勝3敗1分け、勝ち点7で4位でシーズンを終えた。

再び上昇気流に乗る期待も

このシーズンで特筆すべき戦いは、秋のリーグ戦終了1週間後に行われた西が丘競技場での天皇杯関東2次予選の法政大戦だ。前半、バックを抜き去り、キーパーをかかわした植村のゴールで先制し、後半追いつかれたものの堅い守備で追加点を許さず、1-1のままPK戦に持ち込んだ。PK戦は4-5で惜しくも勝利を逃して苦杯をなめたが、その充実した闘いぶりは、ここ数年間、入試中止などの影響に苦しんできた東大が、ようやくその苦境から脱却し、再び上昇気流に乗るところまでこぎつけたひとつの証として、部員や関係者に大きな希望を与えた。（岡田滋行）

主将回顧

夏の検見川。くそ暑い日々、練習中に水を飲むなどもってのほかという当時の妄信のもと、汗を流したこと。鍛えられたのは精神力と忍耐力。3年生の時、「1年上の年代が抜けた穴は埋められる、下級生にも人材はいるしなんとかなる」と臨んだリーグ戦はやはり甘くはなかった。4年生になり、主将として臨んだ秋のリーグ戦。第2戦で右太ももを打撲し、残りの5試合を欠場。皆には本当に迷惑をかけたが、仲間があつての自分であったと改めて認識した。我々の時代は過渡期であった。メキシコ五輪後のサッカーブームで経験者が増え、大学からのスタートでは技術的に追い付けなくなった時代。下部の大学が、高校の有望選手を集めたチームを作り、次々に昇格してきた時代でもあった。（笠原昌行）

1973年度（昭和48年度）

公式試合記録

・春季対抗戦

4月 日 ● 0-2 法大（法大）
 月 日 ● 0-1 東教大（東教大）
 月 日 △ 1-1 拓大（拓大）
 PK 1-3

・国公立

6月3日 1回戦 ○ 3-0 東教大（東教大）
 6月10日 準決勝 ○ 5-2 東学大（東教大）
 6月17日 決勝 ○ 3-2 東工大（東教大）

・京都大学定期戦

7月1日 △ 2-2 京大（御殿下）

・天皇杯

関東1次

8月26日 1回戦 ○ 4-1 宇商OBクラブ（御殿下）
 9月2日 2回戦 ○ 3-0 拓大（御殿下）
 9月16日 3回戦 ○ 2-0 日立水戸勝田（笠松運動公園）

関東2次

11月11日 1回戦 ● 1-1 法大（西が丘）
 PK 4-5

・関東大学リーグ2部

9月29日 ● 1-2 日大（御殿下）
 10月7日 ● 1-2 拓大（御殿下）
 10月10日 △ 1-1 東農大（御殿下）
 10月14日 ○ 1-0 東学大（御殿下）
 10月27日 ○ 6-1 成城大（御殿下）
 10月31日 ○ 2-1 上智大（西が丘補助）
 11月4日 ● 1-2 順天大（御殿下）
 3勝3敗1分 4位

- ・部長 田村三郎
- ・監督 浅見俊雄
- ・主将 笠原昌行
- ・主務 西澤良徳、兵頭圭介
- ・練習 御殿下
- ・部室 御殿下地下

出場選手

相手	春季対抗戦		天皇杯				関東大学リーグ2部						
	法大	京大	宇商OB	拓大	日立水戸	法大	日大	拓大	東農大	東学大	成城大	上智大	順天大
GK	吉沢	吉沢	吉沢	吉沢	吉沢	吉沢	吉沢	吉沢	吉沢	吉沢	吉沢	吉沢	吉沢
FB	山中	天野	天野	天野	天野	天野	天野	天野	天野	天野	天野	天野	天野
	笠原 尾崎	笠原 山中	笠原 山中 (森井)	笠原 山中 (森井)	笠原 山中	柴田 尾崎	笠原 山中	笠原 山中	尾崎 柴田	尾崎 柴田	尾崎 柴田	尾崎 柴田	柴田 尾崎
	佐々木	三田 (池森)	佐々木	佐々木	佐々木	山中	佐々木	佐々木	山中	山中	山中	山中	山中
HB	三田	佐々木	内田	荒川	三田 (田中)	佐々木	荒川	三田 (森井)	内田	内田	内田	内田	内田
	内田 (荒川) 遠藤	遠藤	山辺 (田中) 植村	植村	遠藤	内田	植村 (三田) 遠藤	遠藤	佐々木	佐々木	佐々木	佐々木	佐々木
	田中 (山辺)	宮武	遠藤	宮武	植村	荒川 (笠原) 遠藤	森井 (田中)	山辺 (田中)	山辺	荒川 (森井) 遠藤	山辺 (森井)	山辺	遠藤 (田中)
FW	宮武	御園 (田中) 山辺	宮武	柴田	宮武	植村 (山辺) 宮武	柴田	柴田	宮武	宮武	宮武	宮武	宮武
	御園	山辺	柴田	田中 (山辺)	柴田	宮武	宮武	宮武	遠藤	山辺 (田中)	植村 (田中)	植村 (森井)	植村 (山辺)

関東大学リーグ2部成績

	東農大	順天大	成城大	東大	拓大	日大	上智大	東学大	勝	負	分	得	失	差	点
東農大	-	△2-2	●2-3	△1-1	○4-1	○2-1	○4-2	○4-0	4	1	2	19	10	9	10
順天大	△2-2	-	●0-3	○2-1	○2-1	△2-2	○2-0	○1-0	4	1	2	11	9	2	10
成城大	○3-2	○3-0	-	●1-6	○3-2	●3-8	△3-3	○6-1	4	2	1	22	22	0	9
東大	△1-1	●1-2	○6-1	-	●1-2	●1-2	○2-1	○1-0	3	3	1	13	9	4	7
拓大	●1-4	●1-2	●2-3	○2-1	-	○6-0	●0-2	○2-1	3	4	0	14	13	1	6
日大	●1-2	△2-2	○8-3	○2-1	●0-6	-	△0-0	●2-3	2	3	2	15	17	-2	6
上智大	●2-4	●0-2	△3-3	●1-2	○2-0	△0-0	-	●0-1	1	4	2	8	12	-4	4
東学大	●0-4	●0-1	●1-6	●0-1	●1-2	○3-2	○1-0	-	2	5	0	6	16	-10	4

出足好調もリーグ戦は不振

主力の大半が不変の好条件

昭和49年度は主将柴田、副将山中という体制で1月より練習を開始。前年度より笠原、佐々木の主力メンバーも残り、レギュラーメンバーの大半が不変という好条件でスタートした。特に主将以下イレブンの半分以上がそれぞれ1年生のときからリーグ戦を経験しており、今年こそは上へ、の意気込みで臨んだ。兵頭、谷本の主務・副務体制および創部以来初めての西山由美子さんが女子マネを務めるなどゲームをバックアップする体制の強化面でも充実した。

春季対抗戦で初のベスト8に

教育大、早稲田大、青山学院大と同じ組の1次リーグは1勝2分で2位となり、春季対抗戦で初めて1次を突破し、準々決勝へ駒を進めた。対戦相手の明大ともほぼ互角に渡り合ったが0-1で惜敗。主要メンバーが固まって、守りが安定していたことが好成績につながったといえる。

京大戦は不敗記録を12年に

年度前半の目標を京大戦で勝つことにおいて、春季対抗戦や国公立大戦で作上げたチームがほぼベストの状態試合当日に臨むことができた。ゲームは、ある程度中盤で相手にボールを回させ、攻撃をスローダウンさせてバックスが確実にボールを奪う作戦が奏功し、FWのスピード、キープ力を活かした攻め方もチームとして統一され、1-0の僅差ではあったが、攻守に不安感のない快勝で、不敗連続記録を12年に伸ばした。

天皇杯は2年続け2次予選

天皇杯全日本選手権の予選は、夏季合宿での守備の意識統一という成果が表れ、日産自動車、東邦チタニウムの実業団強豪と関東リーグ2部の青山学院大を無失点で破り、2次予選へと駒を進めた。リーグ戦終了後に行われた2次予選では春に続き実質学生NO.1と言われた早稲田大と対戦した。相手の攻撃を分断しながら守ってカウンター攻撃を、という作戦をほぼ忠実に実行したが、前半に1点を失ったのが痛く、敗れた。

ペースが戻らず全く不本意

リーグ戦、初戦の相手は47、48年度のリーグ戦で連続して敗れている拓大。今年は実力的には十分に勝てる相手ではあったが、試合巧者振りを発揮されて不覚の1敗を喫する。優勝候補であった日大にも翌週負けてやっと目が覚め、第3戦（一橋大）で初勝利を挙げた。

次の青山学院大は直前の天皇杯予選では2-0と完勝しているながらも、雨の中で2点先行される苦しい展開で、終了直前に同点に追いつくのが精一杯であった。第5戦目の国士舘大とのゲームでも、互角以上に攻めたが先制点を挙げるチャンスを逃し、相手に2点先行されてしまった。劣勢を挽回しようと1点を返すが、反対に相手の逆襲を許し、更に2点を入れられるという不安定ぶりを露呈してしまった。残りの2試合を1勝1分で切り抜け、最終的には6位に留まったが、全く不本意なシーズンといわざるを得なかった。

この成績となってしまった要因の分析をシーズン終了後いろいろ行い、これが「闘魂」（第3号）を作成する動機にもなっている。（尾崎哲男）



春季対抗戦準々決勝対明治大学の試合に入定する両チームメンバー



リーグ戦対一橋大戦で相手バックスを抜いて攻めようとする山辺選手

1974年度（昭和49年度）

公式試合記録

・春季対抗戦

4月21日 予選リーグ ○ 3-1 東教大（東伏見）
 4月28日 予選リーグ △ 0-0 早大（東伏見）
 5月3日 予選リーグ △ 1-1 青学大（東伏見）
 5月6日 準々決勝 ● 0-1 明大（大宮）

・国公立

6月16日 1回戦 ○ 4-2 東外大（電通大）
 6月23日 2回戦 ● 0-2 一橋大（電通大）
 6月30日 3位決定戦 ○ 2-0 東学大（電通大）

・京都大学定期戦

7月6日 ○ 1-0 京大（京大農学部）

・七大戰

7月13日 準決勝 ○ 3-0 名大（検見川）
 7月15日 決勝 ○ 0-0 九大（検見川）
 PK6-5

・天皇杯

関東1次予選
 8月29日 ○ 1-0 日産自動車（新子安日産）
 9月1日 ○ 1-0 東邦チタニウム（御殿下）
 9月15日 ○ 3-0 青学大（姉ヶ崎運動公園）

関東2次予選

11月10日 ● 0-1 早大（東伏見）

・関東大学リーグ2部

9月22日 ● 1-2 拓大（御殿下）
 9月29日 ● 0-3 日大（幡ヶ谷東教大）
 10月5日 ○ 2-0 一橋大（浦和駒場）
 10月12日 △ 2-2 青学大（御殿下）
 10月19日 ● 1-4 国士大（大宮）
 10月26日 △ 0-0 順天大（御殿下）
 11月3日 ○ 4-3 成城大（御殿下）
 2勝3敗2分 6位

・部長 安藤良雄
 ・監督 浅見俊雄
 ・コーチ 古村一郎
 ・主将 柴田敏之
 ・副将 山中馨
 ・主務 兵頭圭介
 ・副務 谷本篤信
 西山由美子

・合宿 春季 3月24日～3月30日
 夏季1次 8月9日～8月16日
 夏季2次 8月25日～9月1日

・練習 御殿下
 ・部室 御殿下地下

出場選手

相手	春季対抗戦				定期戦				天皇杯				関東大学リーグ2部					
	東教大	早	青学大	明大	京大	日産	東邦チタ	青学大	早大	拓大	日大	一橋大	青学大	国士大	順天大	成城大		
GK	吉澤	吉澤	吉澤	吉澤	吉澤	吉澤	吉澤	吉澤	吉澤	吉澤	吉澤	吉澤	吉澤	吉澤	吉澤	吉澤		
FB	天野	天野	天野	天野	天野	天野	天野	天野	天野	天野	天野	天野	天野	天野	天野	天野		
HB	尾崎	柴田	柴田	柴田	柴田	柴田	柴田	柴田	柴田	柴田	柴田	柴田	柴田	柴田	柴田	柴田		
	田中	尾崎	尾崎	尾崎	笠原	笠原	笠原	笠原	笠原	笠原	笠原	笠原	笠原	笠原	笠原	笠原		
	山中	山中	山中	山中	山中	山中	山中	山中	山中	小野田	小野田	山中	山中	山中	山中	山中		
	柴田	田中	田中	田中	尾崎	山崎	山崎	尾崎	尾崎	山崎	山崎	山崎	尾崎	尾崎	尾崎	尾崎		
FW	荒川	荒川	荒川	荒川	佐々木	佐々木	佐々木	佐々木	佐々木	佐々木	佐々木	佐々木	佐々木	佐々木	佐々木	佐々木		
	池森	池森	池森	池森	遠藤	遠藤	遠藤	遠藤	遠藤	遠藤	遠藤	遠藤	遠藤	遠藤	遠藤	遠藤		
	(小野田)	山辺	山辺	山辺											山崎	山崎		
	植村	植村	植村	植村	植村	植村	植村	森井	植村	植村	植村	植村	植村	植村	植村	植村		
	宮武	宮武	宮武	宮武	森井	宮武	宮武	宮武	宮武	宮武	宮武	宮武	宮武	宮武	宮武	宮武		
	加藤				(山辺)	(山辺)	(加藤)	(牧野)		(山辺)	森井	森井	森井	森井	森井	加藤		
	(山辺)				(田中)	(山辺)	(加藤)	(牧野)		(尾崎)	(山辺)	(田中)	(牧野)					

関東大学リーグ2部成績

	日大	順天大	国士大	拓大	青学大	東大	一橋大	成城大	勝	負	分	得	失	差	点
日大	●0-1	○6-1	△1-1	○5-1	○3-0	○3-0	○9-0	5	1	1	27	4	23	11	
順天大	○1-0	△2-2	○3-2	●2-4	△0-0	○2-1	○3-1	4	1	2	13	10	3	10	
国士大	●1-6	△2-2	●1-2	△1-1	○4-1	○5-0	○7-0	3	2	2	21	12	9	8	
拓大	△1-1	●2-3	○2-1	△0-0	○2-1	●1-3	○3-1	3	2	2	11	10	1	8	
青学大	●1-5	○4-2	△1-1	△0-0	△2-2	●0-1	○5-1	2	3	3	13	12	1	7	
東大	●0-3	△0-0	●1-4	●1-2	△2-2	○2-0	○4-3	2	3	2	10	14	-4	6	
一橋大	●0-3	●1-2	●0-5	○3-1	○1-0	●0-2	○1-0	3	4	0	6	13	-7	6	
成城大	●0-9	●1-3	●0-7	●1-3	●1-5	●3-4	●0-1	0	7	0	6	32	-26	0	

リーグ戦は中位に敗れ失速

浅見監督の最後のシーズン

昭和50年のシーズンを前に、浅見先生から「今年が最後」と言われた我々にとって、最大の課題は「関東2部残留」であった。我々は1年生の時、とうとう関東リーグから東京都リーグへ落ちるかとうとうOB皆が心配した初めての下の入れ替え戦を、4-3と辛くも制して関東残留という苦い経験を持つ。だからこそ、少なくとも前年の6位以上の成績を挙げなくてはならないとの思いで一杯だった。

「2部優勝、1部復帰」という東大ア式蹴球部にとって当然のことを声高に言う前に、達成しなければならないことがあったのである。

我々には切札ともいえる戦力があつた。4年生となった決定力抜群の宮武、全日本クラスのテクニックを持つ植村という二枚看板である。彼らを生かすために、安定した守備の構築とサポート役となる中盤・FWの育成が急務となった。

その結果、BKは全員経験豊かな4年生でまとまったが、中盤は激しいポジション争いが続き、各学年一人ずつということとなった。しかし、結果としてそれぞれに一長一短があり、二枚看板を自由に操るレベルには最後まで到達できなかった。

春季対抗戦は3戦して3敗

高校サッカーの有力選手を擁する東農大・日体大・順大との春季対抗戦は、実質3学年で戦わざるを得ない東大にとって彼我の力の差はいかんともしがたく、3戦して3敗という結果に終わった。ただ、3戦すべてを1点差でしのげたことは、秋のリーグ戦につながるものとして、期待できるものであった。

京大戦を制した後、万全の準備で臨むべきリーグ戦直前に、守備の要であった小野田が骨折により離脱し、急いで、前年度の主将で留年していた柴田選手に復帰を要請せざるを得ないこととなった。FWとして個人技に優れた柴田選手は、SWとしてもその本領を発揮した。この結果、守備は最上級生で固めたこともあってある程度安定し、6位が決まった後の最終戦である青学大戦を除けば平均1失点に抑える結果となった。

ただ、技術の差を目の当たりにし、負けたくない一心の我々にとって、パスでボールをつなぐことは

二の次となり、とにかく前に蹴る、自陣より遠くでプレーするということが、事実上、最大の命題となってしまう感は否めない。これでは勝てない。宮武・植村の二枚看板は色あせ、二人をどう生かすかよりも、とにかく安全策として「蹴る」ことを皆が第一とせざるを得なかった。彼ら二人の思いはいかばかりであったか、さぞや無念であったであろうと思う。

体力、戦術は劣ってないが

リーグ戦の結果は上位（順大・国士大）と下位（立大・一橋大）に引き分け、中位（青学大・明大・拓大）に敗れるという残念なものに終わった。が、しかし、思い返せば、あともう少し頑張れば、あるいはボールが思うように動いていれば2位になれたかもしれない。つまり（サッカーとはそういうものなのかもしれないが）最終戦の青学大戦以外はすべて勝てたかもしれない試合ばかりだったように思われてならない。

技量の差はいかんともしがたいが、体力、戦術は決して劣ってはいなかったように思う。問題は考えたことがどれだけその場で実現できるかという、やはり技術に戻ってしまうのだが・・・。

国公立大戦は3位決定戦敗退、天皇杯は2次予選で敗退と総じて結果を残せなかった感のある50年度だが、実力はほんの少しの運不運の差という思いがする。しかし、あの時ああしていれば、などとタラレバの世界に浸ってはならず、運をつかみ取るのも実力というものなのであろう。

全日本Bやトップ級と試合

検見川での春合宿で全日本Bの練習台となり、0-3で敗れた。有名選手との一戦に皆少々上がり気味ではあったが、実力差を埋めるために弱者がとる「ブツ切り戦法」が決まり、後半は0-0で抑えた。テクニシャンの植村は自らの技術が通用してただけに慥然としていたが、皆一様に興奮していた。

その他、朝鮮大、YCAC（横浜外人クラブ）などに加え、日立や古河電工といった日本リーグのチームとも当たり前のように試合ができた時代であった。

（南谷尚志）

公式試合記録

・春季対抗戦

4月20日 予選リーグ ● 0-1 東農大（東農大）
 4月27日 予選リーグ ● 0-1 日体大（東農大）
 5月3日 予選リーグ ● 1-2 順天大（東農大）

・国公立

6月8日 2回戦 ○ 6-0 電通大（御殿下）
 6月14日 準決勝 ● 2-2 一橋大（東学大）
 PK 3-4
 6月22日 3位決定 ● 2-3 東学大（御殿下）

・京科大学定期戦

6月29日 ○ 2-1 京大（御殿下）

・天皇杯

関東1次予選
 8月24日 ○ 3-0 日本製鋼（御殿下）
 関東2次予選
 8月31日 ● 0-3 日立水戸勝田（検見川）

・関東大学リーグ2部

9月21日 △ 1-1 国士大（御殿下）

9月27日 ● 0-1 拓大（御殿下）
 10月12日 △ 1-1 一橋大（大宮）
 10月15日 ● 1-2 明大（明大）
 10月18日 △ 1-1 順天大（御殿下）
 10月26日 △ 0-0 立大（御殿下）
 11月2日 ● 1-5 青学大（御殿下）
 0勝3敗4分 6位

・部長 安藤良雄
 ・監督 浅見俊雄
 ・コーチ 武田厚、遠藤譲、兵頭圭介
 ・主将 池森俊文
 ・副将 南谷尚志、宮武明
 ・主務 谷本篤信
 ・副務 茅野浩一、西山由美子

・合宿 春季 3月29日～4月3日 検見川
 夏季 7月28日～8月1日 山中湖
 8月9日～8月17日 検見川1次
 8月25日～8月31日 検見川2次

・練習 御殿下
 ・部室 御殿下地下

出場選手

相手	春季対抗戦			天皇杯予選		定期戦	関東大学リーグ2部						
	東農大	日体大	順天大	日本製鋼	日立水戸	京大	国士大	拓大	一橋大	明大	順天大	立大	青学大
GK	藤原	藤原	藤原	青山	青山(陽)	藤原	藤原	藤原	藤原	青山	青山	青山	青山
FB	池森 小野田 影本 南谷	池森 小野田 影本 南谷	池森 多田 (森井) 影本 南谷	池森 小野田 影本 南谷	池森 宮 影本 南谷	池森 小野田 影本 南谷	柴田 池森 影本 南谷(宮)	柴田 池森 影本 宮	柴田 池森 影本 南谷	柴田 池森 影本 南谷	柴田 池森 影本 南谷	柴田 池森 影本 南谷	田中靖 池森 影本 南谷
HB	田中靖 池田 (牧野) 加川	田中靖 (牧野) 池田 (山崎) 加川	田中靖 池田 (宮) 加川	田中靖 池田 (加川) 牧野 (杉浦)	山崎 吉野 (加藤) 植村	田中靖 (牧野) 吉野 加川	山崎 吉野 植村	山崎 (杉浦) 吉野 植村	山崎 (加藤) 吉野 宮 (杉浦)	山崎 吉野 宮	山崎 吉野 宮	山崎 吉野 宮	山崎 (陽) 吉野 (井田) 堀井
FW	植村 宮武 加藤 (杉浦)	植村 宮武 加藤	植村 宮武 牧野	山崎 宮武 加藤	田中靖 宮武 井田	植村 宮武 加藤 (池田)	加藤 宮武 加川	加藤 宮武 田中靖 (加川)	植村 宮武 田中靖 (加藤)	植村 宮武 田中靖 (加川)	植村 宮武 加藤 (加川)	植村 (田中靖) 宮武 加藤 (加川)	植村 宮武 柴田

関東大学リーグ2部成績

	順天大	国士大	青学大	明大	拓大	東大	立大	一橋大	勝	負	分	得	失	差	点
順天大	—	○3-0	○3-2	○1-0	○1-0	△1-1	○3-1	○2-1	6	0	1	14	5	9	13
国士大	●0-3	—	○2-0	△3-3	○4-0	△1-1	○6-0	△0-0	3	1	3	16	7	9	9
青学大	●2-3	●0-2	—	△0-0	○2-0	○5-1	○3-1	○2-1	4	2	1	14	8	6	9
明大	●0-1	△3-3	△0-0	—	△0-0	○2-1	○2-0	○3-1	3	1	3	10	6	4	9
拓大	●0-1	●0-4	●0-2	△0-0	—	○1-0	○3-1	○1-0	3	3	1	5	8	-3	7
東大	△1-1	△1-1	●1-5	●1-2	●0-1	—	△0-0	△1-1	0	3	4	5	11	-6	4
立大	●1-3	●0-6	●1-3	●0-2	●1-3	△0-0	—	○5-0	1	5	1	8	17	-9	3
一橋大	●1-2	△0-0	●1-2	●1-3	●0-1	△1-1	●0-5	—	0	5	2	4	14	-10	2

忘れ得ぬ劇的な拓大戦勝利

体力を徹底的に鍛える

1976年度は一言で言えば非常に厳しい一年であった。戦力的には、前年度の「にぎやかな」4年生が抜け、全体的に「おとなしい」4年生が6人で、主戦力は留年の小野田さん、3年生、また東京教育大で選手をしていた1年生の平林などに頼らざるを得ない状況であった。特に留年までして我々と1年を過ごしてくれた小野田先輩には心から感謝している。

新体制としては、目標は高くということで、一度看板を降ろした「1部復帰」としたものの、現実的には体力面、技術面、戦術面どれを見ても課題が非常に多かった。すべての面で同時併行的に大幅なレベルアップは余りにもチャレンジングであるという判断から、まずは基礎体力、走力を徹底的に鍛えることとした。

まず行ったことは冬の陸トレである。3月上旬、駒場のトラックと体育館で1週間、足立先生の指導の下、徹底的に走力と筋力のアップを目指した。またゴールデンウィークにも異例の検見川合宿を行い、ボールを扱いながらも冬のトレーニング成果のイメージを失わないよう心掛けた。

入れ替え戦を免れる

しかし結果的には公式戦は負けがこんだ。京大戦では、20年ぶりの敗戦（途中で引き分けはあった）。ちなみにこの年、京大は強力な布陣で、秋のリーグ戦では関西リーグ2部で優勝して関西リーグ1部へ

の返り咲きを果たした。

秋のリーグ戦は上位と下位の戦績が明確に分かれ、東大、拓大、一橋大の3チームが最終戦まで下位リーグとの入れ替え戦のかかった争いをするという厳しいシーズンとなった。最終戦の拓大戦は、勝った方が入れ替え戦を免れ、敗者と一橋大が入れ替え戦出場、引き分けた場合は東大と拓大が入れ替え戦出場という大一番となった。試合は1-1のまま試合終了まで残り2分まで進んだが、最後に3年生の阿部が左からドリブルで切れ込んで鮮やかなシュートを決め、かくも2-1で勝利するとともに入れ替え戦を免れた。試合終了のホイッスルと同時に東大は優勝したかのように大騒ぎとなった。

本当に苦しい一年だっただけに、この一戦は何年たっても忘れることができない。

思い出す冬のトレーニング

思い出としては、冬の駒場での陸上トレーニングには、当時の日本リーグ1部のフジタ工業も参加した。ブラジルから来た、カルバリオという選手も一緒だったが、普通に走るだけなら全然大したことがないのに、いざボールを持つと別人になったのを目の当たりにした。

またトレーニングでは、徹底的に走ってサーキットで絞られ、それまで余り使ったことのない筋肉を酷使したためすさまじい筋肉痛となり、駒場東大前駅の階段を前向きに降りられず、手すりにしがみついて後ろ向きになって降りたことを思い出す。

（藤原真一）



前列左より 森井、三島、藤原
後列左より 岩田、池田、小野田、加藤
（卒業アルバムより）



春季対抗戦 対東教大

公式試合記録

・春季対抗戦

4月20日 予選リーグ ● 0-8 法大（法大）
 4月27日 予選リーグ ● 0-2 東教大（法大）
 5月3日 予選リーグ ● 0-3 国士大（法大）

・国公立

5月30日 1回戦 ○ 6-0 芸大（御殿下）
 6月6日 2回戦 ● 0-2 東学大（東学大）

・京都大学定期戦

7月4日 ● 1-3 京大（京大農学部）

・天皇杯

関東1次予選
 8月22日 ● 2-3 東京蹴球団（御殿下）

・関東大学リーグ2部

9月19日 ● 0-3 青学大（御殿下）
 9月25日 ● 1-2 明大（御殿下）
 10月3日 ● 1-5 順天大（御殿下）
 10月9日 ● 0-6 国士大（駒沢）
 10月17日 ● 0-1 立大（御殿下）
 10月23日 ○ 3-0 一橋大（御殿下）
 10月30日 ○ 2-1 拓大（御殿下）
 2勝5敗 5位

・部長 安藤良雄

・総監督 浅見俊雄

・監督 武田 厚

・コーチ 小柳 望、兵頭 圭介

・主将 藤原真一

・主務 岩田武史

・練習 御殿下

・部室 御殿下地下

出場選手

相手	定期戦	関東大学リーグ2部						
		京大	青学大	明大	順天大	国士大	立大	一橋大
GK	青山	青山	青山	青山	青山	青山	青山	青山
FB	宮	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野
	小野田 山崎	小野田 山崎	小野田 山崎	小野田 山崎	小野田 山崎	宮 山崎	小野田 山崎 (猪熊)	小野田 山崎
HB	潜道 池田	宮崎 宮	宮崎 宮 (池田)	宮崎 宮	宮崎 宮	宮崎 宮	宮崎 池田	宮崎 池田 (猪熊)
	吉野 飯島	飯島 平林	飯島 平林	平林 飯島	飯島 牧野 (森井)	池田 飯島	飯島 牧野	飯島 牧野 (加藤)
FW	平林	牧野 (湊)	菊地 (加藤)	菊地	平林	平林 (井田)	平林	平林
	阿部 (井田淳) 森井 (加藤)	阿部	阿部	阿部	阿部	阿部	阿部	阿部
		菊地 (広瀬)	牧野	加藤 (井田)	加藤 (井田)	加藤 (森井)	菊地	菊地

関東大学リーグ2部成績

	国士大	明大	青学大	順天大	東大	立大	一橋大	拓大	勝	負	分	得	失	差	点
国士大	-	△1-1	○3-2	○2-0	○6-0	○3-0	○3-0	○1-0	6	0	1	19	3	16	13
明大	△1-1	-	△0-0	○1-0	○2-1	○1-0	○4-1	○2-1	5	0	2	11	4	7	12
青学大	●2-3	△0-0	-	△0-0	○3-0	○4-0	○3-2	○1-0	4	1	2	13	5	8	10
順天大	●0-2	●0-1	△0-0	-	○5-1	○6-0	○2-1	○3-0	4	2	1	16	5	11	9
東大	●0-6	●1-2	●0-3	●1-5	-	●0-1	○3-0	○2-1	2	5	0	7	18	-11	4
立大	●0-3	●0-1	●0-4	●0-6	○1-0	-	●0-3	○1-0	2	5	0	2	17	-15	4
一橋大	●0-3	●1-4	●2-3	●1-2	●0-3	○3-0	-	△0-0	1	5	1	7	15	-8	3
拓大	●0-1	●1-2	●0-1	●0-3	●1-2	●0-1	△0-0	-	0	6	1	2	10	-8	1

関東リーグからの陥落決定

サッカーが生活の中心に

いつの時代もそうであったと思うが、われわれの学生時代もサッカーが生活の中心だった。駒場の授業は練習日の5限目（3、4限目も？）は出席せず、駒場東大前から井の頭線、銀座線、丸の内線を乗り継いで土煙の舞う御殿下グラウンドまで通った。全体の練習が終わり、日が暮れてボールが見えなくなってきても、“金太郎”（カラーコーンの東大サッカー部での呼称）でゴールを作り“チビ蹴”、部室入り口でのバーベルを用いた筋力訓練、その後は“珊瑚”“駒”（雀荘）での室内遊戯で時間が過ぎていったものだ。日曜日は、朝の子供サッカー教室コーチが貴重な収入源で、昼に“弥生”の鍋焼きうどんを食べて、午後2時からの練習という日課だ。ほとんど毎日、一日の大部分をサッカー部の仲間と過ごしていた。

前年のリーグ戦は辛うじて残留という成績だったが、レギュラーメンバーが多数残っていたので、武田監督の下、上位チームに勝って上の入れ替え戦を目指すという目標を立て、いいムードでスタートした。しかし、結果としては関東リーグから陥落するという不名誉な歴史を残すことになってしまった。やはり、体力と技術という基本的能力の総和が上位チームと比較して劣っており、当初は気合い十分で採択したこの方針は、結果的には間違っていたことになる。しかし、今振り返ればアマチュアの学生サッカーなので、“夢は大きく”と考えれば、あれで良かったと思う。

入れ替え戦は1点が届かず

この年の4年生、すなわちわれわれの代は、1年からレギュラーでバックの要の山崎や、3年から急成長のCF阿部、チームの支えGK青山が中心となり、3年の宮、吉野、2年の飯島、湊、宮崎、平林などとうまくかみ合うと強いチームだった。春季対抗戦では1部の格上チームに真っ向勝負を挑み、敗れはしたが“やれるぞ”との手ごたえがあり、夏の京大戦では前年の借りを返すことができた。

しかし、シーズン初めは豊富な運動量でいいゲームもできたが、夏にけが人が続出し、チーム作りがままならず、秋のリーグ戦では、格上に正面から突

っかかって粉砕されるという春からのパターンの修正が出来ず、結局1勝1分5敗に終わり、よもやの入れ替え戦となってしまった。立正大との入れ替え戦では、第1試合で関東の立教大が東都の駒沢大に粉砕されたこともあり、雰囲気は飲まれて力を発揮できず、1点が届かず関東リーグから陥落という結果になってしまった。駒沢競技場のロッカールームで皆うつむいて、なかなか顔があげられなかったというのは辛い思い出である。

時代の流れに抗し切れずに

思えばわれわれが入学した1974年以降、東大サッカー部は関東リーグから陥落の危機を毎年際どく乗り切っていたのが実情であり、1975年シーズンも強力な4年生メンバーがいたにもかかわらず、リーグ戦では1勝もできなかったし、1976年シーズンも、最終試合で阿部のゴールで際どく勝って、関東に残ったという状況だった。われわれの代も時代の流れに必死に抵抗するも、ついにその瞬間を迎えてしまったということになるのだろう。

最後にわれわれの代（4年生）のメンバーを紹介しておく、主将の山崎、安定感を増した副将のGK青山、忠実プレーが身上のストッパー本庄、コンスタントに力を発揮したサイドバック猪熊、知性的パスを配給する加川、蜂の刺しが得意のFW阿部、華麗なドリブラーFW牧野、主務として献身的にチームに尽くした森、そして足は速かったが安定して力を発揮できなかったFW井田である。けがやその他の事情で最終学年を待たずにサッカー部を去った西脇、潜道などの仲間もいたことも付記する。

（山崎隆志、井田淳）



（上）山崎、松浦（早大）、青山



（下）西野（早大）、本庄、平林
いずれも春季対抗戦
対早大
1977年4月10日

公式試合記録

・春季対抗戦

4月10日 予選リーグ ● 1-4 早大（東伏見）
 4月16日 予選リーグ ● 0-2 日大（東伏見）
 4月23日 予選リーグ ● 1-2 順天大（東伏見）

・総理大臣杯

5月15日 1回戦 ● 2-5 早大（御殿下）

・国公立

6月11日 1回戦 ○ 2-0 東学大（御殿下）
 6月12日 2回戦 ○ 10-0 農工大（御殿下）
 6月18日 準決勝 ○ 1-1 筑波大（御殿下）
 PK 4-3
 6月19日 決勝 ○ 3-1 一橋大（御殿下）

・京都市大定期戦

6月26日 ○ 1-0 京大（御殿下）

・天皇杯

関東1次予選
 8月28日 ○ 2-1 山梨大（御殿下）
 9月4日 ○ 5-2 茨城大（御殿下）
 関東2次予選
 11月13日 ● 0-5 中大（御殿下）

・関東大学リーグ2部

9月25日 ● 0-2 順天大（御殿下）

10月2日 ● 0-2 青学大（御殿下）
 10月9日 ● 0-6 明大（駒沢）
 10月16日 △ 2-2 慶大（東伏見）
 10月22日 ● 1-3 専大（駒沢）
 10月30日 ● 1-3 拓大（御殿下）
 11月6日 ○ 3-0 立大（西が丘サブ）
 1勝5敗1分 7位

・入替戦

11月26日 ● 1-2 立正大（駒沢）
 東京都 1部に降格

・部長 安藤良雄
 ・監督 武田厚
 ・コーチ 小柳望
 ・主将 山崎隆志
 ・主務 森俊勝

・合宿 春季 3月 検見川
 GW 5月 検見川
 夏季1次 7月 新日鉄釜石
 夏季2次 8月 検見川
 入替戦 11月 検見川

・練習 御殿下
 ・部室 御殿下地下

出場選手

相手	春季対抗戦			総理大臣杯	定期戦				天皇杯				関東大学リーグ2部						入替戦
	早大	日大	順天大	早大	京大	山梨大	茨城大	中大	順天大	青学大	明大	慶大	専大	拓大	立大	立正大			
GK	青山	青山	青山	青山	青山	青山	青山	吉江	青山	青山	青山	青山	青山	青山	吉江	青山			
FB	山崎	吉野	吉野	吉野 (井田陽)	吉野	佐藤	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野			
	本庄	本庄	本庄	本庄	本庄 (佐藤)	井田陽	本庄	井田陽	本庄	本庄	本庄	井田陽	本庄	井田陽	井田陽	井田陽			
	宮崎	宮崎	宮崎	宮崎	宮崎	宮崎	宮崎	宮崎	宮崎	宮崎	宮崎	宮崎	宮崎	宮崎	宮崎	宮崎			
	猪熊	猪熊	猪熊	猪熊	猪熊	青山市	猪熊	猪熊	猪熊	猪熊	猪熊	猪熊	猪熊	猪熊	猪熊	猪熊			
HB	宮	宮	宮	宮	宮	宮	宮	宮	宮	宮	宮	宮	宮	宮	宮	宮			
	吉野	湊	湊	湊	湊 (安藤)	湊 (柿木)	湊	湊	湊	湊	湊	湊	湊	湊	湊	湊			
	飯島	飯島	飯島	飯島	飯島	飯島	飯島	飯島	飯島	飯島	飯島	飯島	飯島	飯島	飯島	飯島			
FW	平林	菊地	菊地	菊地	平林	井田淳	井田淳	井田淳	平林	平林	平林	平林	平林	平林	井田淳	井田淳			
	阿部	阿部	阿部	阿部	阿部	阿部	山本 (阿部)	阿部	阿部	阿部	阿部	阿部	阿部	阿部	阿部	阿部			
	牧野 (湊)	牧野	牧野	牧野	牧野	牧野 (山本)	牧野 (平林)	牧野	牧野	牧野 (安藤)	牧野	牧野 (福田)	牧野	牧野	牧野	牧野			

関東大学リーグ2部成績

	明大	順天大	慶大	青学大	専大	拓大	東大	立大	勝	負	分	得	失	差	点
明大	-	○2-0	○1-0	○2-1	△0-0	●1-2	○6-0	○5-0	5	1	1	17	3	14	11
順天大	●0-2	-	△2-2	○2-1	○3-0	○4-0	○2-0	○5-0	5	1	1	18	5	13	11
慶大	●0-1	△2-2	-	●2-3	○4-0	○5-0	△2-2	○4-1	3	2	2	19	9	10	8
青学大	●1-2	●1-2	○3-2	-	△1-1	○4-1	○2-0	△0-0	3	2	2	12	8	4	8
専大	△0-0	●0-3	●0-4	△1-1	-	△0-0	○3-1	○4-0	2	2	3	8	9	-1	7
拓大	○2-1	●0-4	●0-5	●1-4	△0-0	-	○3-1	△1-1	2	3	2	7	16	-9	6
東大	●0-6	●0-2	△2-2	●0-2	●1-3	●1-3	-	○3-0	1	5	1	7	18	-11	3
立大	●0-5	●0-5	●1-4	△0-0	●0-4	△1-1	●0-3	-	0	5	2	2	22	-20	2

関東リーグ復帰狙ったが

初の東京都リーグは6位

昨昭和52年11月26日に立正大との入れ替え戦に敗れ、ついに関東リーグ2部から陥落した。これにより本年は初めて東京都大学リーグ1部で戦うことになった。

東京都大学リーグではAクラスを確保して、関東大会出場を果たすことは当然であり、そのトーナメント優勝はもちろん、入れ替え戦に勝って関東リーグへ復帰するという目標を、OB諸兄から当然のように期待されてのスタートであった。

前年からの膝の故障を抱えた山崎、平林ともに十分な出場を果たせず、エース飯島（正）も各チームの徹底したマンマークに苦しみ結果を出せなかった。

新婚生活を犠牲にして指導して下さった古村監督に報いることができず、悔いの残るシーズンであった。

やっと東京都1部に残留

何故こんなに情けない思い出ばかり浮かんで来るのだろう、というのが東大サッカー史を編集するに当たり主将の回顧録を寄稿せよとのお達しを受けて、30年前を振り返ってみた直後の素直な感想である。

まずは秋のリーグ戦。昭和52年の納会で、胸を張って「来年は優勝し、関東リーグ復帰が目標」と雄々しく宣言したものの、結果は1勝3分け3敗で6位と無残な成績、しかも最下位とは勝ち点1差で何とか東京1部に残留できたという、まあ何とも情けない結果であった。でも正直なところ、2年連続しての降格を何とか避ける事が出来て本当に良かった。



リーグ戦 対立大

左から

宮崎、菊池、井田、安藤、吉江、吉野、坂田、福田、平林

京大戦に完敗

次が京大戦。たまたま京大の主将であるT君が私とは高校で主将・副主将を務めた間柄であったため、絶対に負けたくない試合だったのだが、結果は0-3の完敗。しかも3点目は私自身がT君に抜かれて失ったもの。打ち上げの懇親会で満面に笑みを浮かべた彼の自慢たらたら発言に、返す言葉もなかった。ただうつつむいているだけの自分を思い出して、再び情けない気持ちになる。

抜かれて点を取られたといえば、前年の立正大との入れ替え戦も同様だ。前半に先制され、後半間もなく私が何とも鮮やかな同点ゴールを決めて、「これで今日はヒーローかな」なんて甘い考えを持っていた時間帯に、私のミスから決勝点を決められての敗戦、降格。「平生ならあり得ないことにお前が点など取るから」と言う先輩の冗談めいた発言が、今でも心に刺さったままで、三度情けない気持ちになる。

主将の回顧録がこれでは目いっぱい盛り下がってしまうが、事実なので致し方ない。同期の皆さん、先輩諸氏、後輩諸君、情けない主将でしたが何とぞご容赦のほどをお願いする。

とは言え、同じ釜の飯を食った昭和54年卒の仲間5人（吉野元章、吉江建一、岸戸健、上村司と私）と途中退部の2人（広瀬一郎、小寺昇二）を加えた7人での今でも続く付き合いは、私にとってはかけがえのないものである。今では全員腹が出たり、頭が薄くなったりと、かつてのりりしい面影は全くないが、たまの集まりでサッカーの話をさかんに、過去、現在そして未来を語り合うのは、大げさかも知れないがある意味「至福の時」だと思っている。

（宮 恭久）



京大戦開会式

左から

湊、宮崎、井田、安藤、吉野、吉江、宮、高岡（京大主将）

公式試合記録

・天皇杯兼総理大臣杯

4月16日 1回戦 ○ 0-0 一橋大（御殿下）
PK 4-2
4月23日 2回戦 ○ 3-0 創価大（御殿下）

・天皇杯

関東一次予選
8月27日 ● 2-6 警視庁（御殿下）

・春季対抗戦

5月14日 予選リーグ 不明 成城大（一橋大）
5月21日 予選リーグ ● 1-3 一橋大（一橋大）
5月28日 予選リーグ △ 3-3 成蹊大（一橋大）

・国公立

6月24日 1回戦 ● 1-3 一橋大（御殿下）

・京都大学定期戦

7月9日 ● 0-3 京大（京大農学部）

・東京都大学リーグ1部

9月10日 ○ 2-0 上智大（御殿下）

9月16日 ● 1-2 自由学園（御殿下）
9月23日 △ 0-0 亜大（御殿下）
9月30日 △ 1-1 明学大（御殿下）
10月8日 △ 1-1 成蹊大（御殿下）
10月14日 ● 1-2 東学大（御殿下）
10月22日 ● 1-5 立大（御殿下）
1勝3敗3分 6位

・部長 渡辺洋三
・監督 古村一郎
・主将 宮恭久
・副将 吉江建一、吉野元章
・主務 岸戸健
・学連 上村司

・合宿 春季 検見川
夏季1次 検見川
夏季2次 検見川
・練習 御殿下
・部室 御殿下地下

出場選手

相手	天皇杯			定期戦		東京都大学リーグ1部					
	一橋大	創価大	警視庁	京大	上智大	自由学園	亜大	明学大	成蹊大	東学大	立大
GK	吉江	吉江	吉江	吉江	吉江	吉江	吉江	吉江	吉江	吉江	吉江
FB	吉野	吉野	宮	吉野	宮	宮	宮	宮	宮	宮	宮
	井田 (平林)	井田	坂田	安藤 (坂田)	安藤	安藤	安藤	安藤	安藤	安藤	安藤
	宮崎	佐藤	安藤 (佐藤)	宮崎	青山 (坂田)	宮崎	宮崎	宮崎	宮崎	宮崎	宮崎
	青山	青山	井田	井田	井田	井田	井田	井田	井田	井田	井田
HB	湊	福田	宮崎	宮	宮崎	吉野	坂田	坂田	坂田	吉野	吉野
	佐藤	湊	湊	湊	吉野	坂田	湊	吉野	吉野	福田 (青山)	坂田
FW	飯島	飯島	吉野	柿木 (福田)	湊	湊	吉野	湊	湊	湊	福田
	菊池	山崎 (平林)	柿木	山崎	柿木 (清水)	飯島	飯島	飯島	福田	飯島	飯島
	山本 (宮)	菊池	菊地	菊池	菊池	菊池	菊池	菊池	菊池	菊池	菊池 (湊)
	清水	柿木	清水	飯島	飯島	清水 (山崎)	福沢 (柿木)	福田 (柿木)	飯島	柿木 (平林)	平林

東京都大学リーグ1部成績

	東学大	明学大	立大	自由学園	成蹊大	東大	亜大	上智大	勝	負	分	得	失	差	点
東学大	△2-1	●0-1	○2-1	○2-0	○2-1	○3-0	△1-1	5	1	1	12	5	7	11	
明学大	●1-2	△2-2	○5-0	○3-0	△1-1	○3-1	○2-0	4	1	2	17	6	11	10	
立大	○1-0	△2-2	●1-2	●0-1	○5-1	○3-1	○7-0	4	2	1	19	7	12	9	
自由学園	●1-2	●0-5	○2-1	●1-3	○2-1	△1-1	○3-2	3	3	1	10	15	-5	7	
成蹊大	●0-2	●0-3	○1-0	○3-1	△1-1	●2-3	△1-1	2	3	2	8	11	-3	6	
東大	●1-2	△1-1	●1-5	●1-2	△1-1	△0-0	○2-0	1	3	3	7	11	-4	5	
亜大	●0-3	●1-3	●1-3	△1-1	○3-2	△0-0	●1-2	1	4	2	7	14	-7	4	
上智大	△1-1	●0-2	●0-7	●2-3	△1-1	●0-2	○2-1	1	4	2	6	17	-11	4	

関東リーグ復帰またならず

4年生は人数的にも大勢力

1977年に関東リーグから陥落し、2年目のシーズンを迎えた。過去2年間の苦い経験を踏まえ、内田先輩（昭49年卒）を新監督に迎え、最上級生を中心にチームはスタートした。われわれ4年生は人数的にも大勢力であったが、平林、飯島、宮崎などは1年生のときから先発メンバーとして出場しており、チームの要であった。この年のリーグ戦初戦においても、宮崎、井田、菊地、青山、佐藤、柿木、飯島と7人の4年生がスターティングメンバーに名を連ねており、攻守の中心を4年生で固めたチームになっていた。関東リーグ降格以降のチームの不振をなんとか一掃し、関東リーグに復帰したいというのが、われわれの強い思いであった。

春季対抗戦は手堅く準優勝

新チームがスタートして、3月の検見川合宿から徹底して走り込んだ。下級生時代は、単純な体力強化練習に一番不満を漏らしていたわれわれの世代であったが、4年生になると考えも変わるもので、まず走力から力をつけようと考えた。

春からの走り込みが功を奏したのか、東京都1部・2部春季対抗戦は、準優勝という成績を取めた。予選リーグ、決勝トーナメントを通じて、攻撃面、守備面とも思い描いたとおりの戦いぶりであった。決勝戦では、前年関東リーグから降格した青学大に0-1で惜しくも敗れたが、秋のリーグ戦に向けて、かなりの手ごたえを感じた大会であった。

京大戦で屈辱的敗戦を喫す

7月8日、第30回目の京大戦が、御殿下グラウンドで行われた。われわれ4年生にとっての京大戦の戦績は1勝2敗、ホームで戦う京大戦をなんとか勝利し、五分の対戦成績に持ち込みたい、またリーグ戦に向けて弾みをつけたいという思いが、当然のことながら強かった。

しかし残念ながら、結果は0-4という記録的な大敗。試合後の諸先輩の厳しい視線の中での挨拶の苦しさ、飲むビールのまずさは今でも忘れられない。秋のリーグ戦に向けて、弾みをつけるどころか不安が頭をもたげていた。

中盤で失速しリーグ戦5位

東京都大学リーグ1部で勝ち残り、関東大会を経て関東リーグ2部との入れ替え戦に出場し、関東リーグに復帰する。これがチームとして、最大の目標に向けて進むべき道であった。

われわれは京大戦の大敗から立ち直るべく、2次にわたる検見川合宿と10試合におよぶ練習試合をこなしてリーグ戦に臨んだ。

結果は2勝2敗3分。春から突出した感のあった青学大に及ばなかったのはともかく、学芸大に0-4の大敗と、リーグ中盤で連敗を喫した。それ以降も勝ちきれず、最終的には1部5位という結果で、関東大会への出場もならなかった。

関東リーグ復帰の夢はかなわなかった。最上級生であり、チームの主力であったわれわれの責任であったろう。4年生を中心として部員一丸となって戦う集団になろうとしたが、何かが足りなかった。勝利への欲求、一人ひとりの技術、体力、精神力、そしてチーム戦術、すべての面でもう一步だったのだろう。もっと、何とかなつたような気がするし、自分が情けなかったが、後の祭りである。

特に私自身は、5月の練習中に負ったアキレス腱断裂というけがから、チームを長期離脱し、選手としても、主将としても役割を果たせなかった。仲間や監督に対して大変申し訳なく思っている。

大学の4年間、一番、時を過ごしたサッカー部と御殿下グラウンド。楽しく、懐かしい思い出も多々あるが、未練も悔いも残っている。（湊 和則）

元気なその後の55年卒組

肝心要のサッカーでは思うような戦績が残せず、不完全燃焼に終わった感もある我々であるが、無類のサッカー好きがそろっていたことと、良くも悪くも仲間意識が強かったことでは人後に落ちないチームであった。卒業後は同期11人の頭文字をつなげて“MY SHOKAI”、皆で次なる飛躍に邁進しようという意を込めて、「邁翔会」という同期会を発足させた。卒業直後はユニホームを新調して遠征もしたが、徐々に海外や地方への転勤組も増え、最近では国内外での交歓やたまさかの飲み会に重心を移している。幸い先輩後輩との交流も続いており、LB会の活性化に貢献していければと思っている。

（宮崎 洋）

1979年度（昭和54年度）

公式試合記録

・天皇杯兼総理大臣杯

4月15日 2回戦 ○ 4-0 和光大（御殿下）
 4月22日 3回戦 ○ 3-0 学習院（御殿下）
 4月29日 ブロック決勝 ● 1-3 帝京大（御殿下）

・春季対抗戦

5月13日 予選リーグ ○ 2-1 亜大（御殿下）
 5月20日 予選リーグ ○ 4-0 上智大（御殿下）
 5月27日 予選リーグ ● 0-1 青学大（青学大）
 6月2日 準々決勝 ○ 3-1 東学大（御殿下）
 6月3日 準決勝 ○ 3-2 農工大（御殿下）
 6月10日 決勝 ● 0-1 青学大（御殿下）

・国公立

6月9日 1回戦 ○ 4-1 都立大（御殿下）
 6月16日 2回戦 ○ 3-1 農工大（御殿下）
 6月17日 準決勝 ○ 6-5 一橋大（農工大）
 6月23日 決勝 ● 1-4 東学大（農工大）

・京大大学定期戦

7月8日 ● 0-4 京大（御殿下）

・東京都大学リーグ1部

9月9日 △ 0-0 立大（御殿下）
 9月15日 ○ 4-3 自由学園（御殿下）
 9月24日 ● 0-3 青学大（御殿下）
 9月29日 ● 0-4 東学大（御殿下）
 10月10日 △ 1-1 一橋大（御殿下）
 10月14日 △ 1-1 帝京大（御殿下）
 10月21日 ○ 3-0 成蹊大（御殿下）
 2勝2敗3分 5位

・部長 渡辺洋三
 ・監督 内田純司
 ・コーチ 吉沢伸明
 ・主将 湊和則
 ・副将 宮崎洋、井田陽彦
 ・主務 佐藤敦郎
 ・副務 山川健一、松元明弘

・合宿 春季 3月22日～3月27日 検見川
 夏季1次 8月4日～8月11日 検見川
 夏季2次 8月22日～8月29日 検見川

・練習 御殿下
 ・部室 御殿下地下

出場選手

相手	天皇杯一次予選			春季対抗戦						定期戦		東京都大学リーグ1部						
	和光大	学習院	帝京大	亜大	上智大	青学大	東学大	農工大	青学大	京大	立大	自由学園	青学大	東学大	一橋大	帝京大	成蹊大	
GK	森原	森原	森原	森原	森原	森原	森原	森原	森原	森原	西野	西野	森原	森原	西野	西野	西野	
FB	菊地	菊地 (福田)	菊地	菊地	菊地	菊地	菊地	菊地	菊地	菊地	菊地	菊地	菊地	菊地	菊地	菊地	菊地	
	坂田	安藤	青山	井田	宮崎	宮崎	宮崎	宮崎	宮崎	宮崎	宮崎	宮崎	宮崎	宮崎	宮崎	宮崎	宮崎	
	井田 (青山)	井田	坂田	安藤	安藤 (川村)	安藤	青山	安藤	安藤	安藤	井田	井田	安藤	井田	井田	井田	井田	
	飯島敦 宮崎	宮崎 坂田	宮崎 (青山)	青山	青山	青山	安藤	青山	青山	青山	青山	青山	青山	青山	青山	青山	青山	
HB	宮崎	坂田	井田	飯島敦	飯島敦	飯島敦	飯島敦	飯島敦	福田	飯島敦	佐藤	佐藤	佐藤	佐藤	佐藤	佐藤	湊	
	湊	飯島敦	飯島敦	宮崎 (川村)	福田 (小林)	坂田	坂田	坂田	坂田	坂田	斎川	斎川	斎川	斎川	斎川	斎川	湊 ()	
	福田 (川村)	湊	福田 (川村)	福田	橋本	福田	福田	橋本 (福田)	飯島敦	斎川	飯島敦	飯島敦	飯島敦	飯島敦	飯島敦	湊 (小林)	飯島敦	
FW	平林	平林	平林	平林	平林	橋本 (植田)	飯島正	福沢	福沢	飯島正	柿木 (平林)	平林	平林 (小林)	平林	平林	平林	平林	
	福沢	福沢	福沢	福沢	福沢	福沢	福沢	平林	飯島正	福田	福沢	福沢	福沢	福沢	福沢	福沢	福沢	
	飯島正	飯島正	飯島正	飯島正	飯島正	飯島正	平林	飯島正	平林	柿木 (福田)	飯島正	飯島正	飯島正	飯島正	飯島正	飯島正	飯島正	

東京都大学リーグ1部成績

	青学大	東学大	成蹊大	立大	東大	一橋大	自由学園	帝京大	勝	負	分	得	失	差	点
青学大	-	△1-1	○4-3	○2-0	○3-0	○2-0	○7-2	○5-0	6	0	1	24	6	18	13
東学大	△1-1	-	△0-0	○3-0	○4-0	△1-1	△2-2	○3-1	3	0	4	14	5	9	10
成蹊大	●3-4	△0-0	-	△2-2	●0-3	○3-0	○1-0	○3-1	3	2	2	12	10	2	8
立大	●0-2	●0-3	△2-2	-	△0-0	○3-1	○2-0	○2-1	3	2	2	9	9	0	8
東大	●0-3	●0-4	○3-0	△0-0	-	△1-1	○4-3	△1-1	2	2	3	9	12	-3	7
一橋大	●0-2	△1-1	●0-3	●1-3	△1-1	-	○4-1	○4-1	2	3	2	11	12	-1	6
自由学園	●2-7	△2-2	●0-1	●0-2	●3-4	●1-4	-	○3-2	1	5	1	11	22	-11	3
帝京大	●0-5	●1-3	●1-3	●1-2	△1-1	●1-4	●2-3	-	0	6	1	7	21	-14	1

関東大会出場へ漕ぎつける

基礎技術と走力のアップを

昭和55年度は監督に内田先輩、コーチに南谷、吉沢、青山の諸先輩を迎えた。4年生が6名（福田、安藤、田中、松元、田河、山川）と少ないため、福田主将、安藤副将に加えて3年生から飯島、福澤の2名を副将として加えた体制で臨んだ。

年度目標はもちろん「関東2部復帰」であった。4年生が関東2部リーグを経験した唯一の年代であり、今年上がらなければ、このまま東京都大学リーグに定着してしまうという危機感があった。

一方、過去2年間は秋季リーグ戦6位、5位と思うような戦績を残せていない現実を踏まえ、東京都1部リーグも決して侮れないという共通認識を持った。また、昨年までの主力選手がごっそり卒業したので若い選手の台頭が必要であったこと、常時グラウンドや検見川を使えるチームのメリットを最大限に生かす目的で、春先は基礎技術向上に加え、走力、パワーをつけることに練習の力点を置いた。

春休みに教養学部体育科の松尾先生に駒場で陸上トレーニングをお願いし、実技を通してサーキットトレーニングや無酸素運動による心肺機能を高めるやり方を学んだ。

検見川での春合宿ではスピードアップのための坂道下り走やグラウンド半周リレーなどの走り込みを重点的に行った。また、伝統の16種目を繰り返し行って反応の速さ、球際への強さを磨いた。御殿下へ戻ってからもクーパー走（12分間走）やインターバル走に加え、上級生が率先して筋トレに励んで筋力アップを図った。

中盤から攻撃を組み立てる

チームの布陣としては主将の福田がけがでなかなか戦線に加われないなか、空中戦での競り合いに絶対的な強さを誇るCB安藤（都リーグ優秀選手）がゲームキャプテンを務めてチームの中心となった。GKは高さと対人動作に強い高木（2年）、守備陣はスウィーパーにボールコントロールと状況判断に優れた坂田（3年）、右サイドバックには都リーグ優秀選手に選出された飯島（3年）を擁し、左サイドは堅実な守備の川村（3年）が務めた。

中盤は斎川（2年）がゲームメイクを担当、技術の高い木下（1年）とコンビを組み、植田（2年）

が粘り強い守備的ハーフで貢献した。攻撃はボールが持てる田中（4年）を左に、スピードとパワーのあるドリブルが得意の橋本（2年）を右に配し、両翼からCFの福澤（3年）に合わせる戦術を取った。スーパーサブとしてテクニシャンの中谷（2年）、スピードとアイデアの赤星、ゴール前での粘りが身上的清水（2年）らを投入した。中盤がボールを持つと、いったんウイングに預け、その折り返しから攻撃を組み立てるのが基本戦術であった。

春先は思うような結果が出ず、天皇杯は1回戦敗退、春季対抗戦はベスト8止まり、国公立大戦は4位であった。京大戦は京都で行われ1-3で敗れたが、その後の京都での練習試合でいい試合ができ、秋へのチーム戦術を確認することができた。

シリ上がりに調子上げ、4位

秋季リーグ戦前半の4試合は2敗2分の勝ち点2と調子が上がらず、4試合でわずか2得点であった。

厄払いとさらにチーム一丸となる目的で、4試合目終了後、監督、コーチ以下全部員が春日駅近くの「養老の瀧」に集まり決起集会を開いて大いに盛り上がった。これを境に、5試合目の学習院大戦で攻撃陣が奮起して4得点し、後半3試合を2勝1分けとして4位となり東京都大学リーグに陥落後初めての関東大会進出を決めた。

最終戦は雨上がりで泥沼の御殿下での対一橋大戦。ゴール前の混戦から田中が先制するも、その後逆転され、後半40分過ぎに味方CKで相手GKに清水が押し倒されてPK。これを斎川が決めて同点として引き分け、ギリギリ4位に滑り込んでの関東大会出場だった。

入れ替え戦出場は果たせず

関東大会は8チームが参加し上位2チームが関東リーグとの入れ替え戦に出場できるトーナメント形式であった。11月1～3日に検見川で強化合宿を行い必勝を期した。1回戦は千葉大に3-0で快勝し、準決勝の明治学院大戦に臨んだが、緊張からか力を発揮できず、0-2で敗れ、関東2部復帰の夢は潰えた。（福田信夫）

公式試合記録

・天皇杯兼総理大臣杯

4月13日 ● 1-3 東洋大（御殿下）

・春季対抗戦

5月11日 予選リーグ ● 0-1 国学院（御殿下）

5月18日 予選リーグ ○ 2-1 農工大（御殿下）

5月25日 予選リーグ ○ 1-0 立大（御殿下）

6月1日 準々決勝 ● 1-4 学習院（御殿下）

・国公立

6月14日 2回戦 ○ 3-0 東外大（御殿下）

6月15日 準決勝 ● 0-1 農工大（医科歯科）

6月21日 3位決定戦 ○ 0-1 東学大（御殿下）

・京都大学定期戦

7月13日 ● 1-3 京大（京大農学部）

・東京都大学リーグ1部

9月7日 ● 0-1 立大（御殿下）

9月14日 △ 0-0 成蹊大（御殿下）

9月21日 ● 1-2 東学大（御殿下）

9月28日 △ 1-1 明学大（御殿下）

10月5日 ○ 4-2 学習院（御殿下）

10月12日 ○ 1-0 自由学園（御殿下）

10月19日 △ 2-2 一橋大（御殿下）

2勝2敗3分 4位

・関東大学サッカー大会

11月8日 1回戦 ○ 3-0 千葉大（御殿下）

11月9日 準決勝 ● 0-2 明学大（東学大）

・部長 渡辺洋三

・監督 内田純司

・コーチ 吉沢伸明、南谷尚志、青山研一郎

・主将 福田信夫

・副将 安藤豊、飯島敦、福沢伸哉

・主務 松元明弘

・学連 山川健一

・合宿 春季 検見川

夏季 検見川

秋季 検見川

・練習 御殿下

・部室 御殿下地下

出場選手

相手	春季対抗戦	定期戦	東京都大学リーグ1部						関東大会			
	学習院	京大	立大	成蹊大	東学大	明学大	学習院	自由学園	一橋大	千葉大	明学大	
GK	高木	高木					高木	高木	高木	高木	高木	
FB	坂田	飯島					飯島	飯島	飯島	飯島	飯島	
	柴田	安藤					安藤	安藤	安藤	安藤	安藤	
	安藤	坂田					坂田	坂田	坂田	坂田	坂田	
	川村	川村					川村	川村	川村	川村	川村	
HB	植田	植田					植田	植田	植田	植田	植田	
	田中	木下					木下	木下	木下	木下	木下	
	(赤星)						(清水)					
	斎川	斎川					斎川	斎川	斎川	斎川	斎川	
FW	橋本	橋本					橋本	田中	橋本	橋本	橋本	
	福沢	福沢					福沢	福沢	福沢	福沢	福沢	
FW	小林	田中					田中	橋本	田中	田中	田中	
									福沢	田中	田中	
									(中谷)	(清水)		

東京都大学リーグ1部成績

	明学大	東学大	立大	東大	一橋大	成蹊大	学習院	自由学園	勝	負	分	得	失	差	点
明学大		○2-1	○2-1	△1-1	△0-0	○6-0	○4-0	○2-0	5	0	2	17	3	14	12
東学大	●1-2		○2-1	○2-1	○3-1	●0-1	○2-0	○2-0	5	2	0	12	6	6	10
立大	●1-2	●1-2		○1-0	△1-1	○1-0	△0-0	○4-0	3	2	2	9	5	4	8
東大	△1-1	●1-2	●0-1		△2-2	△0-0	○4-2	○1-0	2	2	3	9	8	1	7
一橋大	△0-0	●1-3	△1-1	△2-2		△1-1	△1-1	△2-2	0	1	6	8	10	-2	6
成蹊大	●0-6	○1-0	●0-1	△0-0	△1-1		△0-0	△0-0	1	2	4	2	8	-6	6
学習院	●0-4	●0-2	△0-0	●2-4	△1-1	△0-0		○3-1	1	3	3	6	12	-6	5
自由学園	●0-2	●0-2	●0-4	●0-1	△2-2	△0-0	●1-3		0	5	2	3	14	-11	2

半年かけて体づくりに励む

科学的トレーニングを導入

昭和56年度シーズンからは関東リーグの経験が全くない世代となったが、東京都大学リーグでの上位の成績確保と関東リーグへの復帰を現実的な目標と定め、吉沢前コーチを監督にいただいて早々のスタートを切った。

練習メニューについて4年全員と3年の主力を交えて徹底的に話し合って臨んだこと、また秋季リーグ戦をターゲットとした半年かけての体づくりに向け、体育関係の教授のご協力と3年生の和田の提言を取り入れ、F G O筋肉の強化や本格的ストレッチ体操など科学的トレーニングの導入を試みたのもこのときだったと思う。2～5月には徹底した瞬発力と筋力の強化、6～8月には持久力を鍛えるとの方針で、下半身のみならず上半身のトレーニングにも取り組んだ。10m走×50本、検見川グラウンドでの400mトラック走や坂道走など、厳しいトレーニングであったが、今でも大変懐かしく思い出す。

京大戦、4年ぶりに勝つ

7月には過去3年間全敗という状況下で御殿下グラウンドでの京大戦を迎えた。東京での開催であることに加え、この試合に負けると京大戦史上初の4連敗となるという意味で絶対に負けられない一戦であった。前日の雨でいたるところにできた大きな水たまりを、主務の清水の指揮のもと部員総出で当日の試合開始までに全部修復してくれた。チーム全員が4連敗阻止に一丸となっている手応えを感じた。結果は2-0の完勝。在学期間中に1勝も出来ないという大きな危機を乗り越えることができた安堵感と、4年目に初めて味わった打ち上げの格別なビールの味は今でも忘れない。

京大戦後はリーグ戦に向けた最終準備を進めるために、持久力とチーム力向上を主眼とした2度の検見川合宿を実施するとともに、開催大学として久びさに七大学戦にも出場した。若干のけが人は出たものの大きく戦線を離脱する者もなく、事前の練習試合では朝鮮大に勝利するなど、まずまずの調子でリーグ戦に入ることができた。

リーグ戦は4位内に入れず

しかしながら、リーグ戦の最終成績は6位で、関

東大会への出場資格も得ることが出来なかった。リーグ戦中盤で亜細亜大と慶大にともに0-4と連敗したこと、勝てる試合だった学芸大戦を引き分けたことが4位以内に入れなかった直接の原因である。

勝てば4位以内確保できる最終の立教大戦はまさに死闘であった。エースの潰し合いで当方にも退場者が出るなか、後半、赤星のセンタリングを福沢が頭で合わせた会心のシュートが、それまで弱点と目されていた相手GKのファインセーブで得点にならなかったシーンは今でも目に焼き付いている。結果は0-0の引き分けで、両者ともに4位以内に入れずにリーグ戦は終了した。

今でもメールで仲よく反省

現在、同期メンバーは勤務地もバラバラであり、今回の年史編集に際しても全員で会うことは出来なかったが、メールでの情報交換を通じて、現役時代に、フォーメーションにこだわり過ぎて個人の能力を活かし切れなかったこと、瞬発力を鍛え切れなかったこと、戦術面での反省等々に始まり、まだ土であった御殿下のグラウンド整備と地下部室でのミーティングのこと、一生懸命に試合記録をつけたり、けがの手当てをしてくれたマネジャーのことなど、懐かしい話もメールの中で交換した。これを機にさらにコンタクトを増やし、LB会の発展と現役サッカー部の活躍に貢献していければと思う。

（飯島 敦、福沢伸哉、坂田 中）



リーグ戦 対立大

公式試合記録

・天皇杯兼総理大臣杯

4月12日 ● 2-0 創価大（御殿下）
PK 2-4

10月18日 △ 1-1 東学大（慶大）

10月25日 △ 0-0 立大（慶大）

2勝2敗3分 6位

・京都大学定期戦

7月21日 ○ 2-1 京大（御殿下）

・部長 渡辺洋三

・監督 吉沢伸明

・コーチ 南谷尚志

・東京都大学リーグ1部

9月13日 ○ 3-0 一橋大（御殿下）

9月20日 ○ 3-0 成蹊大（慶大）

9月27日 △ 0-0 学習院（御殿下）

10月4日 ● 0-4 亜大（御殿下）

10月11日 ● 0-4 慶大（慶大）

・主将 飯島敦

・副将 福沢伸哉、齊川路之

・主務 志水利彰

・練習 御殿下

・部室 御殿下地下

出場選手

相手	レギュラー	天皇杯	定期戦	東京都大学リーグ1部										
		創価大	京大	亜大	東学大	慶大	学習院	立大	成蹊大	一橋大				
GK	西野 (高木)	高木												
FB	飯島 川村 木下 柴田 (中野北)	飯島 川村 柴田 志水												
HB	坂田 齊川 植田 (中野雅)	植田 齊川 中谷 (清水)												
FW	福沢 赤星 橋本 (清水)	橋本 福沢 田中 (荒川)												

東京都大学リーグ1部成績

	亜大	東学大	慶大	学習院	立大	東大	成蹊大	一橋大	勝	負	分	得	失	差	点
亜大	△2-2	△0-0	△2-2	○2-1	○4-0	○1-0	○10-0	4	0	3	21	5	16	11	
東学大	△2-2	△0-0	○2-1	△2-2	△1-1	△0-0	○9-0	2	0	5	16	6	10	9	
慶大	△0-0	△0-0	△0-0	△2-2	○4-0	△0-0	○6-0	2	0	5	12	2	10	9	
学習院	△2-2	●1-2	△0-0	△2-2	△0-0	△1-1	○3-0	1	1	5	9	7	2	7	
立大	●1-2	△2-2	△2-2	△2-2	△0-0	△1-1	○2-0	1	1	5	10	9	1	7	
東大	●0-4	△1-1	●0-4	△0-0	△0-0	○3-0	○3-0	2	2	3	7	9	-2	7	
成蹊大	●0-1	△0-0	△0-0	△1-1	△1-1	●0-3	○4-0	1	2	4	6	6	0	6	
一橋大	●0-10	●0-9	●0-6	●0-3	●0-2	●0-3	●0-4	0	7	0	0	37	-37	0	

東大ならではの“資源活用”

取り巻く環境変化への対策

関東2部復帰を目標に新任の南谷監督、平林コーチの下、4年は15名、斎川を主将に始動した。

東京都1部に降格して丸4年、関東リーグ時代を全く知らない我々の代となった。入部した昭和54年は第2回ワールドユースサッカーの日本開催で、マラドーナ率いるアルゼンチンが優勝（日本は水沼ら主力）、翌年にトヨタカップの第1回目が開催、第2回ではジーコのフラメンゴが優勝、4年生時のスペインW杯はジーコら黄金カルテットのブラジルが脚光を浴び、そして正月の高校選手権の盛上がり（反町北京五輪代表監督の清水東高等）という時代であった。サッカー人口の底辺拡大を背景に有力選手を擁する他大学に対し技量では劣る東大だが、大学入学以降4年間の鍛錬で他校に伍し、さらには凌駕できることは何かを考え、以下の方針をたてた。

他校に競り勝つための方針

- ①技 量…習熟に努め他校に少しでも追いつく
- ②体 力…世界最先端のトレーニングを他校以上に徹底実行し、筋力・走力で他校を上回る
- ③考える…一人一人が考え抜く

上記①②③を組み合わせ、「見劣りする技量」だが、「体力で凌駕」し考え抜くサッカーで、「へたくそでも勝てるぎりぎりのサッカー、努力し続けて他校に競り勝つチーム」を、新たな取組みも取り入れながら目指すことにした。

新たな視点での取り組み

- ①筋力・走力…「東大ならではの資源の活用」

東大には世界最先端の運動研究に取り組む先生方が多数おられることに気づき（“灯台下暗し”）、その直接指導を得ることに努めた。駒場では全日本サッカー代表チームの科学的トレーニングスタッフ戸部晴彦教授や足立長彦先生ら、本郷では宮下充正教授の教育学部体育学研究室を訪ね、金久博昭院生（現教授）に出会い直接指導を得られるようになった。定期的な筋力・走力測定で自分たちの体力強化状況をチェックし、個人別メニューに反映した。先生方も富士通など日本リーグトップチームとの比較データとして活用された。春の駒場の陸トレで最先端の走法技術を学んだ上で、走力は、スタートダッ

シュ・短・中・長距離それぞれをバランスよく徹底的に鍛えた。1980年冬季五輪でスピードスケート5種目完全制覇を成し遂げたエリック・ハイデンのトレーニング内容を分析、参考に、「「FOG」（有酸素性速筋繊維）強化トレーニング走」との呼称で特に注力した“とてもきつい”300mダッシュ×10本などは、時に救急車を呼んでしまうなど、やや走り込みしすぎることもあった。筋力は、日本に2台しかなかったサイベックスマシーンや自転車エルゴメーターこぎなど世界最先端の高額トレーニングマシンを使ったきついトレーニングを行なえた。ベンチプレスは4年生平均は、日本リーグトップチームを上回るくらいまでになり、他校からも嫌がられる筋力・走力を獲得できた。学内の運動会にもア式蹴球部として参加、1600mリレー優勝や100m走決勝レースへ予選1位で進出など、わが部の存在を示せた。

②その他

普及前のストレッチングを他チームにさがしがいち早く導入した。将来を見据え全国の高校3年生へのリクルートも試み、その後入学、入部しレギュラー入りしてくれる後輩もでた。

リーグは最終節まで大混戦

夏までは新たなゾーンディフェンスを基本戦術に据え、練習試合で関東1部の駒大や朝鮮大を追い詰める京大戦にも勝利したが、最終的には時期尚早との判断からマンツーマンへ戻しリーグ戦を迎えた。リーグ戦は、大混戦で推移し優勝争いは6チームが最終節までもつれこんだ。最終戦は対慶応。双方とも最終戦の勝敗で優勝から6位までの可能性がある中、2敗目を喫し、慶応が優勝、我々は6位で終えた。

主将の反省とすこしの自慢

心残りがあるとすれば、4年生中心の期待されるチームであったにもかかわらず、少々厳しい練習をし過ぎて、ケガや故障が多く、ベストな状態でリーグ戦に臨めなかったことである。個人的には、4年間、リーグ戦全試合にフル出場できたことや、運動会主催主将合宿（検見川）でのクロスカントリー大会で野球部やテニス部などの強豪を抑えて優勝し、蹴球部ここにありと示せたことと、向坊総長名の表彰状をもらえたことは今でも誇りに思っている。

（斎川路之）

公式試合記録

・京大大学定期戦

7月11日 ○ 1-0 京大（京大農学部）

・東京都大学リーグ1部

9月5日 △ 0-0 東学大（御殿下）

9月15日 ○ 1-0 亜大（御殿下）

9月19日 ● 1-4 明学大（御殿下）

9月26日 △ 2-2 国学院（御殿下）

10月3日 △ 1-1 成蹊大（東学大）

10月17日 ○ 1-0 立大（東学大）

10月24日 △ 0-0 学習院（御殿下）

10月31日 ● 0-2 慶大（慶大）

2勝2敗4分 6位

・部長 西本晃二

・監督 南谷尚志

・コーチ 平林健一

・主将 斎川路之

・副将 柴田光弘、和田康太郎

・主務 西田裕

・学連 中野北斗

・合宿 春季 駒場陸上トレーニング

夏季1次 山中湖

夏季2・3次 検見川

・練習 御殿下

・部室 御殿下地下

出場選手

相手	東京都大学リーグ1部								
	京大	東学大	亜大	明学大	国学院	成蹊大	立大	学習院	慶大
GK	高木	高木	高木	西野	高木	高木	高木	高木	高木
DF	柴田	柴田	柴田	柴田	柴田	柴田	柴田	柴田	柴田
	中野北	中野雅	中野雅	中野雅	中野雅	中野雅	中野雅	中野雅	中野雅
	中野雅	伊藤	伊藤	伊藤	伊藤	植田	植田	植田	植田
MF	伊藤	山本	山本	山本	山本	山本	山本	山本	山本
	植田	植田	植田	植田	植田	和田	衛藤 (和田)	衛藤	衛藤
	中谷	中谷	中谷	中谷	中谷	中谷	中谷	中谷	中谷 (和田)
FW	萩原	萩原	萩原 (和田)	萩原	萩原	萩原	萩原	萩原	萩原
	斎川	斎川	斎川	斎川	斎川	斎川	斎川	斎川	斎川
	清水	清水	清水	清水 (手嶋)	近藤	清水	近藤	清水 (荒川)	清水 (荒川)
	橋本 (手嶋)	橋本	橋本 (近藤)	橋本 (近藤)	橋本	橋本	橋本 (田中)	田中 (橋本)	橋本

東京都大学リーグ1部成績

	慶大	明学大	東学大	立大	学習院	東大	国学院	亜大	成蹊大	勝	負	分	得	失	差	点
慶大	—	○4-0	○1-0	●1-2	△1-1	○2-0	○1-0	●1-2	○3-0	5	2	1	14	5	9	11
明学大	●0-4	—	●2-3	△1-1	△0-0	○4-1	○6-2	○1-0	○2-0	4	2	2	16	11	5	10
東学大	●0-1	○3-2	—	○1-0	●1-3	△0-0	○2-1	○3-0	△0-0	4	2	2	10	7	3	10
立大	○2-1	△1-1	●0-1	—	○2-0	●0-1	△4-4	○4-2	○-	4	2	2	13	10	3	10
学習院	△1-1	△0-0	○3-1	●0-2	—	△0-0	○1-0	△0-0	△1-1	2	1	5	6	5	1	9
東大	●0-2	●1-4	△0-0	○1-0	△0-0	—	△2-2	○1-0	△1-1	2	2	4	6	9	-3	8
国学院	●0-1	●2-6	●1-2	△4-4	●0-1	△2-2	—	○3-1	△1-1	1	4	3	13	18	-5	5
亜大	○2-1	●0-1	●0-3	●2-4	△0-0	●0-1	●1-3	—	○4-0	2	5	1	9	13	-4	5
成蹊大	●0-3	●0-2	△0-0	●-	△1-1	△1-1	△1-1	●0-4	—	0	4	4	3	12	-9	4

立大と成蹊大の「得・失・差」は両校の対戦結果を含まない。

都リーグ2部へ初めて降格

練習が農学部グラウンドに

1983年、京大戦を御殿下グラウンドで行ったあと、グラウンド改修のため、練習場所を農学部グラウンドに移すことになった。農学部グラウンドについては、正直なところ「狭い。特に縦が短い。固くてスパイクも利かない。これではまともに練習ができない」と感じていた。

リーグ戦の準備、翌年度のことも気になった。当初、工期はそれほど長くないといわれていたが、その後、遺跡調査を要することがわかり、御殿下の新グラウンド完成までには長い年月を要することになった。

リーグ最終戦の敗戦で降格

秋のリーグ戦（都リーグ1部）は、練習グラウンド移転で十分な準備ができなかったことすら言い訳にならないほどの悲惨な結果であった。

GKには都リーグ1部の優秀選手にも選出されたことがある西野（5年目）、BKの底には主将で不動のスーパー中野を配し、負けないサッカーを目指したが、リーグ戦7戦で2点しか取れないのでは、いかんともし難かった。

大敗こそしないものの押し込まれる時間帯が長く耐え切れずに失点、得点力不足がそのまま結果に表れる試合ばかり。1勝6敗でリーグ最下位となり、東大は史上初めて都リーグ2部に降格することになった。勝てば残留の可能性が残されていた最終戦の学習院大戦が0-1に終わった瞬間の何とも重苦しい雰囲気は、その日の曇り空と相まっていまだに忘れ難い。

この年のリーグ戦は、将来に向け、チームの代替わりも意図した布陣を敷いたこともあり、リーグ戦の出場機会がない4年生も多かった。私もその内の一人であったが、チームが追い込まれている局面で何もできなかった悔しさとむなしさは、今も鮮明に覚えている。

専任コーチにOBの平林氏

「闘魂」5号（創部80年記念誌）によると、我々の4年生時の体制は、西本部長、兵頭監督、コーチは不在ということになっているが、実際は、1980年卒の平林健一先輩に練習、合宿、公式戦を通じフル

に指導していただいた。

西本、兵頭両先生にたいへんにお世話になったことは言うまでもないが、グラウンド上ではやはり平林氏。80年誌で同氏が監督に就任されるのは、われわれの2年後輩の代からということになっているが、「われわれの代の監督は平林氏」と記憶している同期もいる。

引退後の当時でも、現役がだれ一人としてかなわないプレーヤーであったこともあり、同氏にはとにかく圧倒的な存在感があった。私がサッカーの指導（U12）を行うようになって改めて思い返すに、同氏の指摘は一つ一つ極めて的確であったが、氏のクールでシニカルな物言いに慣れないこともあり、素直に受け入れることができない選手も多かった。精神的に少しは成長した今、私としては、同氏の指導の下でもう一度サッカーをやってみみたい気がしている。

昇格を目指せるチーム作り

前述の通り、この年のリーグ戦は翌シーズン以降も継続して関東2部を目指せるチームを作るべく、同ポジションで同程度のレベルなら下級生の方を積極的に公式戦に起用する方針であった（少なくとも、私は、中野主将かだれかからそう聞いたように記憶している）。そのため特に夏合宿以降はモラルの維持、チームにおける自らの役割探しに悩む4年生も多かった。

その一方、今思うに、将来のこと、その年の秋のリーグ戦のことの両方を考えれば、年初から下級生に比重を移した布陣を敷いた方がより合理的であったような気がしている。また、そうだとすれば、春先には試合に出ていた4年生は、リーグ降格の責任をもっと強く感じなければいけないのかもしれない。

なお、最後に、この年まで公式戦に出ることがかなわなかったが、翌年、翌々年の正GKとして活躍した同期の永山慶一がいることを申し添えておく。

（赤城庸人）



練習試合のあと4年生で

公式試合記録

・天皇杯

4月10日 ○ 4-1 東外大 ()
 4月17日 ○ 1-0 東経大 ()
 4月24日 ○ 4-2 成蹊大 ()

10月16日 ● 0-1 専大 (慶大)
 10月23日 ● 0-2 慶大 (慶大)
 10月30日 ● 0-1 学習院 (明学大)
 1勝6敗 8位 2部に降格

・春季対抗戦

5月5日 予選リーグ ● 0-2 成城大 ()
 5月15日 予選リーグ ○ 2-0 帝京大 ()
 5月22日 予選リーグ ○ 2-1 立大 ()
 5月29日 準決勝 ○ 2-1 慶大 ()
 6月5日 決勝 ● 1-2 亜大 ()

・部長 西本晃二
 ・監督 兵頭圭介
 ・コーチ 平林健一
 ・主将 中野雅仁
 ・副将 柴田周、赤城庸人
 ・主務 田中琢二

・京大大学定期戦

7月10日 ○ 4-1 京大 (御殿下)

・合宿 春季 山中湖
 夏季 検見川

・東京都大学リーグ1部

9月11日 ● 0-1 明学大 (明学大)
 9月18日 ● 0-1 立大 (慶大)
 9月25日 ● 0-2 上智大 (東洋大)
 10月9日 ○ 2-1 東洋大 (東洋大)

・練習 御殿下 (京大戦まで) / 農学部
 ・部室 御殿下地下 / 農学部仮設

出場選手

相手	天皇杯予選			春季対抗戦					定期戦	東京都大学リーグ1部						
	東外大	東経大	成蹊大	成城大	帝京大	立大	慶大	亜大	京大	明学大	立大	上智大	東洋大	専大	慶大	学習院
GK	西野	西野	西野	西野	西野	西野	西野	西野	西野	西野	西野	西野			西野	西野
DF	中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野			中野	中野
	柴田	柴田	柴田	柴田	柴田	牛草	伊藤	伊藤	伊藤	山本	伊藤	山本			佐藤	木下
MF	牛草	牛草	牛草	升本	牛草	柴田	牛草	牛草	小泉	佐藤	山本	佐藤			山本	山本
	仙石	仙石	仙石	仙石	仙石	仙石	仙石	仙石	仙石	仙石	仙石	仙石			木下	佐藤
	萩原	萩原	萩原	萩原	萩原	萩原	萩原	萩原	萩原	萩原	萩原	萩原			萩原	萩原
	衛藤	衛藤	衛藤	牛草	衛藤	久井	鈴木	鈴木	鈴木	鈴木	鈴木	鈴木			久井	升本
FW	木下	木下	木下	木下	久井	衛藤	久井	衛藤	木下	木下	木下	木下			鈴木	鈴木
	手嶋	赤城	赤城	衛藤	上原	上原	荒川	荒川	赤城	手嶋	川辺	荒川			鈴木	手嶋
FW	近藤	近藤	近藤	上原	荒川	近藤	近藤	近藤	近藤	近藤	近藤	近藤			川辺	近藤
	赤城	手嶋	手嶋	赤城	赤城	荒川	衛藤	赤城	荒川	荒川	手嶋	手嶋			(近藤)	川辺
			(升本)								(吉村)			(手嶋)		川辺

東京都大学リーグ1部成績

	専大	東洋大	慶大	明学大	上智大	学習院	立大	東大	勝	負	分	得	失	差	点
専大	●0-2	○3-0	○2-0	●1-2	○3-0	○5-2	○1-0	5	2	0	15	6	9	10	
東洋大	○2-0	△0-0	△1-1	○3-2	○2-1	○2-0	●1-2	4	1	2	11	6	5	10	
慶大	●0-3	△0-0	○1-0	○1-0	△1-1	○4-0	○2-0	4	1	2	9	4	5	10	
明学大	●0-2	△1-1	●0-1	○2-0	○3-2	○2-0	○1-0	4	2	1	9	6	3	9	
上智大	○2-1	●2-3	●0-1	●0-2	○2-0	△0-0	○2-0	3	3	1	8	7	1	7	
学習院	●0-3	●1-2	△1-1	●2-3	●0-2	○1-0	○1-0	2	4	1	6	11	-5	5	
立大	●2-5	●0-2	●0-4	●0-2	△0-0	●0-1	○1-0	1	5	1	3	14	-11	3	
東大	●0-1	○2-1	●0-2	●0-1	●0-2	●0-1	●0-1	1	6	0	2	9	-7	2	

1年で1部へ復帰はならず

技術、戦術を繰り返し練習

前年度に東都リーグ1部から2部へ陥落し、1部復帰がまさに至上命題のシーズン。

兵頭監督、平林コーチの指導のもと、春の合宿から、走り込みはもちろん、「目と目を合わせる」「三人目の動き」「ゾーンディフェンスと受け渡し」などの技術、戦術を繰り返し練習し、1年間での1部復帰を目指した。エース鈴木修二も2年生となり、即戦力となる有望な新人も多数入部し、復帰に向けたシーズンがスタートした。

春季対抗戦 PK戦で優勝

出だしは好調。春季対抗戦では、予選通過の後、明治学院大、慶応大と、関東2部から降格した強豪？大学を接戦の末に破り、決勝へ進出、チームの士気は高まった。

決勝の相手は成蹊大。先行されるも何とか同点に持ち込み、PK戦へ。5人目のDF山本が落ち着いて決め、優勝した。

春季対抗戦は1、2部が合同で行ない、東大は2部チームとして、1部チームを破っての優勝。皆が秋季リーグも「行ける」との思いを持った。

国公立戦も準優勝とはいえ、関東2部の学芸大と、延長引き分けの末のPK負けであり、上位チームにも十分通用するとの自信を深めた結果であった。

京大戦勝ち4年生は4連勝

7月18日、雨の京大グラウンドで、京都大学との定期戦が行われた。我々4年生にとって京大戦の最初の思い出は、1年生の時、前日の練習後、御殿下グラウンドにたくさん残った水たまりの水を必死にスポンジで取ったこと。その時から、京大戦の戦績はこれまで3連勝。2年前の雨中の京都では、終了間際にFW手嶋のダイビングヘッドで劇的な勝利。前年は、先制されるも、4ゴールを叩き込んで大勝。

当然京大は4連敗は免れたいと懸命に向かって来たが、1年生のMF利重がPKを決めて先制。FW近藤が加点して、2-0で勝利。4年生は、4年連続の美酒を味わうこととなった。

リーグ戦は4位で成績最低

7月までの戦績に自信を深め、3度の夏合宿を乗り越えて、9月のリーグ戦が始まった。

初戦の武蔵工大から、自由学園、東経大と3連勝、いずれも大量得点での勝利でリーグ首位に立ち、いよいよ期待は高まった。

4戦目の国学院戦はDF佐藤（哲）がサイドから切れ込んで素晴らしい先制ゴールを決めたが、その後、3失点。ここからチームは下降線をたどった。続く成城大戦はゴール前の決定機を逃し、引き分け。この試合で、DF伊藤は衝突した相手選手に殴られ、相手は一発退場、伊藤にもイエローが出て、累積2枚で次戦出場停止となった。

6試合目の成蹊大戦は、春季対抗決勝の敵を取られる完敗。最後の立教大戦は、勝てば他チームの結果次第で入れ替え戦の可能性もあったが、引き分けに終わり、結果は3勝2敗2分、勝ち点8で東都2部4位。この時点では東大サッカー部史上最低の成績で2部残留となった。

僅かだが翌年に貢献したか

春は良かったが、秋は失速してしまい、平林コーチには「春に勝っても何もいいことが無いことが分かったよ」と言われる始末。

だが、この教訓（？）が次年度に生かされたかもしれない。少なくともGK永山、DF牛草の2人が翌年もチームに残ってくれたことで、2部2年目での1部昇格に、我々の世代も僅かながら貢献できたものと思いたい。卒業後は、FW近藤が東京海上チームの関東リーグ昇格に貢献。GK永山は岐阜県代表として国体に出場した。ここ十数年は、必ず年に一度、同期の家に家族連れで集まって、酒を飲んで、昔話に興じている。今年（2008年）は、新日鉄大分製鉄所に勤務する主務の安田を訪ねて、別府温泉に皆で集合した。

（伊藤 洋）

1984年度（昭和59年度）

公式試合記録

・天皇杯

4月8日 ● 0-1 日大農獣医（日大農獣医）

・春季対抗戦

5月6日 予選リーグ ○ 2-1 東洋大（自由学園）
 5月13日 予選リーグ ○ 2-1 上智大（自由学園）
 5月20日 予選リーグ ● 1-2 自由学園（自由学園）
 5月27日 準々決勝 ○ 2-1 明学大（慶大）
 6月2日 準決勝 ○ 2-1 慶大（慶大）
 6月3日 決勝 ○ 2-2 成蹊大（成蹊大）
 PK 4-3

・国公立

6月23日 決勝 ● 2-2 東学大（東工大）
 PK 5-6

・京都大学定期戦

7月18日 ○ 2-0 京大（京大農学部）

・東京都大学リーグ2部

9月9日 ○ 5-2 武蔵工大（自由学園）
 9月15日 ○ 3-0 自由学園（自由学園）
 9月24日 ○ 5-2 東経大（自由学園）
 9月30日 ● 1-3 国学院（自由学園）
 10月7日 △ 0-0 成城大（成城大）
 10月14日 ● 0-3 成蹊大（成蹊大）
 10月21日 △ 0-0 立大（自由学園）
 3勝2分2敗 4位

- ・部長 西本晃二
- ・監督 兵頭圭介
- ・コーチ 平林健一
- ・主将 伊藤洋
- ・副将 久井大樹、手嶋通春、山本昇
- ・主務 安田賢一
- ・学連 加藤広史

- ・合宿 春季 検見川
 夏季 検見川、山中湖
- ・練習 農学部
- ・部室 農学部仮設

出場選手

相手	天皇杯	春季対抗戦						東京都大学リーグ2部							
	日大農獣	東洋大	上智大	自由学園	明学大	成蹊大	東学大	京大	武蔵工大	自由学園	東経大	国学院	成城大	成蹊大	立大
GK	永山	永山	永山	永山	永山	永山	永山	永山	永山	永山	永山	永山	永山	永山	永山
DF	伊藤山本(牛草)	仙石山本	山本仙石	伊藤山本	伊藤山本	伊藤山本	伊藤利重	伊藤山本	伊藤山本	伊藤山本	伊藤山本	伊藤山本	伊藤山本	伊藤山本	伊藤山本
	小泉	牛草	牛草	牛草	牛草	牛草(鹿園)	牛草	牛草	牛草	牛草	牛草	牛草	牛草	牛草	牛草
MF	佐藤	佐藤	佐藤	佐藤	佐藤(仙石)	佐藤	佐藤	佐藤	仙石	仙石(森)	仙石	佐藤	佐藤	仙石	佐藤
	鈴木	鈴木(毛利)	毛利	鈴木	鈴木	鈴木	鈴木	鈴木	鈴木	鈴木	鈴木	鈴木	鈴木	鈴木	鈴木
	久井	小泉	小泉	小泉	小泉	小泉	小泉	小泉	小泉(久井)	小泉	小泉(小栗)	小泉	小泉	小泉	久井
FW	毛利	久井	久井	久井	利重(鹿園)	利重	鹿園	利重(久井)	利重	利重	利重	利重	利重	久井	利重
	衛藤	上原	衛藤	衛藤	衛藤	衛藤	衛藤(外野)	衛藤	衛藤(外野)	衛藤(外野)	衛藤(外野)	衛藤(外野)	衛藤(外野)	衛藤(外野)	衛藤(外野)
	吉村	近藤(山下)	近藤(山下)	近藤(山下)	近藤	近藤	近藤	近藤	近藤	近藤	近藤	近藤	近藤	近藤	近藤
	笹口(上原)	衛藤	上原	上原	上原(山下)	上原	上原	上原(手嶋)	鹿園	鹿園	鹿園	鹿園	鹿園	鹿園(外野)	手嶋(山下)

東京都大学リーグ2部成績

	国学院	成蹊大	立大	東大	成城大	武蔵工大	自由学園	東経大	勝	負	分	得	失	差	点
国学院	-	△3-3	○2-0	○3-1	○1-0	●2-3	○4-3	○14-0	5	1	1	29	10	19	11
成蹊大	△3-3	-	○2-0	○3-0	△0-0	△1-1	○7-2	○2-1	4	0	3	18	7	11	11
立大	●0-2	●0-2	-	△0-0	○2-1	○4-0	○5-0	○1-0	4	2	1	12	5	7	9
東大	●1-3	●0-3	△0-0	-	△0-0	○5-2	○3-0	○4-0	3	2	2	13	8	5	8
成城大	●0-1	△0-0	●1-2	△0-0	-	○3-1	○5-3	○3-1	3	2	2	12	8	4	8
武蔵工大	○3-2	△1-1	●0-4	●2-5	●1-3	-	△2-2	○4-1	2	3	2	13	18	-5	6
自由学園	●3-4	●2-7	●0-5	●0-3	●3-5	△2-2	-	△2-2	0	5	2	12	28	-16	2
東経大	●0-14	●1-2	●0-1	●0-4	●1-3	●1-4	△2-2	-	0	6	1	5	30	-25	1

部史で初めてのリーグ昇格

個性豊かな5人の4年生

平林監督が昭和57年にコーチ就任した直後に入部した昭和60年度の4年生にとって、まさに「平林監督とともに歩んだ4年間」であった。卒業時の在籍人員が僅か5人であったことが、平林監督の情熱的な指導を雄弁に物語っている。その5人とは山本、小泉、森、手塚、上原の面々。横顔を見ると、最小の努力で最善の結果を出すプラグマティズム（例：30cmのジャンプで必ず勝つヘディング）と不思議な包容力を併せ持つ主将の山本、理屈や技術は横に置き、超人的な体力と勢いで周囲を引っ張る副将の小泉、いつも深刻な顔をせずに淡々と力の抜けたプレーをした主務の森、切れのある足技とギャグにセンスの光った手塚、彼女が見に来るとなぜか格段に足が速くなる上原といった面々である。

チーム全体の意識を一つに

春の公式戦では好成績を収めるが、秋に失速してしまうという、それまでの経験を踏まえ、「秋季リーグ戦に照準を定める」とチーム全体の意識統一を図った。夏合宿までは体力作りとチーム基盤強化に努め、秋季リーグ戦では全試合の先発メンバーを固定化することにより、一体感と安定感のあるチーム作りに成功した。

全学年で充実した布陣とる

先発メンバーは、守備陣を経験豊富な上級生で固め、中盤に中堅の2、3年生、攻撃にフレッシュな1、2年生を起用した。

最終的には留年してまで昇格にかけてくれた5年生（6年生という説もある）の永山さんを不動の守護神として、DFは主将山本と副将小泉がセンターを、FWからコンバートした俊足上原が右SB、果敢な攻撃参加が持ち味の3年生佐藤を左SBに配置した。

MFはエースの3年生、副将鈴木（高校時代は東京選抜で国体選手）を中心に、利重（高校時代は読売ユースで活躍）と今井という2年生コンビがボールを支配した。

FWはリーグ戦で12得点いれて得点王をとった超高速ドリブラーの2年生外野と、清水東で長谷川健太らと同期だった久保田に加え、1年生ながら勝負

強いCFだった安田という、充実した布陣だった。

劇的な最終戦での逆転勝利

リーグ戦序盤はなかなか波に乗り切れず、第4戦の立教大戦で完敗して2勝1分1敗となり、残り3試合を一つも落とせなくなったが、第5戦で武蔵工大に、続く第6戦で帝京大に完勝して、自力優勝の望みをつないだ。最終戦の亜細亜大戦は、お互いに勝てば優勝、負ければ3位という、天と地ほどの差がある大一番である。

東大は1点を先制したものの、中盤にかけて個人技や空中戦に勝る亜細亜大の猛攻を受け、1-2と逆転される。ここで自然と円陣が組まれ、絶対逆転してやろうと誓い合ったが、主将山本は思わず『もう駄目だ』と口にして、3年生佐藤に『ヤンさん、なに言ってるんですか！駄目じゃないですか』と逆に気合いを入れられたという経緯は後々までの語り草となった。今思い起こすと、自ら弱音を吐くことで各人のやる気を引き出すという高度な統率力に舌を巻く思いである。その後2点を取り返して3-2で終了のホイッスルを聞いたときは涙あり、歓喜あり、途中で退部していった連中の顔や諸先輩の顔が浮んだ。

東大ア式蹴球部の長い歴史の中で、リーグ昇格を果たしたのは昭和60年度が初めての経験である。たとえそれが下部のリーグであれ、実力が拮抗した中での優勝は簡単なことではない。最終学年時にそのような得がたい経験ができたことは、とても幸福な出来事であった。また、後輩たちはその後数年間、東京都1部リーグの上位をキープし、関東リーグ入れ替え戦に出場するなどの活躍を見せることになるが、そのつなぎとしての役目を果たせたことを大変誇りに思っている。（森 光金）

公式試合記録

・天皇杯

4月7日 1回戦 ○ 10-0 北里大（農学部）
4月14日 2回戦 △ 1-1 国学院（農学部）

10月13日 ○ 2-0 帝京大（立大）
10月20日 ○ 3-2 亜大（一橋大）
5勝1敗1分 優勝 1部昇格

・春季対抗戦

5月5日 予選リーグ △ 0-0 拓大（農学部）
5月12日 予選リーグ ● 1-2 東洋大（農学部）
5月19日 予選リーグ ● 0-2 立大（農学部）

・部長 西本晃二
・総監督 兵頭圭介
・監督 平林健一
・主将 山本昇
・副将 小泉泰郎、鈴木修二
・主務 森光金
・学連 上原裕之

・京大大学定期戦

7月10日 ○ 4-2 京大（検見川）

・合宿 春季 山中湖
夏季 山中湖、検見川

・東京都大学リーグ2部

9月8日 △ 2-2 成城大（一橋大）
9月15日 ○ 2-1 一橋大（農学部）
9月22日 ○ 3-0 日大文理（農学部）
9月29日 ● 1-3 立大（立大）
10月6日 ○ 6-1 武蔵工大（一橋大）

・練習 農学部
・部室 農学部仮設

出場選手

相手	天皇杯予選		春季対抗戦			定期戦	東京都大学リーグ2部						
	北里大	国学院	拓大	東洋大	立大	京大	成城大	一橋大	日大文理	立大	武蔵工大	帝京大	亜大
GK	金子	金子	永山	永山	永山	永山	永山	永山	永山	永山	永山	永山	永山
DF	今井	今井	小泉	小泉	小泉	山本	小泉	小泉	小泉	小泉	小泉	小泉	小泉
	佐藤	佐藤	佐藤	森	佐藤	小泉	佐藤	佐藤	佐藤	佐藤	佐藤	佐藤	佐藤
	山本	山本	山本	山本	山本	森	山本	山本	山本	山本	山本	山本	山本
	森	森	今井	今井	森	佐藤	上原	上原	上原	上原	上原	上原	上原
MF	久保田	久保	鹿園	鹿園	鹿園	鈴木	今井	今井	今井	今井	今井	今井	今井
	(手塚)	鹿園	鈴木	鈴木	鈴木	利重	鈴木	鈴木	鈴木	鈴木	鈴木	鈴木	鈴木
	利重	利重	利重	利重	利重	鹿園	利重	利重	利重	利重	利重	利重	利重
FW	外野	外野	外野	外野	外野	上原	外野	外野	外野	外野	外野	外野	外野
	鈴木	鈴木	上原	上原	手塚	(加藤)	安田	安田	安田	安田	安田	安田	安田
	上原	上原	手塚	手塚	上原	安田	久保田	久保田	久保田	久保田	久保田	久保田	久保田

東京都大学リーグ2部成績

	東大	立大	亜大	帝京大	一橋大	成城大	日大文理	武蔵工大	勝	負	分	得	失	差	点
東大	●1-3	○3-2	○2-0	○2-1	△2-2	○3-0	○6-1	5	1	1	19	9	10	11	
立大	○3-1	●0-1	○1-0	○2-0	○2-0	●2-3	○2-0	5	2	0	12	5	7	10	
亜大	●2-3	○1-0	△2-2	●0-1	○5-0	○3-1	○4-1	4	2	1	17	8	9	9	
帝京大	●0-2	●0-1	△2-2	●3-4	○4-1	○5-2	○7-1	3	3	1	21	13	8	7	
一橋大	●1-2	●0-2	○1-0	○4-3	●2-3	△4-4	○3-2	3	3	1	15	16	-1	7	
成城大	△2-2	●0-2	●0-5	●1-4	○3-2	△1-1	△2-2	1	3	3	9	18	-9	5	
日大文理	●0-3	○3-2	●1-3	●2-5	△4-4	△1-1	●0-1	1	4	2	11	19	-8	4	
武蔵工大	●1-6	●0-2	●1-4	●1-7	●2-3	△2-2	○1-0	1	5	1	8	24	-16	3	

関東リーグ2部復帰ならず

走り負けないチームづくり

目標は東京都リーグ1部で4位以内に入り、関東大会を勝ち抜き、入れ替え戦に勝利して関東リーグに復帰するということであった。そのため平林監督のもと農学部グラウンドで、サーキットトレーニング、筋トレなどを繰り返して体力を增强し、最後まで走り負けないチーム作りを目指した。

4年生はわずか5名であり、前年度攻撃陣で活躍した者も、退部や怪我のため試合に出られず、1年生を何人もメンバーとして加えた、下級生中心のチームとなっていた。

春季対抗戦 予選リーグ敗退

我々の目標はあくまで秋のリーグ戦にあり、それまでは準備期間という認識でもあり、春季大会は、早々に予選リーグで敗退したものの、特にショックを受けることはなかった。

京大戦は手堅く勝ち6連勝

試合は点の取り合いになったものの、終始優勢に進め、4対2で勝利した。

我々4年生にとっての京大戦の戦績は4勝0敗。我々も1回も負けずに京大戦を終えることができた。なお、これで京大戦は6連勝となった。

下馬評横目にリーグ戦3位

都リーグのプログラムに「我々はリーグ戦4位以内を目標にやってきたので、春先ふるわないとしても必ず関東大会には出場する、昨年2部で劇的優勝を飾った神風が今年もきっと吹く」と書いていた。東大は、昨年リーグ2部から昇格したばかりであり、春先の成績もふるわなかったため、下馬評では降格の最有力候補であった。

東京都リーグ1部初戦は、関東リーグから陥落してきたばかりの慶応大であり、力負けしたが、2戦目は立正大に快勝した。その後、1試合引き分け、1試合勝利した後、上智大学戦では後半終了間際に失点して敗れるという悪い流れに入りかかったものの、終盤の2試合をしぶとく勝利し、4勝2敗1分という結果でリーグ戦を終了した。念願の3位となり、関東大会への出場権を得た。我々の戦い方は、前半をしのぎ、後半に相手が疲れてくるところで走

り勝つサッカーであり、失点を最小限に抑え、若いメンバーで組んだ攻撃陣でしぶとく点を取って勝利するというのが勝ちパターンであった。慶応大こそ力の差があったものの、その他の大学とは思ったとおりの展開をすることができた。これもひとえに「神風はきっとふく」と信じて戦ったことによるものである。

関東大会2位で入れ替え戦へ

初戦で茨城県代表の茨城大と戦った。あまりデータがなく、ぶっつけ本番で臨んだ。なかなか点が入らず、膠着状態が続いた。相手のシュートがポストに当たるなどのピンチもあったが、延長の末勝利した。関東大会2戦目（準決勝）の相手は、東京都リーグ1部2位の立正大であった。リーグ戦では勝った相手であるが、メンバーを変え万全の布陣で臨んできた。0-0で前後半を終了し、延長戦でも失点せず、PK戦となった。5人終了時点では勝敗がつかず、サドンデスに入った。ここで、先攻の佐藤（4年）がはずしたものの、GKの金子（3年）が見事相手のPKを止めた。最後は利重（3年）が決めた。決勝戦は、慶応大（東京都リーグ1部1位）と戦った。反町（北京五輪代表監督）率いる慶応大に善戦したものの敗れ、関東リーグ2部7位の学習院大との入れ替え戦に臨むことになった。

入れ替え戦で神風は吹かず

我々の戦術はリーグ戦や関東大会と同様にしっかり守って少ないチャンスを生かすというものであった。何度か得点のチャンスはあったものの、なかなか1点が奪えずに試合は終了し、0-0で引き分け、夢は叶わなかった。リーグ戦や関東大会で吹いた神風は、最後に吹かなかった。

1年のときに東京都リーグ2部に降格が決まったあとの納会で、先輩方から「仲良しクラブだ」などの厳しいご指摘を受け、どんなにがんばろうと結果が出なければ評価はされないという現実を認識できた。これがあったから、厳しい練習にも耐え、あと一歩というところまで行けたものと考えている。入れ替え戦で勝てなかったことは、本当に残念であった。しかし、優秀な部員がほとんど残るため、来年は念願を達成してくれるのではないかと思い、我々はグラウンドを去った。

（鈴木修二、佐藤哲治）

1986年度（昭和61年度）

公式試合記録

・天皇杯

4月6日 1回戦 ○ 4-0 水産大（明学大）
 4月13日 2回戦 △ 1-1 明学大（明学大）
 4月20日 3回戦 ● 0-1 立正大（農学部）

・関東大会

11月8日 1回戦 ○ 1-0 茨城大（駒沢補助）
 11月9日 準決勝 ○ 0-0 立正大（農学部）
 PK 6-5
 11月15日 決勝 ● 1-3 慶大（慶大）

春・季对抗戦

5月4日 予選リーグ ● 0-1 成城大（農学部）
 5月18日 予選リーグ △ 1-1 日大文理（成城大）
 5月25日 予選リーグ ● 0-1 成蹊大（農学部）

・リーグ入替戦

11月29日 △ 0-0 学習院（農学部）
 都リーグ1部残留

・京都大学定期戦

7月13日 ○ 4-2 京大（京大農学部）

・東京都大学リーグ1部

9月10日 ● 1-4 慶大（慶大）
 9月14日 ○ 2-0 立正大（成蹊大）
 9月21日 △ 0-0 東洋大（拓大）
 9月28日 ○ 2-0 拓大（拓大）
 10月5日 ● 0-1 上智大（成蹊大）
 10月12日 ○ 2-1 成蹊大（成蹊大）
 10月19日 ○ 1-0 国学院（成蹊大）
 4勝2敗1分 3位

・部長

西本晃二

・監督

平林健一

・主将

鈴木修二

・副将

佐藤哲治、鹿園直毅、今井勝典

・主務

加藤広史

・学連

馬場洋一

・合宿

春季 検見川

夏季1次 山中湖

夏季2次 検見川

・練習

農学部

・部室

農学部仮設

出場選手

相手	天皇杯			春季对抗戦			定期戦		東京都大学リーグ1部							関東大会			入替戦
	水産大	明学大	立正大	成城大	日大文理	成蹊大	京大	慶大	立正大	東洋大	拓大	上智大	成蹊大	国学院	茨城大	立正大	慶大	学習院	
GK	金子	山口	大久保	金子	金子	金子	金子	大久保	金子	金子	金子	金子	金子	金子	金子	金子	金子	金子	金子
DF	浜田	利重	斎木	谷本	利重	安藤	利重	住谷	住谷	住谷	利重	利重	住谷	住谷	住谷	住谷	住谷	住谷	住谷
	斎木 佐藤 (谷本)	浜田 利重 佐藤	利重 浜田 利重	浜田 利重	末永 佐藤	末永 佐藤	末永 佐藤	末永 佐藤	末永 佐藤	末永 佐藤	末永 佐藤	末永 佐藤	末永 佐藤	末永 佐藤	末永 佐藤	末永 佐藤	末永 佐藤	末永 佐藤	末永 佐藤
MF	利重	斎木	浜田	斎木	鹿取	利重	鹿取	金児	金児	金児	金児	金児	金児	金児	金児	金児	金児	金児	金児
	鈴木	鈴木	加藤	鈴木	鈴木	鈴木	藤森 (金児)	鈴木	鈴木	鈴木	鈴木	鈴木	鈴木	鈴木	鈴木	鈴木	鈴木	鈴木	鈴木
FW	今井 加藤	今井 加藤	今井 馬場 (谷本)	今井 加藤	住谷 加藤	加藤 住谷	今井 藤森	藤森	今井 藤森	今井 藤森	今井 藤森	今井 藤森 (鹿園)	今井 藤森 (鹿園)	今井 藤森 ()	今井 藤森	今井 藤森	今井 藤森	今井 藤森	今井 藤森
	馬場	馬場	鈴木	出村	今井	今井	今井	熊岡 (外野)	熊岡 (橋本)	熊岡	熊岡 (橋本)	熊岡	熊岡	熊岡	熊岡 (鹿園)	熊岡 (鹿園)	熊岡 (早野)	熊岡 (鹿園)	熊岡 (早野)
	久保田	久保田 (末長)	末永	馬場	久保田 (鹿園)	鹿園	内田	久保田 (早野)	久保田 (早野)	久保田	久保田	久保田	久保田	久保田 (橋本)	早野	藤森	鹿園	藤森 (鹿取)	鹿園 (早野)
	出村	出村	出村	藤森 (佐藤)	内田	内田	久保田	内田	内田	内田	内田	内田	内田	内田	内田	内田	内田	内田	内田

東京都大学リーグ1部成績

	慶大	立正大	東大	成蹊大	上智大	国学院	拓大	東洋大	勝	負	分	得	失	差	点
慶大	-	△1-1	○4-1	○5-1	○7-1	○5-1	○2-0	○2-0	6	0	1	26	5	21	13
立正大	△1-1	-	●0-2	●0-1	○2-0	○2-1	○2-1	○2-0	4	2	1	9	6	3	9
東大	●1-4	○2-0	-	○2-1	●0-1	○1-0	○2-0	△0-0	4	2	1	8	6	2	9
成蹊大	●1-5	○1-0	●1-2	-	○4-2	○2-1	●3-4	△2-2	3	3	1	14	16	-2	7
上智大	●1-7	●0-2	○1-0	●2-4	-	△2-2	△1-1	○2-1	2	3	2	9	17	-8	6
国学院	●1-5	●1-2	●0-1	●1-2	△2-2	-	○1-0	○2-1	2	4	1	8	13	-5	5
拓大	●0-2	●1-2	●0-2	○4-3	△1-1	●0-1	-	△1-1	1	4	2	7	12	-5	4
東洋大	●0-2	●0-2	△0-0	△2-2	●1-2	●1-2	△1-1	-	0	4	3	5	11	-6	3

1987年度（昭和62年度）

得失点差でリーグ戦準優勝

関東リーグへの昇格目指し

昭和62年度は、前々年度の都リーグ2部優勝メンバー、前年度の関東大会準優勝メンバーがほぼ残ったことで、約10年振りの関東リーグ昇格がシーズン初めからの部員全員の明確な目標となった。このときの主力は、国体選手、高校時代の主将経験者、名門出身者らがそろい、1年生のときからのレギュラーメンバーも多く、関東リーグ昇格の最大のチャンスであった。

結果は関東大会初戦で不覚をとるという残念なものであったが、リーグ戦では同じ勝ち点ながら得失点差での準優勝という成績を残すことができたのはせめてもの救いであった。

積極策が実った立正大戦

62年度のリーグ戦は、前年度に反町主将を擁して頭抜けていた慶大が関東リーグに昇格したため、関東と都リーグを昇降格している専修大、立正大、拓殖大などの私大組に、東大が挑む形となった。

リーグ戦序盤は、初戦に国学院大には勝利したものの、第2戦の日大文理に不覚をとり、第3戦の上智大戦は終了間際に同点に持ち込まれるなど、スタートダッシュは完全に失敗であった。続く拓大に引き分けた後、最強と見られた立正大戦を前に、固く引き分け狙いでいこうかという消極案も出たが、理想とするプレッシングサッカーを悔いの残らぬようにやりきろうということでもとまった。立正大とは互角の接戦となったが、迷いが吹っ切れたことで東大本来の力を発揮することができ、利重のゴールにより1-0で勝利した。この勝利ではずみがつき、慶大と入れ替わりで関東リーグから降格してきた専修大への勝利を含め、終盤に連勝を取め、終わってみれば4勝1敗2分の勝ち点10で、同勝ち点で立正大に並ぶも得失点差で2位という順位であった。

関東大会は千葉大に敗れる

関東大会は、東京都代表4校（立正大、東大、成蹊大、専修大）と、神奈川県代表関東学院大、千葉県代表千葉大、埼玉県代表独協大、北関東代表茨城大の8校のトーナメントで、関東リーグ2部下位2校との入れ替え戦の切符をかけて開催された。東大は11月7日、駒沢第2競技場において千葉大と対戦

したが、守りを固める相手からなかなか点が奪えず、焦りからプレーが硬くなったすきに、逆襲から78年W杯のネリーニョ張りの見事なアウトフロントシュートを決められ、0-1で敗退した。翌年主将となったGK大久保の横っ飛びの姿が、まさにイタリアGKゾフに重なって、今でも脳裏に焼き付いている。

プレスと集中力で好い結果

平林監督の下、過去数年間を通じて、技術に劣る東大は計算できる体力と守備力を重点的に強化するという基本方針で臨んできた。その成果として、前々年度の都リーグ2部優勝、前年度の関東大会準優勝という好成績を残すことができた。当時、少なくとも都リーグの中では最も厳しい体力練習を課していたと思われる。堅守をベースに、後半残り15分での走力と判断力の差で勝負を決めるというものであった。

前述のようにこまのそろったメンバーが残ったことで、堅守からの速攻というスタイルから脱皮し、さらに高いレベルに到達すべく、敵陣からの高いプレスから攻め切る形や、引いた手を組織的に崩す形を目指した。結果としては、強豪相手には前年度と同様に強いプレスと集中力で好結果を残すことができたが、格下相手に横綱相撲を演じるまでには、選手たちが高度な戦術を消化しきれなかった。従来のも東大と同じような戦い方の千葉大に最後に敗れたのは皮肉なものである。

また、爆発的な突破力を誇り、走るだけで抜けると言われたFW外野もアキレス腱の手術後の回復が万全ではなく、正GK金子も関東大会直前の東京海上戦で腕を骨折するなど、なかなかベストコンディションで臨むことが出来なかったのが返す返すも残念である。

最後に、目標は達成できなかったが、一生分のサッカーをやり尽くしたと言えるような密度の濃い一年を送らせていただいた。チーム運営を支え、応援して下さい関係各位に、この場を借りて深く感謝申し上げます。

（鹿園直毅）

公式試合記録

・天皇杯

4月8日 1回戦 ○ 4-1 電機大（農学部）
 4月12日 2回戦 ○ 1-0 武蔵大（拓大）
 4月19日 3回戦 ● 0-3 拓大（拓大）

10月18日 ○ 1-0 専大（成蹊大）
 10月25日 ○ 2-0 成蹊大（成蹊大）
 4勝1敗2分 2位

・春季対抗戦

5月3日 予選リーグ ● 1-2 一橋大（一橋大）
 5月17日 予選リーグ ● 1-2 立大（一橋大）
 5月24日 予選リーグ ○ 1-0 上智大（一橋大）

・関東大会

11月7日 1回戦 ● 0-1 千葉大（駒沢）

・京大定期戦

6月28日 ○ 1-0 京大（検見川）

・部長 西本晃二

・監督 平林健一

・主将 鹿園直毅

・副将 今井勝典、利重孝夫

・主務 末永浩

・学連 山本武志

・東京都大学リーグ1部

9月13日 ○ 2-0 国学院（拓大）
 9月20日 ● 0-2 日大文理（拓大）
 9月27日 △ 1-1 上智大（拓大）
 10月4日 △ 1-1 拓大（拓大）
 10月11日 ○ 1-0 立正大（成蹊大）

・合宿 春季 検見川

夏季 山中湖（2回）、検見川

・練習 農学部

・部室 農学部仮設

出場選手

相手	天皇杯予選			春季対抗戦			定期戦	東京都大学リーグ1部							関東大会	
	電機大	武蔵大	拓大	一橋大	立大	上智大		京大	国学院	日大文理	上智大	拓大	立正大	専大		成蹊大
GK	金子	金子	金子	大久保	金子	山口		金子	金子	金子	金子	金子	金子	金子	金子	大久保
DF	久保田	久保田	金児	久保田	金児	金児		金児	金児	久保田	金児	金児	金児	山口	金児	
	今井	住谷	住谷	末永孝	住谷	住谷		末永	末永	末永	末永	末永	末永	利重	鹿園	
	末永	末永	末永	谷本	久保田	久保田		住谷	住谷	金児	利重	利重	利重	金児	末永	
	安藤	安藤	安藤	浜田	安藤	末永		久保田	久保田	住谷	鹿園	鹿園	鹿園	久保	利重	
MF	金児	金児	熊岡	今井	早野	中村		利重	利重	鹿取	鈴木	鈴木	鈴木	鈴木	鈴木	
	手塚	今井	今井	利重	今井	今井		鹿園	鹿園	鹿園	内田	内田	内田	熊岡	小島	
	熊岡	早野	久保田	山本	藤森	熊岡		鹿取	鹿取	鈴木	外野	外野	外野	小島	鹿取	
FW	利重	利重	利重	末永浩	利重	利重		小島	小島	利重	早野	早野	早野	早野	早野	
	内田	内田	内田	藤森	内田	内田		内田	内田	内田	鹿取	鹿取	鹿取	今井	外野	
	早野	熊岡	早野	黒木	熊岡	藤森		今井	今井	外野	小島	小島	小島	荒巻	内田	

東京都大学リーグ1部成績

	立正大	東大	成蹊大	専大	日大文理	拓大	上智大	国学院	勝	負	分	得	失	差	点
立正大	-	●0-1	○2-1	●1-2	○2-1	○3-0	○2-0	○4-0	5	2	0	14	5	9	10
東大	○1-0	-	○2-0	○1-0	●0-2	△1-1	△1-1	○2-0	4	1	2	8	4	4	10
成蹊大	●1-2	●0-2	-	○2-0	△1-1	○2-0	○2-1	△1-1	3	2	2	9	7	2	8
専大	○2-1	●0-1	●0-2	-	○2-0	△1-1	△1-1	○2-0	3	2	2	8	6	2	8
日大文理	●1-2	○2-0	△1-1	●0-2	-	●0-2	○3-1	○2-0	3	3	1	9	8	1	7
拓大	●0-3	△1-1	●0-2	△1-1	○2-0	-	●1-3	○5-1	2	3	2	10	11	-1	6
上智大	●0-2	△1-1	●1-2	△1-1	●1-3	○3-1	-	△1-1	1	3	3	8	11	-3	5
国学院	●0-4	●0-2	△1-1	●0-2	●0-2	●1-5	△1-1	-	0	5	2	3	17	-14	2

1988年度（昭和63年度）

狙い変え辛くも都1部残留

平林監督就任以降の1985年からの上昇基調とは打って変わり、このシーズンは世代交代の難しさを痛感させられた。前年度主将の鹿園の現役復帰や、新2年生・新1年生の台頭もおよばず、秋季東京都リーグでは1部7位と苦戦を強いられた。

攻撃重視の布陣であったため、そこそこ点は取れたものの、GK大久保の骨折による長期離脱などもあり、守備陣の整備に最後まで苦しんだ。秋季リーグ戦でも大量失点を喫することが多かったが、中盤戦で2連敗した後は残留狙いに目標を切り換え、入れ替え戦2試合を含む4戦連続引き分けで辛くも1部残留を果たした。

待望久しい部室ができ感謝

この年の5月、OB諸兄の御尽力により、農学部グラウンドの改修工事が完了した。

縦115m、横73mに拡張され、公式戦の開催が可能となったホームグラウンドで、秋には5年振りにリーグ戦を戦うことができた。グラウンドには照明灯も増設され、併せて、シュート板とペンドルも新装された。またシーズン終了後には待望久しかった2階建て部室が完成した。部員一同、OB諸兄に感謝するとともに捲土重来を誓ったのであった。

（大久保将之）



卒業生をみんなで囲んで
（前列で花束を持っているのが卒業生）



晴れやかに巣立つ卒業生5人
（後列左から 浜田、後藤、大久保、斎木、鹿園）

いずれも1989年1月14日 農学部グラウンドで

公式試合記録

・天皇杯

4月3日 1回戦 ○ 2-1 東工大（商船大）
4月10日 2回戦 ● 0-2 国学院（東洋大）

・春季対抗戦

5月1日 予選リーグ ○ 3-0 武蔵大（拓大）
5月15日 予選リーグ ○ 2-1 国学院（拓大）
5月22日 予選リーグ ● 2-4 拓大（ ）
5月29日 準々決勝 ● 1-3 立正大（明学大）

・国公立

6月11日 2回戦 ○ 6-0 医科歯科（水産大）
6月18日 3回戦 ○ 4-3 農工大（商船大）
6月25日 決勝 ● 1-1 東学大（商船大）
PK 4-5

・京都大学定期戦

7月10日 △ 0-0 京大（京大農学部）

・東京都大学リーグ1部

9月11日 ● 2-4 拓大（農学部）
9月18日 △ 2-2 日大文理（農学部）
9月25日 ○ 1-0 上智大（農学部）
10月2日 ● 2-5 明学大（明学大）
10月9日 ● 2-4 立正大（農学部）
10月16日 △ 1-1 学習院（農学部）
10月23日 △ 1-1 専大（農学部）
1勝3敗3分 7位

・入替戦

11月5日 △ 0-0 東洋大（駒沢第2）
11月13日 △ 1-1 東洋大（農学部）

・部長 西本晃二
・監督 平林健一
・主将 大久保将之

・練習 農学部
・部室 農学部仮設

出場選手

相手	春季対抗戦				定期戦	東京都大学リーグ1部							入替戦	
	武蔵大	国学院	拓大	立正大	京大	拓大	日大文理	上智大	明学大	立正大	学習院	専大	東洋大	東洋大
GK	小幡	小幡	小幡	平岡	天野	天野	天野	天野	天野	天野	天野	天野	天野	天野
DF	住谷	吉岡	斎木	住谷	安藤	鹿取	住谷	鹿取	金児	金児	鹿取	鹿園	鹿園	鹿取
	金児	住谷	鈴木	金児	住谷	金児	鹿園	鹿園	鹿取	住谷	金児	鹿園	住谷	金児
MF	横井	安藤	萩原	横井	吉岡	鹿園	鹿取	住谷	鹿園	鹿取	住谷	金児	鹿取	鹿園
	山口	山口	手塚	山口	山口	山口	児玉	児玉	児玉	小島	小島	小島	山口	山口
	小島	小島	児玉	小島	小島	小島	山口	蛭川	山口	山口	児玉	山口	小島	小島
FW	鹿取	鹿取	山田	鹿取	鹿取	蛭川	蛭川	山口	蛭川	蛭川	山口	蛭川	蛭川	蛭川
	熊岡	熊岡	熊岡	内田	内田	内田	手塚	内田	手塚	内田	内田	内田	内田	内田
	(手塚)	(手塚)	加藤	蛭川	早野	手塚	内田	手塚	内田	手塚	手塚	手塚	稲村	手塚
	磯村	磯村	津村	熊岡				稲村		稲村		稲村		内田
	(中村)	(中村)												(早野)

東京都大学リーグ1部成績

	拓大	立正大	学習院	明学大	専大	日大文理	東大	上智大	勝	負	分	得	失	差	点
拓大	—	○3-0	△0-0	○4-0	○2-0	○2-1	○4-2	○4-1	6	0	1	19	4	15	13
立正大	●0-3	—	△1-1	△2-2	△1-1	○2-1	○4-2	○7-0	3	1	3	17	10	7	9
学習院	△0-0	△1-1	—	△0-0	○2-0	△0-0	△1-1	○1-0	2	0	5	5	2	3	9
明学大	●0-4	△2-2	△0-0	—	●0-1	△0-0	○5-2	○3-0	2	2	3	10	9	1	7
専大	●0-2	△1-1	●0-2	○1-0	—	●0-1	△1-1	○2-0	2	3	2	5	7	-2	6
日大文理	●1-2	●1-2	△0-0	△0-0	○1-0	—	△2-2	●1-2	1	3	3	6	8	-2	5
東大	●2-4	●2-4	△1-1	●2-5	△1-1	△2-2	—	○1-0	1	3	3	11	17	-6	5
上智大	●1-4	●0-7	●0-1	●0-3	●0-2	○2-1	●0-1	—	1	6	0	3	19	-16	2

春先から危機意識を持って

農学部構内に2階建て部室

平成元年度は、年度当初において、諸先輩方をはじめとする東大ア式蹴球部関係各位の多大なるご尽力により、農学部構内に2階建ての部室が完成した。1階には部員各人が備品を収納できるスペースが確保されたロッカールームや練習後の疲れを癒してくれるシャワールームが完備され、2階にはミーティング・スペースと世界のトップチームや東京大学リーグの競合相手の戦略や技術を研究する上で欠かせないテレビ・ビデオデッキも設けられた。先輩諸兄の現役選手に寄せる期待とサッカーを愛する気持ちが現役選手一同に伝わった。中でも、最上級生となった4年生同期一同は、その期待に応えなければという意識と責任感を強く持ち、前年度苦しみながら東京都1部リーグ残留という結果に至った下部リーグとの厳しい入れ替え戦の余韻を振り払うべく、心機一転、大学生活最後のシーズンを迎えた。

速攻と遅攻、2方法を練習

1年上の代の人数が少なかったこともあり、前年度から大きなメンバー変更がなく、入れ替え戦を経験した同期一同は、4年生になるまで部員が比較的多く残り、春先から危機意識を高く持ち、自主トレや練習を重ねて試合に臨んだ。

ボランチを中盤に置き、数的優位によるボール奪取を狙った前線からの意図的な守備と、高い位置で相手ボールを奪った場合の速攻、とボランチを起点として中盤を組み立てた遅攻とを使い分けた攻撃の練習を積み重ねた。

夏までの練習成果の試金石となっている京大戦は、結局1-1の引き分けに終わったが、結果的には4年間無敗を守った。また、秋の東京都1部リーグ戦も6位の結果となったものの、4年間、東京都1部リーグ所属を最低限維持し続けることができた。（住谷安史）

新部室・生かすも殺すも……

監督 平林健一

新部室の完成にあたり、様々の想いが頭の中をかけめぐりますが、そのうち特に二つの抱負を述べてみます。

一つは、東大FC構想に関してです。これは一言でいえば、東大サッカー部をサッカーが好きな者なら誰もがやれるクラブにしたい、ということです。メンバー全員が「自分のゲーム」を持てる訳です。練習は照明付きの専用グラウンドをうまく割り振れば、各チームの都合に応じて時間を定められますし、ロッカー完備の更衣室や12基のシャワーをフルに使えば、時間をずらして利用するのですから、FCのメンバー総数が100人であってもパンクはしないでしょう。練習試合も、電話、FAX、パソコン等完備した事務室を十二分に活用して各チームの要望に合わせて組んで行きます。そして、秋のリーグ戦には、東大代表として、各チームから選抜した選手でチームを組んで臨むのです。このチームはもちろん「勝ち」を第一目標とするチームです。

メンバー全員が自分の実力や都合に応じて「自分のゲーム」を持って、各人なりに充実した活動を行えることです。東大でサッカーをやっているものは、皆、FCのメンバーであり、チャンピオン・スポーツとしてサッカーと関わるものから、仲間とボールを蹴る楽しさを求める者まで、様々のサッカー・マンが一

緒になって参加できるのです。東大FCは全東大のサッカー愛好者を包括する本当のサッカー・クラブとして、多くのメンバー達の学生生活をより豊かにすることでしょう。時間はかかるでしょうが、新部室と新グラウンドを拠点に、新しい東大サッカーを創り上げて行きたいものです。

二つ目の抱負はミーティング・ルームに関してです。詰め込めば60人も入れるサッカー部専用のミーティング・ルームが出来たので、様々の事が可能です。私がテーマごとに編集したビデオ教材を使って、「頭の練習」を、全員でしょっちゅう行えます。その日の練習テーマをビデオで理解、確認した後に、グラウンドで実地練習が出来ます。練習効率はグッとアップするでしょう。選手達はいつでも好きな時に自分の見たいビデオを見ながら、サッカーについて話す事も出来ます。こうして選手達がもう少し細かくサッカーを考える様になれば、まだまだ伸びるのですが……。

新部室、新グラウンド、生かすも殺すも我々次第です。東大サッカーをあらゆる意味で再興する大きな力の一つとして、これを最大限に活用し、使い切ることが、ご協力頂いた皆様への恩返しと心得ます。

（闘魂部室建設記念号より抄録）

公式試合記録

・天皇杯

- 4月2日 1回戦 ○ 2-1 日大農獣（農学部）
- 4月9日 2回戦 ○ 1-1 立大（農学部）
PK 6-5
- 4月16日 3回戦 ● 1-1 専大（農学部）
PK 1-3

・関東大学選手権

- 4月29日 予選リーグ △ 0-0 慶大（法大）
- 4月30日 予選リーグ ● 0-3 法大（法大）
- 5月7日 予選リーグ ○ 2-0 群馬大（法大）

・春季対抗戦

- 5月21日 予選リーグ ○ 2-1 上智大（農学部）
- 5月28日 予選リーグ ○ 1-0 帝京大（農学部）
- 6月4日 予選リーグ ● 2-4 専大（農学部）
- 6月10日 準々決勝 ● 1-4 創価大（農学部）

・国公立

- 6月3日 1回戦 ○ 4-0 東学大（一橋大）
- 6月11日 2回戦 ● 1-3 東外大（一橋大）

・京都大学定期戦

- 7月9日 △ 1-1 京大（農学部）

・東京都大学リーグ1部

- 9月10日 ● 0-3 立正大（拓大）
 - 9月17日 △ 1-1 拓大（拓大）
 - 9月24日 △ 0-0 明学大（明学大）
 - 10月1日 △ 1-1 学習院（農学部）
 - 10月8日 ○ 1-0 亜大（農学部）
 - 10月15日 ● 0-1 専大（農学部）
 - 10月22日 ● 2-3 日大文理（農学部）
- 1勝3敗3分 6位

- ・部長 西本晃二
- ・監督 平林健一
- ・コーチ 吉田隆
- ・主将 住谷安史
- ・副将 内田智之、金児敦弘、小島恭、山口孝和
- ・主務 手塚耕治

- ・練習 農学部
- ・合宿 夏季 山中湖、検見川
- ・部室 農学部

出場選手

相手	関東選手権			春季対抗戦				定期戦		東京都大学リーグ1部					
	慶大	法大	群馬大	上智大	帝京大	専大	創価大	京大	立正大	拓大	明学大	学習院	亜大	専大	日大文理
GK	平岡	天野	平岡	天野	天野	天野	平岡	大久保	天野	天野	大久保	大久保	大久保	大久保	大久保
DF	住谷 金児 前沢 鹿取	住谷 金児 前沢 鹿取	住谷 金児 前沢 鹿取 (荻野)	荻野 住谷 金児 前沢	鹿取 金児 住谷 前沢	住谷 金児 前沢 鹿取 (荻野)	住谷 金児 前沢 鹿取 (荻野)	前田 金児 住谷 前沢	金児 住谷 清水 前沢	金児 清水 住谷 前沢	金児 住谷 清水 前沢	金児 住谷 清水 前沢	金児 住谷 清水 前沢	住谷 金児 清水 前沢	金児 住谷 清水 前沢
MF	山口 小島 蜷川 稲村	山口 小島 蜷川 稲村	山口 小島 蜷川 稲村	山口 山田 鹿取 稲村 (橋本)	山口 小島 蜷川 稲村	山口 小島 蜷川 津村	山口 小島 蜷川 津村	山口 小島 蜷川 津村	小島 山口 蜷川 津村 (山田)	小島 山口 蜷川 津村	小島 山口 蜷川 津村 (山田)	小島 山口 蜷川 津村 (山田)	小島 山口 蜷川 津村 (上杉)	小島 山口 津村 蜷川 (上杉)	小島 山口 津村 蜷川 (山田)
FW	手塚 (荻野) 内田	手塚 (加藤) 内田	手塚 内田	手塚 (津村) 内田	手塚 内田	手塚 内田	手塚 (山田) 内田	内田 手塚 (稲村)	手塚 内田	手塚 (瀬戸) 内田	手塚 (山田) 内田	瀬戸 内田	瀬戸 内田	瀬戸 内田	瀬戸 内田

東都大学リーグ1部成績

	拓大	立正大	亜大	専大	明学大	東大	学習院	日大文理	勝	負	分	得	失	差	点
拓大	-	●2-3	○3-1	○3-0	△1-1	○4-2	△1-1	○2-1	4	1	2	16	9	7	10
立正大	○3-2	-	△0-0	△1-1	○2-0	△1-1	○3-0	△0-0	3	0	4	10	4	6	10
亜大	●1-2	△0-0	-	○1-0	○1-0	●0-1	○1-0	○2-1	4	2	1	6	4	2	9
専大	△1-1	●0-2	●0-1	-	●0-2	○1-0	○1-0	○2-0	3	3	1	5	6	-1	7
明学大	●0-3	△1-1	●0-1	○2-0	-	△0-0	○1-0	△0-0	2	2	3	4	5	-1	7
東大	△1-1	●0-3	○1-0	●0-1	△0-0	-	△1-1	●2-3	1	3	3	5	9	-4	5
学習院	●1-3	△0-0	●0-1	●0-1	●0-1	△1-1	-	○1-0	1	4	2	3	7	-4	4
日大文理	●2-4	△1-1	●1-2	●0-2	△0-0	○3-2	●0-1	-	1	4	2	7	12	-5	4

関東大会出場は達成

精神力を鍛え、守備を強化

東京都1部リーグで4位以内に入り、関東大会の出場権を得る—これがわれわれの最低限の目標であった。

もちろん、上位リーグである関東2部リーグへ復帰というのが最終目標ではあったものの、前年のレギュラーの半数以上が卒業したこともあり、下位リーグ降格の危機感を持ってシーズンインした。シーズン最初の公式戦である天皇杯は2回戦敗退、その次の春季対抗戦は、決勝トーナメント1回戦敗退と、秋へ向けての危機感は徐々に高まっていった。

だが、逆にそこで自分たちの力量を認識したことで、その後の練習をプレスティフェンスと最後まであきらめない精神力の強化という2点に集中させることができた。もちろん、2年前に着任された吉田コーチに啓発された攻撃のアイデアを封印したわけではないが、自分たちより強いチームに勝つためには守備を鍛え、残り5分で勝負できる状態をつくるのがなによりも肝要と考え、徹底的に守備の練習と走る練習に時間を割き、秋季リーグに臨んだ。

リーグ戦4位で関東大会へ

実力No.1の立正大との初戦を0-1で落とし、絶対に勝ち点を取らねばとの思いで2戦目の亜大戦に臨んだ。前年に2部から昇格した亜大は、初戦も快勝して勢いに乗っており、東大は序盤から苦戦を強いられた。FKからの直接ゴールを許すなど、前半は0-2で終了。しかしながら、雨中の試合で相手が体力を失い始めた後半、東大が怒りの反撃を開始。75分、85分に瀬戸（2年）が連続ゴールして追いつき、ロスタイムに蛭川（3年）が劇的な勝ち越しゴール。これで3-2と逆転して初勝利をあげた。

3戦目で勝ち星を計算していた成蹊大に引き分けたのは痛かったが、次節の拓大戦ではまたも雨中の消耗戦をFKからの清水（2年）の値千金の決勝ヘッドでものにし、2勝目を挙げた。しかし、続く学習院大戦を落とし、またもや星判定は五分に戻り、関東大会出場に暗雲が垂れ込めた。

がけっぶちに立たされたわれわれの6戦目の相手は創価大。のちに日本リーグ入りも果たすCFを擁し、そこまで快調に勝ち星を重ねてきていた相手。

やや押され気味の中、先制ゴールを許す。なかなか追いつけず、時間ばかりが過ぎていったが、残り5分で得たPKを確実に決めて勝ち点1を獲得し、最終戦に望みをつないだ。

最終節の相手は明治学院大。東大はここまで2勝2敗2分け。対する明学は調子が上がらず、断トツの最下位独走中。勝てば文句なしで関東大会出場が決まる状況だったが、硬くなったのか、それとも気持ち緩んだのか、先制点を奪われて大苦戦。一度は追いつくも、残り5分で再び失点。またも関東大会を逃したかといった思いが半分頭をよぎったものの、あきらめずに最後までボールを追った。その結果、残り3分で黒岩（2年）が起死回生の同点ゴール。何とか2-2の引き分けに持ち込んだ。

最終戦が引き分けに終わったことから、我々の関東大会出場は他会場の結果にゆだねられることとなったが、4位を争っていた成蹊大が拓大と引き分けたことから、東大の3年ぶりの関東大会出場が確定した。リーグ戦7試合中3試合は相手に先制された後に追いついたり逆転したりした試合で、かつ勝ち星を挙げた2試合は体力勝負の雨中の戦いを制したものであり、まさに夏場に強化してきた、最後まであきらめない精神力と体力が実を結んだのだった。

関東大会では神奈川県リーグ1位の強豪であった関東学院大に0-2で敗れ（同校は準優勝）、関東リーグ昇格は果たせなかったものの、何とか関東大会出場という最低限の目標は達成できた。われわれが1年の時は、関東2部昇格は当然という自信を部員全員が思っていたほどだった。しかしながら、関東大会1回戦で千葉大に足元をすくわれた。それ以降、関東大会には出場しておらず、その時の悔しさは一瞬たりとも忘れたことはなかった。何とか後輩に関東大会の雰囲気を感じさせたい。それが4年生全員の思いだった。

われわれが卒業した後の2年間、後輩達も関東大会に連続出場してくれた。それが彼らの努力の成果であることは当然だが、少しはわれわれも寄与できたのではないかと内心自己満足に浸っている。

最後に、常に温かく見守って下さった西本部長、我々にサッカーの面白さと新鮮な驚きを与えて下さった平林監督と吉田コーチ、並びに厳しくも温かい指導をして下さった諸先輩方、決して強くはなかった我々の代を明るく支えてくれた後輩諸氏に感謝を述べたい。（小島恭）

公式試合記録

・天皇杯

4月1日 1回戦 ○ 1-0 東外大（農学部）
 4月8日 2回戦 ● 1-1 日大文理（農学部）

・春季対抗戦

5月20日 予選リーグ ○ 2-1 日大文理（農学部）
 5月27日 予選リーグ ○ 4-2 上智大（農学部）
 6月2日 予選リーグ ● 1-2 明学大（農学部）
 月 日 準々決勝 ● 1-3 立正大（ ）

・京都大学定期戦

7月8日 ● 0-1 京大（京大農学部）

・東京都大学リーグ1部

9月9日 ● 0-1 立正大（農学部）
 9月16日 ○ 3-2 亜大（農学部）
 9月23日 △ 0-0 成蹊大（拓大）

9月30日 ○ 1-0 拓大（拓大）
 10月7日 ● 1-2 学習院（明学大）
 10月14日 △ 1-1 創価大（明学大）
 10月21日 △ 2-2 明学大（明学大）
 2勝2敗3分 4位

・関東大会

11月10日 ● 0-2 関東学院（立大）

- ・部長 西本晃二
- ・監督 平林健一
- ・コーチ 吉田隆
- ・主将 小島恭
- ・副将 山口杏和
- ・主務 荒巻俊哉、山田祈一

- ・練習 農学部
- ・部室 農学部

出場選手

相手	天皇杯		春季対抗戦			定期戦	東京都大学リーグ1部							関東大会
	東外大	日大文理	日大文理	上智大	明学大	京大	立正大	亜大	成蹊大	拓大	学習院	創価大	明学大	関東学院
GK	天野	天野	天野	平岡	平岡	天野	平岡	平岡	平岡	平岡	平岡	平岡	平岡	平岡
DF	前沢	前沢	前沢	前沢	前沢	山口	星川	星川	前田	清水	清水	清水	清水	清水
	清水	清水	清水	清水	清水	清水	住谷	清水	住谷	住谷	住谷	住谷	住谷	住谷
	中村	中村	中村	中村	中村	中村	清水	住谷	星川	星川	星川	星川	星川	星川
	大西	大西	小島	山口	山口	前沢	前沢	前沢	前沢	前沢	前沢	前沢	前沢	前沢
MF	小島	小島	山口	小島	小島	宮部	小島	小島	小島	小島	小島	小島	小島	小島
	津村	津村	稲村	津村	宮部	小島	宮部	宮部	宮部	宮部	宮部	宮部	宮部	宮部
	宮部 (星川)	宮部	宮部	宮部	津村 (星川)	蛭川	稲村	稲村	蛭川	津村	蛭川	蛭川	津村	津村
	蛭川	黒岩	山田	山田	蛭川	津村 (星川)	津村	津村 (蛭川)	稲村 (宮部)	稲村	稲村	稲村 (津村)	稲村	稲村
FW	瀬戸	瀬戸	津村	瀬戸	瀬戸	瀬戸	黒岩	黒岩	黒岩	黒岩	黒岩	黒岩	黒岩	黒岩
	上杉 (黒岩)	上杉 (星川)	黒岩	黒岩	黒岩	黒岩	瀬戸	瀬戸	瀬戸	瀬戸	瀬戸	瀬戸	瀬戸	瀬戸

東京都大学リーグ1部成績

	立正大	創価大	学習院	東大	成蹊大	拓大	亜大	明学大	勝	負	分	得	失	差	点
立正大	—	○2-0	○2-1	○1-0	○2-1	○2-0	○7-0	○4-0	7	0	0	20	2	18	14
創価大	●0-2	—	○3-0	△1-1	○3-1	○3-1	△0-0	○5-1	4	1	2	15	6	9	10
学習院	●1-2	●0-3	—	○2-1	○2-1	●1-2	○2-1	○2-0	4	3	0	10	10	0	8
東大	●0-1	△1-1	●1-2	—	△0-0	○1-0	○3-2	△2-2	2	2	3	8	8	0	7
成蹊大	●1-2	●1-3	●1-2	△0-0	—	△2-2	○2-1	○1-0	2	3	2	8	10	-2	6
拓大	●0-2	●1-3	○2-1	●0-1	△2-2	—	○2-1	●0-1	2	4	1	7	11	-4	5
亜大	●0-7	△0-0	●1-2	●2-3	●1-2	●1-2	—	○3-0	1	5	1	8	16	-8	3
明学大	●0-4	●1-5	●0-2	△2-2	●0-1	○1-0	●0-3	—	1	5	1	4	17	-13	3

関東大会に連続出場したが

西本部長、平林監督が引退

長きにわたり、東大サッカー部に多大なる貢献をされてきた平林監督（バヤシさん）が平成2年度を最後に引退し、3年前よりコーチをして下さっていた吉田さんに監督の座を委譲された。個人的には私の留年を救っていただくなどお世話になりっぱなしの西本部長も退かれるなど、公私に不安を抱える船出だった。

幸いにも主力選手はそのほとんどが過去にバヤシさんの“薫陶”を受けており、プレスを初めとする守備についての基礎は嫌というほど叩き込まれていたため、吉田新監督の下、攻撃面に集中、頭を使ったプレーを身につけることが出来たと思う。

主将としてチームを引っ張る責務を負った蜷川であるが、春先の肉離れにより長期戦線離脱。ふがいない主将に代わりチームを活性化させたのが、副将の面々は当然のことであるが、これに加わるのがスーパー1年生の信国。今でこそ辛口の信国にたじたじの諸兄もあろうが、当時は慶応相手に技が通じず号泣するという純な一面もあった。

走り込みの量を大幅に増加

最近の走り込み方については関知しないが、当時まことしやかに言われていたのが、筋力には速筋と遅筋があり、サッカーで必要なのはこの両方の性質を具有する筋肉、すなわちFOGであると。スポーツ科学に疎く、FOGが何の略かも存せぬ主将は、まさか自分は負傷のため走らずに済んだからではあるまいが、部員たちの非難の声は聞こえぬ振りで、徹底的に走り込みの量を増やした。400m 7本+シャトル7本などはまだ良い方であった。この正気を失った感がある主将にこたえたのが、毎回FOGトップを張る前田である。瀬戸や副将などが体力を温存してラストだけトップを取るのとは大違いであった。手前みそにはなるが、体力負けという事態はリーグ戦を通じてなかったと記憶している。その分戦術面の練習量を増やした方が良かったのでは、という当然あり得べき批判はこの際受け流すことに。

リーグ戦は取りこぼし響く

昨年度も関東大会に出場しながら敗退した雪辱に燃える東大は初戦の成蹊大戦を3-0で飾る。そし

て天王山となる拓大戦へ。技術、体力ともに拓大が上。しかし拓大の猛攻に耐え1-0で辛勝。拓大の「また東大マジックにやられた！」のほやきが耳に心地良い。3戦目は東洋大。実力は東大勝れりといえども狭い東洋大グラウンドに慣れた東洋を攻め切れず0-0のドロー。この取りこぼしが後のちまで響くことに。4戦目は帝京大。主将が1得点、さらにPKをもらうなど圧勝ムードが漂うが、何と欲張った主将がPKをミス。主砲瀬戸に蹴らせていればリーグ得点王に輝いたのにと批判はさておき、ともあれ2-1で辛勝。この時点でリーグトップに立つが、おごれる人も久しからず。吉田監督が「息を吹き返した帝京の波状攻撃を食らい、露呈した守備の弱点を次の立正大戦で突かれた！」とお冠の5戦目の立正大戦。実力リーグNo.1の立正大はブラジル人CFだけではあき足らず、長身のウイングを起用、身長差を突いてくる。たまたま1-4で敗退。続く創価大戦も0-3で敗退。関東大会出場に黄色信号が。背水の学習院大戦を迎える。前2戦のうっ憤を晴らすべく東大FWが爆発。4-1の大勝で関東大会出場を決めた。

しかし、この勝利には犠牲がともなう。相手のスローインになるべくタッチを割ったボールを稲村が何の気なしに蹴るとジャストミートした打球ははるか彼方へ。遅延行為と取られイエローカード。積算により稲村の関東大会不出場が決定。この瞬間チームの精神的支柱のシーズンに終止符が打たれてしまった。

関東大会は関東学院に苦杯

一回戦の相手は昨年と同じ神奈川代表関東学院。昨年は0-2で惜敗したが今年こそは必勝を期す。両者の力は伯仲、どちらも決定的チャンスを作れぬまま後半の死闘へ。残り3分を切り、体力的にも精神的にも限界に達したところ、相手がカウンターから東大右サイドをえぐる。ポテポテのセンターリングをCB前田がカットしたと思い、左SB前沢はマークを外してサイドに開く。ところが、前田の長い足の僅か先をボールはすり抜けペナルティエリア内へ。前沢が外したマークはこれを逃さずサイドネットへ突き刺した。こうして我々の4年間で幕を閉じる。ちなみに、関東大会の決勝は関東学院とくじ運の良かった東洋大であった。（蜷川明男）

公式試合記録

・天皇杯

3月31日 ● 1-1 桜美林（農学部）

10月13日 ● 0-3 創価大（農学部）

10月20日 ○ 4-1 学習院（農学部）

4勝2敗1分 3位

・春期対抗戦

5月19日 予選リーグ ○ 3-2 明学大（農学部）

5月26日 予選リーグ ○ 2-1 国学院（農学部）

6月2日 予選リーグ ● 3-5 創価大（農学部）

・関東大会

11月3日 1回戦 ● 0-1 関東学院（農学部）

・京都大学定期戦

7月7日 △ 0-0 京大（農学部）

・部長 南忠夫

・監督 吉田隆

・主将 蛭川明男

・副将 稲村孝史、前沢重男

・主務 荻野哲弘、天野賢一

・東京都大学リーグ1部

9月8日 ○ 3-0 成蹊大（拓大）

9月15日 ○ 1-0 拓大（東洋大）

9月22日 △ 0-0 東洋大（東洋大）

9月29日 ○ 2-1 帝京大（農学部）

10月6日 ● 1-4 立正大（農学部）

・合宿 春季 検見川

夏季 山中湖（1次、2次）、検見川

・練習 農学部

・部室 農学部

出場選手

相手	天皇杯予選	春季対抗戦			定期戦	東京都大学リーグ1部							関東大会
	桜美林	明学大	国学院	創価大	京大	成蹊大	拓大	東洋大	帝京大	立正大	創価大	学習院	関東学院
GK	天野	天野	天野	天野		天野	天野	天野	天野	天野	天野	天野	
DF	前沢	星川	星川	星川		中村	中村	中村	前田	前田	前沢	中村	(荻野)
	嶋田	荻野	荻野	荻野		前田	星川	星川	中村	星川	前田	前田	前田
	前田	前田	前田	前田		星川	前田	前田	前沢	中村	星川	中村	星川
	荻野	前沢	前沢	前沢		前沢	前沢	前沢	星川	前沢	中村	前沢	前沢
MF	星川	清水	清水	清水		清水	清水	清水	清水	清水	清水	清水	清水
	黒岩	小松	小松	小松		西原	稲村	清水	稲村	稲村	稲村	信国	信国
	宮部	大西	(信国)	(瀬戸)		信国	(蛭川)	西原	信国	信国	(来住)	信国	宮部
	稲村	宮部	宮部	宮部		稲村	西原	信国	西原	信国	宮部	宮部	稲村
FW	瀬戸	上杉	上杉	上杉		宮部	宮部	宮部	宮部	瀬戸	黒岩	瀬戸	瀬戸
	上杉	黒岩	黒岩	黒岩		瀬戸	瀬戸	瀬戸	瀬戸	宮部	(蛭川)	瀬戸	黒岩
	(片山)						(黒岩)						

東京都大学リーグ1部成績

	立正大	拓大	東大	東洋大	創価大	成蹊大	帝京大	学習院	勝	負	分	得	失	差	点
立正大	-	△3-3	○4-1	○2-1	●0-1	△0-0	○3-0	○2-0	4	1	2	14	6	8	10
拓大	△3-3	-	●0-1	△2-2	○2-1	○2-1	○4-3	○5-1	4	1	2	18	12	6	10
東大	●1-4	○1-0	-	△0-0	●0-3	○3-0	○2-1	○4-1	4	2	1	11	9	2	9
東洋大	●1-2	△2-2	△0-0	-	○2-1	●0-1	○2-0	○3-1	3	2	2	10	7	3	8
創価大	○1-0	●1-2	○3-0	●1-2	-	○3-0	△1-1	●0-1	3	3	1	10	6	4	7
成蹊大	△0-0	●1-2	●0-3	○1-0	●0-3	-	○2-1	○2-0	3	3	1	6	9	-3	7
帝京大	●0-3	●3-4	●1-2	●0-2	△1-1	●1-2	-	○2-0	1	5	1	8	14	-6	3
学習院	●0-2	●1-5	●1-4	●1-3	○1-0	●0-2	●0-2	-	1	6	0	4	18	-14	2

首位も狙える大一番で大敗

脈々と連なることを願って。

（小松 成）

4年生は例年になく大人数

2年連続関東大会で関東2部との入れ替え戦の手前で苦杯をなめてきた雪辱を期し、のぞんだシーズン。特に前年はボールをしっかり回して試合の主導権を握りながらいろいろな攻撃のできる可能性の高いチームだっただけに、今年こそ関東2部へ！の気持ちが強かった。4年生は例年にない大人数の代で、2年からレギュラーを務めている選手が多い、そんな年だった。

チームの中心は主将の宮部、一見細身ながらも相手を背にした時の強さ、胸筋を生かした走り、桐蔭学園李監督仕込みのテクニックと口の悪さを武器にチームを引っ張る。住谷大先輩に追いつくと毎晩頭が壊れそうなほどヘディングの練習をしていた小柄なセンターバック星川、1年からセンターバック・ボランチとして活躍してきた清水が宮部と共にちんたらちんたらビルドアップし、相手の隙をつく。前年スーパールーキーとして大活躍した2年の信国がチャンスを作り、左足は蹴れないけれど当時文句なしで東京都NO1ストライカーの瀬戸二郎が応援団イタ車堀江のハイトーンボイスに押されてゴールにねじ込む。それが必勝パターン。90分しっかり自分たちのプレーを継続できれば立正大以外には間違いなく勝てる……そんなチームだった。

リーグ戦は中盤で勢い回復

前年の3位を上回る優勝を目指したリーグ戦は序盤につまずいたものの、帝京戦での信国のスーパープレーを機に流れを取り戻した…かに見えたが、不動のレギュラー清水のリーグ戦寝坊事件…それでも持ち前のちんたらポゼッションで拓大をけむに巻き、なんと立正大との首位攻防戦に。勝てば首位の大一番。4年間で一番本気の立正大だったか…ルイス・バビベ・ビボバに翻弄され大敗。最終戦も波に乗れず、リーグ戦中盤の勢いは最後まで戻らず、結局関東大会も勝ち抜けず入れ替え戦には進むことができなかった。その思いは卒業しても残ったのか…ただ幸せなことに上にも下にも本当にサッカー好きが集まった世代だったのか…1つ上の代とOBチーム「チームDIEGO」を結成し、更にはOBシニアチーム「DON-DIEGO」を結成し、今に至っている。いい仲間にも恵まれました。サッカー好きの線が

公式試合記録

・天皇杯兼総理大臣杯兼関東大学選手権

月 日 2回戦 ○ 1-0 杏林大 ()
 月 日 3回戦 ○ 2-1 成城大 ()
 月 日 ブロック決勝 ● 1-2 創価大 ()

10月11日 ○ 3-2 拓大 (農学部)
 10月18日 ● 0-5 立正大 (農学部)
 10月25日 ● 0-3 東洋大 (農学部)
 3勝3敗1分 4位

・関東大学選手権

月 日 予選リーグ ● 2-5 国士大 ()
 月 日 予選リーグ ● 0-5 法大 ()
 月 日 予選リーグ △ 1-1 群馬大 ()

・関東大会

月 日 1回戦 ○ - 宇都宮大 ()
 月 日 2回戦 ● - 創価大 ()

・春季対抗戦

月 日 予選リーグ ○ 2-1 学習院 ()
 月 日 予選リーグ ○ 2-1 明学大 ()
 月 日 予選リーグ ● 0-3 立正大 ()
 月 日 トーナメント ● 1-3 亜大 ()

・部長 南忠夫

・監督 吉田隆

・主将 宮部達

・副将 黒岩征

・主務 星川佳広

・会計 中村智

・学連 小松成

・京都大学定期戦

7月9日 △ 1-1 京大 (京大農学部)

・合宿 春季 3月下旬 検見川

夏季 8月上旬 山中湖 (Aチーム)

8月中旬 検見川 (Bチーム)

8月下旬 検見川

・東京都大学リーグ1部

9月13日 △ 1-1 成蹊大 (農学部)

9月20日 ● 1-3 創価大 (拓大)

9月27日 ○ 1-0 亜大 (東洋大)

10月4日 ○ 3-0 帝京大 (拓大)

・練習 農学部

・部室 農学部

出場選手

相手	レギュラー
GK	有馬
DF	磯
	星川
	前田
HB	霧島
	清水
	信国
	西原
FW	稲村
	宮部
	瀬戸

定期戦	東京都大学リーグ1部							
	京大	創価大	立正大	拓大	帝京大	東洋大	亜大	成蹊大

東京都大学リーグ1部成績

	創価大	立正大	拓大	東大	帝京大	東洋大	亜大	成蹊大	勝	負	分	得	失	差	点
創価大	-	○2-0	△2-2	○3-1	△0-0	○5-0	○3-0	○1-0	5	0	2	16	3	13	12
立正大	●0-2	-	△1-1	○5-0	○1-0	○1-0	○3-2	○1-0	5	1	1	12	5	7	11
拓大	△2-2	△1-1	-	●2-3	●1-5	○3-0	○3-1	○5-0	3	2	2	17	12	5	8
東大	●1-3	●0-5	○3-2	-	○3-0	●0-3	○1-0	△1-1	3	3	1	9	14	-5	7
帝京大	△0-0	●0-1	○5-1	●0-3	-	○1-0	●0-1	△2-2	2	3	2	8	8	0	6
東洋大	●0-5	●0-1	●0-3	○3-0	●0-1	-	○1-0	○4-1	3	4	0	8	11	-3	6
亜大	●0-3	●2-3	●1-3	●0-1	○1-0	●0-1	-	○2-1	2	5	0	6	12	-6	4
成蹊大	●0-1	●0-1	●0-5	△1-1	△2-2	●1-4	●1-2	-	0	5	2	5	16	-11	2

主将としての指導力を反省

純粋にサッカーを楽しんだ

私が東大ア式蹴球部に入部して非常に印象深かったのは「勝利のために切磋琢磨する」ことに加え、「各人がサッカーを純粋に楽しんでいる。」ということでした。私が育った静岡県では、前者に非常に重きが置かれる傾向があると感じていた私としては、かかる環境は非常に心地よく、かつ私自身も純粋にサッカーの楽しみを実感することができた4年間でした。

その一方、主将および最上級生という、チームを引っ張る立場に立ってからは、上記2つの平衡を保つことに苦心した1年間でしたが、都リーグ2部へ転落した結果が示す通り、残念ながら、少なくとも前者については全く良い結果を残すことができませんでした。

平成5年度の同期は、2年生の後期には6名まで減少したので、我々が最上級生となる年には、いろいろな困難に直面することが予想されましたが、主務／学連幹事として、甲斐、檜川および藤原が盤石な運営をしてくれたと思います。その一方、今から言えば主将としての私は、グラウンドにおけるリーダーシップの発揮が不足していたように思います。理由としては、怪我などが多かったことから、プレーの中で声をかけることが少なかったことと、主将および最上級生として、サッカーに対する誠実な姿勢を示すことで、多くを語らずとも部全体の意思統一が図れる、つまり（砕けた表現を借りれば）「俺の背中を見てついて来い」的な発想に固執したことが挙げられると思います。非常に貴重な大学生活4年間の中でサッカーをどのように位置づけるのかということにつき、各人がそれぞれ異なる思いを持つ中で、チーム全体で冒頭記載の2点のバランスを保つためには、主将および最上級生として、もっと分かりやすい形でリーダーシップを発揮し、コミュニケーションの深化を重視すべきだったと、今では考えています。

きびしい状況を将来の糧に

秋季リーグ戦で連敗を喫し、都リーグ2部への転落がほぼ確定した際、吉田監督から「大学卒業後は各人ともサッカーとは直接関係のない職業に就き、

困難な状況に直面することもあると思うが、今置かれている厳しい状況においても最善を尽くし、ぜひ将来の糧にして欲しい」という趣旨の言葉を頂きました。

部に在籍した4年間は、私にとってサッカーの楽しさを再認識できた場であるとともに、上記の吉田監督の言葉が示す通り、一生の糧となる経験でした。（霜島弘則）

公式試合記録

・天皇杯兼総理大臣杯兼関東大学選手権

月 日 2回戦 ○ 1-0 日大商学 ()
 月 日 3回戦 ● 0-0 大東大 ()
 PK 3-4

10月3日 ● 0-3 明学大 (農学部)
 10月10日 ● 1-4 創価大 (農学部)
 10月17日 ● 0-2 立正大 (拓大)
 10月24日 ● 0-1 拓大 (拓大)
 0勝7敗 8位 2部に降格

・春季対抗戦

6月6日 予選リーグ ○ 2-1 東洋大 (農学部)
 月 日 予選リーグ ● 1-3 学習院 (農学部)
 月 日 予選リーグ ● 0-3 日大文理 (農学部)

・部長 南忠夫
 ・監督 吉田隆
 ・主将 霜島弘則
 ・副将 西原基史

・京大定期戦

9月4日 ● 0-3 京大 (農学部)

・主務 甲斐正彦、藤原英正
 ・学連 藤原英正、檜川和正

・東京都大学リーグ1部

9月12日 ● 0-3 帝京大 (農学部)
 9月19日 ● 2-4 東洋大 (立大)
 9月26日 ● 2-5 立大 (立大)

・練習 農学部
 ・部室 農学部

出場選手

相手	春季	定期戦	東京都大学リーグ1部						
	東洋大	京大	帝京大	東洋大	立大	明学大	創価大	立正大	拓大
GK	有馬	有馬				有馬	有馬	有馬	
DF	前川	前川				前川	前川	前川	
	霧島 (大石)	霧島				霧島	霧島	霧島	
	布瀬川 渡辺	布瀬川 渡辺				布瀬川 竹内	高橋 竹内	布瀬川 竹内	
HB	信国	信国				渡辺	渡辺	渡辺	
	日置	西原				信国	信国	信国	
	森田	森田				宮沢 (服部)	森田 (服部)	森田	
FW	高橋	高橋				西原	西原	西原	
	来住 瀬戸	来住 瀬戸				来住 瀬戸	来住 瀬戸	来住 瀬戸	

東京都大学リーグ1部成績

	立大	立正大	拓大	帝京大	明学大	東洋大	創価大	東大	勝	負	分	得	失	差	点
立大	—	●1-2	○2-1	○1-0	○3-1	○1-0	○2-1	○5-2	6	1	0	15	7	8	12
立正大	○2-1	—	△1-1	○4-0	△0-0	△0-0	△2-2	○2-0	3	0	4	11	4	7	10
拓大	●1-2	△1-1	—	△0-0	○1-0	○2-0	○4-2	○1-0	4	1	2	10	5	5	10
帝京大	●0-1	●0-4	△0-0	—	△1-1	○3-1	○5-0	○3-0	3	2	2	12	7	5	8
明学大	●1-3	△0-0	●0-1	△1-1	—	△2-2	○2-1	○3-0	2	2	3	9	8	1	7
東洋大	●0-1	△0-0	●0-2	●1-3	△2-2	—	○1-0	○4-2	2	3	2	8	10	-2	6
創価大	●1-2	△2-2	●2-4	●0-5	●1-2	●0-1	—	○4-1	1	5	1	10	17	-7	3
東大	●2-5	●0-2	●0-1	●0-3	●0-3	●2-4	●1-4	—	0	7	0	5	22	-17	0

都2部なら優勝する力もつ

優勝した創価大だけは他と比べると力があつたが、他は同じくらい。サッカーのベースは十分作れていたから、創価大以外の相手は、試合展開としてはほとんど6：4から7：3の割合でボールを支配するような感じだった。後ろ目のポジションにいると暇な時間帯が結構あつた。

前シーズンの2部降格から、すぐに1部昇格できたよかつたが、内情をよく知る身としてはよくあそこまで仕上がつたと思う。攻めの時間帯が多い試合展開は、かえつて点とるのが難しい側面があるから、それは裏を返せば一つのまとまりを作るところまでは1シーズンかけてできたということだと思ふ。

夏の山中合宿で、慶応大と割といい試合して、少し手応えを感じた記憶がある。リーグ戦までの練習試合の対戦では、まったく負けてなかつた相手から、リーグ戦では勝ち点をガツチリ取れなかつたりした残念な点はあつたが、東京2部なら優勝する力くらいは身につけていた。そのまま社会人におきかえれば東京1部の上位くらいだろうから、十分自慢して誇りに思つていいと思う。たしか雨でぐちゃぐちゃのグラウンドでの試合はなくて、選手にとってはやりやすい環境での試合が多かつた。原則参加義務のリーグ戦後の夜の宴会は毎試合後やつた。いいリーグ戦であつた。

新体連の東京都大学リーグ

おもに通常の公式戦の出場機会がない選手のために新体連の東京都大学リーグに参加した。河川敷での試合が多く、雨天中止や、風が強すぎてセンターリングが元に戻つてきて悲しい気分になることもしばしば。しかし、監督不在の開放感からか、普段見られないようなアグレッシブなプレーが多数みられた。新体連のリーグに出場するメンバーは落ち込みつつも開き直り試合を楽しんでいた。

部員数が多くて運営に苦労

とにかく部員数の多いシーズンだった。4、5月ころには名簿上では60人を超えていたはず。実際、一度に農学部グラウンドに50名以上の選手が集まつた日もあつたと思う。毎週一人1本ずつは試合ができるように手配するのがとにかく大変だった。シーズ

ン後半には、けがで練習できなかつたり、徐々に来なくなつたりと、少し人数的には落ち着いたが、試合相手を確保し、その試合を見るだけでも結構な労力であつた。

そんな中、いつも試合の録画に使つていた8ミリビデオカメラがシーズンはじめに壊れた。カメラだけはどうしても必要だったので、全員から少しずつお金を集めてすぐに新しいのを買った。皆よく協力してくれて、一週間以内にはまた録画をはじめたように記憶している。自分が出た試合のビデオは皆良く見て復習していた。農学部グラウンドは試合はいつも応微研の屋上から撮影していた。

練習は基本的に農学部グラウンドで、梅雨の時期などは農学部わきの野球場でも練習した。御殿下のグラウンドを使つた記憶はない。プールと筋トレのジム通いをしている選手がわりといたと思う。野球場の筋トレマシンも使つていたと思う。夏前に一度体力測定を駒場でやつた。体育を専攻していた星川先輩のところでトレッドミルなどの機材を使つた測定などもやつていただいた。

練習の内容はとにかく基本的な内容のものが多かつた。人数は多くても、ひいき目に見ても決して能力豊かな選手が集まつていたとはいえず、Aチームの練習でも簡単なことからこつこつと、という感じだった。人数が多いため待ち時間も結構多く、工夫の余地もあつたのではなかつたか。雨でグチャグチャの農学部グラウンドで練習した日には、練習後にトンボがけをするようにしたのは、このシーズンからである。前年までは練習前しかやらなかつたので、練習後にグラウンドが乾いて、がちがちになつた足跡が消えるまで日数がかかり苦労していた。

(信国陽二郎)



4年生一同

公式試合記録

・天皇杯兼総理大臣杯兼関東大学選手権

月 日 1回戦 ○ 0-0 杏林大 ()
PK2-1
月 日 2回戦 ● 0-0 帝京大 ()
PK1-2

10月9日 ○ 1-0 成蹊大 (農学部)
10月16日 △ 1-1 大東大 (農学部)
10月23日 △ 0-0 創価大 (農学部)
2勝2敗3分 4位

・春季対抗戦

月 日 予選リーグ ● 0-4 立正大 ()
5月29日 予選リーグ ○ 3-0 帝京大 ()
6月5日 予選リーグ ● 1-2 創価大 ()

・部長 南忠夫
・監督 吉田隆
・主将 信国陽二郎
・副将 有馬嘉彦、前川圭吾
・主務 大石智弘
・臨時コーチ 平林健一、リカルド

・京大大学定期戦

7月3日 ● 0-1 京大 (京大農学部)

・合宿 春季 3月 検見川
夏季1次 8月 山中湖
夏季B 8月 検見川
夏季2次 8月 検見川

・東京都大学リーグ2部

9月11日 △ 0-0 国学院 (農学部)
9月18日 ○ 2-0 玉川大 (農学部)
9月25日 ● 0-2 成城大 (農学部)
10月2日 ● 0-1 日大文理 (農学部)

・練習 農学部
・部室 農学部

出場選手

相手	春季対抗戦			定期戦	東京都大学リーグ2部						
	立正大	帝京大	創価大	京大	国学院	玉川大	成城大	日大文理	成蹊大	大東大	創価大
GK	有馬	有馬	有馬	有馬	有馬	有馬	有馬	有馬	有馬	有馬	有馬
DF	前川 島 (矢野) 竹内	前川 島 竹内	前川 島 竹内 (矢野)	前川 島 矢野	前川 島 竹内	前川 島 竹内	前川 島 竹内	前川 島 竹内	前川 島 竹内 (矢野)	前川 島 竹内	前川 島 矢野
MF	来住 渡辺 増淵 信国 服部	来住 信国 渡辺 増淵 (秋山) 森田	来住 信国 渡辺 増淵 宮沢 (森田)	来住 竹内 信国 渡辺 宮沢	来住 信国 増淵 渡辺 今井	来住 信国 増淵 渡辺 今井 (服部)	来住 信国 増淵 渡辺 今井 (服部)	来住 信国 増淵 渡辺 (服部) 森田	増淵 信国 渡辺 宮沢 大川	来住 信国 増淵 渡辺 宮沢	増淵 信国 渡辺 宮沢 大川
FW	宮沢 瀬戸	江村 (宮沢) 宮沢	江村 瀬戸	江村 瀬戸	瀬戸 (大川) 宮沢	宮沢 (大川) 瀬戸	宮沢 瀬戸	瀬戸 宮沢	瀬戸 来住	大川 瀬戸	瀬戸 来住

東京都大学リーグ2部成績

	創価大	日大文理	成蹊大	東大	大東大	国学院	成城大	玉川大	勝	負	分	得	失	差	点
創価大	-	○2-1	△2-2	△0-0	△0-0	○1-0	○1-0	○1-0	4	0	3	7	3	4	11
日大文理	●1-2	-	△1-1	○1-0	○1-0	○3-2	△2-2	△2-2	3	1	3	11	9	2	9
成蹊大	△2-2	△1-1	-	●0-1	△0-0	○3-0	○2-0	●0-1	2	2	3	8	5	3	7
東大	△0-0	●0-1	○1-0	-	△1-1	△0-0	●0-2	○2-0	2	2	3	4	4	0	7
大東大	△0-0	●0-1	△0-0	△1-1	-	●1-2	△1-1	○4-0	1	2	4	7	5	2	6
国学院	●0-1	●2-3	●0-3	△0-0	○2-1	-	△0-0	○3-0	2	3	2	7	8	-1	6
成城大	●0-1	△2-2	●0-2	○2-0	△1-1	△0-0	-	△1-1	1	2	4	6	7	-1	6
玉川大	●0-1	△2-2	○1-0	●0-2	●0-4	●0-3	△1-1	-	1	4	2	4	13	-9	4

自分たちなりに真剣に追求

私たちがサッカー部で過ごした4年間は、Jリーグがスタートし、ドーハの悲劇などを通じてサッカー日本代表が世間の大きな関心を集めたりしたことで、ちょうど日本のサッカー界は大きな変革期にあった。一方で、大学サッカーおよび大学のサッカー部のあり方や存在意義に疑問が投げかけられ始めた時代でもあったように思う。とはいえ、当時お世辞にも大学トップレベルにいたわけではなかった我々は、農学部グラウンドで自分たちなりに真剣にサッカーと向き合うのみであったわけだが・・・。

2年次のリーグ戦で東京都1部から降格し、4年次に1部との入れ替え戦まで進んだものの引き分けで昇格を果たせず、悔しい思いをしてしまったが、自分たちのサッカーの追求という意味では、とても充実した時間を過ごせたと思っている。

現在、サッカーの奥深さ、楽しさを大学時代以上に感じながらプレーを続けておりますが、そんな欲びに導いてくれた東大サッカー部に感謝している。

（前川圭吾）



リーグ戦後、部室前にて

公式試合記録

・天皇杯兼総理大臣杯兼関東大学サッカー選手権

月 日 1回戦 ○ 4-0 武蔵大（ ）
 4月2日 2回戦 ○ 1-0 上智大（ ）
 月 日 ブロック決勝 ○ 1-0 東洋大（ ）

・関東大学選手権

4月29日 予選リーグ ● 0-7 専大（筑波大）
 4月30日 予選リーグ ● 0-6 筑波大（筑波大）
 5月3日 予選リーグ ○ 3-0 神奈川工大（筑波大）

・春季対抗戦

5月28日 予選リーグ ● 0-1 成蹊大（ ）
 6月4日 予選リーグ ● 0-1 明学大（ ）
 月 日 予選リーグ ● 0-1 東洋大（ ）

・京都大学定期戦

7月 日 ● 3-4 京大（農学部）

・東京都大学リーグ2部

9月10日 ○ 2-0 日大文理（農学部）

9月24日 ○ 1-0 帝京大（帝京大）
 10月1日 △ 0-0 立大（農学部）
 10月8日 ● 0-1 東経大（帝京大）
 10月15日 △ 0-0 一橋大（一橋大）
 10月22日 ○ 1-0 日大農獣（農学部）
 10月29日 ○ 1-0 明学大（農学部）
 4勝1敗2分 3位

・入替戦

11月19日 △ 1-1 創価大（駒沢第2）
 2部に残留

・部長 南忠夫

・監督 吉田隆

・主将 前川圭吾

・副将 今井盛広、島桂一

・主務 西馬功泰、阿部貴弘

・学連 佐藤有

・練習 農学部

・部室 農学部

出場選手

相手	定期戦	東京都大学リーグ2部							入替戦
	京大	日大文理	帝京大	立大	東経大	一橋大	日大農獣	明学大	創価大
GK	西馬	西馬	西馬	西馬	西馬	西馬	西馬	西馬	西馬
DF	前川	前川	前川	前川	前川	前川	前川	前川	前川
	島	島 (矢野)	島	島	島	島	島	竹内	島 (矢野)
MF	竹内	竹内	竹内	竹内	矢野	竹内	竹内	島	竹内
	日高	日高	日高	日高	竹内	日高	日高	日高	日高
	今井	服部	服部	服部	服部	服部	服部	服部	瀬戸
	瀬戸	今井 (宮澤)	今井 (川人)	村岡	村岡 (樋渡)	今井	川人 (村岡)	川人	服部
FW	服部	原田	村岡 (宮澤)	原田	原田 (阿部)	越部	越部	越部 (原田)	川人 (鈴木)
	原田	瀬戸	瀬戸	瀬戸	瀬戸	瀬戸	瀬戸	瀬戸	越部 (原田)
	来住	樋渡	来住 (阿部)	樋渡	来住	来住	来住	来住	来住
	阿部 (鈴木)	来住	樋渡	永守	越部	樋渡	樋渡	樋渡	樋渡

東京都大学リーグ2部成績

	日大文理	東経大	東大	立大	一橋大	帝京大	明学大	日大農獣	勝	負	分	得	失	差	点
日大文理	—	○2-1	●0-2	△2-2	○3-0	○1-0	○2-0	○5-0	5	1	1	15	5	10	16
東経大	●1-2	—	○1-0	△1-1	○2-0	△0-0	○2-0	○1-0	4	1	2	8	3	5	14
東大	○2-0	●0-1	—	△0-0	△0-0	○1-0	○1-0	○1-0	4	1	2	5	1	4	14
立大	△2-2	△1-1	△0-0	—	○1-0	●1-4	○2-0	○2-1	3	1	3	9	8	1	12
一橋大	●0-3	●0-2	△0-0	●0-1	—	○1-0	○3-1	○7-2	3	3	1	11	9	2	10
帝京大	●0-1	△0-0	●0-1	○4-1	●0-1	—	●1-2	○5-1	2	4	1	10	7	3	7
明学大	●0-2	●0-2	●0-1	●0-2	●1-3	○2-1	—	○2-1	2	5	0	5	12	-7	6
日大農獣	●0-5	●0-1	●0-1	●1-2	●2-7	●1-5	●1-2	—	0	7	0	5	23	-18	0

入れ替え戦に勝ち2部残留

得点力強化がチームの目標

前季リーグ戦を4勝1敗2分（得点5、失点1）の3位で終えたが、1部昇格に何が不足していたかと言えば、得点力であった。そこで本年は組織的な守備力をベースとしつつ、得点力の強化を図ることをチームの目標と定めた。しかし基礎体力、技術で相対的に劣るチームは勝つためには頭を使う以外になく、オフシーズン中、ポジション別（FW、MF、DF、DF、GK）、テーマ別（CK、FK、スローイン）に全部員をグループに分け、勝つためにはどうしたら良いか、おのおの検討することから開始した。キッカー不足には常に悩まされたが、この試みをしたことで、特にリスタートの多様性は向上したと今でも思っている。

京大戦は1～3軍とも勝つ

天皇杯予選、春季対抗戦は確たる結果を残せなかったが、敵地での京大戦は1、2、3軍戦で全勝した。質で勝りながら、ここ数年結果が出ていなかった1軍戦で勝利し、夜のレセプションでその思いをぶつけたところ、京大の連中からさんざん吞まされた。

リーグ戦は途中から不調に

秋のリーグ戦では第一戦に完勝して順調な滑り出しだったが、第2戦で2位帝京大の圧倒的な攻撃力の前に完敗、第3戦では優勝した国学院大と当たり、1-1で迎えた後半、1年生FWに直接FKを決められ、そのあとの3試合も勝ち星を挙げられなかった。夜の飲み会も次第にトーンダウンしていったことを覚えている。結果2勝4敗1分（得点6、失点9）の6位で終え、3部の明星大との入れ替え戦に臨むこととなった。

相手をビデオ分析して快勝

入れ替え戦当日、すでに自動昇格を決めている朝鮮大が間違えて会場に登場するハプニングもあったが、矢野の下宿先まで押しかけ、徹底して相手のビデオ分析を行ったかきもあり、試合は樋渡のループシュートなどで快勝、無事残留を果たした。

格上に弱い素直なチーム

弱い相手に試合を取りこぼす事は少なく、そうした意味で得点力は向上したが、明らかに実力が上回る相手に対してチーム全体として踏みとどまることが出来なかった。関東大会で筑波大と戦った昨年と比較し、強豪校との対戦機会が少なかった事も一因だったが、振り返ると「素直な」チームだったように思う。（竹内真之介）



山中合宿



農学部グラウンドにて

公式試合記録

・天皇杯兼総理大臣杯兼関東大学選手権
3月24日 ● 0-0 学習院（農学部）
PK 4-5

・春季対抗
5月26日 ● 1-4 東洋大（東洋大）
6月2日 ○ 1-0 拓大（農学部）
6月9日 ● 0-4 国学院（東洋大）

・京都大学定期戦
7月 日 ○ 1-0 京大（京大農学部）

・東京都大学リーグ2部
9月15日 ○ 2-0 大東大（農学部）
9月29日 ● 0-4 帝京大（帝京大）
10月6日 ● 1-2 国学院（農学部）
10月13日 ● 0-1 立大（成蹊大）
10月20日 ● 0-1 一橋大（一橋大）
10月27日 △ 0-0 成蹊大（農学部）

11月3日 ○ 3-1 東工大（農学部）
（9月22日の試合が台風で日程変更された）
2勝4敗1分 6位

・入替戦
月 日 ○ 3-1 明星大（ ）
2部に残留

- ・部長 南忠夫
- ・監督 吉田隆
- ・主将 竹内真之介
- ・副将 服部浩介、原田剛、矢野将文
- ・主務 塚本俊作
- ・学連 米良英剛
- ・合宿 春季 検見川
夏季 山中、検見川
- ・練習 農学部
- ・部室 農学部

出場選手

相手	春季対抗戦			定期戦	東京都大学リーグ2部							入替戦
	東洋大	拓大	国学院	京大	大東大	東工大	帝京大	国学院	立大	一橋大	成蹊大	明星大
GK	多留	多留	宮川									
DF	村岡 (永井) 矢野 竹内 大谷	村岡 矢野 竹内 大谷	手塚 山下 飯島 江口									
MF	服部 新倉 (萩原) 原田 川人 (吉田)	新倉 (小林) 川人 服部 原田 (越部)	小林 新倉 (伊地知) 原田 吉田 (綿貫)									
FW	安部 樋渡	安部 樋渡	永守 藤井									

東京都大学リーグ2部成績

	国学院	帝京大	立大	大東大	一橋大	東大	成蹊大	東工大	勝	負	分	得	失	差	点
国学院	○4-2	○1-0	○3-0	○2-1	○2-1	○1-0	○2-0	7	0	0	15	4	11	21	
帝京大	●2-4	○2-1	△1-1	○6-1	○4-0	○1-0	○3-1	5	1	1	19	8	11	16	
立大	●0-1	●1-2	△2-2	○2-0	○1-0	○3-1	○2-0	4	2	1	11	6	5	13	
大東大	●0-3	△1-1	△2-2	○5-0	●0-2	○1-0	△1-1	2	2	3	10	9	1	9	
一橋大	●1-2	●1-6	●0-2	●0-5	○1-0	○2-1	○1-0	3	4	0	6	16	-10	9	
東大	●1-2	●0-4	●0-1	○2-0	●0-1	△0-0	○3-1	2	4	1	6	9	-3	7	
成蹊大	●0-1	●0-1	●1-3	●0-1	●1-2	△0-0	○1-0	1	5	1	3	8	-5	4	
東工大	●0-2	●1-3	●0-2	△1-1	●0-1	●1-3	●0-1	0	6	1	3	13	-10	1	

指導者欠き試行錯誤の1年

降格の苦しみを成長の糧に

1997年12月7日に成蹊大との入れ替え戦に敗れて、東京都大学リーグ3部への降格を初めて味わったが、その苦い経験は我われに成長させる機会を与えてくれていると強く実感している。

入学時に出会ったア式のサッカー部や先輩方は、1974-76年に生まれて、東大にたどり着くまでにもかなりサッカーを楽しむ経験をしたつもりで我われにとっても、もう一度熱中しようと思うに足りるほど魅力的だった。短期間だけの所属も含めると、約20名程度が、Jリーグ開幕の翌年である平成6年（1994年）に入部したが、その3年後、前年まで6年間監督を務められた吉田隆氏との契約が更新されないという事実で最上級生として直面し、その後の試行錯誤の1年を共にしたのは10名である。

抜群の才能を持つ選手は不在

議論を重ねた結果、ボール支配率を高めて80分を終えた時には負けていないようにしようという戦術を採用した。前年までに吉田監督や先輩から教わったやり方を踏襲したのである。4年間で出会った前後の計6世代と自分世代を冷静に比較してみると、総合的には標準的で、個人的には抜群の才能を持つ選手がいたわけではない。

また例年なら入部当時の4年生が全員、最終戦まで試合に出場するために努力をし、かつ実際に活躍して、チームの総合力を高めるのだが、平成10年卒の場合、監督不在から生じる戦術上や組織運営上の不慣れを克服するために、早い段階から多くのメンバーが選手としての可能性をある程度断念した。

現在ア式蹴球部のOBを主体としたチームDiego（東京都社会人リーグ1部所属）や弁護士日本代表チームに参加して思うのは、ボールを蹴ってはじめて面白いということ。今考えると部員全員が秋季リーグ戦への出場を目指して努力する環境を作るべきであったかもしれない。

時に運営方針に迷いが生じ

大学生だけによる組織運営で乗り越えるべき点をさらに2点書き残したい。1つは、特定のコーチ、監督などの中心人物を欠いた結果として、チーム運営は話し合いによる意思決定に基づくこととなった

が、練習などの現場での対応において話し合いにより決められた規律、方針を超越する冒険を採用することが困難であったということ。

もう1つは、時として首脳陣にもチーム運営方針などに迷いが生じたため、チーム活性化の原動力になるべき下級生に対して、伸びのびやれる環境を作れていなかったかもしれないという点。将来の後輩によって達成されることを願う。

手塚氏に多大なご尽力を頂く

最後に、我々が東大ア式蹴球部に直接的に関わるようになった1994年以降、数名の関係者が他界されていってしまうが、なかで平成2年卒の手塚氏には、97年シーズンのチーム運営にあたり、多大なご尽力を頂いたことが、平成10年卒の10名の心には強く刻まれている点の特記させて頂きたい。

（矢野将文、増田直毅）



部室にて

公式試合記録

・東京都サッカートーナメント兼関東大学選手権
3月23日 1回戦 ● 0-5 明学大（ ）

・春季対抗戦

月 日 ● 0-1 東経大（ ）
月 日 ○ 2-0 上智大（ ）
月 日 ● 0-2 大東大（ ）

・京都大学定期戦

7月6日 ○ 3-0 京大（農学部）

・東京都大学リーグ2部

9月14日 △ 0-0 一橋大（農学部）
9月21日 ● 0-2 大東大（農学部）
9月28日 ○ 2-1 立大（立大）
10月5日 ● 1-3 創価大（農学部）

10月12日 ● 1-2 朝鮮大（一橋大）
10月19日 ○ 2-0 都立大（農学部）
10月26日 ● 1-5 学習院（農学部）
2勝4敗1分 6位

・入替戦

12月7日 ● 0-3 成蹊大（駒沢）
3部に降格

・部長 影本浩

・主将 矢野将文

・副将 川人解、増田直毅、樋渡類、大谷聡

・主務 山下聖志

・副務 秋山淳、小林政雄

・学連 伊地知亮太

・練習 農学部

・部室 農学部

出場選手

相手	東京都トーナメント	定期戦	東京都大学リーグ2部							入替戦
	明学大	京大	一橋大	大東大	立大	創価大	朝鮮大	都立大	学習院	成蹊大
GK	宮川	宮川	宮川	宮川	宮川	宮川	宮川	宮川	宮川	宮川
DF	矢野	秋山	日高	足立	日高 (永井)	足立	日高	日高	日高	足立 (越部)
	大谷	矢野	飯島	飯島	矢野	飯島	飯島 (秋山)	矢野	矢野	矢野
	秋山	飯島	矢野	矢野	飯島	矢野	矢野	飯島	飯島 (伊藤)	飯島 (小林)
MF	永井 (増田)	足立	足立	日高 (秋山)	足立	日高 (端本)	足立 (手塚)	足立 (秋山)	足立 (秋山)	日高
	小林	大谷	大谷	大谷	大谷	越部 (秋山)	大谷	大谷	大谷	安部 (古川)
	新倉	端本	端本	端本 (越部)	新倉 (川人)	大谷	新倉	新倉	新倉	端本
	樋渡	新倉 (萩原)	安部	新倉	安部	新倉	安部	安部	安部 (古川)	新倉
FW	川人	越部 (小林)	新倉	安部	端本	安部	端本 (古川)	端本 (伊藤)	端本	大谷
	萩原 (手塚)	川人 (安部)	樋渡	樋渡	樋渡	樋渡	樋渡	樋渡	樋渡	樋渡

東京都大学リーグ2部成績

	学習院	大東大	朝鮮大	立大	創価大	東大	都立大	一橋大	勝	負	分	得	失	差	点
学習院	—	○5-1	○4-1	△3-3	△1-1	○5-1	△1-1	○2-0	4	0	3	21	8	13	15
大東大	●1-5	—	●3-4	○1-0	○2-0	○2-0	●0-1	○2-1	4	3	0	11	11	0	12
朝鮮大	●1-4	○4-3	—	●1-3	●2-4	○2-1	○3-1	○3-1	4	3	0	16	17	-1	12
立大	△3-3	●0-1	○3-1	—	○4-1	●1-2	○3-0	△1-1	3	2	2	15	9	6	11
創価大	△1-1	●0-2	○4-2	●1-4	—	○3-1	△2-2	○2-1	3	2	2	13	13	0	11
東大	●1-5	●0-2	●1-2	○2-1	●1-3	—	○2-0	△0-0	2	4	1	7	13	-6	7
都立大	△1-1	○1-0	●1-3	●0-3	△2-2	●0-2	—	△0-0	1	3	3	5	11	-6	6
一橋大	●0-2	●1-2	●1-3	△1-1	●1-2	△0-0	△0-0	—	0	4	3	4	10	-6	3

無敗優勝、1年で2部復帰

服部監督と中西コーチ就任

学生だけで練習や試合を運営した前年に対し、この年はLB会より服部監督（故人）、三菱養和より中西コーチ（故人）に来て頂き、指導を仰いだ。ただ、前年に目標として掲げた「自分たちで考えるサッカー」というコンセプトを実現することは諦めず、戦術やメンバーなども自分たちで主体的に考え、指導者にはそれをサポートしてもらおうという形を目指した。

一方、前年に3部落ちを喫したチームに最多5人のレギュラーを配していた4年生にとっては、2部復帰は「義務」であった。3部優勝・2部復帰という結果を出すだけでなく、内容でも2部復帰以降につながるチーム作りを目指した。

春季戦は苦戦を重ねて優勝

天皇杯予選は都立大に2-2からPK戦負け。数人の1部レベルの選手を擁して成長著しい都立大が、年間を通じての厳しいライバルになることを実感した。

▽春季トーナメント（3、4部） 主将・大谷を負傷で欠いて予選を開始する。ライバル都立大を4-0の大差で下すなど比較的順調に予選突破。

しかし決勝トーナメントでは準々決勝の一橋大戦は攻撃の要・樋渡を累積警告による出場停止で欠いて苦戦。決勝では東工大を下して優勝を飾ったがPK戦までもつれる大苦戦。3部の強豪チームを圧倒することはかなわず。

▽京大戦（アウェー） セットプレーから先制されるも3点を連取し快勝ムード。しかし後半の半分過ぎから追い上げにあい、今度はCKから逆サイドに流れたボールを京大エースに決められる。なんとか逃げ切って3-2で辛勝した。

▽山中湖合宿 梅村、広谷、鎌倉、茂木、光井など若手レギュラー候補を試す。練習試合では1.5軍とはいえ慶大を4-0と圧倒し、自信をつける。初の東都3部落ちを心配し、二宮、折原両先輩が激励（練習の監視？）に駆けつけてくださった。

▽苗場合宿（オープン大会に参加） 前後半でメンバーを総入れ替えしてチーム強化を図るというポリシーで参加。立命大などを倒して決勝進出。決勝の専修大戦も、Aチームで臨んだ前半は1-0、後

半は総入れ替えしたにも関わらず0-1で踏ん張り、PK戦の結果も6人目までもつれて3-4の惜敗。層が厚くなってきたことを実感し、チームの雰囲気も良い。

リーグ戦は格下相手に白星

初戦の外語大戦でこれといったチャンスも作れず0-0の引き分けとつまづく。その後は、樋渡、五十嵐の両エース、左サイド端本（5年）などを中心に攻撃陣が機能。守っても秋のリーグ戦からセンターバックを務めた足立（2年）の活躍が光った。ぬかるんだピッチの中で6-3と苦戦した玉川大戦を除けばほとんど失点もせず、格下相手に全勝する。最終戦はライバル都立大。双方1-2回の決定機があったが（シュートは両チーム10本ずつ）、宮川が都立大エースのミドルシュートを超美技ではじくなどし、結局無得点のドロー。5勝2分けで優勝を決めた。

全方位的な努力が実を結ぶ

前年度のゲームメーカー安部がシーズン前に離脱して波乱含みのスタート。しかし5年の端本、以後数年にわたって東大サッカー部を支えた五十嵐が、シーズン半ばで（再）合流した。端本と同ポジションの副将・越部やゴールゲッター古川が、シーズン中に負傷で長期離脱したことを考えると、非常に効果的な補強であった。

シーズン開始より5月いっぱいまでは、前年からレギュラーだった4年生中心だったが、春期の途中より層の厚み作りを目指して若手を登用した。4年は全員がAチームに入る実力者揃いであったが、レギュラー以外は、Bチームコーチに就任した藤井を筆頭に、レギュラーの練習サポート役も引き受けるなどしてチーム運営の礎となった。

すべてホームグラウンドで開催すべく都学連を相手に奔走した主務・小林、学連担当・下田の働きは特筆されるべきだ。科学的トレーニングを導入してくれた野上コーチ、1シーズン付き合ってくださった学生コーチの今井さん、原田さん、スポーツマッサージを導入するなどした女子マネージャー陣の貢献も大きかった。全方位的な努力が結実した1年間での2部復帰であったと言える。

（大谷 聡）

1998年度（平成10年度）

公式試合記録

・東京都サッカートーナメント兼関東大学選手権

3月22日 1回戦 ○ 1-1 日大商学（農学部）
PK 4-3
3月29日 2回戦 ● 2-2 都立大（農学部）
PK 3-5

9月27日 ○ 6-3 玉川大（農学部）
10月4日 ○ 1-0 農工大（農学部）
10月11日 ○ 2-1 高千穂商大（農学部）
10月18日 ○ 7-0 自由学園（農学部）
10月25日 △ 0-0 都立大（農学部）
5勝2分 優勝 2部に昇格

・春季対抗戦

5月10日 予選リーグ ○ 6-0 帝京科学大（農学部）
5月17日 予選リーグ ○ 4-1 桜美林（農学部）
5月24日 予選リーグ ○ 4-0 都立大（農学部）
6月7日 決勝1回戦 ○ 3-0 都留文科大（農学部）
6月20日 準々決勝 ○ 1-0 一橋大（一橋大）
6月21日 準決勝 ○ 2-0 電通大（一橋大）
6月28日 決勝 ○ 3-3 東工大（一橋大）
PK 4-3

・部長 影本浩
・監督 服部一郎
・コーチ 中西義和
・主将 大谷聡
・主務 小林政雄
・学連 伊藤陽介

・京都大学定期戦

7月5日 ○ 3-2 京大（京大農学部）

・合宿 春季 検見川
夏季1次 山中湖
夏季2次 苗場フェスティバル

・東京都大学リーグ3部Bブロック

9月13日 △ 0-0 東外大（農学部）
9月20日 ○ 5-0 都留文科大（農学部）

・練習 農学部
・部室 農学部

出場選手

相手	天皇杯1次予選		春季対抗戦							定期戦		東京都大学リーグ3部Bブロック						
	日大商	都立大	帝京科大	桜美林	都立大	都留文大	一橋大	電通大	東工大	京大	東外大	都留文大	玉川大	農工大	高千穂大	自由学園	都立大	
GK	宮川	宮川	宮川	宮川	宮川	宮川	宮川	宮川	宮川	宮川	宮川	宮川	宮川	宮川	宮川	宮川	宮川	
DF	日高	足立	日高	福田	足立	日高	広谷	広谷	広谷	足立	足立	足立	足立	足立	足立	足立	足立	
	飯島	大谷	飯島	米良	米良	飯島	米良	米良	米良	飯島 (米良)	広谷	広谷	広谷	広谷	広谷	広谷	広谷	
	大谷	飯島	米良	飯島	飯島	大谷	大谷	大谷	大谷	大谷	大谷	大谷	大谷	大谷	大谷	大谷	大谷	
	足立	日高	福田	日高	日高	足立	足立	足立	足立	福田	福田	福田	米良	福田	福田	福田	福田	
MF	小林	小林	小林 (永井)	小林	小林	小林	日高	日高	日高	日高	日高	日高	日高	日高	日高	日高	日高	
	新倉	梅村	新倉	足立 (我部)	伊地知 (伊藤)	新倉	新倉	新倉	新倉	新倉	梅村 (端本)	我部	我部	我部	新倉	新倉 (我部)	新倉	
	梅村 (伊地知)	新倉	伊地知	新倉	新倉 (新見)	伊地知 (伊藤)	伊地知	伊地知	越部	越部	新見 (我部)	端本	端本	端本	端本	端本	端本	
	我部	我部	越部	越部	越部	越部	越部	越部	樋渡	樋渡	樋渡 (新見)	樋渡	樋渡	新倉	樋渡	樋渡	樋渡	
FW	伊藤	樋渡	古川	樋渡	樋渡	古川	古川	古川	古川	古川	五十嵐	五十嵐	五十嵐	五十嵐	五十嵐	五十嵐	五十嵐	
	樋渡	古川	樋渡	古川 (伊藤)	古川 (藤井)	樋渡 (我部)	伊藤 (山中)	樋渡	山中 (我部)	山中	伊藤	伊藤 (光井)	伊藤	伊藤	樋渡 (古川)	伊藤 (古川)	古川 (光井)	

東京都大学リーグ3部Bブロック成績

	東大	都立大	東外大	高千穂大	自由学園	玉川大	都留文大	農工大	勝	負	分	得	失	差	点
東大	-	△0-0	△0-0	○2-1	○7-0	○6-3	○5-0	○1-0	5	0	2	21	4	17	16
都立大	△0-0	-	●2-3	○2-1	○2-1	○2-1	○11-0	○4-1	5	1	1	23	7	16	14
東外大	△0-0	○3-2	-	○3-0	●1-3	△0-0	△1-1	○2-0	3	1	3	10	6	4	14
高千穂大	●1-2	●1-2	●0-3	-	○3-2	○4-0	○2-1	△2-2	3	3	1	13	12	1	12
自由学園	●0-7	●1-2	○3-1	●2-3	-	●0-1	○4-1	○1-0	3	4	0	11	15	-4	10
玉川大	●3-6	●1-2	△0-0	●0-4	○1-0	-	●1-2	○2-0	2	4	1	8	14	-6	7
都留文大	●0-5	●0-11	△1-1	●1-2	●1-4	○2-1	-	△1-1	1	4	2	6	25	-19	6
農工大	●0-1	●1-4	●0-2	△2-2	●0-1	●0-2	△1-1	-	0	5	2	4	13	-9	0

基礎体力向上で成果あげる

新コーチの方針めぐり議論

前年に3部で無敗優勝し2部に昇格した東大の次の目標は当然ながら1部昇格であった。服部監督は留任し、コーチが中西氏から高崎氏へ交代した。高崎コーチは筑波大学の大学院生で、服部監督が田嶋幸三氏に依頼して紹介してもらった経緯がある。当時の執行学年である我々は、前年の中西コーチの時の体制と同様に、4年生が基本方針や戦略を決定していくというやり方にこだわったが、一方で高崎コーチは「自分に指揮権がある」との立場を貫いた。我々は日夜「学生主体でやっていくことに意義があるのか、それとも勝利にこだわるなら専門家に従うべきなのか」という議論を続けた^(注1)。このような議論にかなりの労力を費やし、どのような体制がベストか容易には決められなかった背景に、それまで我々が経験した3年間には、それぞれ全く異なる「コーチ（あるいは監督）と学生の関係」があったことが挙げられる^(注2)。そして最後には服部監督も交えて、結論を出すに至ったのである。すなわち「高崎さんを第一にする」と。しかしながら当然、我々に全く主張する権利がなかったというわけではなく、主将の福田と主務の伊地知が中心になって、部を運営して行くことになった。

選手とスタッフの道わける

福田主将の根強い勧誘活動の結果、2年生ながら大町という大型FWの獲得に成功した。大町は桐朋高校の主将を務め、自身2度、全国高校大会に出場したのだが、腰の具合が悪いためア式蹴球部に入部するのをためらっていた。

また、選手として活躍する道と、スタッフとして部を支えていく道を完全に分け、結果、伊藤と梅村はBチームコーチに、下田はGKコーチになった。複数の者がプレーヤーを完全に辞するというこの形態は、それまでのア式蹴球部に見られなかったものである^(注3)。

練習に割かれるフィジカルトレーニングの量は前年までとは比較にならないほど多いものであり、皆が一度は高崎コーチに対し殺意を抱くほどであったが（殺意を抱く前に自分が死にそうになる者もいたが^{注4}）、基礎体力の向上は著しかった。これゆえ実際の試合でも、前線でのチェイスおよび中盤でのプ

レスを効果的に実践できたと言えよう。

京大戦は4年連続で勝ち星

珍しくこの年、応援団に来てもらった。大学の運動会なのだから、応援団がいることは不自然ではないが、ア式蹴球部では近年見られない試みであった。1軍戦は4年連続の勝利に終わり、我々は幸運にも敗北を知らぬまま卒業することになる。

2部3位で1部には挑めず

東大はここ数年ダイヤモンド型4-4-2を続けてきたが、高崎コーチのもとでディフェンシブハーフを2人置く（3年生の我部と足立）布陣を敷き、豊富な運動量を背景にそのスタイルを完成させた。一方で大町と光井という2人の2年生FWが、スーパーサブとして得点力向上に貢献した。結果は3位であり、関東リーグとの入れ替え戦の結果によっては1部との入れ替え戦の望みもあったので、シーズン終了後も練習を続けたが、結局はその望みも絶たれ、我々の戦いは終わった。

（下田修平）

注1：永井の部屋で終電間際まで議論する日が続いたが、永井と彼女のデートの約束をキャンセルさせてまで強行することもしばしばであった。そういった無理強いの上にア式蹴球部が運営されていたことを忘れてはならない。

注2：1年生のときは吉田監督がチームを指揮、2年生のときは監督を置かず選手のみでチームを運営、3年生のときは中西コーチを招請しつつも選手が主体となって運営と、そういった経緯があった。

注3：この2年前、増田さんがプレーヤーを辞してヘッドコーチになるという珍しい事例もあったが、他の人はプレーヤーを続けた。

注4：3年生の小川が、フィジカルトレーニング中に不整脈により意識を失った。AEDが普及する前のことだが、今考えるとかなり危険なことであった。

1999年度（平成11年度）

公式試合記録

・東京都サッカートーナメント兼関東大学選手権

3月21日 1回戦 ● 2-2 武蔵大（農学部）
PK 2-4

9月26日 △ 1-1 帝京大（農学部）
10月3日 ● 1-2 立大（立大）
10月10日 ○ 4-1 日大商学（農学部）
10月17日 ● 2-3 成蹊大（農学部）
10月24日 ○ 2-0 一橋大（一橋大）
4勝2敗1分 3位

・春季対抗戦

5月23日 予選リーグ △ 1-1 立正大（農学部）
5月30日 予選リーグ △ 1-1 拓大（農学部）
6月6日 予選リーグ ○ 1-0 大東大（農学部）
6月13日 準々決勝 ● 0-3 東洋大（農学部）

・部長 影本浩
・監督 服部一郎
・コーチ 高崎康嗣、野上宏志
・主将 福田雅
・主務 伊地知亮太
・学連 南谷梨紗

・京大大学定期戦

7月11日 ○ 2-1 京大（検見川）

・東京都大学リーグ2部

9月12日 ○ 5-2 日大文理（一橋大）
9月19日 ○ 3-0 大東大（一橋大）

・練習 農学部
・部室 農学部

出場選手

相手	東京都T		春季対抗戦			定期戦		東京都大学リーグ2部					
	武蔵大	立正大	拓大	大東大	東洋大	京大	日大文理	大東大	帝京大	立大	日大商	成蹊大	一橋大
GK	佐藤	中島	中島	中島	米山	中島	中島	中島	中島	中島	中島	中島	中島
DF	福田	祝部	福田	祝部	福田	福田	福田	福田	福田	福田	福田	福田	福田
	鎌倉 広谷 小川 (本多)	広谷 鎌倉 福田 (胡内)	鎌倉 広谷 祝部	広谷 鎌倉 福田	鎌倉 石田 広谷	広谷 鎌倉 祝部	広谷 鎌倉 祝部	鎌倉 広谷 祝部	鎌倉 広谷 祝部	鎌倉 広谷 祝部	鎌倉 広谷 大谷	鎌倉 広谷 大谷 (祝部)	鎌倉 大谷 祝部 (新山)
MF	足立	我部	足立	我部	沖野 (祝部)	足立	足立 (大谷)	足立 (大谷)	足立 (大谷)	足立 (伊藤)	足立	足立	我部
	我部	足立 (沖野)	我部	足立	我部	我部	我部	我部	我部	我部	我部	我部	足立 (沖野)
	新倉 伊地知	新倉 (光井) 五十嵐	新倉 (石田) 伊地知 (抜木)	伊地知 新倉	新倉 (中沢) 抜木 (光井)	新倉 伊地知 (古川)	新倉 (伊藤陽) 抜木 (胡内)	新倉 (伊藤) 抜木 (胡内)	新倉 (大町) 抜木 (伊藤)	新倉 (大町) 抜木 (大谷)	新倉 (伊藤) 抜木 (中沢)	新倉 (伊藤) 抜木 (中沢)	抜木 (中沢) 新倉
FW	伊藤陽 (古川) 山中 (大町)	新倉 山中 (大町)	五十嵐 山中 (光井)	五十嵐 山中	伊藤 (五十嵐) 山中 (伊地知)	五十嵐 (伊藤) 山中 (光井)	五十嵐 山中 (今井)	五十嵐 (大町) 山中 (光井)	五十嵐 山中 (光井)	五十嵐 山中 (光井)	五十嵐 山中 (光井)	五十嵐 山中 (緒方)	山中 (古川) 五十嵐 (伊藤)

東京都大学リーグ2部成績

	帝京大	立大	東大	大東大	成蹊大	一橋大	日大商	日大文理	勝	負	分	得	失	差	点
帝京大	—	○2-1	△1-1	○2-0	○1-0	○6-1	○1-0	○3-1	6	0	1	16	4	12	19
立大	●1-2	—	○2-1	△0-0	△1-1	○3-1	○3-1	○4-0	4	1	2	14	6	8	14
東大	△1-1	●1-2	—	○3-0	●2-3	○2-0	○4-1	○5-2	4	2	1	18	9	9	13
大東大	●0-2	△0-0	●0-3	—	○4-0	△1-1	△1-1	○2-1	2	2	3	8	8	0	9
成蹊大	●0-1	△1-1	○3-2	●0-4	—	●3-5	△2-2	○2-1	2	3	2	11	16	-5	8
一橋大	●1-6	●1-3	●0-2	△1-1	○5-3	—	●0-2	○2-1	2	4	1	10	18	-8	7
日大商	●0-1	●1-3	●1-4	△1-1	△2-2	○2-0	—	●2-3	1	4	2	9	14	-5	5
日大文理	●1-3	●0-4	●2-5	●1-2	●1-2	●1-2	○3-2	—	1	6	0	9	20	-11	3

黒星なしで1部へ自動昇格

初戦の武蔵大戦の勝利で勢いづき、その後も、創価大、朝鮮大、立大と接戦をものにして勝った。他方、1部降格組で、当初から最大のライバルと予想していた東経大も4戦全勝で勝ち上がり、第5節でリーグ戦の行方を左右する天王山を迎える。この東経大戦を4-1で快勝すると、その後も勢いは止まらず、第6節の大東大戦の勝利により、最終節を待たずしてリーグ優勝を決めた。ここで気が抜けたためか、最終節の成蹊大戦は引き分けて終えることとなったが、最終的には東大の強さが際だった結果となった。

チームの一体感作りに配慮

チームの一体感を考えたときに、まずグラウンド外では、できるだけ仕事の公平性に配慮し、全員がチームを運営しているという意識を持つようにすることが重要であると思われる。例えば、OBの方々への案内の発送や会費の徴収、グラウンド整備その他もろもろの仕事があるが、学年を問わず、レギュラーか否かを問わず、全員で仕事をするのが大切であると思う。

下の学年が雑用をするということがよくあるが、もちろん多少は許されても、それが当たり前になっては、学年間のギャップが生まれ、チームの一体感が希薄になるおそれがある。また、効率化を図ってレギュラー以外が雑用を行うというチームもあろうが、それではレギュラーでない者のモチベーション

が保たれないし、レギュラーはサッカーさえしていればいいということにもなりかねない。大学サッカーは、自主的に運営するところにも面白みがあるのではないかと思う。

それから、チーム内のコミュニケーションも大切である。東大は他の大学に比べてミーティングの時間を十分に取る方ではないだろうか。理論に偏りすぎでは当然いけないが、チームとして目的や戦術などを明確にし、共通の認識を持つことは重要である。当学年がどれだけ一体感を作れたのか、反省する部分も多々あるが、絶対に東京都1部に昇格するという目的をチーム全体の共通意識としてしっかり持つことができ、その結果厳しい練習を乗り越えて1部昇格を果たせるのではないかと思う。

（伊藤陽介）



4年生一同

公式試合記録

- ・東京都サッカートーナメント兼関東大学選手権
3月26日 1回戦 ○ 1-0 理科大（農学部）
4月2日 2回戦 ● 1-2 国学院（拓大）

- 10月1日 ○ 2-1 朝鮮大（立大）
- 10月8日 ○ 1-0 立大（農学部）
- 10月15日 ○ 4-1 東経大（農学部）
- 10月22日 ○ 2-1 大東大（立大）
- 10月29日 △ 0-0 成蹊大（農学部）
- 6勝1分 優勝 1部に昇格

- ・春季対抗戦
5月21日 ● 0-5 帝京大（農学部）
5月28日 ● 0-1 立正大（帝京大）
6月4日 ○ 3-2 朝鮮大（立正大）

- ・部長 影本浩
- ・監督 服部一郎
- ・コーチ 高崎康嗣
- ・主将 足立雅人
- ・主務 伊藤陽介
- ・学連 新山通世

- ・京大大学定期戦
7月9日 ○ 3-2 京大（京大農学部）

- ・練習 農学部
- ・部室 農学部

- ・東京都大学リーグ2部
9月10日 ○ 2-1 武蔵大（農学部）
9月24日 ○ 4-2 創価大（農学部）

出場選手

相手	東京都トーナメント		春季対抗戦			定期戦	東京都大学リーグ2部						
	理科大	国学院	帝京大	立正大	朝鮮大	京大	武蔵大	成蹊大	創価大	朝鮮大	立大	東経大	大東大
GK	米山	米山	中島	本多	米山	米山 (中島)	中島	中島	中島		中島	中島	中島
DF	胡内	広谷	長瀬	中村 (長瀬)	鎌倉	鎌倉	賢川	鎌倉	賢川		鎌倉 (山地)	鎌倉	鎌倉
	本多	本多	山地 (山地)	松村	広谷	沖野	本多	本多	鎌倉		沖野	本多	本多
	広谷 祝部	沖野 祝部	斉藤 都島	斉藤 山田	賢川 鈴木	河島 鈴木	沖野 広谷	沖野 河島 (渡邊)	沖野 広谷 (河島)		本多 広谷 (胡内)	沖野 河島	沖野 広谷
MF	足立 (荒牧) 我部	足立 我部	小川	小松	足立	祝部 (小松) 足立	鈴木 小松	小松 (大町) 賢川	足立 小松 (山地)		小松 (大町) 賢川	鈴木 (胡内) 小松 (光井) 賢川	賢川 小松 (光井) 小松 (中沢) 渡邊
	中沢 (新山) 扱木 (犬童)	胡内 (犬童) 扱木 (伊藤)	豊福 (井木) 小松 (吉田)	豊福 (山地) 渡邊	沖野 五十嵐	賢川 山中 (大町)	足立 鈴木	鈴木 鈴木	鈴木 鈴木 (大町)		鈴木 (祝部) 足立	鈴木 賢川	鈴木 (光井) 鈴木 (中沢) 渡邊
	五十嵐	五十嵐	牟田	牟田	山中 (荒牧) 伊藤 (扱木)	五十嵐 伊藤 (渡邊)	緒方 五十嵐	五十嵐 祝部 (光井)	緒方 (光井) 五十嵐		五十嵐 緒方 (光井)	五十嵐 山中 (大町)	五十嵐 緒方 (大町)

東京都大学リーグ2部成績

	東大	東経大	大東大	創価大	朝鮮大	立大	武蔵大	成蹊大	勝	負	分	得	失	差	点
東大		○4-1	○2-1	○4-2	○2-1	○1-0	○2-1	△0-0	6	0	1	15	6	9	19
東経大	●1-4		○2-0	○4-0	△1-1	△1-1	○3-0	○3-0	4	1	2	15	6	9	14
大東大	●1-2	●0-2		△2-2	△2-2	●0-1	○2-1	○2-0	2	3	2	9	10	-1	8
創価大	●2-4	●0-4	△2-2		●1-2	○4-0	△0-0	○2-1	2	3	2	11	13	-2	8
朝鮮大	●1-2	△1-1	△2-2	○2-1		○3-2	●3-5	●0-2	2	3	2	12	15	-3	8
立大	●0-1	△1-1	○1-0	●0-4	●2-3		△0-0	○3-1	2	3	2	7	10	-3	8
武蔵大	●1-2	●0-3	●1-2	△0-0	○5-3	△0-0		△3-3	1	3	3	10	13	-3	6
成蹊大	△0-0	●0-3	●0-2	●1-2	○2-0	●1-3	△3-3		1	4	2	7	13	-6	5

都1部との差を浮き彫りに

最後の15分で4点とられる

初戦の早大戦を0-5の大敗でスタートし、調子に乗れず4連敗で前半戦を折り返す。第6節（実際は第5戦目）、初めてホームで迎えた帝京大戦、終了間際の勝ち越し点で初勝利をあげるが、次節の上智大戦でも勝ちきれず、最終戦の専修大戦も、後半30分まで3-0でリードするも、最後の15分で4点を奪われ、リーグ戦を終了。都リーグ1部チームとの地力の差が浮き彫りにされた結果であった。

主体的であることを問い続け

振り返ればわれわれは、リーグ最下位での2部降格という惨めな結果を残したのみであった。現在、社会人としての研鑽を積みつつある当時のメンバーが、自らの置かれた状況に対して「主体的であること」の意味を問い続けたあの1年をどうとらえているのか、ぜひ改めて問うてみたい。私にとっては、依然としてできれば思い出したくない、しかし同時に、逃れ難く今の自分を支えてくれている、そんな時代であった。

「闘う集団」への脱皮を目指す「創造的破壊」（平成11年度）と、都1部昇格という形での、この努力の結実（平成12年度）。こうした流れを継いだわれわれが目指したのは、さらなる高みを目指すためにも、あくまで勝利にこだわるというチームの姿勢を「仕組み」として定着させることだった。

海外の大学などと交流試合

個人の意識をさらに高めつつ、選手をプレーに専念させ十分なサポートを提供できる機能的な組織体制を作り、また海外の大学や地元の高校との交流試合を通じて、チームを「社会」の中へ位置付けていった。痛みも伴うこうした試みは、予想された反発を経ながらも、最後にはおおむね理解を得られたように思う。しかし結果的に上述のような戦績しか残せなかったのは、結局はメンバー一人ひとりが、チームを、そして自らを信じ切れなかったためではないか。私を含め、真に強い相手と闘った経験を持たないメンバーが、これから肩を並べてゆくべき、いわば「見えない」相手を前に、「われわれは何をすべきか、自分には何ができるのか」を、最後まで確信を持ってないままがき続けていたように思う。

そうした中、本来「仕組み」に吹き込まれるべき「魂」が、いつしか疲弊してしまっていた。その意味で、努力を積み重ねる愚直さや仲間を思う気持ちといったこのチームの強みを、道程を示せないがゆえにつぶしてしまった主将の責任は重い。

最後に、だれよりもチームの成長を応援してくれた故服部監督、だれよりも体を張ってチームを支え続けた故鎌倉貞之に、この拙文を捧げる。

（大町卓也）

学生スタッフで意識を向上

諸先輩方より、「1部昇格」という大きな宿題を受け継いだ我々は、「1部で勝ち抜く」という、これまで経験したことのない未知の目標を達成するために、チーム発足と同時に議論に議論を繰り返した。結果として、一人ひとりの役割を明確にし、それぞれが自身のパフォーマンスの最大化に向けて徹底的に取り組むことを促進するようなチーム体制を構築した。学生スタッフ新設などがそれに当たる。その効用として、一人ひとりの意識や能力は飛躍的に向上したといえる。最終戦で後半30分まで専修大を圧倒したことが、1年間の全員の努力の成果を証明していたのではないかと。

一方で、極度の役割意識による、自己犠牲やコミュニケーションの希薄化、それに伴いチームとしての一体感が醸成しきれなかったことが、組織としての最大の問題であった。チームとしての一体感が喚起された、ホームでの帝京大戦、専修大戦での最高のパフォーマンスが常に発揮されていれば、全く違った結果を残すことができたと思う。それくらい、選手一人ひとりは、新しい体制の下で、自身の役割を果たすために1年間努力を積み重ねてくれた。チームの結節点として、役割を超えたコミュニケーションを束ねるべき存在であった自身の責任を強く感じる場所である。

振り返るとあの1年には「組織」の縮図が詰まっていたように思う。現在社会人として働く中で「よい組織を作るにはどうすればいいのか?」「個々人のスキル向上とチームとしてのモチベーション向上の同時実現を可能にするような組織はどのように作られるのか?」、そんなことを考えるときは、いつも思い出す。あの1年間は組織人としての私の原点となっている。

（楳木崇史）

2001年度（平成13年度）

公式試合記録

- ・東京都サッカートーナメント兼関東大学選手権
4月15日 2回戦 ○ 5-3 電機大 (拓大)
4月22日 3回戦 ● 0-3 拓大 (拓大)

- 10月14日 △ 1-1 上智大 (東洋大)
10月21日 ● 3-4 専大 (農学部)
1勝5敗1分 8位 2部に降格

・春季対抗戦

- 5月20日 予選リーグ ● 0-6 朝鮮大 (立大)
- 5月27日 予選リーグ ● 0-2 立大 (立大)
- 月 日 予選リーグ ○ 不戦勝 国学院

・京都大学定期戦

- 8月5日 ○ 3-2 京大 (検見川)

・東京都大学リーグ1部

- 9月2日 ● 0-5 早大 (早大)
- 9月16日 ● 0-1 東洋大 (東洋大)
- 9月23日 ● 0-1 国学院 (東洋大)
- 9月30日 ● 1-4 学習院 (東洋大)
- 10月7日 ○ 2-1 帝京大 (農学部)

・部長 影本浩

・監督 服部一郎

・コーチ 高崎康嗣

・主将 大町卓也

・副将 沖野泰之

・主務 扱木崇史

・学連 扱木崇史、南谷梨紗、加藤今日子

・合宿 春季 検見川

夏季 那須スポーツパーク、検見川

・練習 農学部、御殿下

・部室 農学部

出場選手

相手	東京都トーナメント		春季対抗戦		定期戦		東京都大学リーグ1部					
	電機大	拓大	朝鮮大	立大	京大	早大	東洋大	国学院	学習院	帝京大	上智大	専大
GK	中島	中島	中島	中島	中島 (米山)	中島	中島	中島	中島	中島	中島	中島
DF	新山	新山	新山	李 (河島)	鈴木	河島 (渡邊)	河島 (渡邊)	渡邊	渡邊 (新山)	新山	新山 (賢川)	賢川 (河島)
	齋藤	齋藤	鎌倉 (茂木)	新山	鎌倉 (茂木)	鎌倉	鎌倉	沖野	賢川 (茂木)	沖野	沖野	沖野
	鎌倉	沖野	沖野	鎌倉	河島 (賢川)	賢川	賢川	賢川	鎌倉	齋藤	齋藤	齋藤
	鈴木	鎌倉	中村 (中沢)	胡内	渡邊	鈴木	鈴木	鈴木	鈴木	鈴木	鈴木	鈴木
MF	沖野 渡邊	賢川 渡邊	賢川 辻	沖野 水越 (中沢)	沖野 胡内	坂本 茂木 (胡内)	坂本 沖野	坂本 茂木 (光井)	沖野 坂本	坂本 茂木	坂本 茂木 (鎌倉)	坂本 茂木 (鎌倉)
	中沢 (賢川)	鈴木	李 (山中)	辻 (茂木)	小松 (緒方)	沖野	胡内	胡内	胡内 (大町)	犬童 (光井)	犬童 (光井)	小松 (胡内)
	五十嵐	五十嵐	牧	五十嵐	牧 (犬童)	小松 (大町)	小松 (大町)	犬童 (小松)	小松 (光井)	小松 (牟田)	小松 (光井)	牟田 (犬童)
FW	牟田 (小山)	山中	緒方 (五十嵐)	齋藤 (牧)	五十嵐	五十嵐	五十嵐	五十嵐	五十嵐	五十嵐	五十嵐	五十嵐
	山中 (大町)	緒方 (中沢)	齋藤	馬場 (山中)	大町 (牟田)	山中 (光井)	山中 (光井)	牟田 (大町)	牟田 (犬童)	緒方 (大町)	緒方 (大町)	大町 (緒方)

東京都大学リーグ1部成績

	早大	専大	東洋大	帝京大	学習院	上智大	国学院	東大	勝	負	分	得	失	差	点
早大	-	○4-2	○4-0	●0-3	○1-0	○3-0	○3-0	○5-0	6	1	0	20	5	15	18
専大	●2-4	-	△1-1	△1-1	○2-0	○2-0	○1-0	○4-3	4	1	2	13	9	4	14
東洋大	●0-4	△1-1	-	○2-1	○2-1	○1-0	△0-0	○1-0	4	1	2	7	7	0	14
帝京大	○3-0	△1-1	●1-2	-	○2-1	●1-2	○2-1	●1-2	3	3	1	11	9	2	10
学習院	●0-1	●0-2	●1-2	●1-2	-	○1-0	○2-1	○4-1	3	4	0	9	9	0	9
上智大	●0-3	●0-2	●0-1	○2-1	●0-1	-	○2-0	△1-1	2	4	1	5	9	-4	7
国学院	●0-3	●0-1	△0-0	●1-2	●1-2	●0-2	-	○1-0	1	5	1	3	10	-7	4
東大	●0-5	●3-4	●0-1	○2-1	●1-4	△1-1	●0-1	-	1	5	1	7	17	-10	4

学生で運営したが3部降格

自分たちでやることに固執

前年度の2部降格を受けて、チームの根本的な改革が必要と判断。前年度までのコーチ制に別れを告げ、学生自身が自分の思いを主張し、やりたいことを行動に移し、そしてそれらに対して学生自身が責任を負う体制へと移行。他大学が推薦選手を集めてくる中で、「心」（と「体」）で「技」を凌駕している集団として、1部昇格を目指した。学生主体で味わった勝利は格別なものだったが、リーグ戦の結果は3部降格。最後の結果が自分たちに不足した点があったことを物語る。それは、一つ一つのプレー、戦術に「確信」をもって望めなかったこと、何が何でも自分たちでやることに固執しすぎたことだと振り返って思う。

勝負の世界であり、結果が出なかったことが悔やみ切れないほど悔しい。しかし、思いをともにする仲間、先輩、後輩と本気で改革に取り組んだことは忘れ得ぬ経験となっている。サッカーを通じて大人の世界をのぞき込んだ1年だったのではなからうか。

（新山通世）

みんなが生き生きとプレー

2月シーズンインの前からミーティングを重ね、学生主体のチーム運営についてメンバー全員で論じていた。自分はチーム運営に専念するためにプレーヤーを引退し、会計、学連、総務、渉外、合宿運営、新人勧誘、LBニュース作成、メルマガ作りなどのさまざまなことをした。グラウンド移転問題、日韓W杯、岡野俊一郎氏を囲む会なども記憶に鮮やかである。

サッカー部にいながら試合でプレーできないもどかしさを感じることもあった。そのたびに当時の服部監督の「組織にとって大切なのは自己犠牲の精神」「本当に強い組織を作るためには専属の責任者が必要」という言葉をかみしめていた。プレーヤーの皆が生き生きとプレーしている姿が何よりの支えであった。

結果を残せなかったという事実は重い。しかし、この1年間ほどサッカーに没頭し、さまざまな角度からサッカーのことを考え、実践したことはなかった。自分にとっては学生主体という責任に耐えて闘った人生の原点だ。周りのメンバーも同じではなからうか。

（吉田 寛）



赤門前で、緒方、胡内、都島、吉田、小野、新山、米山、中島、祝部

公式試合記録

・東京都サッカートーナメント兼関東大学選手権

4月14日 2回戦 ● 2-2 東外大（農学部）
PK 4-5

9月8日 △ 1-1 東経大（農学部）

9月15日 ○ 4-2 成城大（成蹊大）

9月22日 △ 1-1 成蹊大（農学部）

9月29日 ● 1-3 国学院（農学部）

10月6日 ○ 1-0 上智大（成城大）

10月13日 ● 1-3 日大文理（農学部）

2勝3敗2分 6位 3部に降格

・国公立

5月11日 ○ 5-2 水産大（電通大）

6月1日 ○ 3-0 東工大（農学部）

・春季対抗戦

5月19日 予選リーグ ● 1-2 日体大（日体大）

5月26日 予選リーグ ● 1-3 専大（農学部）

6月2日 予選リーグ ● 1-4 国学院（農学部）

・部長 影本浩

・監督 服部一郎

・主将 新山通世

・副将 中島大智

・主務 吉田寛

・トレーナー 小野高志

・京都大学定期戦

8月4日 ○ 3-1 京大（京大農学部）

・東京都大学リーグ2部

9月1日 ● 1-3 武蔵大（東経大）

・練習 農学部

・練習 農学部

出場選手

相手	東京都大学リーグ2部											
	東外大	日体大	専大	国学院	京大	武蔵大	東経大	成城大	成蹊大	国学院	上智大	日大文理
GK	中島	中島	岩田	中島	中島	岩田	岩田	岩田	岩田	岩田	中島	中島
DF	一言 (河村) 山地 贄川 新山	鈴木 贄川 河島 (山地) 新山 (清)	鈴木 贄川 山地 (小松) 新山 (清)	鈴木 贄川 河島 新山	鈴木 河島 贄川 (山地) 新山	鈴木 (渡邊) 坂本 河島 (佐藤) 新山	鈴木 坂本 河島 (道畑) 渡邊	鈴木 鈴木 坂本 河島 (北村) 渡邊	鈴木 鈴木 坂本 河島 渡邊	鈴木 贄川 河島 (新山) 渡邊	鈴木 鈴木 新山 河島 渡邊	鈴木 鈴木 新山 河島 (山地) 渡邊
MF	坂本 茂木 鈴木 渡邊	坂本 茂木 胡内 渡邊 (小松)	坂本 茂木 胡内 渡邊	坂本 茂木 胡内 (小松) 渡邊	坂本 茂木 胡内 渡邊	贄川 茂木 胡内 小松 (北村)	贄川 茂木 胡内 小松 (北村)	茂木 贄川 胡内 小松	贄川 茂木 (新山) 胡内 小松	坂本 (上土居) 胡内 茂木 (牧)	小松 (牧) 贄川 胡内 (上土居) 茂木 (北村)	坂本 茂木 胡内 小松 (佐藤)
FW	馬場 (清) 緒方	緒方 牧 (GK宮副)	牧 緒方	緒方 牧	緒方 (寺田) 小松	緒方 祝部	緒方 緒方 山崎 (祝部)	山崎 (新山) 緒方 (祝部)	緒方 山崎 (牧)	山崎 (緒方) 祝部 (山路)	緒方 坂本	緒方 牧 (祝部)

東京都大学リーグ2部成績

	日大文理	国学院	武蔵大	東経大	成蹊大	東大	上智大	成城大	勝	負	分	得	失	差	点
日大文理	-	○5-2	●1-3	○3-2	○4-2	○3-1	○3-1	○4-0	6	1	0	23	11	12	18
国学院	●2-5	-	△1-1	△2-2	○3-2	○3-1	○4-0	○3-2	4	1	2	18	13	5	14
武蔵大	○3-1	△1-1	-	●1-2	○1-0	○3-1	△1-1	○2-1	4	1	2	12	7	5	14
東経大	●2-3	△2-2	○2-1	-	△1-1	△1-1	△0-0	○3-1	2	1	4	11	9	2	10
成蹊大	●2-4	●2-3	●0-1	△1-1	-	△1-1	△2-0	○5-3	2	3	2	13	13	0	8
東大	●1-3	●1-3	●1-3	△1-1	△1-1	-	○1-0	○4-2	2	3	2	10	13	-3	8
上智大	●1-3	●0-4	△1-1	△0-0	●0-2	●0-1	-	○3-2	1	4	2	5	13	-8	5
成城大	●0-4	●2-3	●1-2	●1-3	●3-5	●2-4	●2-3	-	0	7	0	11	24	-13	0

外部からコーチを招いて

指導は単純だが効果大きく

都1部に昇格した1年時には想像さえしなかった、2年連続の降格。そんな憂き目を味わった自分たちにとって、4年時の目標は当然「2部昇格」だった。

当時の体制は過渡期の状態だった。前年度の学生コーチを継続するか、それとも外部からコーチを呼ぶか意見が分かれた。OBや4年で連日意見を交わしたが、下級生の強い要望もあり、服部監督に鈴木コーチを招請してもらい、前年から学生コーチをしていた高橋康一やOBコーチの胡内さんら（平成14年度卒）がそれを支える体制で新チームはスタートした。

鈴木コーチの指導は単純だったが、少なくとも自分にはとても新鮮だった。攻撃は「ボールを蹴って、止める」。守備は「低い体勢からじっと相手についていく」。たったそれだけの動作なのだが、奥が深い。農学部グラウンドが凸凹なことを差し引いても、自分たちがどれだけめっちゃくちゃなボール扱いをしていたのかを痛感した。一方で、上達の喜びを感じていた部員たちの顔は生き生きしていた。また1年生部員10人の中で、赤木、諏訪は初心者、池田、石川は高校時代は他のスポーツの部活をやっていたが、練習前後に欠かさず基礎練習をするなどしたかいもあって、驚くほど上達していったように思う。

昇格の機会ことごとく逃す

しかし、結果が伴わない時期が続いた。関東リーグ、都1部などでの練習試合では、5点差で負ける試合もあった。春の天皇杯予選は2回戦で国学院大



農学部グラウンドにて

に、春季リーグもベスト8で成城大に敗れ、連勝中だった京大戦でも敗れた。チームの雰囲気自体は声も出て、暗くなることはなかったが、勝てるのかという不安もあった。

秋のリーグ戦では、とにかく徹底的にボールを追って守備の意識を高く持つことを確認して臨んだ。圧倒的に押し込んでいた2戦目の東京外語大には痛い黒星を喫したが、その後は鈴木泰輔、春から入部した福島らの活躍で白星を重ね、最終戦を残して1位の成城大と勝ち点差1で、直接対決で勝った方が優勝という位置までこぎつけた。

しかし、結果的にいうと、ここから3度昇格のチャンスがありながら、ことごとく逃すことになった。成城大戦では1点差を追いつくも、終盤の好機を生かせず引き分け。2位同士の成蹊大との昇格決定戦では、先制するも逆転を許し1-2の惜敗。2部5位の立教大との入れ替え戦は0-3で敗れ、結局3部残留となった。関東リーグと東京都大学リーグの複雑な入れ替え戦システムの関係で、この年は昇格のチャンスが多かったのだが、ことごとく逃した。（注）

「昇格」という目標が果たせなかった悔しさは今も残っている。それでも、純粋に「サッカーが上手くなる喜び」を感じた1年間だったし、その意味では先につながるものだとも感じた。（費川 俊）

（注）平成15年の昇格チャンス

この年、東京都1部から関東2部に1校昇格、関東2部から東京への降格は無かった。

このため、東京都リーグでは、上位リーグから自動降格の2校に代わっての自動昇格に加え、もう1校が下位リーグから自動昇格した。さらに例年同様1校に入れ替え戦の機会が与えられた。

3部Bブロックに属していた東大には、

- ①ブロック1位での自動昇格
- ②ブロック2位のプレーオフに勝って自動昇格
- ③プレーオフに敗れても2部6位との入れ替え戦に勝って昇格

と、2位プレーオフの勝者が入れ替え戦に出場する例年より、1回多い昇格チャンスがあった。

公式試合記録

- ・東京都サッカートーナメント兼関東大学選手権
4月6日 1回戦 ○ 3-1 日大生資（農学部）
4月13日 2回戦 ● 0-2 国学院（農学部）

- 10月12日 ○ 2-1 大東大（農学部）
10月19日 △ 2-2 成城大（農学部）
5勝1敗1分 2位

- ・春季対抗戦
5月25日 予選リーグ ○ 1-0 日本社事大（農学部）
6月1日 予選リーグ ○ 5-0 都留文科大（農学部）
6月8日 決勝1回戦 ● 1-2 成城大（農学部）

- ・3部2位プレーオフ
11月1日 ● 1-2 成蹊大（駒沢第2）
- ・入替戦
11月30日 ● 0-3 立大（駒沢第2）
3部に残留

- ・京都大学定期戦
8月3日 ● 0-1 京大（検見川）

- ・部長 影本 浩
- ・監督 服部一郎
- ・コーチ 鈴木久雄
- ・主将 賢川 俊
- ・主務 山地毅彦
- ・トレーナー 小西 優

- ・東京都大学リーグ3部Bブロック
9月7日 ○ 2-1 日大生資（農学部）
9月14日 ● 0-1 東外大（農学部）
9月21日 ○ 2-0 都立大（都立大）
9月28日 ○ 1-0 山梨学院（農学部）
10月5日 ○ 2-1 桜美林（農学部）

- ・練習 農学部
- ・部室 農学部

出場選手

相手	東京都トーナメント		春季対抗戦			定期戦	東京都大学リーグ3部Bブロック							プレーオフ	入替戦
	日大生資	国学院	日本社大	都留文大	成城大	京大	日大生資	東外大	都立大	山梨学院	桜美林	大東大	成城大	成蹊大	立大
GK	岩田	岩田	瀬谷	瀬谷	瀬谷	宮副(岩田)	岩田	岩田	岩田	岩田	岩田	岩田	岩田	岩田	瀬谷(岩田)
DF	上土居	上土居(一言)	賢川	賢川	梶原	梶原(茂木)	河島	西村	西村(梶原)	西村	西村	西村	西村	西村	西村(馬場)
	賢川渡部(茂木)清(道畑)	賢川道畑(渡部)茂木	賢川道畑	賢川道畑(清)梶原	梶原道畑(一言)茂木	渡邊賢川	渡邊賢川	賢川渡邊	賢川渡邊	賢川渡邊	賢川渡邊	賢川渡邊	賢川渡邊	賢川渡邊	賢川渡邊
MF	渡邊	渡邊	石黒	石黒	渡邊	小林	茂木	小林	小林	小林	小林	小林	小林	小林	坂本
	河島	河島	渡邊	渡邊	石黒	河島	小林	茂木	茂木	茂木	茂木	茂木	茂木	茂木(馬場)	
	鈴木	鈴木	鈴木	鈴木(辻)	鈴木	鈴木	石黒	鈴木	鈴木	鈴木	鈴木	鈴木	鈴木	鈴木	
	辻(小松)	北村(辻)	北村(辻)	北村(馬場)	北村	石黒(北村)	鈴木	石黒	石黒(辻)	辻	辻(小松)	辻(小松)	辻(小松)	辻(坂本)	小松(河島)
FW	北村(馬場)坂本	坂本	小松	河島	小松	福島	坂本	坂本	坂本	坂本	石黒	石黒(寺田)	石黒(寺田)	石黒	石黒
	馬場(小松)	河島	小松(寺田)	河島	坂本	福島	福島	福島	福島	福島	福島	福島	福島	小松(北村)	福島

東京都大学リーグ3部Bブロック成績

	成城大	東大	山梨学院	大東大	都立大	桜美林	日大生資	東外大	勝	負	分	得	失	差	点
成城大	-	△2-2	○3-1	○4-3	△3-3	○3-0	○2-1	○5-1	5	0	2	22	11	11	17
東大	△2-2	-	○1-0	○2-1	○2-0	○2-1	○2-1	●0-1	5	1	1	11	6	5	16
山梨学院	●1-3	●0-1	-	○1-0	△2-2	●0-1	○4-3	○7-1	3	3	1	15	11	4	10
大東大	●3-4	●1-2	●0-1	-	△3-3	○4-1	○1-0	○2-0	3	3	1	14	11	3	10
都立大	△3-3	●0-2	△2-2	△3-3	-	○3-0	●2-3	○1-0	2	2	3	14	13	1	9
桜美林	●0-3	●1-2	○1-0	●1-4	●0-3	-	○2-1	○3-1	3	4	0	8	14	-6	9
日大生資	●1-2	●1-2	●3-4	●0-1	○3-2	●1-2	-	○4-2	2	5	0	13	15	-2	6
東外大	●1-5	○1-0	●1-7	●0-2	●0-1	●1-3	●2-4	-	1	6	0	6	22	-16	3

4年ぶり、東京都2部昇格

4年生はたった9人で苦勞

1学年平均12～13人部員がいるサッカー部において、この年の4年生は数が少なく、一時は6人にまで数が減った。最終的には9人まで増えたものの、人数が少ないことには変わりはない。人数が少ないということは4年生ひとりひとりのピッチ内外での負担が増えることとなり、4年ぶりの昇格を目指すチームには立ち上がりから苦しいシーズンとなった。

だが、ピッチ外では主将の牧、ピッチ内では副将の坂本が中心となり、徐々にチームはまとまっていた。主務と選手を兼任し両面で素晴らしい働きをした辻、CBとして急激に成長しレギュラーの座を獲得した一言など、他の4年生もチームを積極的に引っ張った。

2年目に入った鈴木コーチのサッカー哲学もチームにうまく融合し、非常に良いチーム状態で秋季リーグを迎えることができた。そして、思わぬ敗戦による危機も乗り越え、チームは4年ぶりの東京都大学リーグ2部昇格を果たした。これまで降格と残留しか見てこなかった4年生にとっては最初で最後の昇格となり、見事有終の美を飾った。

OBコーチが本格的に参加

これまで、OBは卒業後、試合に駆けつけ応援にまわることはあっても、後輩へのサッカーの指導を定期的に行うことはなかなかできなかった。しかしこの年から、前年の4年生のうち、主に大学院に進学した者や留年した者が中心となってOBコーチとしてチーム運営に関わる体制が、本格的にとられることとなった。初年度は高橋さん、河島さん、鈴木さん、清さんなどが参加し、前年の主将である賛川さんがOBコーチのとりまとめ役のOBコーチ長をつとめた。

鈴木コーチが主にAチームを、OBコーチが主にBチームを指導することになってはいたが、OBコーチはAチームの選手に対してもピッチの内外で積極的にアドバイスをを行った。また、OBコーチは選手に対してピッチの外から指導するだけでなく、実際に練習や試合に参加した。そして、ある時は自分のプレーを手本として選手に見せ、またある時は練習で疲れている選手を盛りあげ、口だけでなく体を

使って指導に当たった。コーチと選手の間をつなぐ役割もOBコーチは果たし、次の世代以降もチーム運営に欠かせない役割を担うこととなった。

御殿下グラウンドの改修

チームでは、長い間、農学部グラウンドをホームグラウンドとして利用していた。このグラウンドは、土のグラウンドであるだけでなく、整地を行ってもすぐに凸凹になってしまい、さらにグラウンド内に煉瓦やガラスなどが埋まっていることもあるなど、管理に非常に手間がかかっていた。だが、この場所に新しい法科大学院の施設が出来ることになった。

これを機会に、御殿下グラウンドを改修し、ここをチームのホームグラウンドに戻そうと部長、監督、OBが大学側に掛け合って、その成果が実った。2004年4月1日、御殿下グラウンドが新しい人工芝に張りかえられたついでに新しい御殿下グラウンドが完成した。東大サッカー部のホームグラウンドは御殿下に戻った。このグラウンドは、天然芝に劣らない本格人工芝、新型の照明設備を備えており、都内の大学でもトップクラスのグラウンドである。グラウンド完成の日、柿落としとして、東大の教職員を中心とした歴史のあるチームである東大ダックスとの柿落としの試合が行われた。

この御殿下グラウンドの改修による（他の運動部との兼ね合いでしばらく農学部グラウンドも利用してはいたが）すばらしいホームグラウンドの獲得は、チームの2部昇格への原動力の一つとなった。

（河村俊太郎）



人工芝の御殿下

公式試合記録

- ・東京都サッカートーナメント兼関東大学選手権
 - 4月4日 1回戦 ○ 4-0 日本社事大（農学部）
 - 4月11日 2回戦 ○ 2-1 学習院（農学部）
 - 4月18日 3回戦 ● 1-3 東洋大（成蹊大）

- 10月3日 ○ 3-0 山梨学院（御殿下）
- 10月10日 ○ 2-0 大東大（御殿下）
- 10月17日 ○ 2-1 玉川大（御殿下）
- 5勝1敗1分 2位 2部に昇格

・春季対抗戦

- 5月23日 予選リーグ ○ 1-0 東工大（御殿下）
- 5月30日 予選リーグ ○ 2-1 大東大（御殿下）
- 6月6日 準々決勝 ○ 4-3 理科大（玉川大）
- 6月13日 準決勝 ● 2-2 玉川大（創価大）
PK 3-4

- ・部長 影本浩
- ・監督 服部一郎
- ・コーチ 鈴木久雄
- ・トレーナー 小西優、山下貴士、小野高志
- ・主将 牧尚史
- ・副将 坂本優
- ・主務 辻正太
- ・副務 河村俊太郎

・京都大学定期戦

- 8月1日 △ 0-0 京大（京大農学部）

- ・合宿 春季 検見川
夏季 那須、検見川
- ・練習 御殿下
- ・部室 農学部

・東京都大学リーグ3部

- 9月5日 ○ 4-0 工学院（御殿下）
- 9月12日 ○ 3-2 一橋大（御殿下）
- 9月19日 ● 0-1 理科大（御殿下）
- 9月26日 △ 2-2 電機大（御殿下）

出場選手

相手	天皇杯			春季対抗戦			定期戦		東京都大学リーグ3部					
	日本社事	学習院	東洋大	東工大	大東大	玉川大	京大	工学院	一橋大	理科大	電機大	山梨学院	大東大	玉川大
GK	瀬谷	瀬谷	瀬谷	瀬谷	瀬谷	瀬谷	宮副	瀬谷	瀬谷	瀬谷	中村	中村	瀬谷	瀬谷
DF	梶原 (朝倉)	上土居	上土居	上土居	上土居 (道畑)	上土居	上土居 (河村俊)	上土居 (河村俊)	上土居	上土居	上土居	上土居	上土居	上土居
	坂本	道畑 (一言)	坂本	一言 (道畑)	一言	一言	坂本	坂本	坂本	坂本	坂本	西村	坂本	
	上土居	坂本	道畑 (一言)	坂本	坂本	坂本	一言	一言 (道畑)	一言	一言	一言	坂本	一言	
	北村	河村卓 (朝倉)	河村卓 (山崎)	河村卓	河村卓	西村	北村 (河村卓)	伊藤	伊藤	北村 (寺田)	北村	北村 (寺田)	北村	北村
MF	石黒	辻 (山崎)	辻 (河村俊)	小林 (山崎)	西村 (北村)	辻	西村	西村	西村 (金子)	西村 (福島)	西村 (馬場)	小林 (牧)	西村 (牧)	
	小林	牧	小林	小林	北村	小林	小林	小林	小林	小林	小林	伊藤	小林	
	辻 (河村俊)	小林	北村 (青山)	福島	青山 (辻)	小林	辻 (青山)	青山 (菊月)	青山 (百谷)	青山	青山	青山 (辻)	青山 (辻)	
	寺田 (山崎)	北村	牧 (寺田)	寺田 (牧)	牧	牧	牧 (馬場)	牧 (北村)	菊月 (北村)	牧 (菊月)	牧 (菊月)	菊月	菊月	
FW	福島	福島 (青山)	石黒	石黒	石黒	石黒	石黒	木野本 (馬場)	木野本	伊藤	木野本	木野本 (馬場)	木野本	
	道畑 (一言)	石黒	福島	青山 (辻)	福島 (馬場)	福島	福島	福島 (金子)	福島 (牧)	木野本	福島	福島	福島 (牧)	

東京都大学リーグ3部成績

	理科大	東大	玉川大	一橋大	大東大	電機大	山梨学院	工学院	勝	負	分	得	失	差	点
理科大	-	○1-0	○2-1	△1-1	△1-1	○1-0	○3-1	○3-2	5	0	2	12	6	6	17
東大	●0-1	-	○2-1	○3-2	○2-0	△2-2	○3-0	○4-0	5	1	1	16	6	10	16
玉川大	●1-2	●1-2	-	○3-2	○1-0	●1-2	○4-1	○6-0	4	3	0	17	9	8	12
一橋大	△1-1	●2-3	●2-3	-	○1-0	○4-1	△4-4	○5-0	3	2	2	19	12	7	11
大東大	△1-1	●0-2	●0-1	●0-1	-	○3-2	○1-0	○8-0	3	3	1	13	7	6	10
電機大	●0-1	△2-2	○2-1	●1-4	●2-3	-	△1-1	△2-2	1	3	3	10	14	-4	6
山梨学院	●1-3	●0-3	●1-4	△4-4	●0-1	△1-1	-	○2-1	1	4	2	9	17	-8	5
工学院	●2-3	●0-4	●0-6	●0-5	●0-8	△2-2	●1-2	-	0	6	1	5	30	-25	1

2部4位、昇格の機逃す

新方針の下でチームが団結

鈴木コーチがサッカー部コーチに就任して2年、徹底した基礎技術の見直しを軸としたチームの再編成で、東大は東京都2部に再び咲いた。平成17年度のシーズンはさらに1部への昇格を目指すという目標を掲げ、よりいっそう厳しい練習に取り組む決意のもとスタートした。

鈴木コーチの指導はいたってシンプルだった。ボールを止めて、蹴る。踏み込み、体のバランス、ジャンプのタイミング。ボールを動かす、人も動く。ゴール前で体を張る、決めるところで決める。走る。大学入学までにそれぞれが培ってきた技術をもう一度見直し、基本に立ち返るという作業は時間と労力がかかったが、選手たちは日々努力し、その結果、多くの選手がレベルアップしていた。

最高学年のメンバーが、技術的に優れたタイプでなく、基礎的な練習をくり返しやと少しずつうまくなってきた選手が多かったため、このような方針のもとでチームが団結できた。

人数は少ないが連帯感は強く

この年の4年生は入部当初から人数は少なく、1学年の部員数はほぼ1けたで推移した。その代わりに同期の連帯感は強く、現役のときはもとより現在でも仲が良い。ディフェンシブな人間が多く、学年が上がるにつれてポジションが下がっていった傾向がある。平均的にみて決して能力の高い学年ではなかったが、努力家が多く、秋季リーグの最終戦では同期全員がフィールドに立って終了のホイッスルを迎えることができた。

総理大臣杯予選で快進撃

筑波フェスティバルで強豪との対戦を経てチームは一回り成長し、迎えた総理大臣杯予選では、例年になく快進撃をあげるようになった。準決勝まで駒を進めた東大は、立正大に0-1で敗れたが、4位に入賞、その後の都県代表リーグ戦を突破し、関東予選まで勝ち進んだ。関東大会予選では0-5で拓殖大には大敗するも、確かな自信をつけたことは間違いない。また同時に東京都1部のチームのレベルの高さも実感した。一方で同時期には春季リーグ戦もあり、チームは二手に別れて試合に臨んでいた。

トップチーム以外のメンバーも公式戦の厳しさを経験することで、チームとしても大きな収穫があった時期だと言える。

秋季リーグ最終節にドラマ

2部へ昇格したばかりの東大は、秋季リーグでは上位校から順に対戦していくという厳しい試合日程であった。迎えた第1節の成蹊大戦、東大は成蹊大の速いサッカーに必死で食らいつき、スコアレスドローの勝ち点1をもぎ取る。第2節の学習院大に対しても同様にスコアレスドロー。2部の厳しさを実感する2試合であった。第3節の立教大戦、第4節の東京経済大戦が、実質昇格の命運を決める2試合であったが、ここ一番での勝負強さに欠け、勝ちきれない2試合となってしまった。

その後の東大は山梨大、東京理科大と順調に勝ち点3を積み、迎えた最終節の首都大戦でドラマは起きた。前半で大量点を挙げた東大、鈴木コーチは後半思い切ったメンバー交代を告げる。呼ばれたのはこれまでチームを引っ張ってきた4年生たち、そしていつしかフィールドには4年生全員が立っていた。同期7名、決して期待された学年ではなかったが、その全員がひたむきに練習し、地道に努力する選手であったことがこのような幸運を呼び寄せたのではないかと鈴木コーチもこれほどの思い切った采配ができる試合はない、と後に語るほど感動的な最終節であった。

結果として秋季リーグは4位にとどまり、勝ち点1差で1部昇格を逃すという残念な結果となったが、選手はすべての力を出し切り、晴れやかな表情をしていた。

東大に入学する多くの学生は進学高出身で、他の高校の選手に比べてサッカーの練習量は少ない。そんな部員だからこそ、もう一度サッカーの原点に戻って、ボールを止めたり、蹴る基礎が必要だったのではないかと。そんなチームの実情を見極め、基本からきっちり叩き込んでくださった鈴木コーチ、温かく見守ってくださった服部監督、支えてくれたスタッフ陣、LBの皆様、すべてのサッカー部関係者に感謝の意を表する次第です。（上土居 悠）

公式試合記録

・東京都サッカートーナメント兼総理大臣杯

- 4月3日 2回戦 ○ 6-0 東工大（御殿下）
- 4月10日 3回戦 ○ 3-1 国学院（玉川大）
- 4月17日 準々決勝 ○ 4-2 東経大（成蹊大）
- 4月24日 準決勝 ● 0-1 立正大（成蹊大）
- 5月1日 3位決定戦 ● 1-3 朝鮮大（立正大）

・国公立

- 5月7日 3位決定戦 ○ 3-1 首都大（東工大）

・春季対抗戦

- 5月22日 ● 0-4 武蔵大（御殿下）
- 5月29日 ● 1-4 成城大（御殿下）
- 6月5日 ● 2-3 学習院（御殿下）

・総理大臣杯関東予選

- 6月12日 ● 0-5 拓大（東海大）

・京大大学定期戦

- 7月31日 ○ 1-0 京大（御殿下）

・東京都大学リーグ2部

- 9月4日 △ 0-0 成蹊大（御殿下）
- 9月11日 △ 0-0 学習院（御殿下）
- 9月18日 ● 1-2 立大（御殿下）
- 9月25日 △ 1-1 東経大（御殿下）
- 10月2日 ○ 4-2 山梨大（御殿下）
- 10月9日 ○ 2-0 理科大（御殿下）
- 10月16日 ○ 4-1 首都大（御殿下）
- 3勝1敗3分 4位

- ・部長 影本浩
- ・監督 服部一郎
- ・コーチ 鈴木久雄
- ・主将 上土居悠
- ・副将 北村篤司
- ・主務 朝倉赴

- ・合宿 検見川、那須
- ・練習 御殿下
- ・部室 農学部

出場選手

相手	東京都トーナメント兼総理大臣杯					春季対抗戦			定期戦		東京都大学リーグ2部						
	東工大	東経大	立正大	朝鮮大	拓大	武蔵大	成城大	学習院	京大	成蹊大	学習院	立大	東経大	山梨大	理科大	首都大	
GK	中村 (宮副)	中村	中村	中村	中村	宮副	宮副	宮副	中村	中村	中村	中村	中村	中村	中村	中村 (宮副)	
DF	碓	北村	北村	北村	北村	朝倉 (佐藤)	千布 (朝倉)	千布 (金山)	河村	河村	北村	碓 (梶原)	北村	北村	北村	上土居	
	西村 (宮本)	梶原 (木野本)	上土居	上土居	上土居	宮本	宮本	梶原	西村	西村	上土居	西村	上土居	上土居	上土居	北村	
	上土居 (梶原)	上土居	西村	西村	西村	梶原	梶原	宮本	上土居	上土居	西村	上土居	宮本	西村	西村	碓 (朝倉)	
	北村	河村	河村	河村	碓 (梶原)	杉山	杉山	杉山	梶原 (宮本)	北村	河村	北村	碓	碓 (梶原)	河村 (梶原)	碓 (朝倉)	
MF	小林	西村	伊藤貴	小林	小林	門田	鈴木	鈴木 (百谷)	小林	小林	伊藤貴	小林	石黒	石黒 (山崎)	山崎	山崎	
	石黒	石黒	小林	伊藤貴	河村 (青木)	斉木	山崎	斉木	伊藤貴	伊藤貴	小林	伊藤貴	小林	小林	小林	小林	
	山崎 (石川)	菊月	菊月	菊月	菊月	今西 (宮城)	宮城 (門田)	宮城 (朝倉)	山崎 (池田)	明石 (木野本)	菊月	明石 (水澤)	菊月	菊月 (山崎)	菊月	菊月	
	菊月	伊藤貴	池田	池田	福島	百谷 (金山)	明石 (中西)	明石 (今西)	石黒	菊月 (水澤)	水澤 (木野本)	明石 (福島)	明石 (水澤)	明石 (水澤)	明石 (水澤)	明石 (木野本)	
FW	池田 (金子)	池田 (百谷)	石黒	石黒	伊藤貴	金子 (鈴木)	金子 (金山)	金子 (門田)	木野本 (水澤)	石黒	石黒	石黒 (河村)	伊藤貴	伊藤貴	伊藤貴	伊藤貴	
	福島 (百谷)	福島 (山崎)	福島	福島	石川 (木野本)	青木	青木	青木	福島	福島	福島	福島 (木野本)	木野本 (水澤)	福島	福島	福島	

東京都大学リーグ2部成績

	学習院	成蹊大	立大	東大	首都大	理科大	東経大	山梨大	勝	負	分	得	失	差	点
学習院		○2-0	○2-1	△0-0	○1-0	○2-1	○3-2	○3-1	6	0	1	13	5	8	19
成蹊大	●0-2		○2-0	△0-0	○4-0	○2-1	○1-0	○3-0	5	1	1	12	3	9	16
立大	●1-2	●0-2		○2-1	○3-2	△3-3	○2-0	○2-1	4	2	1	13	11	2	13
東大	△0-0	△0-0	●1-2		○4-1	○2-0	△1-1	○4-2	3	1	3	12	6	6	12
首都大	●0-1	●0-4	●2-3	●1-4		○1-0	●0-3	○2-0	2	5	0	6	15	-9	6
理科大	●1-2	●1-2	△3-3	●0-2	●0-1		○2-1	△4-4	1	4	2	11	15	-4	5
東経大	●2-3	●0-1	●0-2	△1-1	○3-0	●1-2		●0-1	1	5	1	7	10	-3	4
山梨大	●1-3	●0-3	●1-2	●2-4	●0-2	△4-4	○1-0		1	5	1	9	18	-9	4

入院中の服部監督が急逝

都リーグは10チーム編成に

「1部昇格」を目標に、石黒主将のもと2月1日シーズンインした。昨年、あと勝ち点1で昇格を逃したとはいえ、春の関東大会や秋季リーグを通じ、鈴木コーチがこれまで築いてきた走るサッカーが2部でも通用することは実感していた。その上で2部で確実に勝てるチームになるために、今までのサッカーを基盤に、一人ひとりが1対1であと少しだけ強くなることを年間のテーマに掲げた。

また、今年から関東リーグの再編成に伴って、東京都大学リーグも再編され、各8チームからなる1部、2部、3部AB、4部ABの6リーグから、各10チームからなる1部、2部、3部、4部ABの5リーグへと変わった。

LB会の法人化で環境整う

グラウンド外では、樋口周嘉氏（昭和40年卒）を中心に前年から準備の進んでいたLB会の法人化が行われ、LB会は有限責任中間法人として生まれ変わった。これによって、コーチやトレーナーとの契約、会計などの負担が現役から減り、よりサッカーに集中できる環境が整った。金銭面でも代議員制の導入により、組織力が強化されたLB会からは得点板の寄贈をはじめ多大なご支援を受けることになる。また、5月祭ではシンポジウム「サッカー部OBが語る ワールドカップとその世界」やホームカミングデーでの少年サッカー教室の開催などを通じて、サッカー部の学内でのプレゼンスを高めると同時に現役とOBの距離が縮まった一年であった。

前任の意向うけ福田監督

昨年と同様に、検見川合宿と筑波遠征を経て、迎えた春シーズンでは天皇杯予選、国公立大会ともに結果を残せず、また自分たちの狙いとする走るサッカーも展開することが出来なかった。そんななか、以前から入院されていた服部監督が体調の悪化により勇退を決意される。新監督には服部さんの意向に従って福田雅氏（平成12年卒）が就任した。そしてその直後、5月9日に服部監督はお亡くなりになられた。

思い起こせば、2月、3月と話しあったときに「俺は今年からは総監督という立場になる。現場は

福田に任せる」と何度も言われたのに、監督の体調の変化を感じ取れず、「そんなこといわずに今年も監督をお願いします」と軽々しく言ってしまった自分の思慮の至らなさが今でも悔やまれる。

春季大会で復調し夏合宿へ

天皇杯予選の反省から、原点回帰をテーマに臨んだ春季対抗戦では、前線からの守備とシンプルなパス回しという自分たちの持ち味を発揮することが出来、ベスト4に入り、方向性の正しさを確認することが出来た。

京大戦では先制するものの、最後まで集中力を維持することができずに逆転負けを喫した。この試合の反省と今期から2試合増えたリーグ戦を乗り切るために、夏は検見川で体力面を一番の課題に掲げて合宿をした。

勝ち点差1でまた昇格逃す

そうして迎えた秋季リーグでは、豊富な運動量をベースにしたサッカーでほとんどの試合を優勢に進めた。しかし、終始押していたにもかかわらず、カウンターで1点とられて負けてしまった東京経済大戦、開始早々2得点したが、後半最後まで持ちこたえられずに引き分けにされてしまった玉川大戦、先制したが追加点を奪えずに、後半セットプレーから2点失い、逆転負けしてしまった一橋大戦など、リーグ開始前から天王山になるであろうと考えていたこの3連戦では1分2敗と勝ち点をほとんど稼ぐことが出来なかった。これが響いて3位でリーグを終了した。自分たちのサッカーが通用することは実感できたが、90分間集中して戦い抜く精神力の養成が最後まで課題として残り、試合に勝つということの難しさを何よりも実感したシーズンであった。

そして、前年に引き続いて勝ち点差1で昇格を逃すという大変悔しい結果に終わった。

（赤木 升、中村達也）

公式試合記録

・東京都サッカートーナメント兼総理大臣杯

4月2日 2回戦 ○ 1-0 首都大（御殿下）
4月9日 3回戦 ● 0-2 学習院（創価大）

・春季対抗戦

5月7日 予選リーグ △ 1-1 立大（御殿下）
5月21日 予選リーグ ● 0-1 国学院（御殿下）
5月28日 予選リーグ ○ 2-1 東経大（御殿下）
6月4日 予選リーグ ○ 5-0 理科大（御殿下）
6月18日 準々決勝 ○ 0-0 玉川大（御殿下）
PK 4-3
6月25日 準決勝 ● 0-1 朝鮮大（御殿下）

・京大大学定期戦

7月30日 ● 1-2 京大（京大農学部）

・東京都大学リーグ2部

9月3日 △ 2-2 日大生資（御殿下）

9月10日 ○ 2-1 上智大（御殿下）
9月17日 ○ 3-0 桜美林（御殿下）
9月24日 ○ 2-0 山梨大（御殿下）
10月1日 ● 0-1 東経大（御殿下）
10月8日 △ 2-2 玉川大（御殿下）
10月15日 ● 1-2 一橋大（御殿下）
10月22日 ○ 6-0 理科大（御殿下）
10月29日 ○ 4-3 首都大（御殿下）
5勝2敗2分 3位

- ・部長 影本浩
- ・監督 福田雅
- ・コーチ 鈴木久雄
- ・主将 石黒雄一
- ・副将 小林誠
- ・主務 赤木升

・練習 御殿下 ・部室 農学部

出場選手

相手	東京都トーナメント				春季対抗戦				定期戦		東京都大学リーグ2部								
	首都大	学習院	立大	国学院	東経大	理科大	玉川大	朝鮮大	京大	日大生資	上智大	桜美林	山梨大	東経大	玉川大	一橋大	理科大	首都大	
GK	中村	中村	中村	中村	中村	中村	中村	中村	中村	中村	中村	中村	中村	中村	中村	中村	中村	中村	
DF	河村	河村	宮城	宮城	菊月	河村	菊月	金子	河村	水澤	菊月	菊月	菊月	河村	水澤	水澤	千布	千布	
	宮本 千布	宮本 千布	宮本 千布	宮本 千布	千布 宮本	宮本 千布	宮本 河村	宮本 河村	西村 宮本	宮本 西村	宮本 西村	西村 宮本	宮本 西村	千布 宮本	西村 千布	西村 宮本	宮本 西村	宮本 西村	
	碓 (石黒)	碓 (石黒)	菊月	菊月	宮城	菊月	宮城	斉木 (西)	水澤	河村 (石川)	水澤 (河村)	水澤	水澤	水澤	菊月	千布	水澤	水澤	
MF	伊藤	伊藤	石黒	小林	小林	伊藤	小林	菊月	菊月	小林	伊藤	小林	伊藤	菊月	小林	小林	鈴木	河村	
	菊月	菊月	小林	河村	石黒	西	伊藤	明石	小林	菊月	小林	伊藤	小林	小林	伊藤	小林	鈴木	小林	
	百谷	百谷	百谷	百谷	明石	百谷 (中川)	明石 (中川)	百谷	明石 (石川)	大沢 (鈴木)	大沢 (青木)	鈴木	明石 (百谷)	明石 (百谷)	百谷	百谷	明石	明石	
	石黒 (明石)	明石 (小林)	明石	明石	百谷	明石 (金子)	百谷 (木野本)	中川 (高木)	百谷	明石	鈴木	百谷 (大沢)	鈴木	鈴木 (百谷)	明石	明石	百谷	百谷 (大沢)	
FW	木野本	木野本	青木	青木	伊藤	青木	石黒	石川	鈴木	石黒	石黒	石黒	石黒	石黒	石黒	石黒	伊藤	石黒	
	水澤	水澤	水澤	水澤	木野本 (水澤)	木野本 (水澤)	水澤 (石川)	水澤	木野本	木野本 (太田)	木野本 (太田)	木野本 (中川)	木野本	木野本	木野本 (石川)	木野本 (石川)	青木 (木野本)	木野本 (中川)	木野本 (石川)

東京都大学リーグ2部成績

	東経大	玉川大	東大	一橋大	日大生資	上智大	山梨大	首都大	桜美林	理科大	勝	負	分	得	失	差	点
東経大	-	△1-1	○1-0	△1-1	○3-2	○7-1	○4-2	○1-0	○4-2	○4-0	7	0	2	26	9	17	23
玉川大	△1-1	-	△2-2	○1-0	△0-0	●2-3	○5-1	○2-0	○2-0	○5-0	5	1	3	20	7	13	18
東大	●0-1	△2-2	-	●1-2	△2-2	○2-1	○2-0	○4-3	○3-0	○6-0	5	2	2	22	11	11	17
一橋大	△1-1	●0-1	○2-1	-	○3-2	△3-3	●0-1	○2-0	○2-1	○3-1	5	2	2	16	11	5	17
日大生資	●2-3	△0-0	△2-2	●2-3	-	○3-2	●0-2	○2-1	○4-1	○4-2	4	3	2	19	16	3	14
上智大	●1-7	○3-2	●1-2	△3-3	●2-3	-	○4-1	●1-2	○2-1	○4-0	4	4	1	21	21	0	13
山梨大	●2-4	●1-5	●0-2	○1-0	○2-0	●1-4	-	○6-2	○3-2	△1-1	4	4	1	17	20	-3	13
首都大	●0-1	●0-2	●3-4	●0-2	●1-2	○2-1	●2-6	-	○2-1	○3-1	3	6	0	13	20	-7	9
桜美林	●2-4	●0-2	●0-3	●1-2	●1-4	●1-2	●2-3	●1-2	-	○2-0	1	8	0	10	22	-12	3
理科大	●0-4	●0-5	●0-6	●1-3	●2-4	●0-4	△1-1	●1-3	●0-2	-	0	8	1	5	32	-27	1

都1部へ昇格の挑戦ならず

2005年に東都2部リーグに復帰して、2年連続勝ち点1の差で1部昇格を逃してきた悔しさを胸に、2007年のシーズンは薮内新監督を迎え、5年目となる鈴木コーチのもとで、例年より2週間ほど早く1月下旬に始動した。関東リーグからの降格チームが2チームあった影響で、1部からの降格チームが10チーム中4チームというリーグ編成になった一方で、2年次に新人大会で優勝した伊藤貴寛主将を中心とした学年が最高学年になったことから、厳しいながらもベストを尽くせば必ず昇格できるはずだという想いを持っていた。

春季リーグいいところなし

新チームが発足して、厳しいリーグ編成になったことから、例年以上に走りこみの量と質を上げて、秋の9連戦を戦い抜ける体を作ることを目標に、春の検見川合宿、筑波遠征などを行った。

そんな中で迎えた春季リーグでは1分け3敗といふところなく予選リーグで敗退してしまった。特に関東リーグから降格してきた立正大には1-9という屈辱的な敗退をしてしまった。チーム内にはリーグ戦への危機感があふれ、戦い抜く自信が無くなってしまふように思われた。

終了間際に失点した京大戦

7月29日、第58回目の京大戦が、御殿下グラウンドで行われた。春季の悪夢を一掃すべくチームを立て直して臨んだ結果は、1、2、3軍戦とも押し気味に試合を進めながら引き分けに終わった。1軍戦は先制した後も試合を支配していたが、終了間際に京大の執念のゴールで同点にされた。ゲーム内容では非常に満足できるものだったが、勝負強さの点で秋季に少し不安を残した試合だった。

リーグ戦にも出た勝負弱さ

1部昇格への3度目の正直をかけた秋季リーグ戦が9月2日に開幕した。

京大戦後に御殿下で午前午後2回の練習での走りこみ、検見川で総仕上げを行い、秋季直前の練習試合では1部校に完勝し、万全の状態でリーグ戦に突入できた手ごたえが私にはあった。

しかし、結果は4勝4敗1分け。1部からの降格

4校からは勝ち点1しか奪えず、5位という結果に終わった。リーグ2戦目から4戦目を押し気味に進めながらもワンチャンスをものにされ、勝ち点を失ってしまったことが大きく響いてしまった。京大戦で勝ちきれなかった勝負弱さがそのままリーグ戦に出てしまったように思われる。特に思い出されるのが8戦目、勝てば3位に滑り込める可能性のあった明治学院大戦。同点に追いつき、さらに逆転かと思われたシュートがゴールライン上でカバーしたDFにクリアされ、そのカウンターから勝ち越し点を奪われたシーンは、2007年シーズンを象徴する失点シーンだったと、悔しい気持ちと一緒に鮮明に記憶に残っている。

あれから1年たった今、なぜ1部に昇格出来なかったのか改めて振り返ってみると、様々な要因はあると思うが、我われ最高学年が2年次に新人大会を優勝したことが自信ではなく、慢心になっていた可能性が捨てきれない。俺たちは東京都で1位になったという気持ちだが、秋季リーグ9試合を戦い抜くことを心のどこかで甘くみていたのかも知れない。自信と慢心は紙一重だとはよく言うが、我われの場合まさにその紙一重がずれてしまった結果が秋季の戦績となってしまったのだろう。力はあったと思うだけに、思い出すたびに悔しい気持ちで胸が一杯になる。

4年間を通して仲間は18人

最後の年は思うように成績を残せず悔しい思いをした我われだが、4年間を通して18人という人数を維持したのは、お互いの結びつきとサッカー愛、サッカー部愛が強かったからだと感じている。現在も大学に残った者が中心となって現役をサポートするために、OBコーチとして日々の練習に参加している。また、社会人組も土日に暇を見つけては顔を出してくれている。

これから、徐々にお互いに忙しくなり、今のよう直接現役に関わることは少なくなっていくとは思われる。しかし、大学時代の4年間を濃密なものにしてくれた東京大学ア式蹴球部への感謝を忘れず、諸先輩方とともに現役の力となるべく、LB会の一員として活動をこれからも続けていきたいと思う。

（礎 知也）

公式試合記録

・東京都トーナメント兼総理大臣杯

4月7日 2回戦 ○ 4-0 桜美林（御殿下）
4月8日 3回戦 ● 1-2 玉川大（朝鮮大）

10月14日 ○ 4-1 日大商学（御殿下）
10月21日 ● 1-3 明学大（御殿下）
10月28日 ○ 2-0 一橋大（御殿下）
4勝4敗1分 5位

・春季対抗戦

5月6日 予選リーグ △ 1-1 日大文理（御殿下）
5月13日 予選リーグ ● 2-3 上智大（御殿下）
5月20日 予選リーグ ● 1-9 立正大（御殿下）
5月27日 予選リーグ ● 2-3 日大（御殿下）

・部長 影本浩
・監督 藪内俊和
・コーチ 鈴木久雄
・フィジカルコーチ 小野高志
・トレーナー 山下貴士、平井慎二郎
・主将 伊藤真寛
・副将 木野本朋哉
・主務 碓知也

・京都大学定期戦

7月29日 △ 1-1 京大（御殿下）

・東京都大学リーグ2部

9月2日 ○ 2-1 日大生資（御殿下）
9月9日 ● 0-1 上智大（御殿下）
9月16日 ● 1-2 学習院（御殿下）
9月23日 △ 1-1 成城大（御殿下）
9月30日 ○ 3-2 創価大（御殿下）
10月7日 ● 1-2 立大（御殿下）

・合宿 春季 3月8～13日 検見川
筑波フェス 3月18～20日 筑波大他
夏季 8月14～19日 検見川
・練習 御殿下
・部室 農学部

出場選手

相手	東京都トーナメント		春季対抗戦				定期戦		東京都大学リーグ2部							
	桜美林	玉川大	日大文理	上智大	立正大	日大	京大	日大生資	上智大	学習院	成城大	創価大	立大	日大商学	明学大	一橋大
GK	水口	水口	水口	水口	藤安(中野)	水口	水口	水口	水口	水口	水口	水口	水口	水口	水口	水口
DF	南田	南田	千布	千布	千布	千布	碓(宮城)	南田	南田	南田	深田	深田	深田(南田)	大内	大内	大内(宮城)
	水澤	水澤	深田(南田)	深田	太田	太田(深田)	千布	千布	千布	千布	千布	千布	千布	千布	千布	千布(宮本)
	宮本	宮本	宮本	宮本	宮本	宮本	水澤	水澤	水澤	水澤	水澤	宮本	宮本	宮本(斉藤)	宮本	水澤
MF	村上(千布)	村上(千布)	村上	村上	村上(宮城)	村上	宮本	宮本	宮本	宮本	宮城	宮城	宮城	宮城	菊月	菊月
	伊藤貴	伊藤貴	菊月	菊月(吉田)	菊月	菊月	菊月	菊月	菊月	菊月	菊月	菊月	菊月	菊月	久木田	久木田(鈴木)
	菊月(吉田)	菊月(太田)	明石	明石	明石	明石	明石(池田)	明石(百谷)	明石(中川)	吉田	吉田	吉田	明石(百谷)	百谷(大沢)	百谷(大沢)	百谷(大沢)
FW	木野本(池田)	木野本	青木(伊藤慶)	青木(水澤)	青木(水澤)	池田(吉田)	木野本(青木)	木野本(青木)	木野本(伊藤慶)	木野本	木野本	木野本	木野本	木野本	木野本(水澤)	木野本(池田)
	青木(深田)	青木(池田)	木野本	木野本	木野本	木野本	伊藤貴(太田)	伊藤貴	伊藤貴	伊藤貴	中川(太田)	伊藤貴	伊藤貴	伊藤貴	伊藤貴	伊藤貴

東京都大学リーグ2部成績

	立大	学習院	明学大	成城大	東大	上智大	日大生資	創価大	一橋大	日大商	勝	負	分	得	失	差	点
立大	-	○3-2	○3-2	●0-1	○2-1	○6-2	○2-1	○2-0	○2-0	○6-0	8	1	0	26	9	17	24
学習院	●2-3	-	○1-0	○3-0	○2-1	○3-2	○1-0	△0-0	△1-1	○4-1	6	1	2	17	8	9	20
明学大	●2-3	●0-1	-	○4-2	○3-1	●0-1	○5-1	○3-0	○4-1	○1-0	6	3	0	22	10	12	18
成城大	○1-0	●0-3	●2-4	-	△1-1	○2-1	●1-3	○3-1	△0-0	○3-1	4	3	2	13	14	-1	14
東大	●1-2	●1-2	●1-3	△1-1	-	●0-1	○2-1	○3-2	○2-0	○4-1	4	4	1	15	13	2	13
上智大	●2-6	●2-3	○1-0	●1-2	○1-0	-	○5-4	●2-3	△3-3	○3-0	4	4	1	20	21	-1	13
日大生資	●1-2	●0-1	●1-5	○3-1	●1-2	○4-5	-	○3-2	○2-0	○6-2	4	5	0	21	20	1	12
創価大	●0-2	△0-0	●0-3	●1-3	●2-3	○3-2	●2-3	-	○1-0	○4-0	3	5	1	13	16	-3	10
一橋大	●0-2	△1-1	●1-4	△0-0	●0-2	△3-3	●0-2	●0-1	-	○5-1	1	5	3	10	16	-6	6
日大商	●0-6	●1-4	●0-1	●1-3	●1-4	●0-3	●2-6	●0-4	●1-5	-	0	9	0	6	36	-30	0

都1部への昇格果たせず

2005年に東京都リーグ2部に復帰して、3年連続惜しいところで1部昇格を逃してきた悔しさを胸に、2008年度は、6年目となる鈴木コーチの下で1月下旬からシーズンをスタートさせた。1部リーグから4チームも落ちてきた昨シーズンに比べ、本年度は比較的与しやすいリーグ構成となり、悲願の1部昇格に向けて高いモチベーションで日々の練習に取り組んだ。

春季対抗戦は予選で敗退

前任の小野氏に代わりフィジカルトレーナーに新たに平井氏を迎えて、より試合を意識したフィジカルトレーニングを取り入れた。また、2年生の発案によりベンチ外の部員による、より組織的な応援が導入された。その成果か、初戦の山梨大戦、日大文理学部戦と破竹の2連勝を飾った。しかし続く帝京大と立大には地力の差を見せつけられ、惜しくも予選リーグでの敗退となった。

京大戦は終了間際に逆転

8月3日、第59回京都大学定期戦が、京都大学農学部グラウンドで行われた。昨年は3試合とも引き分けに終わっており、その悔しさを知る上級生を中心に必勝態勢で臨んだ。それが実を結び1、2、3軍戦全体で2勝1分という結果となった。特に2軍戦は終了間際のPKによる逆転で2-1の勝利、1軍戦は試合開始早々に先制されたが、逆転で前半を終了。そのまま終了かと思われた後半38分に同点に追いつかれたが、終了間際に副将大沢の直接FKが右上隅に決まった直後にタイムアップのホイッスルが鳴るとい劇的な幕切れで3-2と勝利した。ここ数年でまれにみる好試合となり、続く夏合宿、そして来たるべき秋季リーグへとよいはずみとなった。

勝ち点19だがリーグ戦4位

例年に比べて早い8月31日に秋季リーグが開幕した。京大戦との間が短くコンディション調整が難しい部分もあったが、恒例の検見川合宿でありえないほどの走り込みを行い、やることはすべてやったという気持ちで臨んだ。

結果は6勝2敗1分。ここ数年で最も多い勝ち点

19を得た。開幕から3連勝と順調なスタートを切ったが、リーグ中盤で、勝ち点2で最下位に終わった山梨学院大と引き分け、続いてこちらの方が分がよいと思われた桜美林大にまさかの敗北を喫した。その後は優勝した日大文理学部には敗れたものの、格上相手に接戦をものにし大金星をあげ続け最後まで昇格争いを演じた。

しかし結果は4位。2位の東京経済大、3位の上智大との直接対決には勝ったものの下位校との戦績および得失点差で差をつけられ、またも東京都1部昇格を逃してしまった。もちろんア式蹴球部員全員が正直悔しい気持ちでいっぱいである。だが、それと同時にやれることはやったという達成感、満足感もあることを告白しておこう。

今シーズンは、未曾有の大規模な新人勧誘活動を行いチームの結束を今まで以上に強くした。また、千布キャプテンが毎月各選手にその月の目標とその日その日の練習の目標を明確化させ、練習の質の向上およびマンネリ化の防止に腐心した。さらに、ベンチに入れなかった選手たちが全員で一体感を持って一生懸命応援した。その他挙げればきりのないほど多くのことをやってきた。そして6勝2敗1分という成績を残した。その中には多くの奇跡とも呼べる逆転勝ちもあった。私が在籍した4年間の中では最高の年であったと確信をもって言える。後輩たちが1部昇格の夢を現実にしてくれることを心から願っている。

(那須雄介)



リーグ戦を終えて 2008年10月26日

公式試合記録

・東京都サッカートーナメント兼総理大臣杯

4月6日 2回戦 ○ 8-0 国際基督大（御殿下）
4月13日 3回戦 ● 0-1 成蹊大（成蹊大）

10月5日 ○ 2-1 東経大（御殿下）
10月12日 ○ 2-1 上智大（御殿下）
10月19日 ● 0-1 日大文理（御殿下）
10月26日 ○ 2-1 成城大（御殿下）
6勝2敗1分 4位

・春季対抗戦

5月4日 予選リーグ ○ 4-1 山梨大（御殿下）
5月18日 予選リーグ ○ 2-0 日大文理（御殿下）
5月25日 予選リーグ ● 2-6 帝京大（御殿下）
6月1日 予選リーグ ● 1-2 立大（御殿下）

- ・部長 影本浩
- ・監督 荻内俊和
- ・コーチ 鈴木久雄
- ・フィジカルコーチ 平井慎二郎
- ・主将 千布勇氣
- ・副将 水澤仁雅、大沢拓巳
- ・主務 船本洋平
- ・学連 中島悠司

・京都大学定期戦

8月3日 3-2 京大（京大農学部）

・合宿 春季 3月11日～16日 検見川
夏季 8月8日～13日 検見川

・東京都大学リーグ2部

8月31日 ○ 6-1 日大生資（御殿下）
9月7日 ○ 2-1 創価大（御殿下）
9月14日 ○ 2-1 山梨大（御殿下）
9月21日 △ 2-2 山梨学院（御殿下）
9月28日 ● 0-2 桜美林（御殿下）

・練習 御殿下
・部室 農学部

出場選手

相手	東京都トーナメント		春季対抗戦				定期戦	東京都大学リーグ2部									
	国際基督	成蹊大	山梨大	日大文理	帝京大	立大	京大	日大生資	創価大	山梨大	山梨学院	桜美林	東経大	上智大	日大文理	成城大	
GK	中野	中野	中野	中野	中野 (藤安)	中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野	
DF	大内 (深田)	大内	大内 (中島)	大内	南田	大内	南田	大内	大内	大内	大内	大内	大内	大内	大内	大内	
	千布	千布	船本	船本	船本	船本	千布 (水澤)	千布	千布	千布	千布	千布	千布	千布	千布	千布	
MF	船本 (江連)	船本	千布	千布	千布	千布	深田	水澤 (船本)	水澤	水澤	水澤	水澤	水澤	船本	船本	船本	
	南田 (村上)	南田	南田	南田 (中島)	中島 (村上)	南田	村上	村上 (南田)	村上 (南田)	村上 (中島)	村上	村上	南田	南田	水澤	水澤	
FW	西	吉田 (大沢)	西 (南)	西 (深田)	深田	西 (村上)	久木田	久木田	久木田	久木田	久木田	久木田	西 (村上)	森元 (松谷)	森元	森元	
	吉田 (南)	西 (高木)	久木田 (高橋)	久木田	久木田	深田	松谷	森元 (西)	森元	森元	森元	森元	森元 (松谷)	西 (村上)	西	西 (中川)	
FW	高橋 (後藤)	松谷 (中川)	松谷 (深田)	松谷	松谷 (高橋)	松谷 (高橋)	久保 (高橋)	久保 (高橋)	久保	久保	松谷	松谷 (中川)	松谷 (中川)	大沢 (水澤)	大沢	大沢	
	松谷	鈴木 (深田)	大沢	大沢	大沢	大沢	大沢	大沢	大沢	大沢	大沢	大沢	大沢 (加賀田)	大沢 (加賀田)	大沢 (加賀田)	大沢 (加賀田)	
FW	鈴木	久木田	鈴木 (後藤)	鈴木	鈴木 (南)	鈴木 (中川)	鈴木 (西)	鈴木	鈴木	鈴木	鈴木	鈴木	鈴木 (久木田)	鈴木 (久木田)	鈴木 (久木田)	鈴木 (久木田)	
	水澤 (中川)	水澤	水澤 (高木)	水澤	水澤	水澤	三浦	三浦 (中川)	三浦	三浦 (松本)	三浦 (中川)	三浦	三浦 (高木)	三浦 (中川)	中川 (三浦)	中川 (三浦)	

東京都大学リーグ2部成績

	日大文理	東経大	上智大	東大	成城大	桜美林	山梨大	日大生資	創価大	山梨学院	勝	負	分	得	失	差	点
日大文理	-	●1-2	○2-0	○1-0	○3-2	○6-0	○1-0	○2-0	○3-1	△0-0	7	1	1	19	5	14	22
東経大	○2-1	-	△1-1	●1-2	○2-1	△3-3	○3-1	○2-1	○2-0	○2-1	6	1	2	18	11	7	20
上智大	●0-2	△1-1	-	●1-2	○3-1	○6-0	○3-1	○1-0	○4-1	○5-1	6	2	1	24	9	15	19
東大	●0-1	○2-1	○2-1	-	○2-1	●0-2	○2-1	○6-1	○2-1	△2-2	6	2	1	18	11	7	19
成城大	●2-3	●1-2	●1-3	●1-2	-	○3-0	○2-1	●2-3	○3-0	○6-1	4	5	0	21	15	6	12
桜美林	●0-6	△3-3	●0-6	○2-0	●0-3	-	●0-3	●1-4	○1-0	○3-2	3	5	1	10	27	-17	10
山梨大	●0-1	●1-3	●1-3	●1-2	●1-2	○3-0	-	○3-2	●0-1	○5-0	3	6	0	15	14	1	9
日大生資	●0-2	●1-2	●0-1	●1-6	○3-2	○4-1	●2-3	-	●1-2	○6-0	3	6	0	18	19	-1	9
創価大	●1-3	●0-2	●1-4	●1-2	●0-3	●0-1	○1-0	○2-1	-	○3-0	3	6	0	9	16	-7	9
山梨学院	△0-0	●1-2	●1-5	△2-2	●1-6	●2-3	●0-5	●0-6	●0-3	-	0	7	2	7	32	-25	2

